

ち濃雜滲滿、手法甚だ粗野なるものあり。

(ロ) 繪様に於ける曲線

繪様に於ける曲線は彼此の別や、明瞭なるものあり。今「飛貫」下なる「持送り」を以て評せむ。

茲に中和殿、太和殿及び乾清宮に於ける「持送り」を對比するに、其の輪廓は、第五二八—五三〇圖に示すが如く、共に(1)、(2)、(3)、(4)等の曲線より構成せられ、(5)、(6)は中和殿に於いては直ちに(4)に連なりて「持送り」の輪廓となるも、太和殿、乾清宮に於いては(5)、(6)は「持送り」を支承する斗と「肘木」となれり。

今(1)より(4)に至る曲線の性質を考ふるに、中和殿に於けるものは(1)の凹曲線は勁強にして短く、(2)のS字形曲線は深くして力あり、(3)の凸曲線曲率強くして楕圓に類し、(4)の凸曲線は緩てして一種の高次の曲線をなせり。乾清宮に於けるものは、(1)は凸曲線となりて比較的長く、(2)のS字形曲線は淺くして弱く、(3)は寧ろ圓弧に類し、(4)は(3)と同系なり。太和殿に於けるものはこれに比して稍中和殿に近き觀あり。これ等の曲線の形狀は元「持送り」の全形の如何に由りて規定せらるゝものなれば、直に彼此相對比するは妥當を缺くものあるに似たるも、而も曲線の質は其の量と直接の關係なし。要するに中和殿のものは明代の精神ありて運用に變化あり筆勢に力あり、乾清宮のものは清代の作として著しく柔弱の資性に陥りたり。

(ハ) 細部に於ける裝飾的手法

細部の裝飾的手法は明清著しき相違を示せり。殿扉は即ちよくこれを證明せり。今中和殿、保和殿に於ける扉を視察するに、其の上部なる花狹間を構成せる格の形は第五二六圖に示すが如く甚だ堅實なるも、乾清宮に於けるものは第五二七圖に示すが如くこれに比してや、複雑なるのみならず、其の曲線柔弱にして緊張を缺く、即ち明式は清式に優れり。

扉の「羽目」に就ては、中和殿、保和殿に在りては單に一種の曲線の繪様を以てこれを裝飾するに過ぎざるも、太和殿、乾清宮等に在りては複雑なる雲龍の高刻を以てこれを充填せり。即ち明代は簡潔なる手法を好み、清代は濃雜なるを好めることを知るべし。その他「八双」の手法を比較するに、中和殿に於けるものは「八双」の末端に於ける繪様頗る雄健にして、其の表面に隆起せる雲龍は甚だ秀高の氣韻あり。乾清宮に於ける「八双」はこれに反して末端の繪様放漫に流れ、表面の雲龍は大いに彼に劣れるものあるを觀察すべし。

(ニ) 裝飾文様

裝飾文様も亦彼此相異なれり。試に中和殿と保和殿との藻井及び梁の裝飾法を比較すれば兩者互に相酷似し、一見同時代に屬することを知るべし。試にこれを乾清宮の藻井及び梁に比すれば、兩者の間に大なる差異の存することを見るべきなり。「格間」に畫ける龍は大體に於いて兩者相均しきが如くなるも、龍の軀體の彎曲の形狀を熟視すれば、中和、保和の兩殿は相符合し、乾清宮は獨り著しく異なれり。梁の模様は、中和、保和兩殿に於いては其の兩端部に雄大なるから、草文様を置き、中央部には秘めて複雑なる、而も秀麗精緻なる輪廓の裡に雄大

なる龍を納めたり。乾清宮に於いては、其の兩端部には幾何學的の粗野なる線條を配置し、中央部には寧ろ蹣跚せる龍を納めたり。彼は意匠甚だ精巧にして、此は甚だ粗放なり。斯くの如きは獨り藻井と梁とのみならず、建築の各部に於いて、多少皆これに類する關係を示さざるなし。要するに明代の裝飾文様は清代に比して優れるものあり。

(ホ) 色彩

色彩に關しては、奥山恒五郎氏の精細なる報告あるを以て予はこれを省略すべし。只だ中和保和の兩殿に於いては前記梁の兩端なるから、草の部分に極めて好成绩を收め得たり。即ち、青緑に交ゆるに赤色の多量を以てして諧調を保ちたればなり。乾清宮の如きは青、綠過多にして獨り眼を衝くの感あり。乾清門は乾清宮に比して遙に好良なる結果を收めたるを観察すべし。要するに色彩に於いても亦明代の遠く清代に勝れることを知るべきなり。

(ハ) 建築的價値

以上數件の事實に由り、證明するが如く、明清兩代の建築は其の大體に於いて相酷似し、容易に其の差異を發見せずと雖も、其の裝飾に關する部分に於いては、兩者著しく相異なり、其の形狀、手法、文様及び色彩皆明代の遠く清代に優れることを見る。思ふに支那建築は其の大體の形狀に於いては、遠き古代より著しき變化なく、其のチテール及び裝飾は時に隨ひて變遷し來れるもの如く、而して其の變遷は寧ろ退歩の傾向あるが如し。

吾人は唐代の裝飾文様等の非常に優美秀麗なることを觀察せり。明より清に降りて即ち斯くの如きは殆ど意外に出づ。要するに明代の建築はこれを清代に比して優ること一等なること、恰も明朝が清朝に比して古きこと一級なるに并せり。

更に眼を轉じて清朝最近の建築裝飾文様を見れば、其の線條の野鄙なる、其の敷置の放漫なる、其の形狀の減裂なる、其の色彩の輕薄なる殆ど云ふに忍びざるものあり。裝飾の手法も亦往々妥當を缺き、其の意義を失ふものあり。萬壽山離宮に蔓を連ねたる幾多の大厦高樓は、殆ど皆此の失敗の好例ならざるはなし。予は支那裝飾の將來に向ひて、益々退歩せんとするを見て怪訝の念に堪へざるなり。

第六章 明清建築の長所と短所

以上記述せる明清兩代の建築が建築學術上果して如何なる點に於いて失敗せるか、左に予の所感を陳べて大方の教を乞はむと欲す。

[甲] 長所

(イ) 規模の嚴正

紫禁城殿門の配置は正しく左右同形にして、極めて嚴肅なるのみならず、其の建築の主従の配置宜しきに適ひ、相輔けて美觀を大成せり。例せば午門即ち五鳳樓は、中央に雄大廣壯なる大厦高く聳で、一群の主を爲し、

兩翼の隅角には、恰もこれが従として適當なる大さと形とを備へたる閣樓あり。これを連結せる廊の長さ亦宜しきを得て互に諧調を保持せり。太和門を主とせる一廓には、其の左右に貞度、昭徳の二門扈從し、協和、熙和の兩門遙に相對してこれに應じ以て全體の諧調を保てり。太和門よりも更に廣壯なる太和殿を主とせる一廓に於いては、協和、熙和の兩門よりも更に廣壯なる體仁、弘義の兩閣遙に相對して従となり、左翼右翼の兩門は更にこれに附從して全體の諧調を保ちたり。内廷に於いては乾清宮を主とせる一廓に日精、月華の兩門を配して小なる規模を劃成せり。

我が國に於いても奈良朝に於ける七堂伽藍、平安朝に於ける大内裡の如きは、元來唐朝の伽藍宮殿の規模に準據するものなるが故に、其の建築の配置極めて嚴正を保ちたり。後世漸く此の規律を失ひ、今日に至りては伽藍宮殿の規模全く放縱に流るゝに至れり。蓋しこれ自然の結果に由るものにして、或る意味に於いて却つて建築術の進歩を證明するものありと雖も、多くは規模の完美を缺くものなり。殊に彼の主たる本堂のみ獨り徒に歴大にして、これと諧調を保つべき従たる建築を缺き、殆ど荒野の中央に一大堂の孤立するが如きものに至りては、全く失敗に歸したるものと云はざるべからず。伽藍宮殿の如き嚴正なる建築の規模は、亦宜しく嚴正ならざるべからざるなり。

(ロ) 壇の秀高

凡そ記念碑、立像、又は床飾の置物の如きものに於いては、其の物體と物體を載すべき臺との關係を研究する

ことを要す。これ等の物體の美觀の半は其の臺の爲めに活殺せらるゝものなりとす。是の故に宮殿伽藍等の建築特に其の主要なる殿堂に於いては、亦其の臺即ち基壇の意匠に注意せざるべからず。果せる哉太和門は十三尺の基壇の上に立ち、太和殿は三成三十餘尺の基壇の上に聳え、乾清宮は十尺の基壇の上に建築せられたり。況んや其の壇は純白の大理石を以て疊み、白石の欄を繞らし、豪壯人目を眩せしむるものあり。建築の品位これが爲めに幾倍を増し、見る人をして建築の實體よりも遙に大なるが如く感ぜしむ。實に支那建築獨特の長所なり。

我が邦の伽藍宮殿等は即ち大いにこれに異なり、獨り建築の本體にのみ意匠を竭し、其の基壇に就いては即ち深く注意するところあらず。京都知恩院の三門は本邦有數の大建築にして壇の高さは即ち三尺に過ぎず。奈良大佛殿は其の高さ百五十六尺にして其の壇は僅に七尺のみ。東寺の五重塔は殆ど百九十尺の高さを有し、而して其の壇は五尺なり。其の他幾多の大殿堂にして、殆ど平地の上に立てるが如きもの比々として皆然り、法隆寺の金堂と五重塔とは其の形狀の寧ろ小なるにも關せず二成壇の上に立てるを以て、建築の美を助成するところ少からざるを覺ゆ。要するに宮殿伽藍の建築、特に嚴正なる式典を舉行するが如き建築に在りては、吾人は宜しく深く基壇の手法に注意せざるべからず。これ吾人の採りて以て戒とすべきところなり。

(ハ) 手法の妥當

支那宮殿建築の手法は一見其の粗漫なるに驚くと雖も、退いて其の全體の諧調を見れば、再び其の結果の好良なるに驚くなり。階階石欄其の他扉に於ける微細なる手法の如き人目に近き部分には精巧無比の工を施すと雖も、

漢井・梁の如き人目に遠き部分に於いては手法甚だ粗漫なり。然れども漢井、梁の如き部分は斯くの如くにして足るのみ、吾人仰いで漢井を觀て能く諧調を感受すれば足るのみ。彼の小品建築的物件、例せば龍輿、舍利塔の如きものに於いては常に繊巧なる手工を加へ、大建築の上部に於いて却つて粗漫なる手法を用ふるは支那建築の一種の特色にして、頗る其の當を得たるものと稱すべきなり。本邦に於いては厩大なる殿堂に繊細なる工を施すの弊風あり、爲めに大建築をして空しく小ならしむるの憾あり。彼の人目の達せざる邊に顯微鏡的の彫刻を施し、或は何處よりも見るべからざる部分に向ひて均しく精巧なる工を加ふるが如きは、元來技工を重んずるの意に出づるものなるべきも、これ決して建築の美を成す所以にあらず。要するに本邦近世の建築に細部の技工を重んじて建築の大體に著目せざるもの多し。支那に於いては即ち大體の諧調を觀て微細の技工を顧みず、譬へば支那建築は油繪の如く、本邦建築は我が邦固有の風俗畫の如きもの乎。

(二) 色彩の華美

支那建築は實に色彩建築なり。ファーガソン氏も支那建築は其の形式よりも其の色彩を重んずと云へり。其の基壇は純白の大理石を以てし、其の柱及び壁は丹朱に、其の内外部は所謂極彩色を用ひ、屋蓋は即ち濃黄色の瓦より成れり。凡そ建築の各部分は基壇を除くの外、悉く鮮明なる色彩を施さざるところなく、一望殆ど目を眩す、況んや其の屋蓋の瓦は黄、藍、青、綠、紫等の數種あり。或は一字にして一色以上の瓦を覆ふものあり。其の配合の意匠縱横奇抜を極めたり(奥山恒五郎氏別にこれが詳説あり、今これを省略す)。要するに、支那建築の色彩は其の細

部に於いては甚だ粗野なるが如しと雖も、大體に於いては即ち寧ろ成功せり。

本邦の建築は由來色彩を用ゆること甚だ少し。寺院及び近世の神社等に於いて極彩色を賞用するものもあるも、其の屋蓋は多くは暗黒色にして冷靜なる瓦を以て覆ふのみ。是の故に其の結果は常に沈鬱にして活動の勢なし。元來建築に色彩を應用するは最も適切なる手法なり。無色建築は即ち極めて没趣味なるものなり。我が邦日光廟の如き極彩色の建築に在りては、色彩の瓦を以て屋を蓋ふは蓋し正當の理なるべし。況んや我が國は山は深緑にして空は濃藍なり、若し棟楹の極彩色に伴うて屋蓋に一種の鮮明なる色彩を應用せば、其の美觀果して如何ならむ。人或は支那建築の色彩瓦を見て兒戯に類すとなすものあり。然れどもこれ其の一部を見て未だ全體を見ざるもの言のみ。

(ホ) 屋蓋の變化

支那建築の宮殿佛寺等の建築に在りては、屋蓋の形狀に多くの變化ありて、我が邦の千遍一律なるが如きものにあらず。例せば「プラン」を以てすれば方形あり、圓形あり、多角形あり、凸字形あり、十字形あり、○形あり、層數を以てすれば單層乃至四層以上あり。屋蓋の變化に富む所以なり。即ち下層方にして上層圓きもの「母屋」と廂とを異様に連結せるもの、屋上更に小樓を建てたるもの、千種萬様の形狀を生ず。予は此に於いて我が邦平安朝に於ける八省院の青龍白虎兩樓、及び棲鳳翔鸞兩樓の形式を想起せざるを得ざるなり。予の始めてこれ等諸樓の形狀を畫卷に於いて見たるや、予は其の意匠の奇なるに驚きたり。然して今支那に於いて予はこれと同

形なるもの、若くは更にこれよりも複雑にして奇異なるものを目撃するなり。又屋蓋の輪廓の平板に陥るを防ぐが爲めに獸形を用ひ、鬼龍子の列を置くが如き、用意の頗る到れるものあるを見るべし。

(ヘ) 「プラン」の形状

殿門の「プラン」の多くは長方形にして、長さは大凡其の幅の二倍に出入す。然れども亦往々黄金截の比をなすものあり。是の故に屋蓋の形状過大に失すること稀なり。我が邦近代の殿堂は其の「プラン」往々正方形に近い場合に於いて、これに「單層入母屋」の屋蓋を覆ふを以て屋蓋異常に大となり、殆ど建築の全部皆屋蓋なるが如き奇觀を呈し、破風徒に大にして妻飾の手法に困難を極む。これ決して美觀にあらざるなり。蓋しこれ皆「プラン」の正方形に近いもの一大原因たらずんばあらず。故に實際建築の使用上支障なき限りは、殿堂の「プラン」は長方形なるの利あるに如かず。本邦に於いても古代奈良朝に於ける堂は概ね長方形なりき。法隆寺金堂の五間四面、唐招提寺金堂の七間四面、東大寺大佛殿の十一間七面、皆長方形の「プラン」を以て成功せるにあらずや。支那に於いては我が國に於けるが如く、全建築皆屋蓋なるが如き奇觀を呈することなし。蓋し一は其の基壇の秀高なるが爲めに、吾人は常に殿門の屋蓋を仰ぎ視るの位置にあり、爲めに視野に入る屋蓋の大きさは適當に減殺さるに由るもの如し。

〔乙〕 短 所

(イ) 手法の貧少

手法の貧少は争ふべからざる事實なり。即ち所謂根本獨創に乏しきものにして、何れの處にも同一又は同系の手法を反覆せり。是の故に其の結果清新の味に乏しきを觀察すべし。例せば裝飾文様は龍を用ひること甚だ多く、殆ど其の處を撰まずしてこれを濫用せるの事實を見る。「柱」「扉」「羽目」「梁」「臺輪」「琵琶板」「格天井」「鋸金具」等一も龍の模様を以て裝飾せられざるものなきにあらずや。鳳は龍よりもやゝ少きも亦甚だ多く用ひられたり。構造手法に於いては數多の殿門に於けるもの千遍一律に流れ、料栱の如きは到るところに同一の形式を反覆せり。蓋し建築の森嚴なる態度を保つべき必要上、同一の手法を反覆して統一を維持するは多少其の理を存すと雖も、統一を維持し得る範圍内に於いて手法の變化を試むるは、建築の美を成すべき重要な事項に屬するにあらずや。要するに支那建築の手法は、處に隨ひ時に應じ、意匠縱横湧出するが如きものにあらず。只だ同系の手法を何處にも反覆し、平然として倦まざるが如きに至りては、吾人は寧ろ其の堅忍度無きに驚嘆せざるを得ざるなり。

(ロ) 構造の脆弱

構造の精細は吾人不幸にしてこれを調査することを得ざりしなり。「小屋組」の如きに至りては吾人全くこれを見ることを得ざりしなり。其の「繼手」や、其の「指口」や亦これを知るの便を得ざりしなり。是の故に構造に關する精細なる評論は吾人これを能くせずと雖も、其の大體は即ちこれを觀察するに難からず。

一般に支那建築の「木割」は我が邦に於けるものよりも細なり。「柱」「貫」「料栱」皆比較的過小なり。只だ輒

を以て外部を包圍するを以て、外觀上の堅牢を保つに過ぎず。次に各殿門建築の柱の太さ及び我が邦二三の建築に於ける柱の太さを對比すべし。

	外柱の徑 (R)	内柱の徑 (R)	外面中の 間の大さ (R)	最大柱間 (R)	建物の 大さ (坪)
太和門	2.12	2.42	27.45	〃	300. +
太和殿	2.60	3.50	28.10	37.00	613. +
中和殿	2.00	2.15	21.00	〃	133. —
保和殿	2.15	3.00	24.25	39.60	308. —
乾清門	1.66	1.66	22.70	〃	104. —
乾清宮	2.30	3.00	24.00	37.20	284. +
交泰殿	2.00	2.80	23.70	〃	79. —
法隆寺金堂	1.90	1.90	10.60	21.20	42. —
法隆寺大講堂	1.50	1.82	13.35	13.35	20. +
法隆寺南三門	2.30	2.30	—	17.25	69. —

これを我が國の殿門に比すれば、彼の柱の比較的小なること顯著なり。又料栱の小なるは最も特殊の事實なり。是の故に軒自ら淺からざるを得ず。況んや「栿木」のこれを支ふるものなきをや。「扇垂木」の手法に至りては最も構造の不完全なるものあり。即ち「垂木」は隅の一部に於いて扇形に配布せるを以て、此の「扇垂木」の「尻」は一塊となりて「隅木」に「配付」となるのみ。而してこれを以て格外に重き瓦葺の屋蓋の「軒先き」を支ふるは實に困難の極なり。殊に軒の「反轉」の甚しきものに在りては其の困難愈々大なるべし。是の故に支那の殿門は屋の隅の部分先づ破損を來すを常とせり。又楹を充たすに輓を以てするは、一見堅牢なるが如くにして實は甚だ脆弱なり。輓と柱との間に別に連結の手法なきを以て兩者全く互に別箇のものとなり。一旦激震あらば即ち危かるべきなり。幸にして北京の地由來激震なく又暴風少し。由つて以て安全を保つことを得るなるべし。

(ハ) 技工の粗漫

技工の粗漫は實に言語に絶せり。其の人目の容易に達せざる邊に於いてこれあるは姑く論ぜず。其の最も人目に近くして最も精緻ならざるべからざる石階、石欄等に於いても亦手法の甚だ粗放なるものあり。例せば階に於ける石級の如きは簡々其の大さを同じくせず。是の故に其の「收マリ」は曖昧の裡に葬り去らるゝなり。石欄の如きも寶珠柱の配置甚だ不規律にして其の間隔毫も一定するところなし。料栱の如きも簡々の「斗」「肘木」皆其の形状と大きさを異にし、甚しきは同列の斗にして一寸以上の差を發見するに至る。「垂木割」の如きも實に放縱にして其の排列甚だ亂雜なり。只一楹の間に若干支を入るれば足ると云ふが如きのみ。要するに支那建築施工の方

法は、起工に先だちて精確なる圖を作るにあらず、細部の手法等亦現寸乃至適當の縮尺を以て精確なる圖を作るにあらず、漫然として工を起し、進んで究迫するに至れば即ちこれを糊塗するもの如し。由來支那に於ける用器畫は非常に幼稚なるものにして、殆ど適當に建築圖と稱するに足るべきものを作ること知らざるが如し。斯くの如くして焉んぞ技工の精緻を望むを得べけんや。然れども建築大體の諧調は比較的よく成功せるを以て、細部の技工の精粗の如きは即ち深く道ふに足らざるものあり。若し支那人に對して技工の粗なるを詰問せば、彼は最も冷靜に答へて曰はむ、「吾人は大體に於ける諧調を考ふるのみ、些細なる手工上の問題に至りては即ち吾人の知るところにあらず」と。要するに紫禁城殿門建築の意匠は非常に豪邁雄大なり。所謂大陸的と稱すべきもの即ちこれなるべし。

規模、配置の嚴正、手法の大膽粗放、敷彩の華麗は其の特色なり。我が邦平安城の大内裡建築も亦酷だこれに肖たりき。彼の八省院、豐樂院を始めとし、無數の殿門は所謂丹楹碧甍、燦爛として人目を眩したり。假令其の大きに於いて遙に此の紫禁城に及ばざりしと雖も、其の規模の整齊、配置の嚴肅は決してこれに譲らざりしなり。然も今や其の痕跡全く滅絶し、我が隣邦の宮殿を見て坐るに千歳の古を追懷するに過ぎず、而して此の隣邦の宮殿も、永く修繕を怠りたるの結果として、白石の欄は雜草に埋没し、怪木莖に生じ、異草屋上に茂るの慘狀を呈せり。今より後此の珍奇なる殿門は應にますます廢頽に歸するなるべし。吾人はこれに對して憮然たる感を起さざるを得ざるなり。

第七章 日本建築と明清建築との歴史的關係

明清建築と我が日本建築と、歴史上如何なる關係あるやを攻究するは、極めて重大なる事項なり。予は今輕々にこれが斷案を下すことを得ざるなり。

予は只茲に此の研究の資料として、形體上に現はれたる二三の事例を列擧すべし。

〔甲〕 奈良朝建築との關係

(一) プラン 明清建築のプランは多く長方形にして、其の前面は十一間、九間、七間、三間等あり。高き基壇の上に建つこと奈良朝に於ける伽藍建築に於けるが如し。

(二) 屋蓋 重要な宮殿は屋制「四注」にして、これに次ぐものは「入母屋」なるの事實は、また奈良朝の伽藍制度と符合せり。彼は屋脊に獸形を用ひ、我は鴟尾即ち杵形を費用せり。彼は「入母屋」及び「切妻」の場合に「箕甲」を存せず。我もまたこれを存せざるものありしは、法隆寺金堂内の玉蟲厨子等に徴してこれを考ふることを得べきなり。

(三) 柱 柱の上下に「チマキ」なく、往々上部に向つて漸次に大きさを減少し、礎石の上面は水平なる圓狀をなし、僅かに床上に隆起せり。斯くの如きは皆我が奈良朝建築と相符合し、若くは親密の關係を有するところなり。

(四) 料・栱 料・栱の組織中「鬼斗」無くして、これに代ふるに普通の「斗」を以てし、斜に四十五度の角度に於て置けるが如き、支輪を用ひざるが如き、圓形の丸桁を用ひたるが如き、またよく奈良朝建築に類似するところあり。

(五) 垂木 軒の「ニ夕軒」なる場合に於いて、「地垂木」は常に圓形をなし、「飛椽垂木」は常に方形をなすが如き、「垂木割」の粗放にして嘗て正確なる規律なきが如き、「垂木」と料・栱と親密の關係を有せざるが如き、皆我が奈良朝建築に於いて慣用せられたる事實にあらざるは無きなり。

〔乙〕 平安朝建築との關係

平安朝は即ち奈良朝の日本化の時代なり。奈良朝の文物は殆ど全く唐朝の直寫なりしが如し。是の故に前記の事項中、日本化せられざる部分は尙ほ能く支那建築と親密の關係を保てり。

〔丙〕 鎌倉室町時代の建築との關係

(一) 料・栱の形式 料・栱の形式は我が所謂「カラ様」と稱するものにして、鎌倉時代に於いて我が國に輸入せられたるものと相均し。即ち「肘木」の端を圓弧の一種の形とし、上に「水クリ」を附加せり。「斗」の形状の如きは技工の粗放なるが爲めに、容易に其の真相を知るべからざるも、其の大體の諧調、權衡は即ち我が「カラ様」のものと相似たり。

(二) 料・栱の配置 料・栱の配置は我が所謂「ツメ組」なるものにして、楹間全く料・栱を以て充填せり。我が邦京

都近郊妙心寺の境内なる玉鳳院開山堂は後奈良院天皇の御宇に成れるもの、其の料・栱の配置方頗る明清の殿門と相似たり。

(三) 「尾垂木」これ「肘木」の「鼻」を作り出したるものにして眞正の「尾垂木」にはあらず。我が邦信濃小縣郡別所村なる安樂寺の八角四重塔は室町時代のものなるべし。其の「尾垂木」の手法全く暖滑のものに均し。其の他南都東大寺の鐘鏤の如き、亦此の類に屬するものなるべし。

(四) 柱と料・栱 柱の上には必ず「臺輪」あり、其の上に料・栱を冠す。「大斗」の大きさは必ずしも柱の上端の徑と均しからず、却つて往々これよりも小なり。斯くの如きは明清建築の通性にして、兼ねて又我が鎌倉以後に於ける「カラ様」建築の特性なり。

(五) 「扇垂木」我が邦に於いて軒の隅の部分のみを「扇垂木」とすること明清建築の如くなるの例は播磨國淨土寺の淨土堂等數多あり。淨土堂は建久の作にして大佛様即ち天竺様の式を備へ、明かに明清建築の模寫なることを自白せるが如し。

(六) 繪様 「貫」の下に於ける「持送り」「拳鼻」「繪様肘木」等の繪様は大體に於いて我が鎌倉室町のものと同類似せり。殊に彼の「持送り」の輪廓の如きは我が鎌倉時代に慣用せられたる「貫鼻」と酷肖することを觀察すべし。

(七) 彫刻 我が鎌倉室町時代に於いて慣用せる「墓股」「格狭間」等に於ける彫刻は亦明清建築にも現存せり。

特に石欄、石座及び木製の器具に於いてこれを見る。石欄の「擬寶珠」に於ける彫刻、其の「斗束」の彫刻の如き、亦皆我が邦鎌倉以降の手法に類似の性質を有せり。

(八) 裝飾文様及び色彩 裝飾文様及び色彩の彼我相酷似するもの甚だ多し。我が邦建武の建築と稱する、河内國南河内郡なる觀心寺本堂内の裝飾文様は、殆ど全く明清建築に於いて見るものと符合するものあり。また、京都市東福寺三門樓上の内部の裝飾文様の如きは、宛然純粹なる明清の様式を現はしたり。要するに、我が禪刹の宋朝建築と相關聯するは論勿く、其の他諸宗の寺院も猶ほ且つ、支那藝術の影響を免れざりしことを知るべきなり。

(丁) 桃山江戸時代の建築との關係

(一) 裝飾文様 我が桃山江戸時代に於いて慣用せられたる裝飾文様は、多くは支那より傳來するところなるが如し。彼の藻井の中に丸龍を畫き「貫」「長押」「羽目」等に一種のから草、若くは幾何學的な文様を施すこと我が日光廟の如きは、吾人支那に於いて到る處にこれを視る。これ蓋し偶然にあらざるなり。

(二) 色彩 色彩は文様と相隨伴して同様の關係を有せり。藻井、棟梁、料枳等に於ける濃艶なる色彩法は彼我殆ど同一の手法に成れり。其の慣用せる顔料は概ね原色にして其の手法は概ね纏綿なり。

(三) 繪様 明清建築に於ける繪様は亦我が桃山江戸時代の繪様に似たるもの少からず。殊に彼の石材に於けるもの、木造の器具に於けるものに於いて然りとす。即ち非常に複雑なる「華頭」「格狹間」の類に於いて彼此其

の方針を均しうするもの往々にしてあり。又我が陸前松島瑞巖寺の玄關に於ける「持送り」の輪廓、其の表面に彫せる繪様の如きは、殆ど全く純然たる支那的趣味を保てることを觀察すべし。斯くの如き類例尙ほ他に少からず。

(四) 彫刻 彫刻に關して吾人の言はむと欲するところは亦繪様に於けるが如し。只だ明朝時代に於いては建築的彫刻甚だ少く、只だ石欄、石座、基壇及び器具等に於いてこれを觀るのみ。龍、鳳、麟の如きは彼の最も賞用せる題材なり。其の寧ろ寫生的にして便化の力に乏しきが如きに至るまで、洵によく桃山、江戸時代の特性と符合せり。

右の事實に由りて考ふるに、吾人は左の如き成績を得るが如し。

(イ) 大體の形式に於いては奈良朝時代の建築に類似す。

(ロ) チテールの手法に於いては鎌倉室町時代の建築に類似す。

(ハ) 裝飾の手法に於いては桃山、江戸時代の建築に類似す。

これ甚だ興味ある現象にあらずや。奈良時代とは即ち支那に於ける唐代なり。鎌倉室町とは即ち宋元明なり。

桃山とは即ち明末なり。是の故に以上の成績を換言すれば、今日の支那建築は其の大體形式に於いては遙に唐代の意匠を傳へ、其のチテールの手法は多く宋以後の精神を遺し、其の裝飾に至りては即ち明以後の手法を襲用するものと云ふことを得べきなり。大體の骨格は千歲朽ちざるも、其の局部の手法は漸くにして變遷し、殊に裝飾

の方法に至りては全く昔日の觀を改めたるもの、實に支那建築の真相なるが如し。吾人は斯の興味ある大問題に就いて、漸次研究の歩を進めむことを期すべきなり。

第八章 明清建築の由來

終りに臨みて、予は明清建築が如何にして成立せるかを一言せざるべからず。而して這の問題を解釋せんと欲せば先づ支那歴史の要領を説かざるべからず。

世人の已に熟知するが如く、支那歴史の半面は即ち漢族と東胡北狄等の蠻族との競争の歴史なり。漢族は元來今の黄河附近の地に繁殖し、漸次に地を南方に拓きたり。これと同時に北方に東匈奴、蒙古族等ありて常に漢族と争闘せり。南北朝の際蠻族は一時中國即ち漢人の領土の一部を占領せしが、久しからずして復た隋唐即ち漢人の爲めに統一せられたり。唐宋に遼東北より起り、金これに代りて終に中國の北半部を占領せり。元は即ち蒙古にして、金と宋とを併呑して天下を合一せり、これ中國の胡人の手に歸せる始なり。明は元を亡ぼして再び胡人を逐ひ、中國復た漢人に屬せしが、清東胡より出でてこれに代り、二百餘年の星霜を経て今日に及び中國は終に胡人の奪ふところとなり了れり。

今日吾人が見るところの明清建築は、果して何處より傳來せるものなるや、これ恐らくは元代の建築を繼承したるものなるべし。元の建築の起原は何處に在りや、由來元の文化は複雑なるも、畢竟これ宋の傳來にあらざれば即ち金の傳來なり。然れども金の都城は宋の宮城を模寫したるの記録あるを以て見れば、金と宋と其の建築法に差異なかりしものと考へざるを得ず。而して金は遼の古都に據り、宋は遙かに唐の遺風に準へるものなりとせば、明清建築は唐宋即ち漢人の系統を承繼せるものにして、時に遼金元等の胡人の意匠の加味せるものにあらざるなきやを疑はざるを得ず。

然れども當時中國の人文は著しく發達し、胡人の野なるが如き比にあらず。是の故に胡人中國に入れば直に中國の文物を取りてこれを用ひたるもの如し。胡人の美術及び工藝に關する技倆は遠く漢人に及ばざりしもの如し。即ち宮城の建營に當りても、常に其の範を中國に取りし所以なり。是の故に明清建築は唐宋の直系に屬し、北狄文化の影響を加味すること極めて僅少なりと認めざるを得ず。只吾人は未だ唐宋の建築の如何なるものなるやを詳かにせず、又北狄固有の藝術を知らず、今これを對比するを得ざるを憾みとす。唐の宮城建築は唐六典に其の概略を記載せり。記事茫漠として其の要領を得るに苦しむも、亦多少其の規模を想像するに足るものあり。況んや我が朝の平安京は唐の宮城に模せるものなりと稱せらる。宋の宮城に關する記は載せて輟耕錄に在り、亦其の要領を得難きも、多少其の規模を窺ふことを得るに足る。元以降の宮城に至りては即ち吾人ほど其の要領を得るものあり。以上唐、宋、元及び遼、金の各宮城を對比して考ふるに、其の大體の規模は殆ど同一の方針に由れるもの如く、只だ殿門の配置及び大きさ等は各朝多少の差異あるもの如し。要するに支那建築は古來著しき形式の變化なく、只だ其のチテールに於いて、漸次の變遷を受けたるもの如し。

前章記述せるが如く、明清建築の大體の形式は我が奈良朝の建築に似たるものあり。我が奈良朝の建築は即ち唐朝の建築と親密なる關係を有するものなり。是の故に明清建築の大體の形式は亦唐朝の建築と相類似するものなりと云ふことを得べし。明清建築のチテールの手法は、我が鎌倉以後の建築に似たるものあり。我が鎌倉時代の建築は即ち宋朝の建築と親密の關係を有するものなり。是の故に明清建築のチテールの手法は、亦宋朝の建築に於けるものと相類似するものなりと云ふことを得べし。要するに明清建築の起原は遠く唐朝にあり、唐朝の建築宋に至りて其のチテール一變し、明清に至つて裝飾全く其の面目を變ぜるもの、即ち現今の支那建築なるが如し。若しそれ唐朝以前に遡りて考ふるが如きは、別種の問題としてこれを他日に譲らむと欲す。

吾人は更に一步を進めて唐朝建築形式の如何を想ひ、これを明清建築と相對比して其の異同を考へ、其の變遷の順序を察するに、吾人は其の間に殆ど常識を以て解する能はざるが如き激烈なる變遷を致せることを觀察すべし。今試に一二の例を示さむ。

(一) 鴟吻 鴟吻は唐朝に於いては、我が奈良の唐招提寺金堂に於けるが如き形式を有せしものなるべし。而して明清に於ける吻は全然これと別種のものなり。我が邦黃檗宗の佛寺の殿門に於ける吻及び東京湯島聖堂の大成殿に於ける鬼狀頭と名付くる吻の一種は、共に明代の意匠を傳へたりと稱するにも關せず、全く北京城に於けるものと其の形狀を異にせり。北京城に於ける吻の形狀は、唐朝の吻より如何なる經路を經由して變化し來りたるものなるか。

(二) 勾欄 勾欄の佛教と共に韓土支那より我が邦に傳來したるは論無し。其の形式は即ち一定の法規に由り、寶珠柱ある場合には柱に一種の寶珠を冠し、柱なき場合には即ち所謂「組勾欄」を用ひたり。今明清建築に於ける勾欄は其の石造なると木造なるとを論ぜず、常に寶珠柱を備へたるものにして「組勾欄」なるもの無く、柱の上部には絶えて寶珠を冠せずして、却つて雲龍等の複雑なる彫刻を用ひ、或は獅子の坐像を用ひ、稀に蓮に似たる一種の物體を用ひ、彼我の差頗る著しきものあり。知らず、如何なる經歷に由りて唐以後の勾欄が明清の勾欄に變ぜしや。

(三) 唐破風 「唐破風」は本邦に於いては鎌倉以後にこれを見る。即ち吾人の宋朝の傳來と認むるところなり。宋朝に於いて現存したるべき「唐破風」が、明清時代に於いて絶體的に其の形を現はすことなきは何故なるべきか、吾人の殆ど怪訝に堪へざるところなり。

(四) 妻飾 「妻飾」は明清建築に於いては極めて無趣味のものなり。唐宋に於ける「妻飾」は予未だこれを詳かにせずと雖も、推理上及び繪畫等に現はれたるものに就いて考ふるに、多少本邦普通の「妻飾」に類似するものならざるべからず。予は唐代の秀美なる「妻飾」が如何にして明清の無趣味なるものに變化したるやを疑はざるを得ず。

(五) 裝飾文様 唐代に於ける裝飾文様は即ち我が天平時代の文様の師なり。其の意匠の巧妙にして曲線の飛動せる、色彩の精美なるは世間已に定論あり。今明清の裝飾文様は、これに比して頗る劣等のものとして爲れ

り。吾人は如何にして斯の如く墮落せしやを知らざるなり。

以上は特に顯著なるものの二三を掲げたるに過ぎず。其の些細なるものに至りては即ち殆ど無数なり。吾人は此に於いて唐朝以後の建築が如何に激烈なる變遷を致したるかを思ひ、殆ど怪訝に堪へざるものあり。吾人若し此の疑問を解決せむと欲せば、先づ唐朝以後の各朝の建築を精査し、兼ねて北狄建築の真相を研究し、更に遠く西域建築を調査し、其の中國建築に與へたる影響の有無を研究せざるべからざるなり。而して其の唯一の方法は即ち先づ支那全土に於ける古代建築を實査するに在り、予は未だ支那に古代建築の遺物あるや否を詳かにせず、然れども北京附近なる天寧寺の塔は隋代の創立と稱せられ、通州の塔は遼金の間に粉まると傳ふ。若し洛陽、長安、成都等を探究せば、或は古代建築の現存を發見することあらむ。洛陽、長安は我が邦の奈良京都に比すべき處にして、歷朝交々都せるところなり。商、東周、漢、東漢、西晉、隋は洛陽に都し、周、秦、漢、隋、唐は長安に都し、蜀漢は成都に都せり、その他北支の鄴都汴京、江南の建康、臨安等々の地を探究して然る後始めて明清建築の由來を論すべきなり。別に吾人の注意を要するもの猶ほ一あり。即ち支那南北に於ける建築の比較研究これなり。支那は南北其の風土氣候等を異にするのみならず、北部は古來屢々北狄の領土となりてこれと接觸し、南部は即ち殆どこれと離隔せり。其の建築の形式亦自ら異ならざるを得ず。是の故に南北の形式を對比して其の異同を詳かにするは、即ち亦明清建築の真相を研究する所以の第一義なり。

最終に予は附言す。予が今日茲に論ずるところは總て北京城の建築に限れり。詳言すれば其の宮殿建築に限れり。更に詳言すれば主として其の紫禁城内の九重殿門の建築に限れり。宮殿以外北京には幾多の宗教建築の大乾坤あり、住家建築の別天地あり、更に北京以外北清の野に無數の建築世界あり、北清以外別に南清あり、北清と南清との外に塞外諸州あり。支那建築は決して一括して論じ去るべきものにあらず。予僅に北京の一小部を視て其の他を視ず、而して敢へて斯の一篇を草す、素より粗漏杜撰の譏を辭せざるなり。若し後の支那建築研究者の参考の一端となるものあらばこれ予が望外の僥倖なり。

謹で復命す。

明治三十五年二月

(明治三十六年四月東京帝國大學工科大学學術報告 第四號掲載)

清國北京紫禁城殿門の建築

北清建築調査報告

北清建築調査報告

緒言

予は明治三十五年六月一日を以て北京を發し、路を西北に取り、昌平南口を経て居庸關を越え、永定河に沿うて懷來、鷄鳴、宣化等を経て張家口に到り、轉じて西南に向ひ、懷安、天鎮、陽高、聚樂等を経て山西省の大同府に到れり。次いで大同より西の方、三十清里なる雲岡に至り、再び大同に歸り、更に轉じて南に向ひ、應州を経て長城を越え、繁峙に到り、滹沱川を渡りて五臺山に登り、轉じて東に向ひ、龍泉關を越えて直隸省に入り、阜平、王快、曲陽等を経て定州に出で、汽車に搭乘し、七月六日を以て北京に歸りたり。

其の間各地方の建築に關して調査するところ甚だ少なからず、今一々此を詳述するの時なし、姑らく其の最も顯著なるものを選びて其の梗概を記述す。

第一 明 陵

明陵は昌平の北二十清里（以下單に里と略稱す）に在り、俗に十三陵と云ふ。明の十三帝の墓陵あるを以てなり。

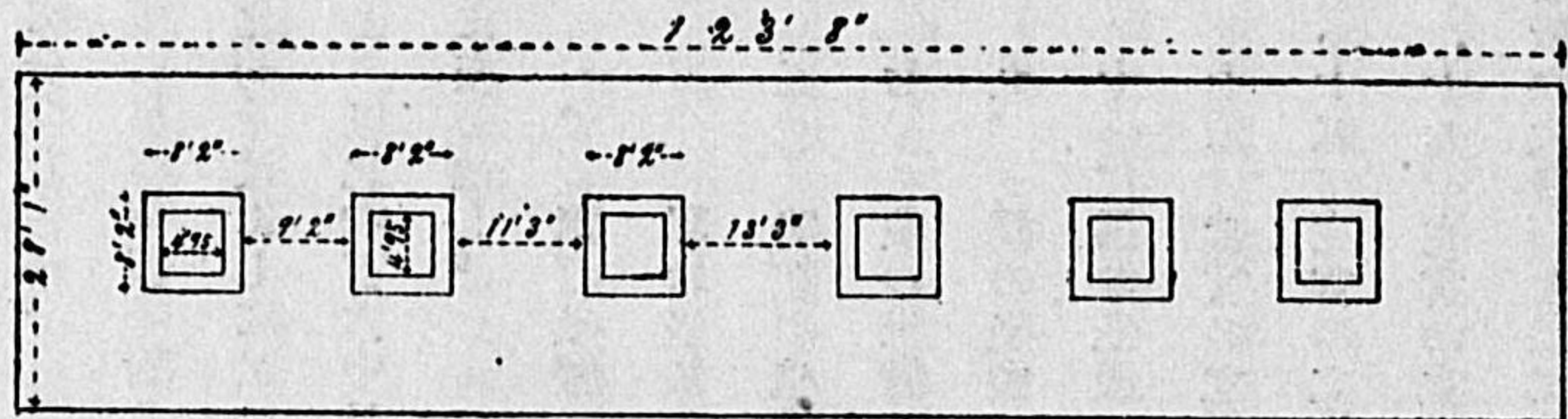
所謂十三陵とは

- | | |
|----------------|----------------|
| (一) 永樂(成祖)の長陵 | (二) 洪熙(仁宗)の獻陵 |
| (三) 宣德(宣宗)の景陵 | (四) 正統(英宗)の裕陵 |
| (五) 成化(憲宗)の茂陵 | (六) 弘治(孝宗)の泰陵 |
| (七) 正德(武宗)の康陵 | (八) 嘉靖(世宗)の永陵 |
| (九) 隆慶(穆宗)の昭陵 | (十) 萬曆(神宗)の定陵 |
| (十一) 泰昌(光宗)の慶陵 | (十二) 天啓(熹宗)の德陵 |
| (十三) 崇禎(毅宗)の思陵 | |

就中永樂の長陵は其の尤も大なるものにして、直に天壽山の南麓に在り。其の他は長陵と相距ること或は二三里或は七八里に及ぶ、皆天壽山に連れる山に倚れり。

昌平より北行五里にして石造の大牌樓あり、これ即ち明陵の第一門なり。其のプランは第五三二圖に示すが如く、五間にして、元來色彩を施せるものなるも、今や全く剝落して殆ど其の痕跡を止めず。各部に於ける彫刻は技工甚だ秀美にして、明初の手法を見るに足るべきものなり、牌樓の北約三千三百尺にして大紅門あり、二楹三闕、悉く輓を以て造る。東西約百二十六尺、南北約三十六尺、三闕、廣さ各十八尺、内部は穹窿を用ひて藻井なり、軒は石の刳形より成りて垂木を出さず。極めて堅實にして記念建築の性質を具有せり。(第六〇五圖)

第五三一圖



明陵牌樓平面圖

北清建築調査報告

大紅門の北約千三百尺にして碑亭あり、亭の前に一對の華表あり、八角の臺上に八角の石柱を建つ。柱の上に柱頭あり、其の上に往天虎と稱する龍に似たる動物を置けり。柱の表面には雲龍の高彫あり、柱頭の下に雲形の貫あり、其の大體北京城內天安門の内外に建てるものに肖たり。全高約三十六尺、柱の一面の大さ一尺九寸、臺の一面四尺一寸五分あり、彫刻の手法は彼の牌樓に於けるものと同様にして甚だ精巧を極めたり。

碑亭は八十七尺六寸五分四方の重層建築にして、屋は入母屋をなせり。四方中央に各廣さ十六尺一寸の穹窿道を開き、穹窿道は樓を十字形に縦横に貫通せり。中央に一大碑あり、龜趺の上に建ち、高さ約二十七尺あり、大明長陵神功聖德碑と題し、終に

高 熾 謹 述

洪熙元年四月十七日孝子嗣皇帝
と刻せり。

此の建築は柱以下皆輓を以て作り、木造の如くに色彩せり。料栱は上下共に「三手先」にして二個の「尾垂木」を出せり。形式所謂「和様」と「唐様」と

を混じて分明ならず。

亭の後に再び華表一對あり、亭前のものと全く相均し。

亭の北約千尺にして又一對の華表あり、六角にして高さ二十五尺許り、形狀製作共に遙かに前者に劣れり。此の華表より以北約百六十尺の間隔に於いて、精巧なる動物の石像道路の兩側に相對して駢列せり、今其の順序を検するに左の如し。

- | | | | |
|-----|-------|-----|-----|
| 一、 | 獅の坐像 | 二、 | 全立像 |
| 三、 | 犀の坐像 | 四、 | 全立像 |
| 五、 | 駱駝の坐像 | 六、 | 全立像 |
| 七、 | 象の坐像 | 八、 | 全立像 |
| 九、 | 麟の坐像 | 十、 | 全立像 |
| 十一、 | 馬の坐像 | 十二、 | 全立像 |
| 十三、 | 武官の立像 | 十四、 | 全上 |
| 十五、 | 文官の立像 | 十六、 | 全上 |
| 十七、 | 文官の立像 | 十八、 | 全上 |

像は皆白大理石を以て造り、其の臺亦同一の石より彫出せり、其の最も大なるものは立像にして、長十二尺餘、

高さ臺上十尺、幅六尺あり、此の故に臺を除いて尙ほ七百二十立方尺の巨石を要したり。これに臺を加ふる時は殆ど千立方尺とならざるべからず。吾人は何處より斯くの如き巨大なる大理石を鑿出し、如何なる方法を以てこれを運搬し來たるか殆ど怪訝に堪へざらんとす。

石像の列終れば更に石門あり、三門三闕、其の制北京城内天壇の祭壇の前に於けるものに均し。但し此の柱の形式は碑亭の前後に於ける華表と同一にして、上に往天虎あり。柱頭の下に雲形の貫あり、又楣の上の中央に寶珠を置けり。

以上の装置は則ち十三陵の總てに共通するものにして、石門内は廣潤なる平野數里に亘り、平野に限れる連山の下に森林點在せるを見るは即ち陵の在る所なり、十三陵の制は殆ど皆同一にして、只大小精粗の別あり、就中永樂の長陵は規模尤も壯大にして、製作尤も優秀なり。故に今長陵の現状を記して十三陵を代表すべし。

石門の北凡そ十里、天壽山の麓に位して長陵あり、正面に三闕單層入母屋の門あり、門内東方に碑亭あり。更に進めば五楹三闕單層入母屋の大門あり、稜恩門と名づく。前後陞三出、白石の基、白石の欄、一に宮城内の太和門に似たり。

門内廣潤なる院子を距て大殿あり、三成の白石壇上に屹立し、九間五面、重層、四阿、正面五闕、其の制大いに宮城内の太和殿に似たり。今其の大きさを測るに、前面二百二十尺九寸、側面九十五尺三寸、即ち殆ど太和殿と同一の面積を有せり。内部の柱は凡て三十二本、直徑三尺有六寸、皆楠の一木より成り、近世の如く小片を合し

たるものに非らず、實に無雙の偉觀なり。礎石は白石にして方六尺七寸あり。外柱は前面直徑二尺五寸、側面直徑一尺八寸。内部の裝飾文様は全く清代のものとの趣を異にし、藻井には「から花」を畫いて甚だ美なり。大殿は即ち我が拜殿に相當するものにして、中央に位牌を安置せり、大殿の後に三座門あり、門内に小碑亭あり、碑亭の中に石造の卓を据ゑ、其の上に石造の五具足を陳列せり。卓の後に石壁直立し、壁上一高樓あり、其の外観大いに北京城内の鐘樓に似たり。

石壁の下より隧道を通じ、曲折して樓に登るべし。樓内には一碑あり、「成祖文皇帝之陵」と刻せり。古へ色彩を施せるも今剝落して殆ど痕跡なし、樓の後なる小丘は即ち成祖の墳にして、丘上別に墓標の類を建てず、其の制大いに我が邦の古墳に類似せり。

明陵の建築的價値は其の規模の絶大なるにあり、其の個々の墓陵及び其の附屬建築は、比較的特に注目すべきものなしと雖も、彼の第一の五間の牌樓より、最後の石門に至るまで、大紅門、碑亭を置き、華表を配し、石獸石人を列ぬるが如き、意匠望洋として際涯を知らず、終に人をして自失せしむるものあり、所謂纒かに門に入る時、先づ其の膽を奪ふものか。

第二居 庸 關

南口より西北に向つて進むこと十五里にして萬里長城に至るべし。長城の前に支城あり、壁を穿ちて關門あり、

門を過ぎて行くこと數十歩にして一つの石造の穹窿道あり。これ我が建築學上尤も趣味あるもの一つなり。フアーガッソン氏も印度及び東洋建築史上にこれを紹介したりき。

穹窿道は、フアーガッソン氏の記せるが如く、五角形の穹窿にして南北に通じ、全部白石を以てこれを造る。穹窿の幅二十四尺、深さ四十九尺八寸、穹窿の左右なる石壁長各三十三尺八寸、高さ高棟の下より地上まで三十一尺、拱の幅四尺五寸あり、前後の拱の周圍には彼の喇嘛教に特有なる彫像あり、即ち拱の上には Garuda (迦樓羅) あり、其の左右に龍女あり、其の頭上に七蛇を戴き、其の尾は蛇となれり。明以降の遺物にして吾人の目に觸るゝものは此の龍女の上に七蛇あることなし。獨り元末の遺物なる此の關門に於いてこれを見るは、吾人の尤も趣味を感じる所以なり。蓋し喇嘛教は元初より支那に流布せるを以て、元末に於いては已に支那固有の佛教を壓したるもの如し。況んや、其の皇室の保護甚だ厚きものありしをや、居庸關に於ける彫刻の手法は、これを證明して餘りあるものと謂ふべきなり。

拱道の内面は亦精細緻密なる佛像を以て裝飾せられたり、其の前後の入口に接する部分に四天王の像を彫刻せり、手法精熟なる後世に其の儔を見ざるところなり。四天王は即ち喇嘛教の摩利海(西北)、摩利清(東北)、摩利紅(東南)、摩利受(西南)なり、摩利紅の左に左の銘あり。

正統十年五月十五日功德

靈信官林普賢發心修造

北清建築調査報告

即ち大明正統に修繕を加へたることを知る。

今其の痕跡を辨すべし。四天王の間には漢、蒙古、西夏、畏古兒、西藏、デヴァナガリの六種の文字を以て銘を刻せり。漢字を以て記したる末に左の署名あり、

至正五年□□乙酉九月吉日

西蜀成都寶積寺僧德成書

至正五年は即ち元の惠宗の代にして、西曆一千三百四十五年、我が國北朝の貞和元年に當れり。

四天王及び銘の上部には東西各五軀の佛の坐像を彫刻せり。予一々其の名を知らずと雖も、其の印相は獨り喇嘛佛に於いて見るべき特殊のものなり。

天井には五個の曼荼羅を彫刻せり、箇々皆其の形相を異にせり。

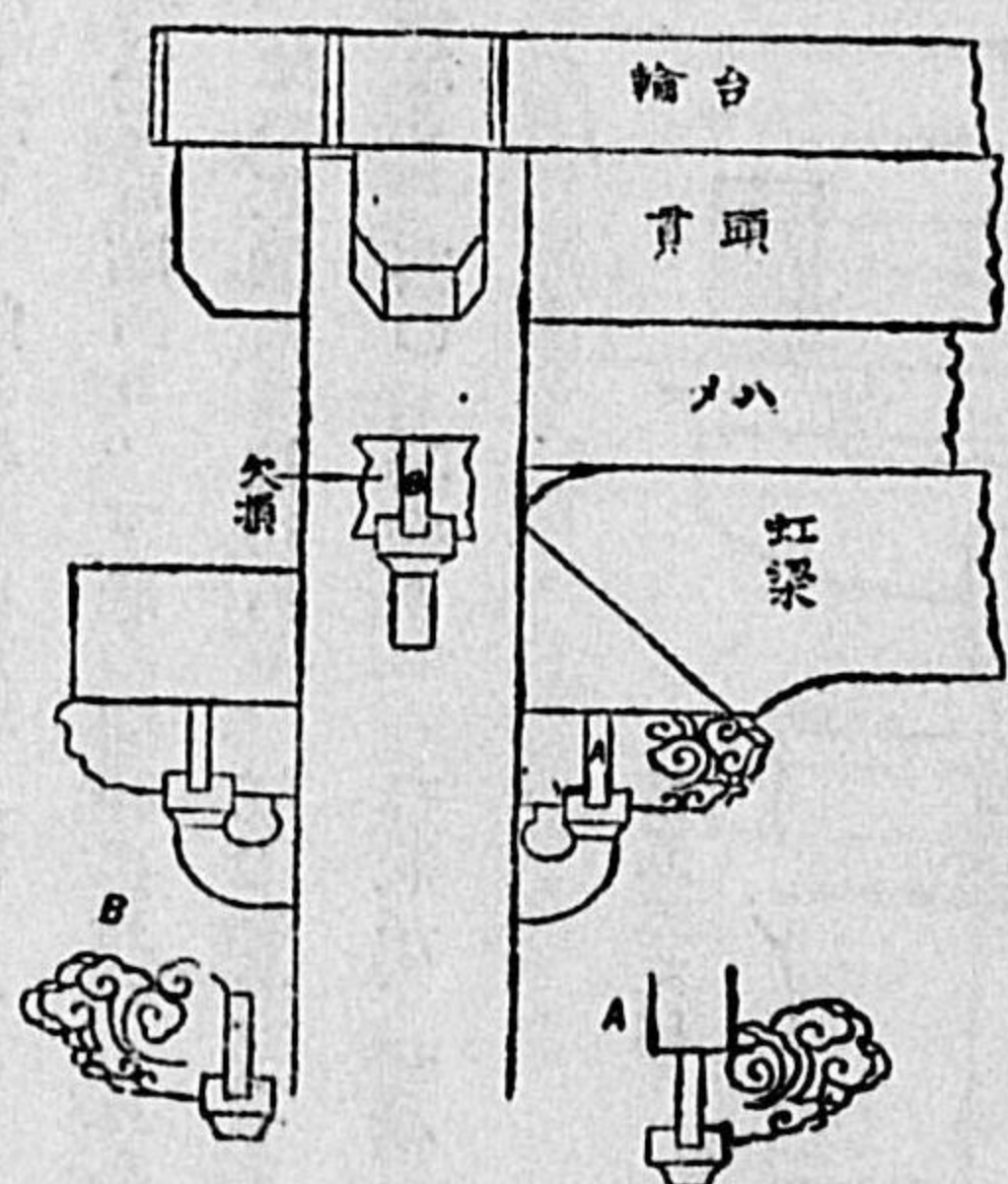
要するに此の關門は其の拱の形状の奇異なること、其の拱の周縁に七蛇を戴ける女體、及び迦樓羅を見ること、内面の精細なる佛像の彫刻あること、六箇國の文字を以て記せる銘あること、此の銘に署名を見ること、工作の甚だ精巧なること等に由り、建築史上及び一般文藝史上非常なる價值を有するものと認むべし。(第六六〇圖)

第三 宣化府の鐘樓及び玉皇閣

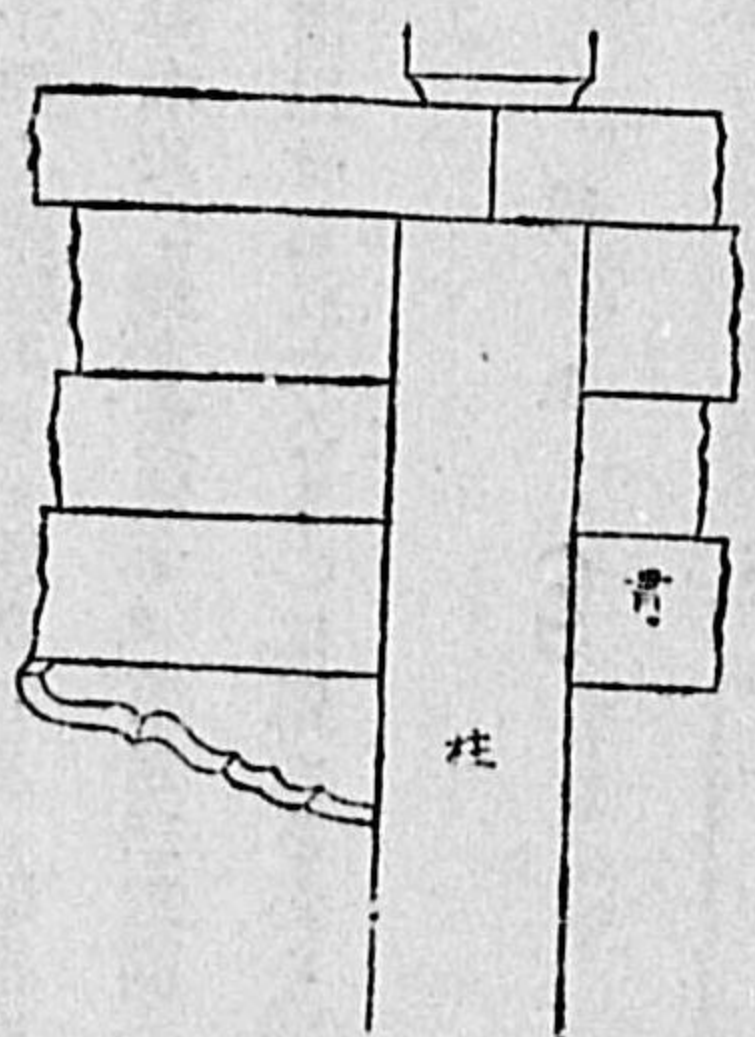
宣化府は北京の西北三百三十五里にあり、此の附近木造建築多く、其の構造形式大いに我が邦の建築に類似せり。鐘樓及び玉皇閣の建築は其の最も觀るべきものなり。

鐘樓は軛造の臺上に建てり。臺は九十三尺二寸五分四方にして、十字形に、廣さ十四尺九寸五分の穹窿道を通じ、其の中心は交叉穹窿を成せり。宣化以西都邑の鐘樓若くは鼓樓の臺は多く斯くの如き手法を用ひたり。

樓の下層は五間三面にして、外柱は游離して立ち、内柱は軛を以て包まれたり。内陣の中央別に四本の柱あり、直ちに上りて上層に至り、鐘を懸けたる梁を支承せり、上層は三間三面にして椽を廻らせり。兩層共に前後に向

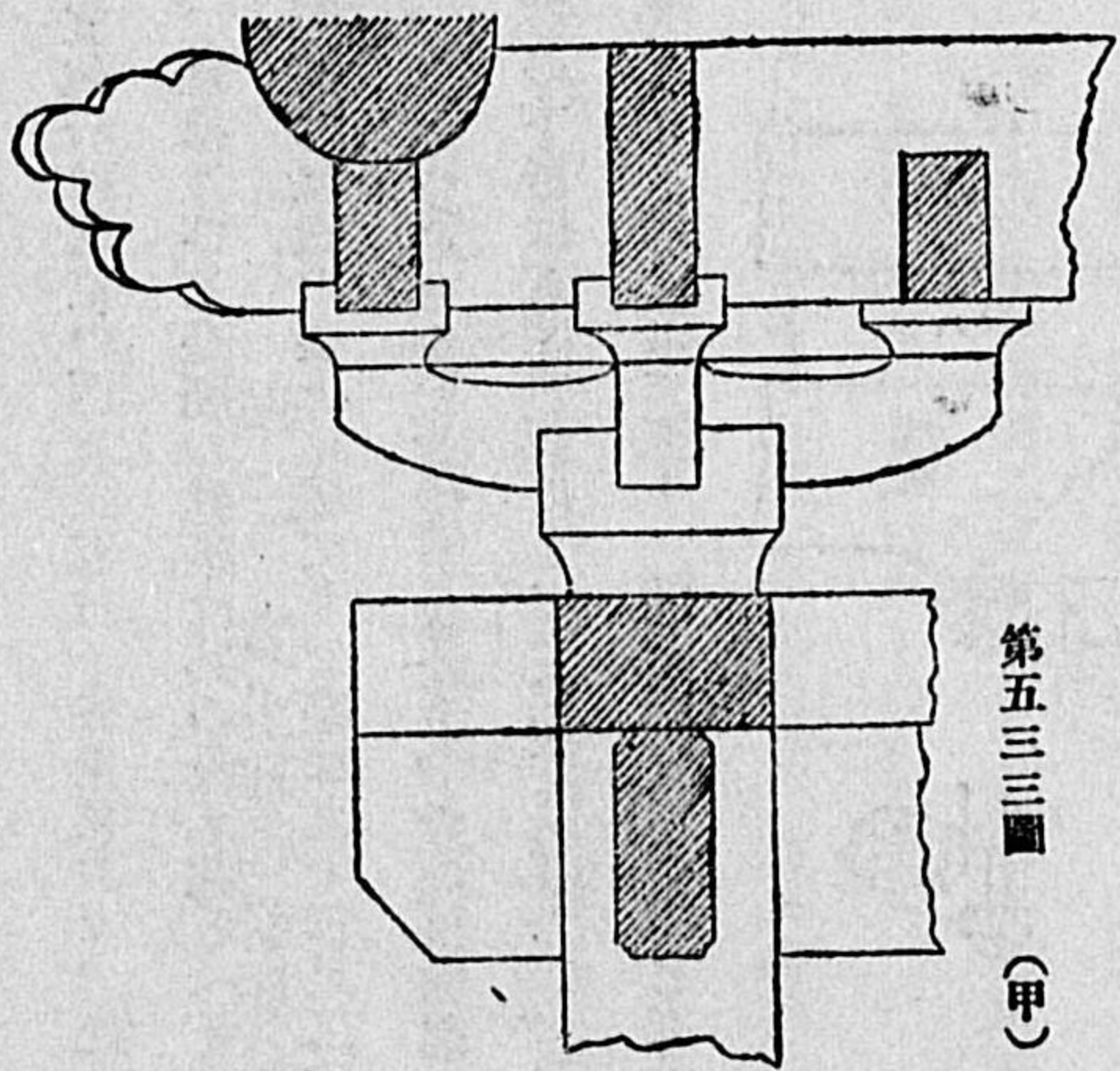


第五三二圖(甲)

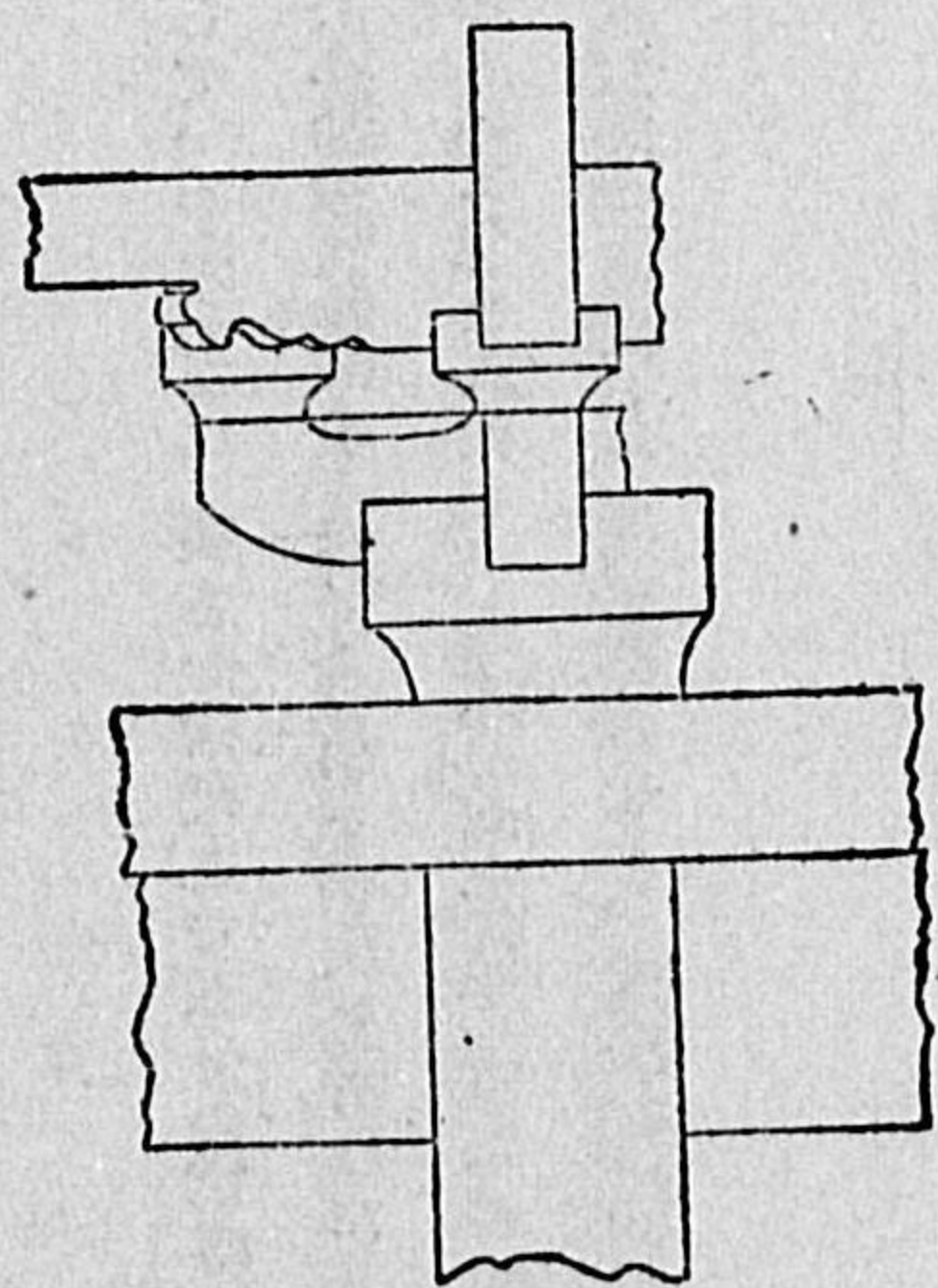


同上(乙)

拜あり、大屋根向拜屋根共に入母屋にして、向拜の棟は大棟より低し。此の故に建築の形状頗る變化に富み輪廓甚だ美なり。此の建築に於いて觀るべきものは其の細部の手法なり。其の木造なるが爲めに著しく我が國の建築に類似する點あり。下層の向拜に於ける手法は第五三二圖に示すが如く臺輪あり、頭貫あり、羽目あり、虹梁あり、此の虹梁には袖切あり、虹梁を支承するに繪様肘木あり、挿肘木又これを支承す。第五三三圖は下層側面の手法なり、其の「持送り」の形状が、如何に我が邦の鎌倉時代に慣用せられたるものに似たるかを觀察すべし。

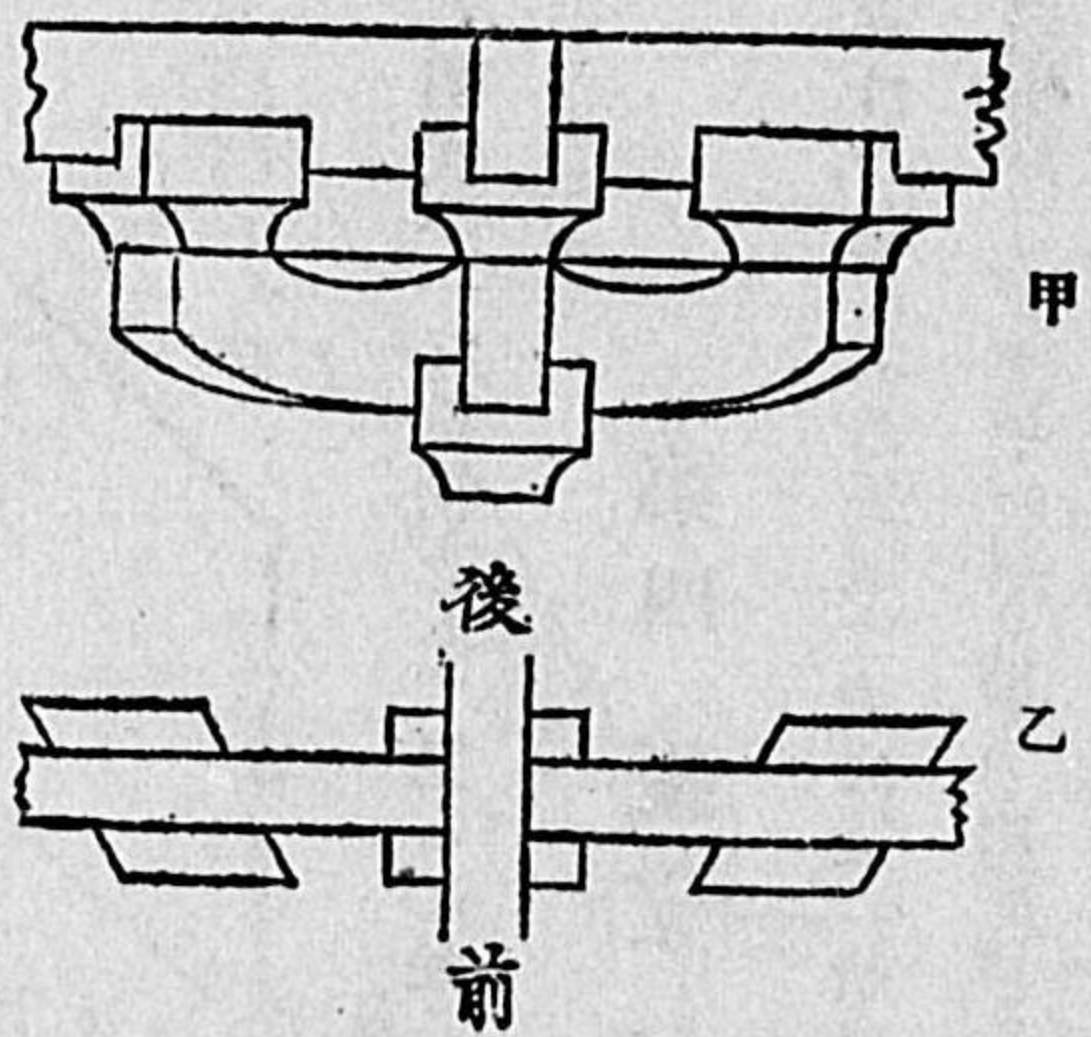


第五三三圖 (甲)



同上 (乙)

第五三四圖甲は樓上の料栱なり。内部の料栱四手先にして、料を斜に置くの奇法あり(第五三四圖乙)。斯くの



第五三四圖

如き手法は亦此の附近に行はれたり、其の何の故なるや知らず。

此の建築の年代は未だ詳かならざれども、恐らくは明代のものなるべし。今の宣化城は明代に於いて其の規模を割せしものなればなり。

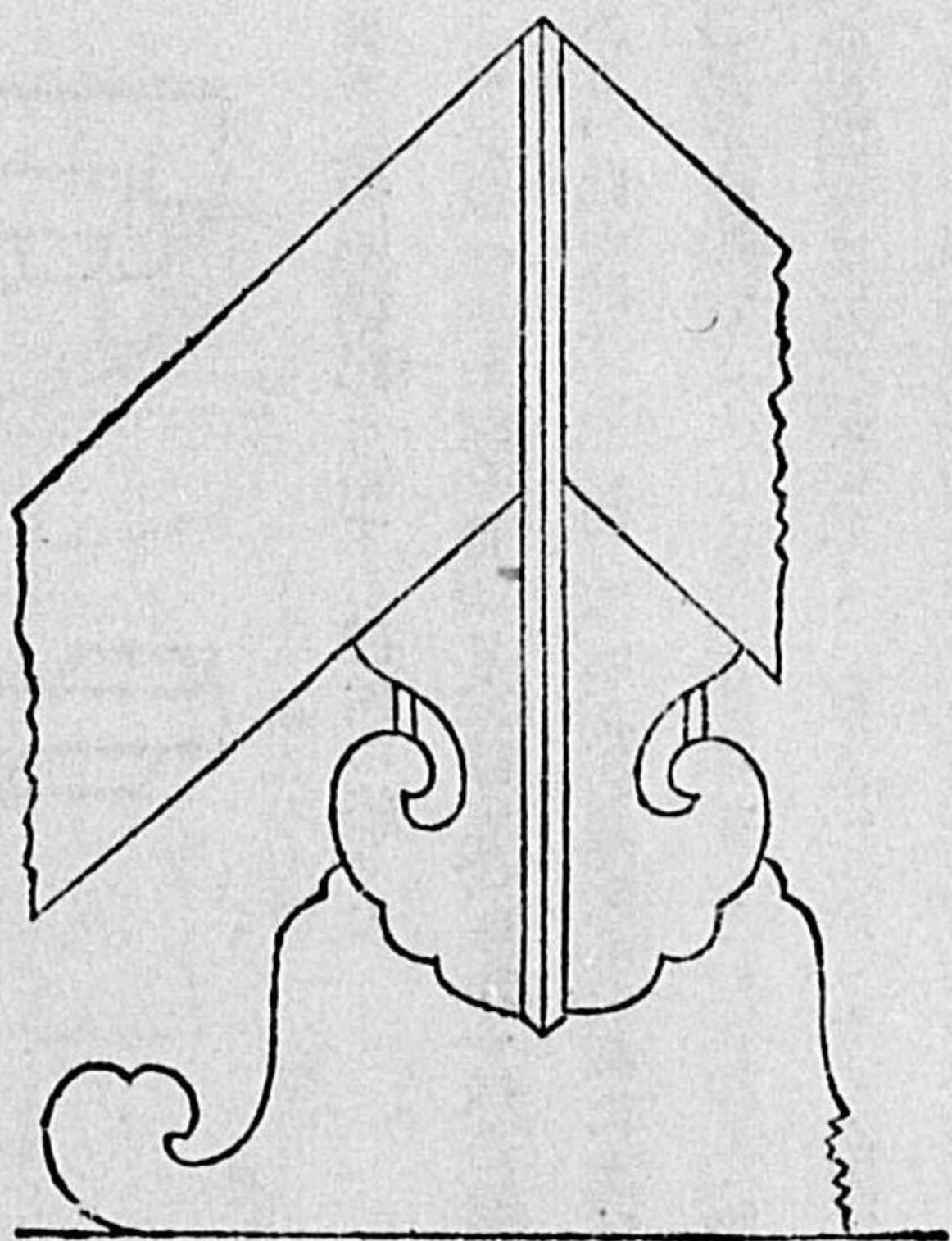
碑銘に

大明弘治七年歲次甲寅九月上日

とあり、蓋し創建の時を示すものにあらざるか。

又重修清遠樓記と題する碑銘の終りに
乾隆歲次戊辰閏七月初日文林宣化縣加一級西蜀雷建立

とあり、此の碑文によれば、明代の建築は大破に及び、丹青剝落せしを以て修繕すと云ふ。思ふに明代の様式は多くこれを變することなくして修理せしもの如し。要するにこれ明代建築の一好遺物として見るべきものならん。玉皇閣はまた鐘樓の如く、輓を以て造りたる高臺の上に立ち、臺は穹窿道を以て四方に貫通し、中央に交叉穹窿を架し、臺上に木造三層の樓を建つ。其の平面及び立面共に太だ鐘樓に似たり。其の上層は入母屋にして、妻

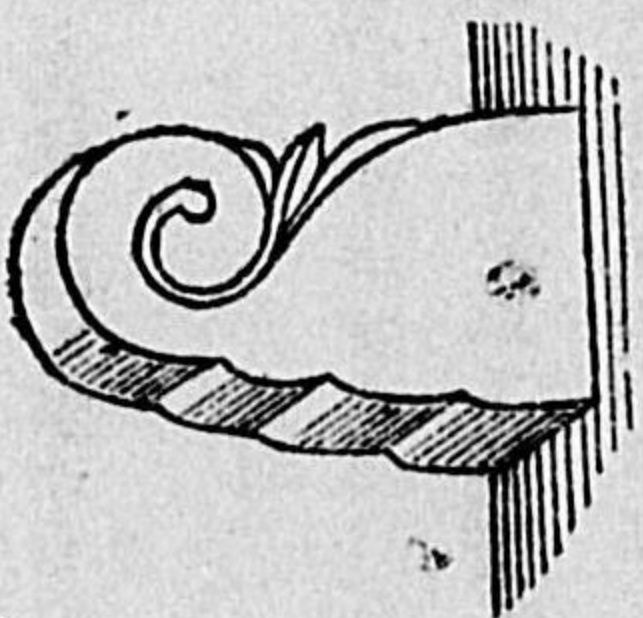


第五三五圖

は亦た明代の一好遺物として見るに足るものならん。

第四 張家口の長城

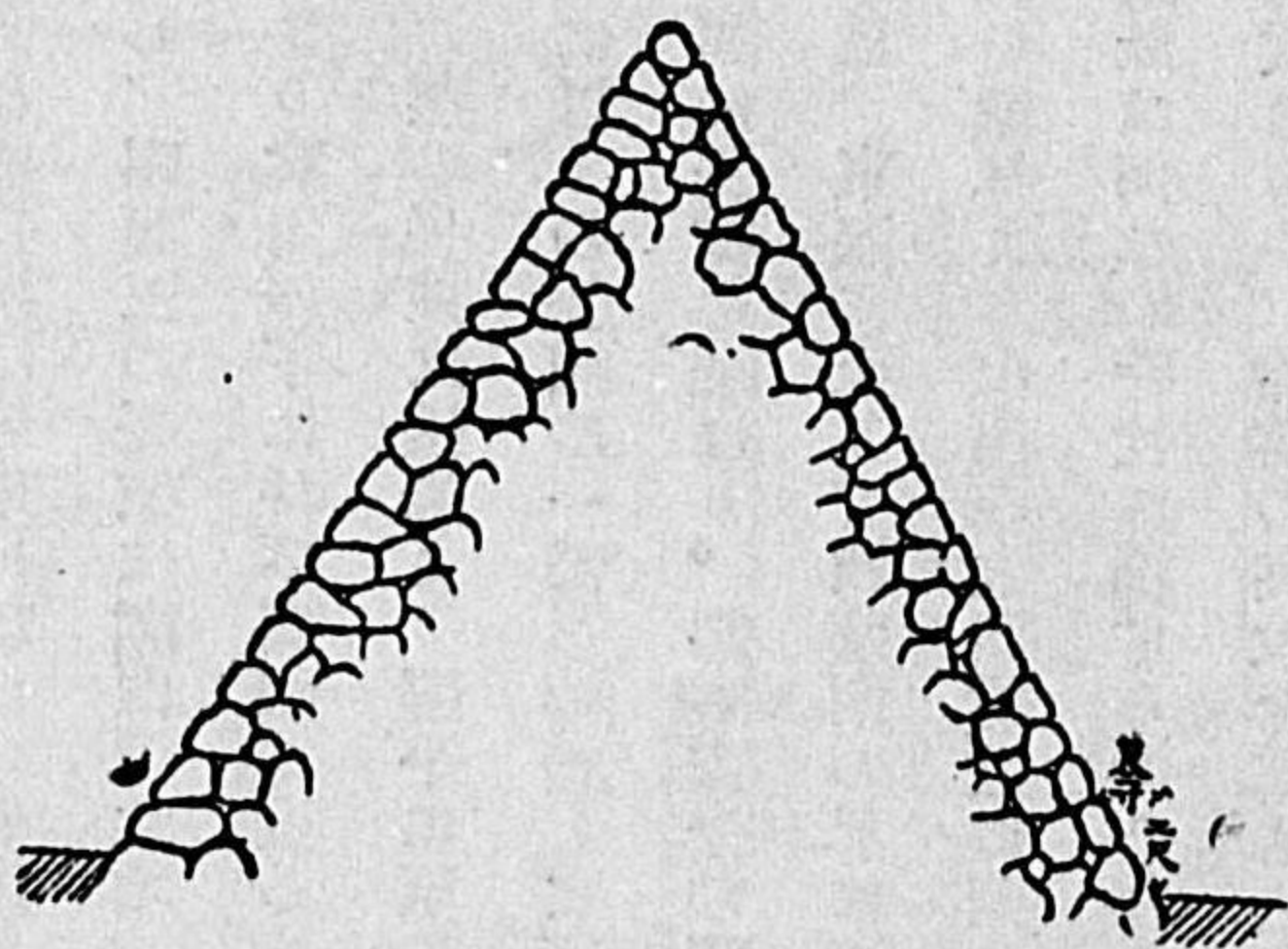
張家口の北にある長城は或は秦の始皇帝の築造に係るもの残趾にはあらざるか、予は此の残趾が果して秦時代の遺物なるや否やを知らず。然れども其の構造法全く明代のものとなると、其の極めて簡單にして殆ど城壁の體裁をなさざると、其の遺趾の實況とよりこれを推考し、其の年代の甚だ遠きを知るなり。



第五三六圖

三〇八
は我が邦に於けるが如き懸魚と螭股とを見るは、吾人の最も意外とするところなり(第五三五圖)。又下層の向拜には第五三六圖の如き拳鼻あり、これ豈我が邦足利時代に於いて賞用せられたるもの一にあらずや。玉皇閣

城壁は洋河を挟める山岳の脊上に在り、山岳はみな露骨にして甚だ峻嶮なり、而して城壁は紆曲蜿蜒として山麓の關門より山嶺に登り更に山脊の上を馳せたり。壁は斷面ほど等邊三角形をなし、高さ二丈に達し、傾斜は第五



第五三七圖

三七圖に示すが如し。材料は即ち附近の岩石を適當の大きさに碎き、これを重疊せるものにして、石の大きさは一人の力を以てこれを運搬し得べき程度とせり。是の故に一片の石塊は一尺乃至一尺五寸、二尺に達するものは稀なり、石塊には別に工作を加へず、これを積むに泥灰を用ひず、只だ土を以て内部を充填せるのみ、故にこれを攀づること甚だ容易なり、又所々に高さ數丈の土塊あり、蓋し望樓の遺趾なるべし。要するに城壁の構造は甚だ簡粗なるものなり、これを築くは甚だ容易なりしならん。其の延長もまた萬里連綿たるが如きものに非らず、關門の左右數里にして城壁盡き、復た遺趾を見ず。予は所謂萬里長城なるものが萬里連續するに非らずして、只だ關門の附近に於いてのみ

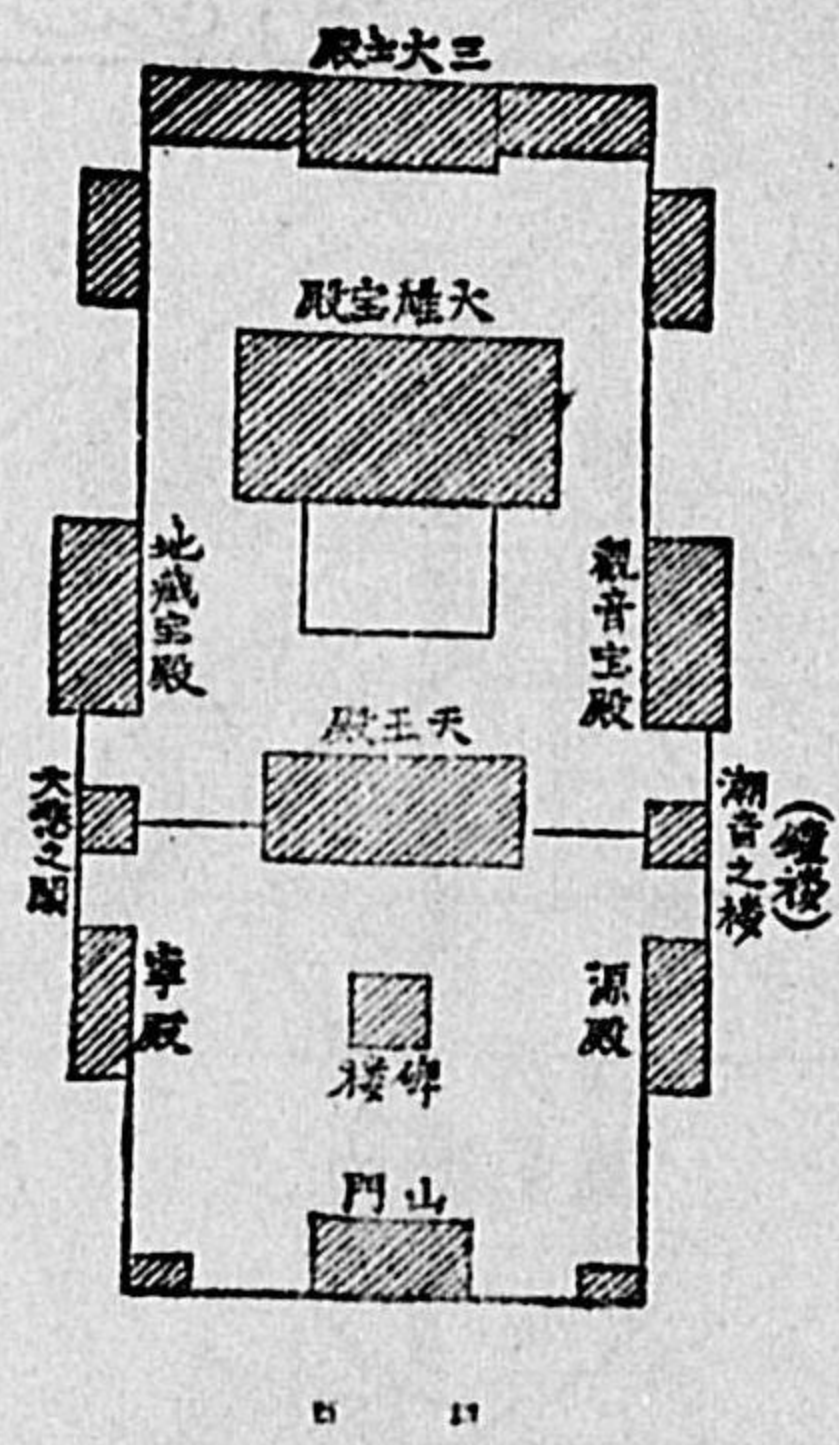
防禦の爲めに城壁を築きたるものなることを知るを得たり。明代の長城も亦斯くの如し。予は八達嶺、茹越口、龍泉關の三ヶ所に於いての長城を越へ、此の事實を見ることを得たるなり。關門は大境門と稱す、礎は石を以て造り、輒を以て其の上に重疊せり。今の關門の年代は不詳、然れども其の最古の石材の殘片を用ひて改築せし痕

跡は明瞭なり。最古の石材には一種の紋様を彫刻せり、から草の一種なるは明かなれども、線條の運用今悉く辨すべからず。予は關門の内面に於いて、其の入口と出口とに當る部分に於いて、斯くの如き石材の礎石として用ひられたるもの三箇を發見せり。

按ずるに長城は周末に於いて各所に築造せられたるを、秦始皇帝これを補綴し、爾來しばらく修築せられたるが如し、昭襄王の長城は隴西、北地、上郡に築けるものにして、今の陝西及び甘肅の長城なるが如く、趙の長城は代より陰山の下に並び高岡に至るものなれば、其の北境は今の張家口の北方より歸化城の邊に互るものなるが如く、燕の長城は造陽より襄平に至るものなれば、今の張家口以東遼河の附近に至るものなるが如し。始皇帝の長城は以上の長城の一部を補綴して臨洮より遼東に至るものか。其の他南北朝の際魏は赤城より五原に至る二千里の間に長城を築けり。即ち方今の張家口附近より起るが如し。齊は長城を築くこと三次、前後合せて東西凡そ三千里、東海に至り、西陝西の界に至れるが如し。方今居庸關附近の長城は此の線に當るが如し。隋代の長城は陝西の榆林より山西の大同附近に至れるもの如く、唐代亦た懷來附近に築きたるが如し。今日の張家口に於ける遺趾は何れの時代に屬するものなるや、予未だ詳かなる説を聞かず、趙か、秦か、將た魏か、そもく亦た他の時代なるか、諸君の高教を乞ふところなり。

第五 新懷安の昭化寺

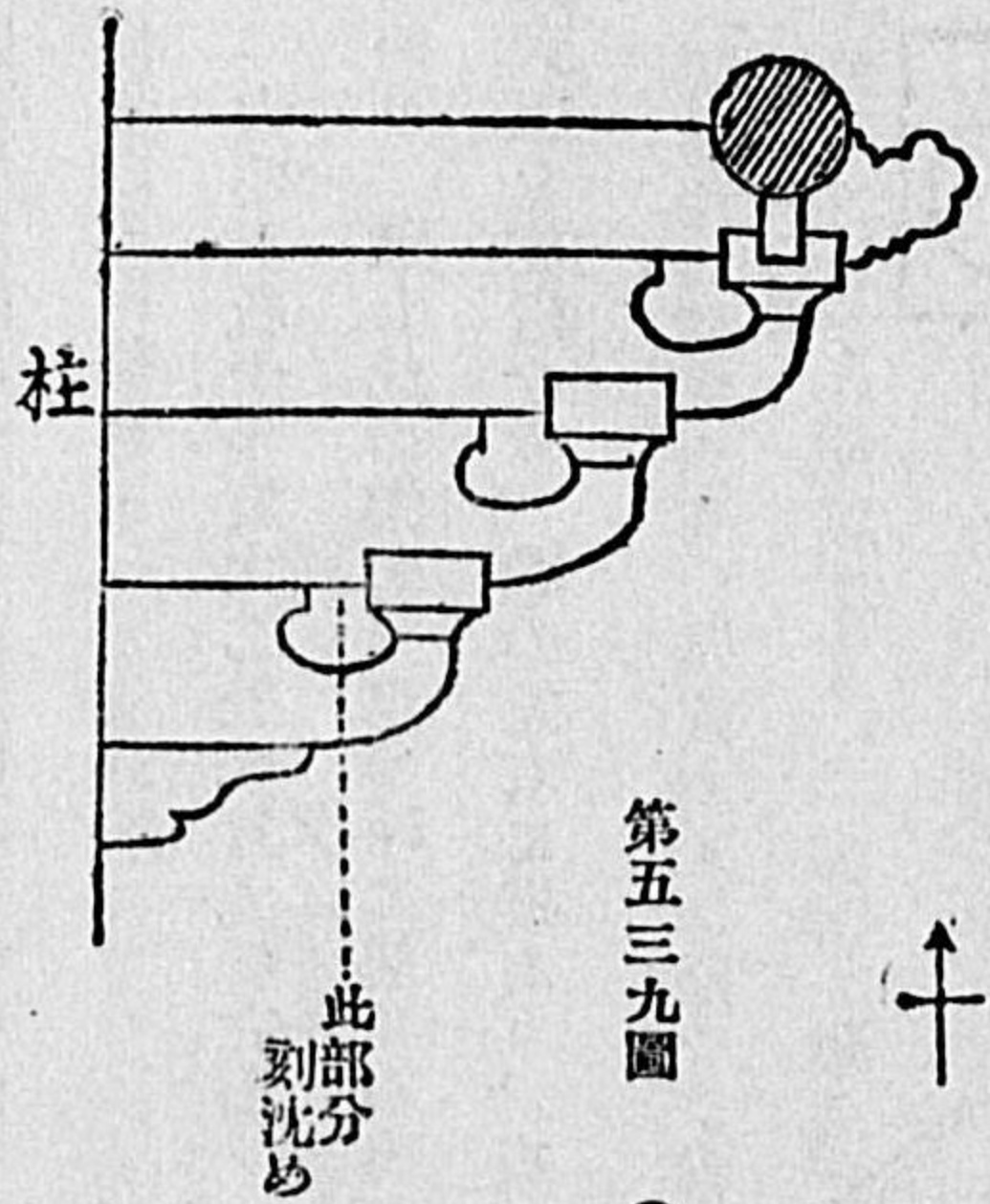
第五三八圖



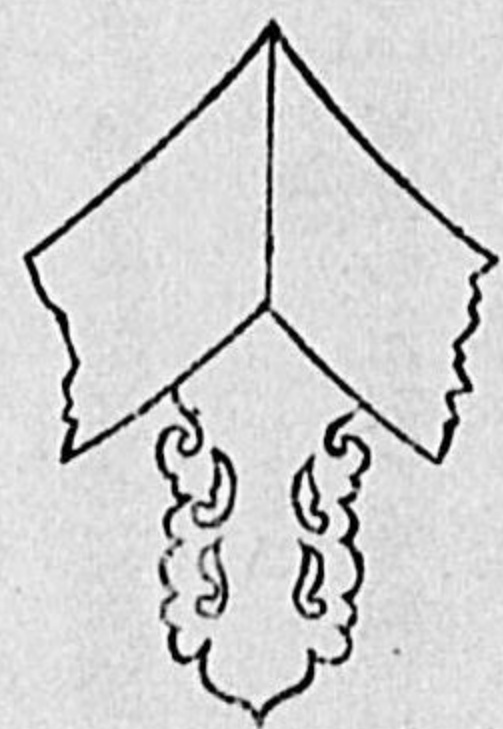
新懷安の市中に於いて見るべきものは、玉皇閣、孔子廟、昭化寺等なり。玉皇閣はほど宣化府に於けるものに均しきを以て、爰にこれを述べず。孔子廟また其の類多きを以て、これを省略し、獨り昭化寺伽藍を紹介す

昭化寺俗に觀音寺と稱す。其の平面は第五三八圖に示すが如く南面し中央に山門あり、山門は單層四注にして屋脊の中央に極めて複雑なる裝飾を施せること、一に彼の道教の廟宇に於けるが如し。山門の左右に腋門あり、料栱の制、懸魚の形頗る異様なり(第五三九圖)。山門の次に碑樓あり、一間四方にし

第五三九圖



同上(乙)



て四方各向拜あり、屋蓋は四方千鳥破風あり、中央に特異なる裝飾を加へ、其の輪廓頗る奇なり。碑は勅賜昭化寺碑と題し、終に

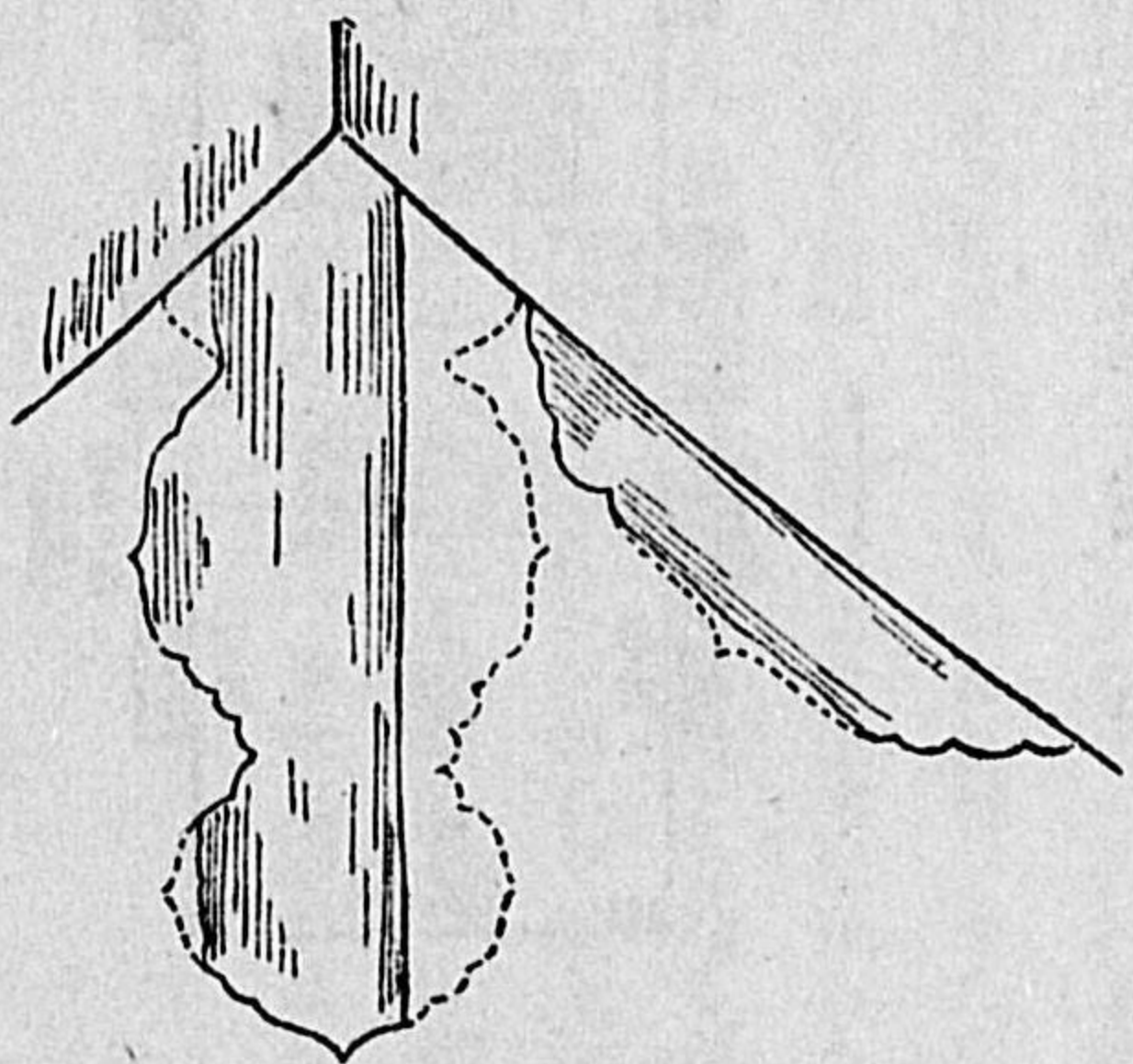
大明正統十年歲次乙丑九月九日立石

とあり、蓋し此の伽藍重修の時に屬するものなるべし。碑樓の左右に寧殿、源殿あり。後に天王殿あり、喇嘛の四天王を安置せり。殿の左右に樓あり、東を潮音之樓と云ふ、即ち鐘樓なり。西を大悲之閣と云ふ、即ち觀音の像を安置せり、兩樓形式相均しく、四方に「千鳥破風」あり。第五四〇圖は其の「欄間」なり、如何に我が邦の「格狭間」に似たるかを見るべし。

第五四〇圖

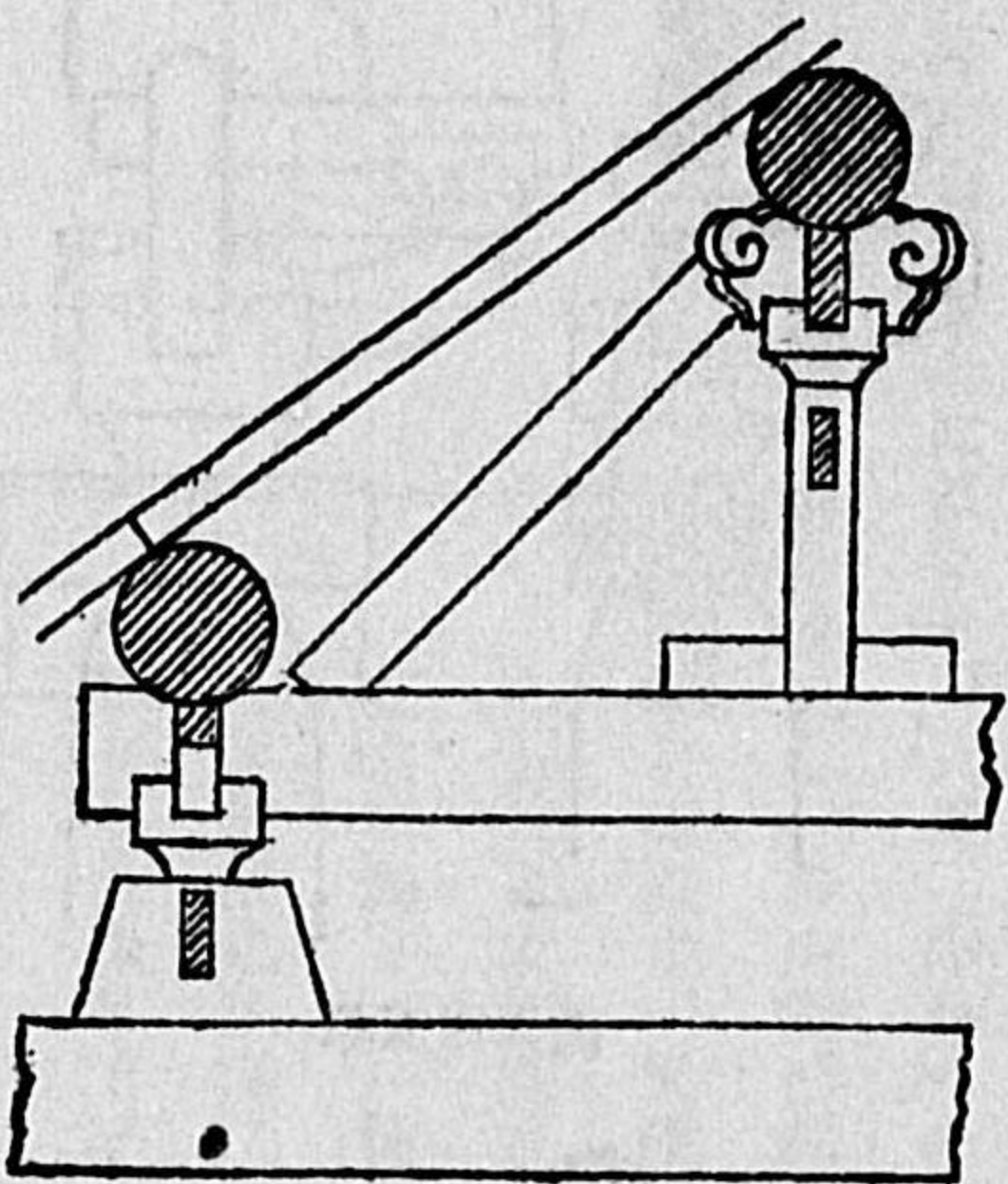


圖一四五第

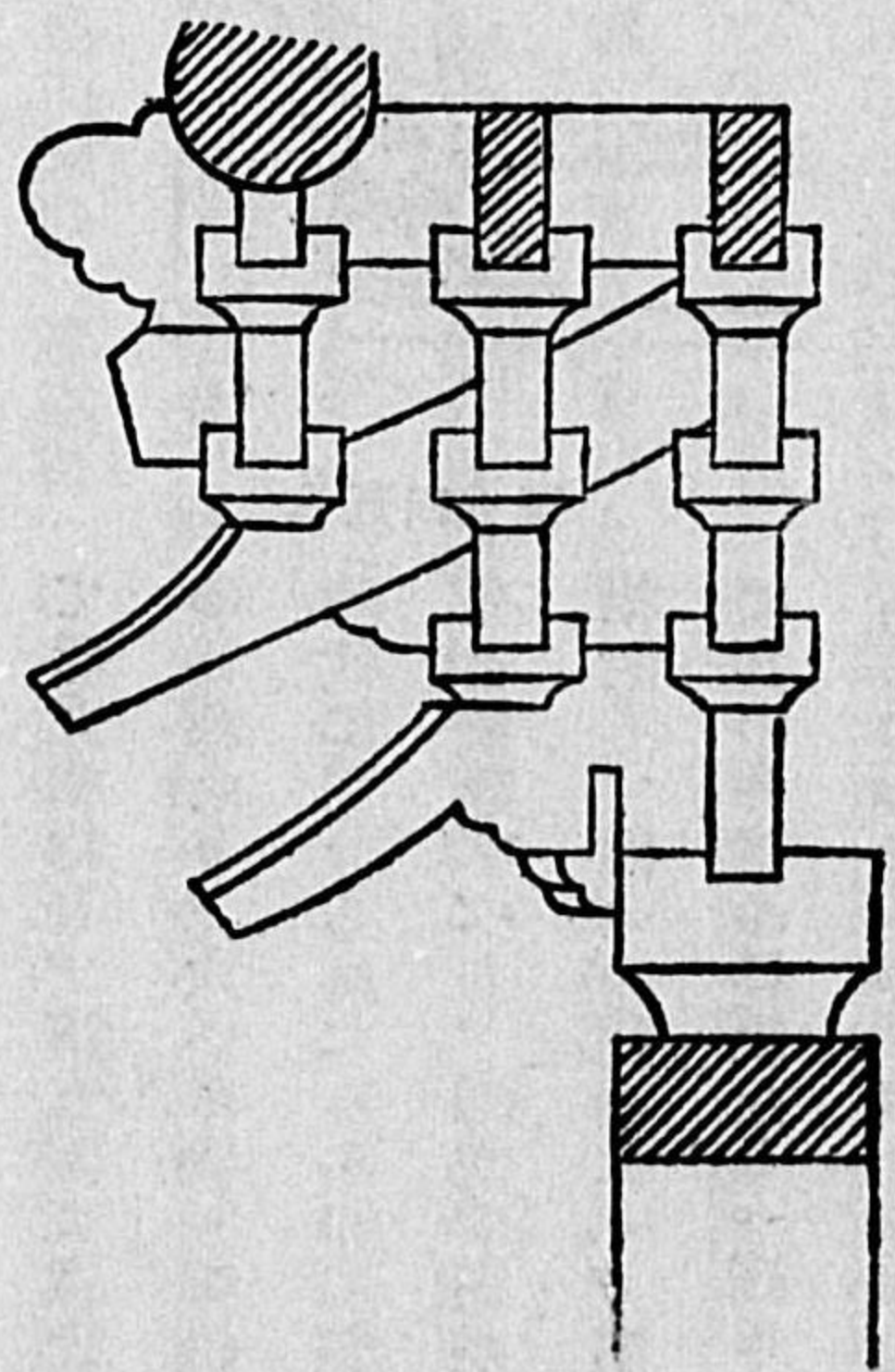


第五四一圖は天王殿の「懸魚」なり、其の缺損せる部分は試に點線を以てこれを補へり、吾人は茲に始めて懸魚に「鰭」あるの例を得たり。

天王殿を過ぐれば東に觀音寶殿あり、其の構造形式互に相均し。第五四二圖は地藏寶殿内部なり。大雄寶殿は伽藍の正殿にして釋迦を安置す。其の製作頗る優秀なり。只だ其の光背には迦樓羅ありて喇嘛教の影響を受けたることを證明せり。建築は單層



圖二四五第



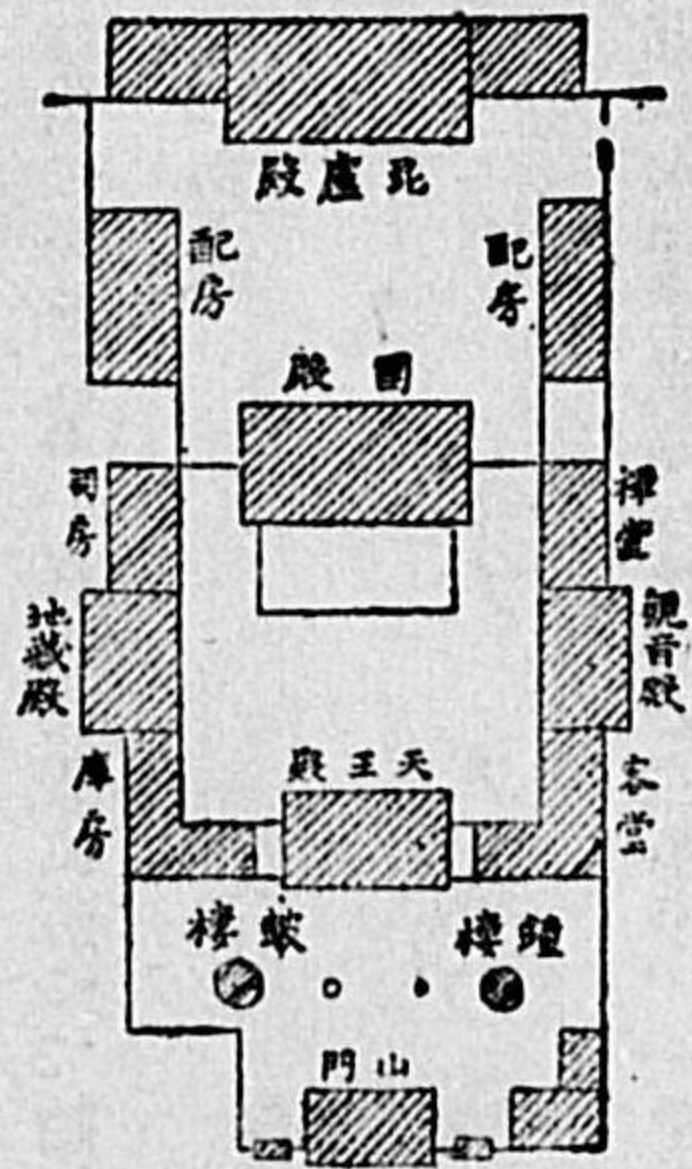
圖三四五第

入母屋にして「懸魚」あり、「桁隠し懸魚」あり、其の「妻飾」は不幸にして詳かに見ることを得ざりき。第五四三圖は軒の料栱なり、吾人は爰に至つて始めて眞正の「垂尾木」を見たり、扉の「花狭間」また頗る意匠の斬新なるものあり。

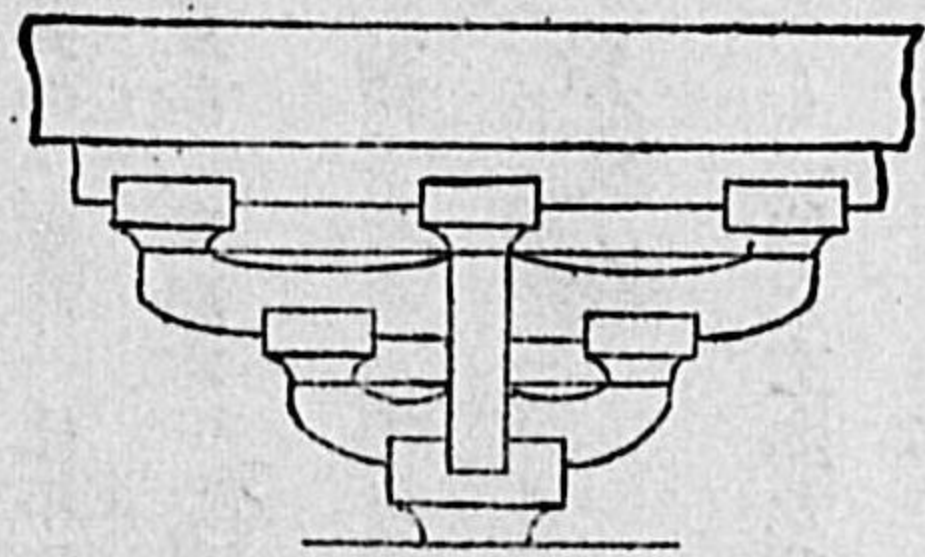
第六 天鎮の慈雲寺附文廟

天鎮の市中に見るべきもの三あり、一を慈雲寺とし、他を文廟及び玉皇閣とす。

慈雲寺の平面は第五四四圖に示すが如く、大いに新懷安の昭化寺と相似たり。即ち第一に山門あり、兩腋門こ

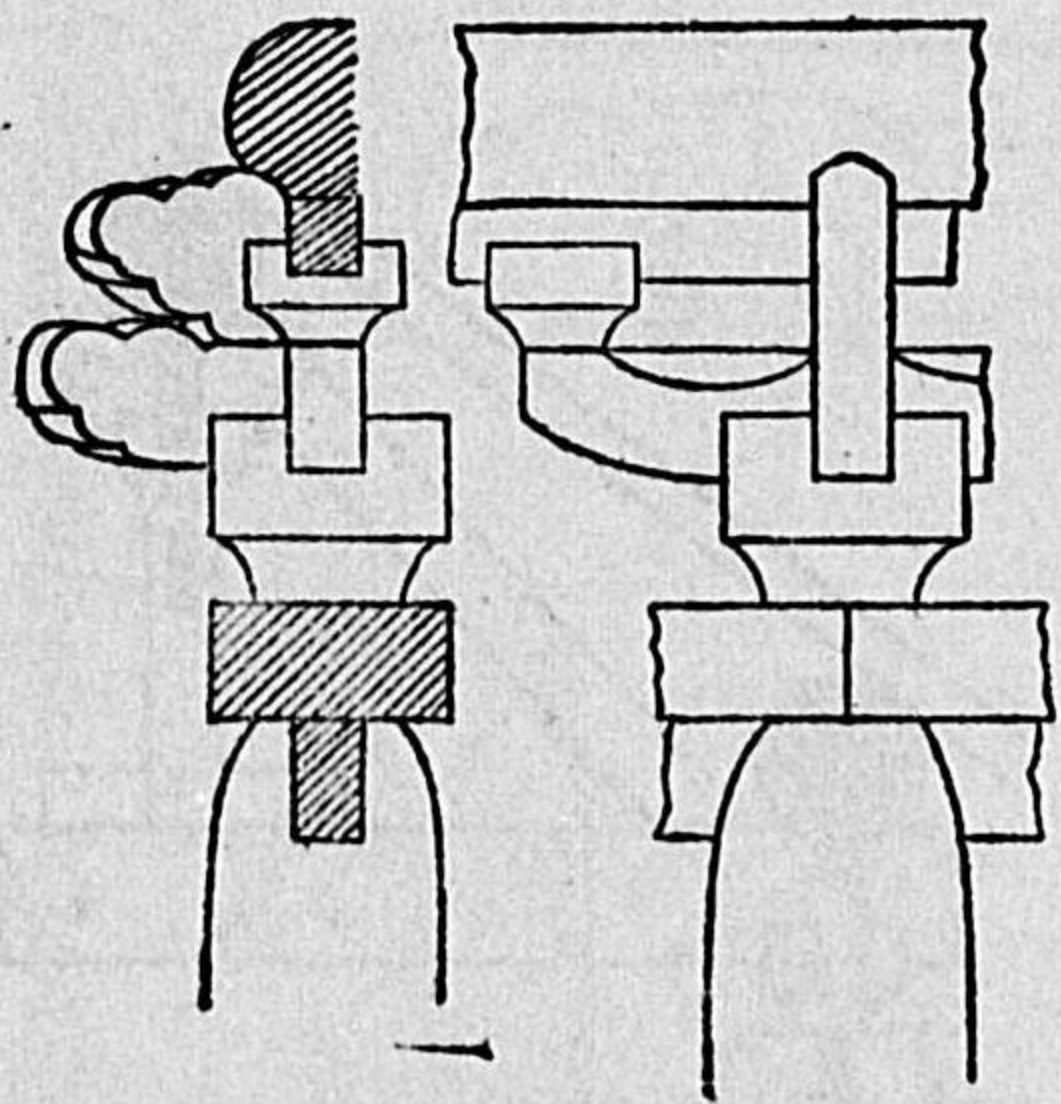


圖四四五第

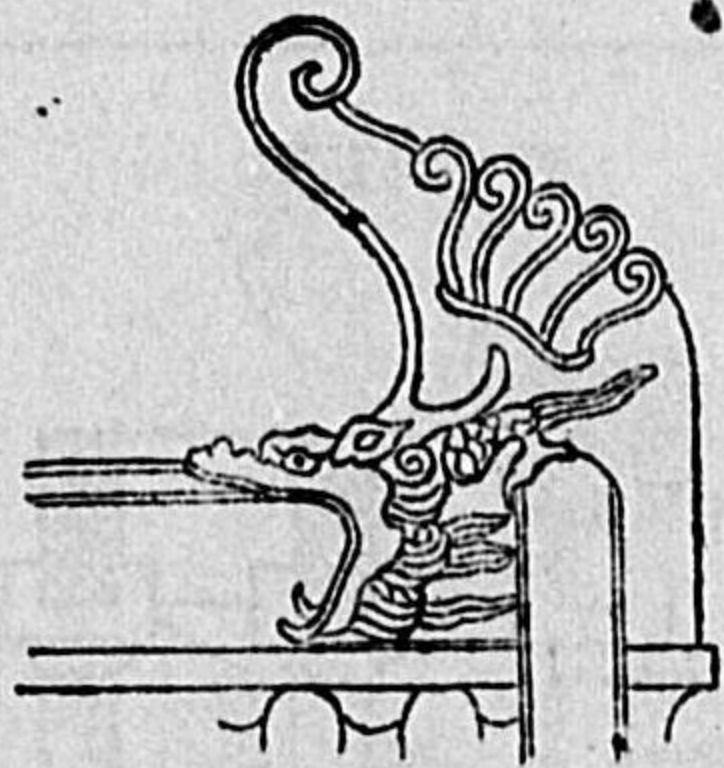


圖五四五第

れに附属す。第五四九圖は山門と腋門に於ける「拳鼻」なり、門内に鐘樓、鼓樓あり、共に圓形にして重層、然れども腰屋根無きは一奇なり、上層の屋は滲金圓頂なり、又兩樓共に柱に「ちまき」あり。



圖六四五第

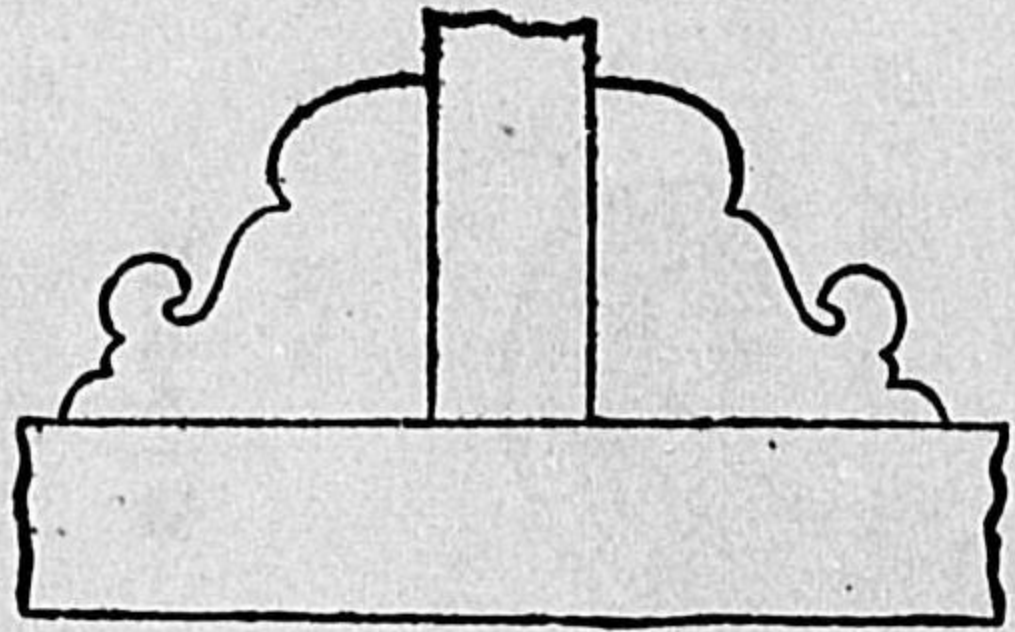


圖七四五第

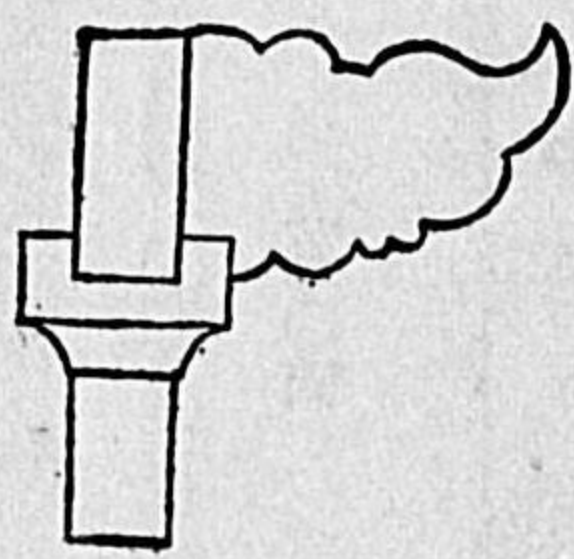
天王殿内の四天王は彼の喇嘛教のものなり。觀音殿、地藏殿は東西相對して形式相均し。第五四五圖は其の内部の料枋なり。大いに我が邦鎌倉室町の時代に用ひられたるものに類似することを觀察すべし、禪堂、司房また左右相對して同一の建築たり。第五四六圖は其の外部の料枋なり。柱に「ちまき」あるのみならず、料の形狀また大いに

我が邦中古のものに似たり、只だ「拳鼻」の極めて粗悪なるを觀察すべし。第五四七圖は禪堂の正吻なり。少しく近代の吻と其の輪廓を異にし、多少我が邦唐招提寺の鴟尾に似たるものあり。團殿には釋迦、阿彌陀、藥師の三尊を安置す、又壁畫あり、傳へて唐代のもの云ふ。未だ俄に信すべからずと雖も其の製作甚だ優秀なり。第五四八圖は團殿の妻に於ける手法なり。吾人は虹梁の上束の左右に跨りて一種の蓋股を見るべし。

第五四八圖



第五四九圖



慈雲寺の年代は不詳、碑に大明嘉靖十八年の銘あり、蓋し重修の年代なり。要するに該寺の創立は甚だ古きものなるが如し。團殿内壁畫の傳説及び建築の手法より推考するに、必ずや唐宋の間にあるものならざるべからず。只後年しばらく改修せられ、屋蓋の如きは全く變化し了れり。屋瓦は數種の琉璃瓦を用ひ、種々なる彫刻的裝飾物を附加し、艶麗浮華を極め、終に全く兒戯に均しきものとなれり。

文廟の全體に就いては特に記すべきものなし。其の細部の一二を擧ぐれば「懸魚」に第五五〇圖の如きあり、此の種の「懸魚」は「破風」の「拜み」を蔽ふの目的を以てこれを加ふるなり。即ち圖中(イ)(ハ)は共に鏝にして「懸魚」を「破風」に固著せしむる用をなす。(ロ)(ハ)

第五五〇圖



第五五一圖



玉皇閣はこれを省略す。

(ニ)は共に釘にして(ホ)は「六葉」の意ある裝飾なれども、元來釘の意に外ならず。我が邦の「六葉」に於ける「樽の口」は即ち釘にして、六個の花弁の如きものは即ち釘の座に過ぎざるなり。(ト)は桁の末端を蔽ふの目的より出でたる一種の裝飾物にして、即ち所謂懸魚なり。
正吻に第五五一圖の如きものあり、即ち正吻と旁吻とを合せて一つとなせるが如きものなり。支那建築に往々屋の「大棟」に旁吻の形を用ふるものあり。會ま茲に正旁兩吻相合せるなり、此の種の變態尙ほ甚だ多く、茲に兩頭の龍の如き畸形となりたるものを生ずるに至れり。

第七 陽高の昊天閣及び文廟

陽高の市中また昊天閣と文廟とあり、共に見るに足る。

昊天閣は即ち玉皇閣の第三層なり、玉皇閣は三間四方三層にして、上層入母屋「破風」の「建て所」甚だ深きは、我が邦藤原鎌倉の建築に酷肖せり。

閣の下層に碑あり、題して

陽和城新建玉皇閣記

と云ひ、終に

正徳十一年歲在云々

とあり、即ち知る、此の閣が大明正徳の創立なるを。重修の碑に萬曆四十年の銘あるものあり、吾人はこれを以てまた明代の一好遺品と認むるを得べきなり。

上層の「破風」は其の勾配、曲率、其の長さと幅との比、共に我が邦中古の建築と酷肖せり。其の「懸魚」は第五五二圖の如く、二箇の「懸魚」相重なれる如き形をなす。但し(A)(B)は同平面に在らず(B)は(A)の下に附著せるなり。

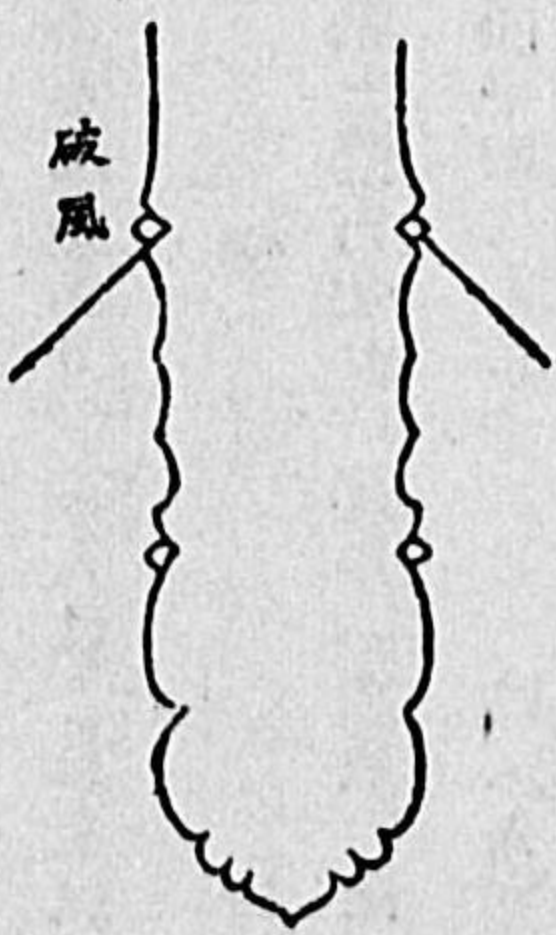
第三層即ち昊天閣は三方に壁畫を施し、窓牖を開きたり。其の内部の料枳は第五五三圖に示すが如く、其の組

織第五四五圖に似たり。只だ大斗に當るべき(A)は大斗にあらずして(B)なる縦梁の上に架けたる横梁の末

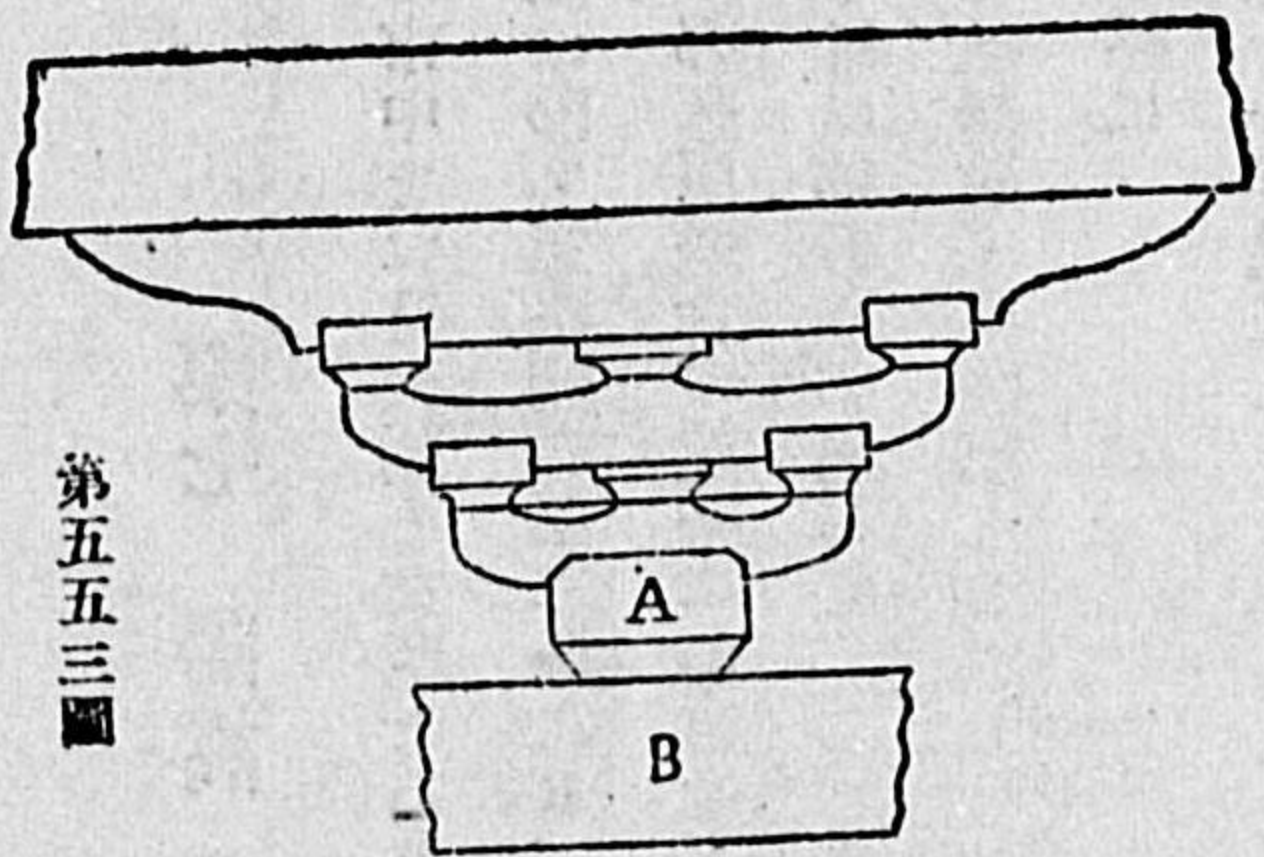
第五五二圖

第五五四圖

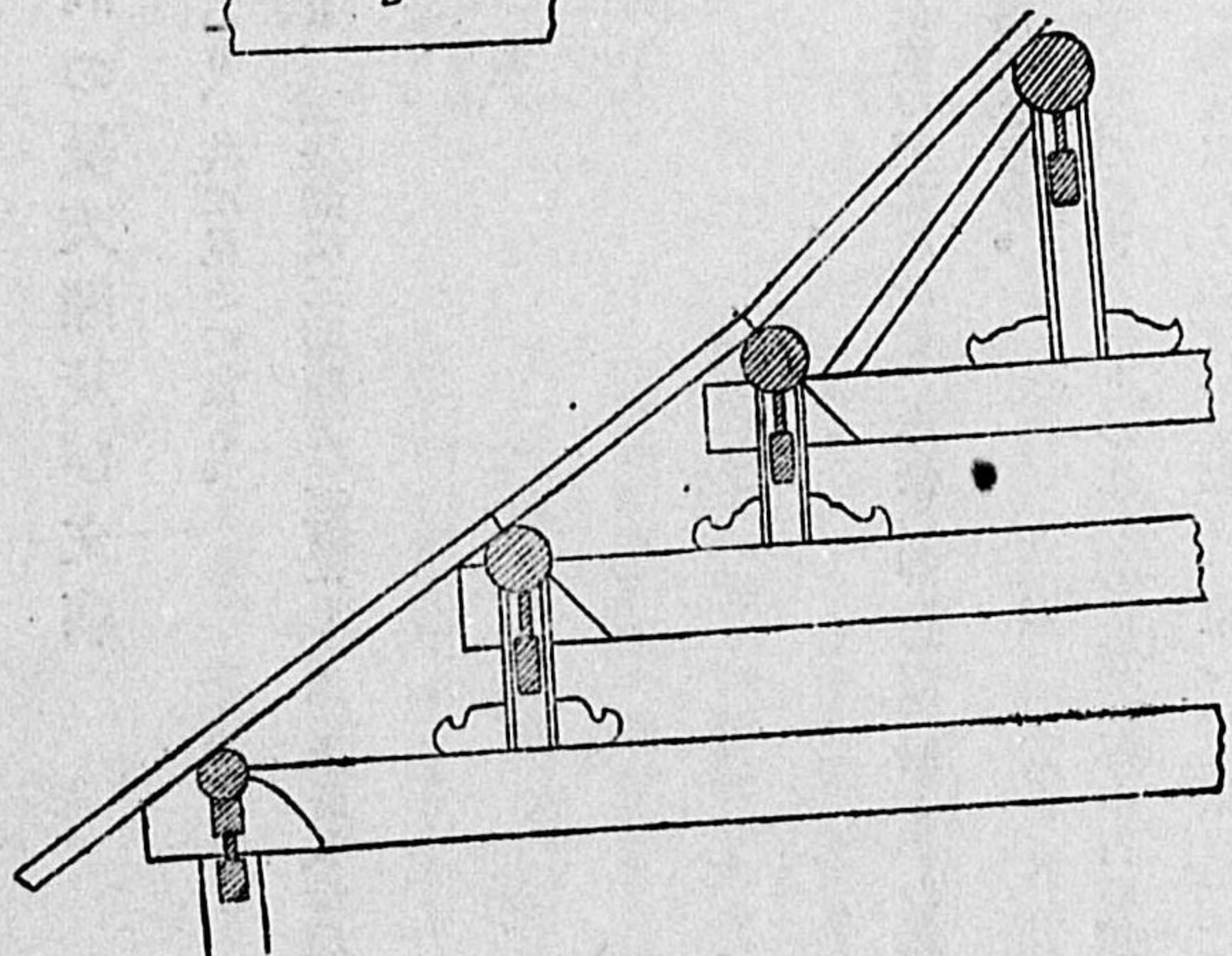
第五五五圖



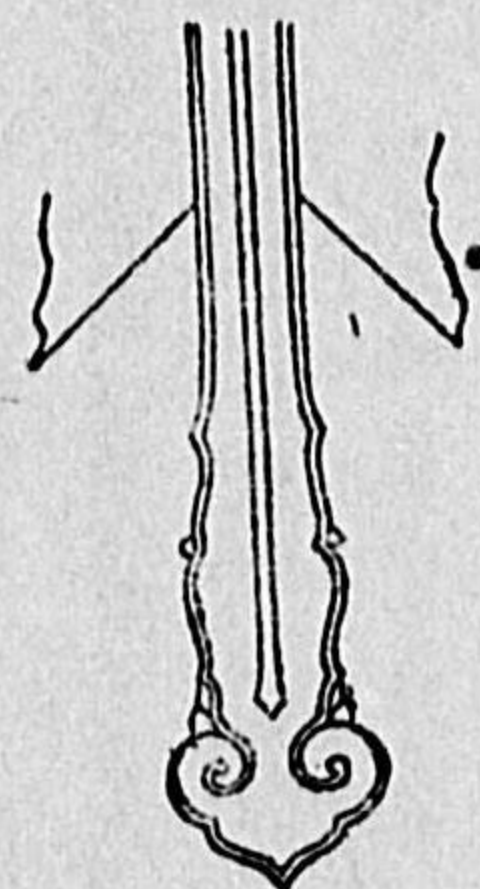
第五五六圖



第五五三圖



第五五七圖



端なり。「地垂木」には四本毎に風鐸を懸けたり。又扇額には修繕の年代を記せり。曰く嘉靖三十九年、曰く萬曆三十七年、曰く崇禎九年、曰く光緒五年等なり。

文廟は其の全體に就いて多く云ふべきものなし。只だ明倫堂の内部は注目するに足るべきか。第五五四圖に示すが如く三重の梁三重の束あり、梁には各「袖切」あり、其の形互に小差あり。「束の下」に各「臺股」あり、其の形また一々異なれり。「束」はみな「大面取り」なり「母屋桁」は皆圓形なり、「束」の「貫」はまた下面に於いて「大面取り」となれり。

第五五五圖は其の「懸魚」なり。

文廟の堂宇中細部の見るべきもの少なからず。第五五六圖及び第五五七圖は共に「懸魚」の例なり。

第八 大同の大華嚴寺

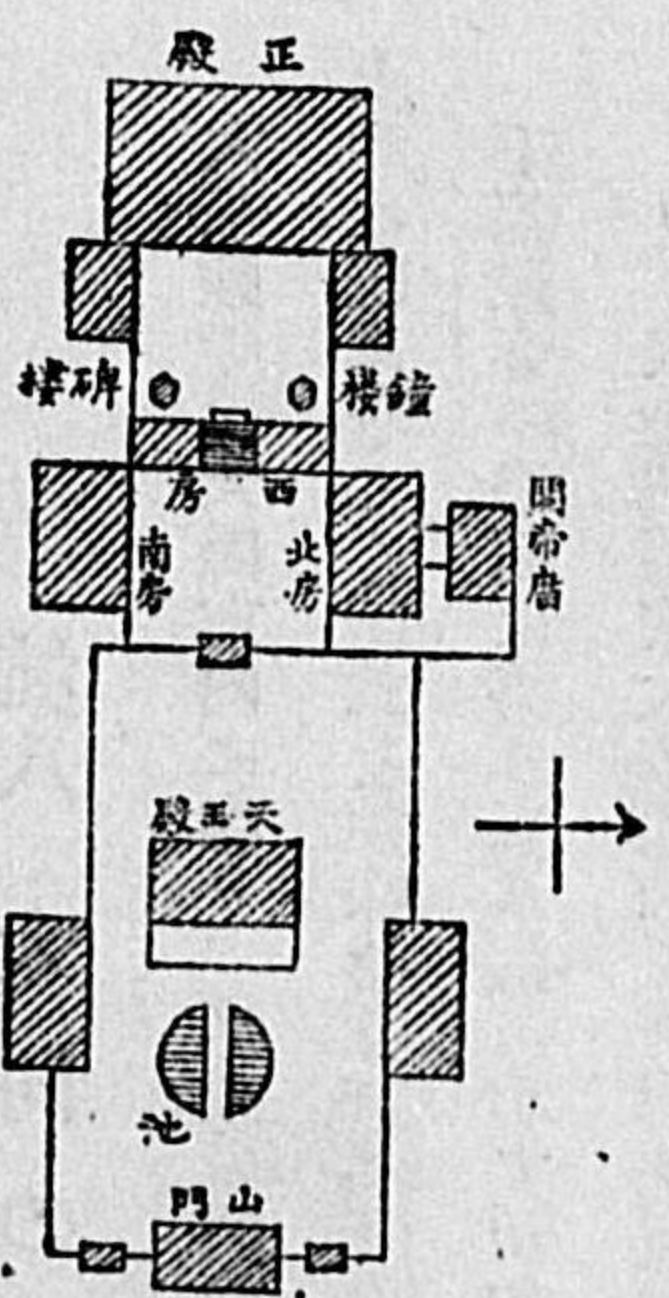
大華嚴寺は大同市内に在り、遼金の間の創立にかゝり、分れて上下二寺となれり。下寺は多く古式を存するも上寺は既に著しく新式を加味せり。

下華嚴寺の平面は第五五八圖に示すが如し。其の正殿を薄伽藏經と唱ふ。堂内の碑に

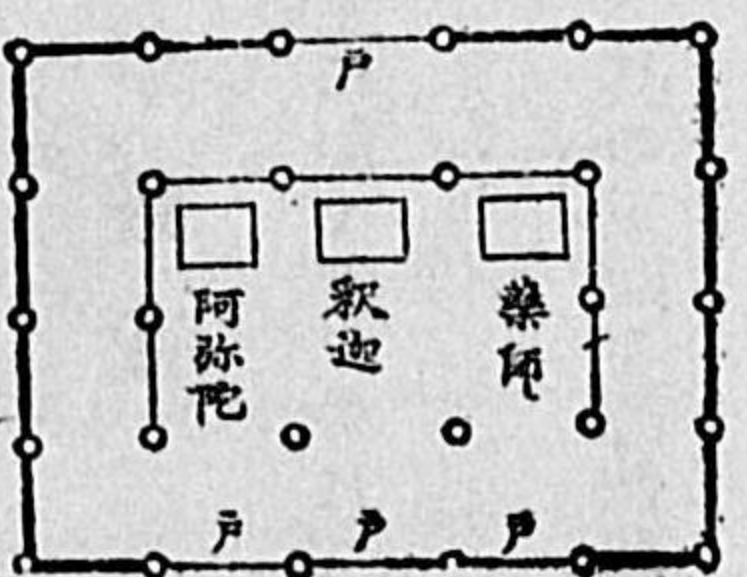
大金國西京大華嚴寺重修薄伽藏教記

と題せり。蓋し大同は金の代に於いて其の西京たりしなり。而して大華嚴寺は、此の時に於いて創建せられたる

第五五八圖



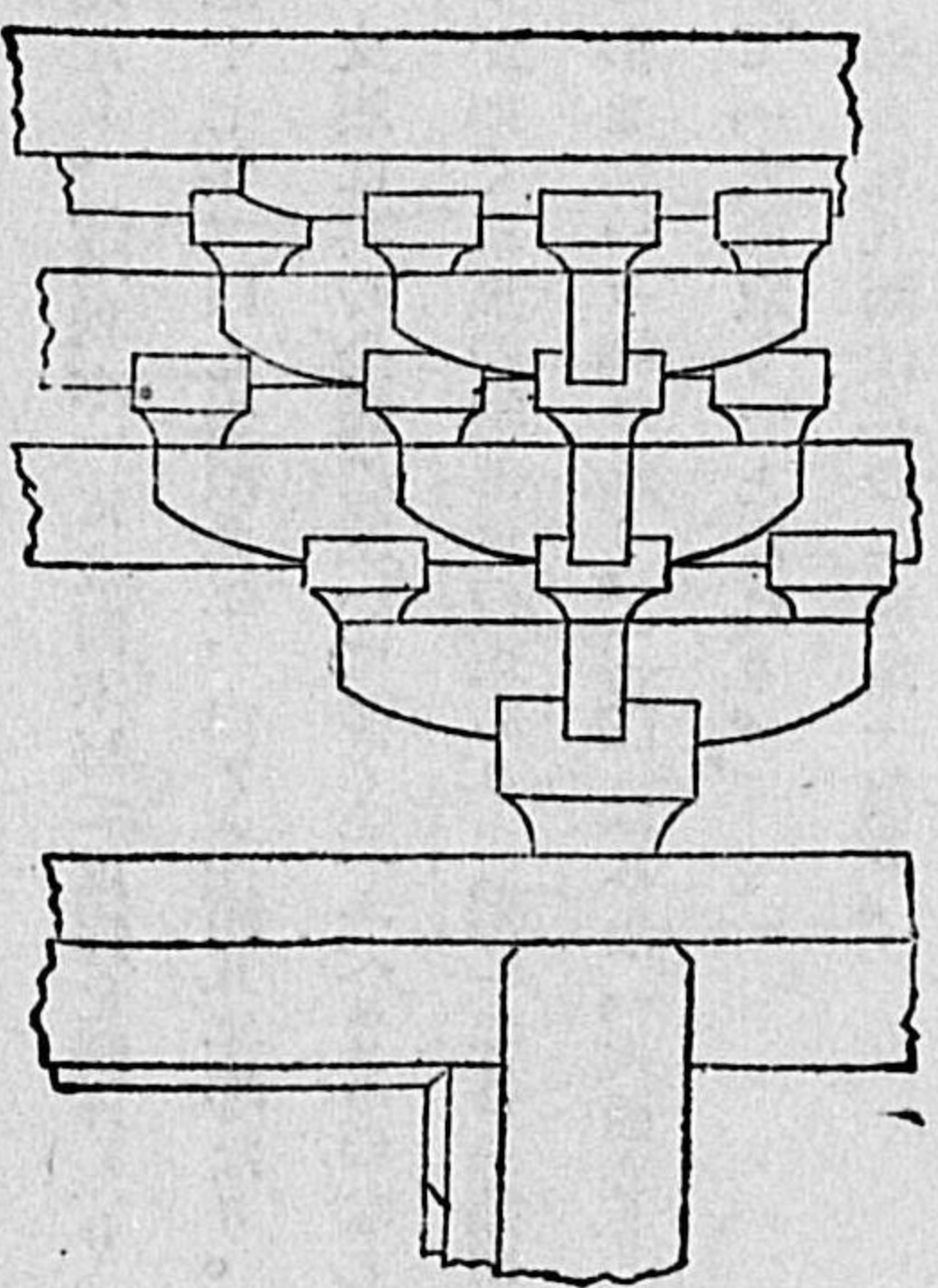
第五五九圖



なり。

正殿(第五五九圖)は五間四面、單層、入母屋にして、内陣に釋迦、阿彌陀、藥師三尊を安置す。其の他佛像甚だ多し、皆喇嘛教を混和せざるもの如し。建築形式は金代のものなるが如く、大いに特殊の點を有せり。其の料栱(第五六〇圖)は所謂「つめ組」にあらずして、中間には「束」を用ひ「大斗」と「卷斗」との比はほと我が邦の料栱に均しく、其の手法は、即ち所謂「和様」なり。柱は其の上端に於いて急激なる「ちまき」あり、柱の大きさは殆ど「大斗」の大きさに均し。

正殿の前に鐘樓及び碑樓あり、鐘銘に云



第五六〇圖

下華嚴寺

住持澄定

前任持禪因

助緣僧清鑑

□明

淨寶淨果繼安

天順六年十一月吉日造鐘

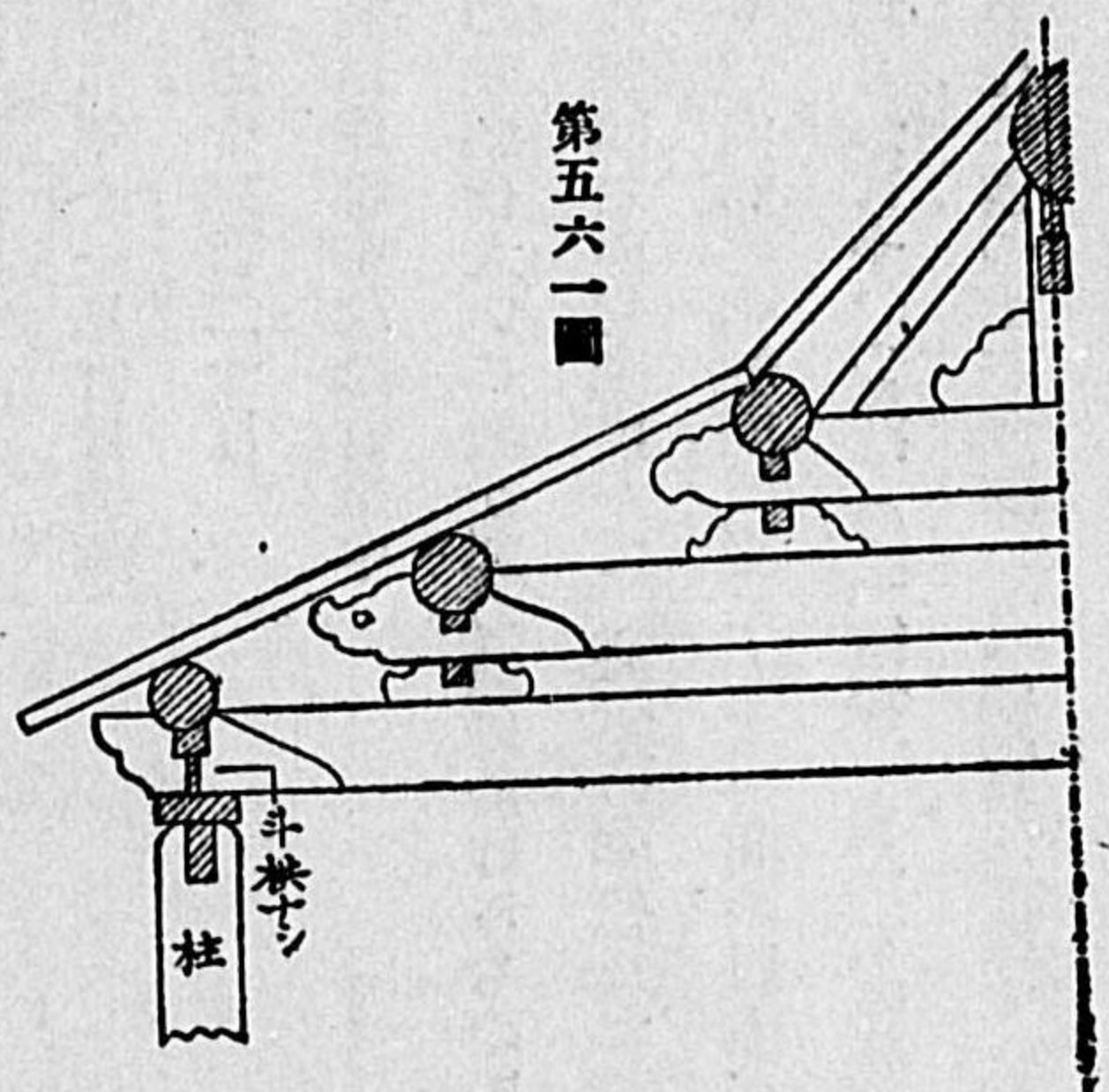
□重三千三百二十斤

四川成都府化緣僧道中

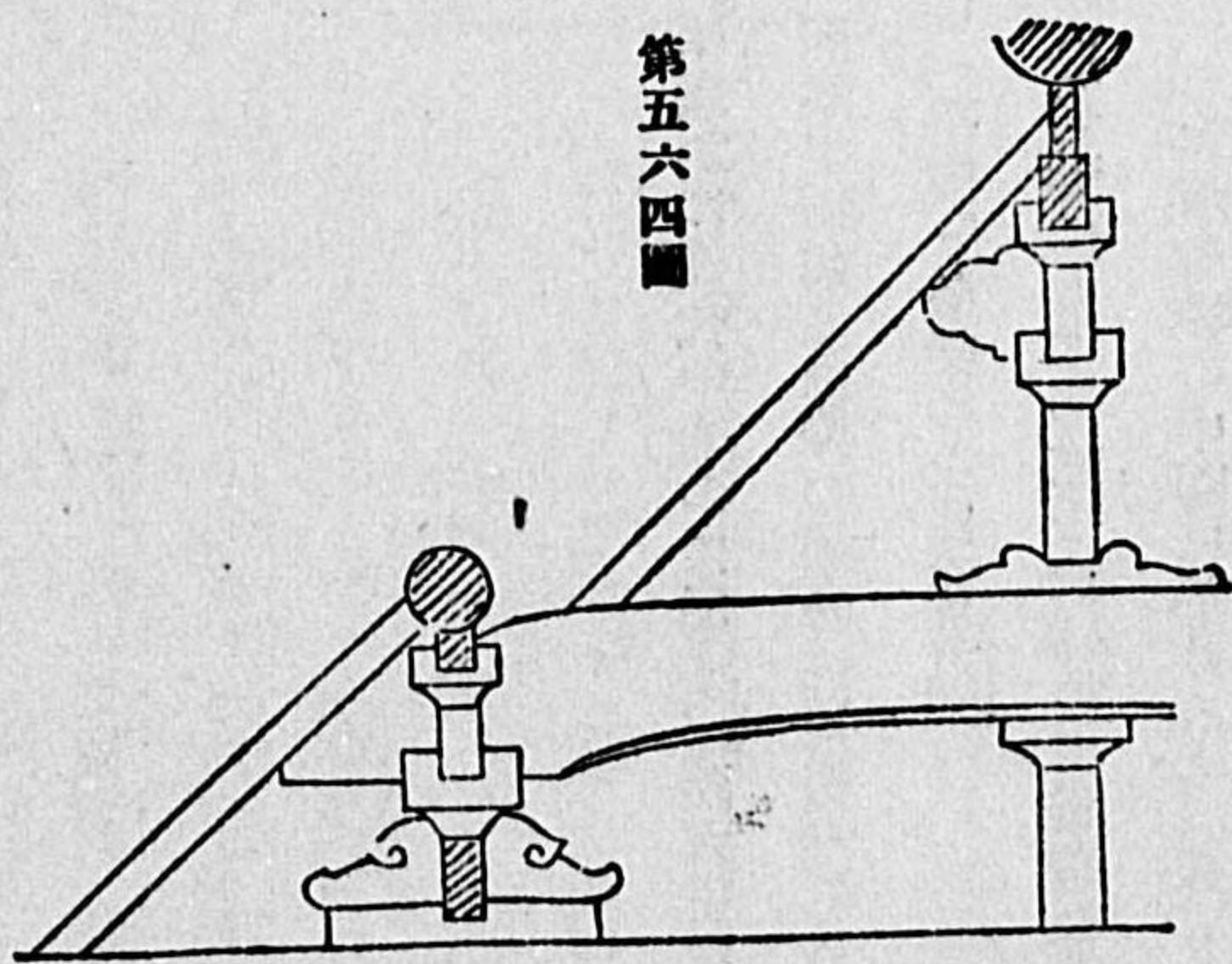
此の鐘の龍頭は大いに我が邦の鐘に於けるものに似たり。

天王殿は三間三面切妻にして、建築の年代また正殿に比すれば遙かに後代のものに屬し、四天王はかの喇嘛的のものなり。内部は化粧屋根裏にして、其の組織は第五六圖に示すが如く三條の梁各「袖切」あり、「袖切」の形互に均しからず、「鼻」の「繪様」また互に異れり。三様の「墓股」各梁の上に在り。

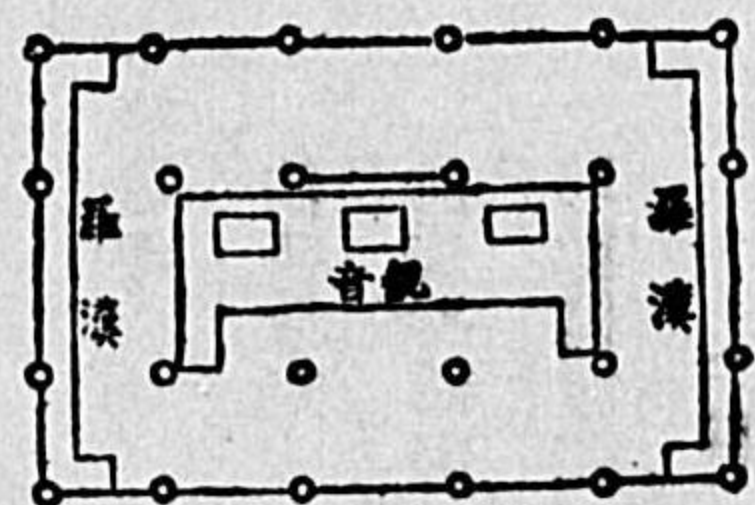
正殿の東化に當つて海會殿あり、觀音を安置す(第五六二圖)。單層切妻にして形式手法極めて古奇なり。想ふに、れ金代創立の際に於ける形式なるべし。第五六三圖は「軒廻り」の料栱の柱の中間に於けるものなり、其の「束」



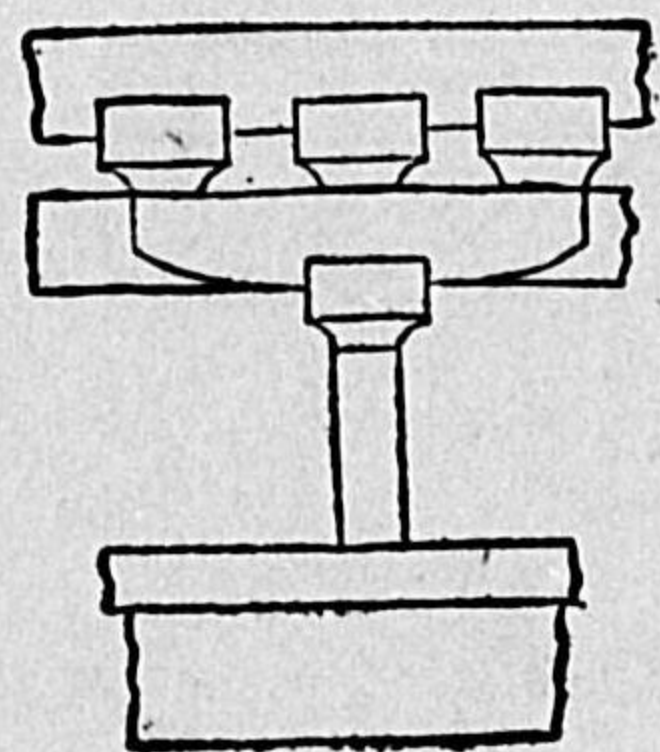
第五六一圖



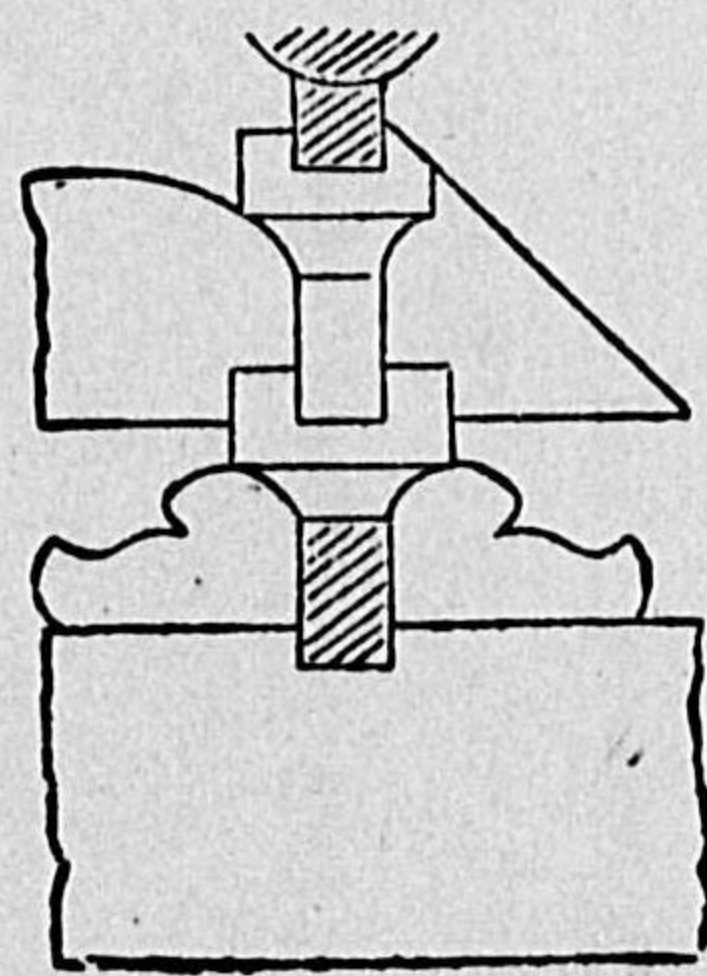
第五六四圖



圖二六五第



圖三六五第



圖五六五第

を用ひたるの手法は、我が邦鎌倉以前に慣用せられたるものに類似せり。第五六四圖は「妻」に於ける手法なり。第五六五圖は「外陣繁虹梁」に於ける手法に似たり。

上華嚴寺の正殿は大雄寶殿にして、七間五面、單層四注、黃琉璃瓦を以て覆ひたり。料栱の制は一に下華嚴寺のものに均し。諸佛像及び色彩、裝飾文様等は全く近代のものにして觀るべきものなし。内部の壁畫また全く觀るに足らず。要するに其の構造は下華嚴寺を模範として造れるものなり。

以上記述するが如く、華嚴寺伽藍は金代の創立にして、下華嚴寺に於ける海會殿正殿の如きは、よく金代の形式を傳へたるものと認むべきが如し。海會殿内また多くの石佛あり、其の相貌我が所謂弘仁時代の佛像に髣髴たるものあり、蓋し遼金の間に成るものならん。

第九 大同の善化寺

善化寺又南寺と云ふ、大同市の南にあるを以て名づく。其の創立に關しては、西京大普恩寺重修大殿碇記の末文に、

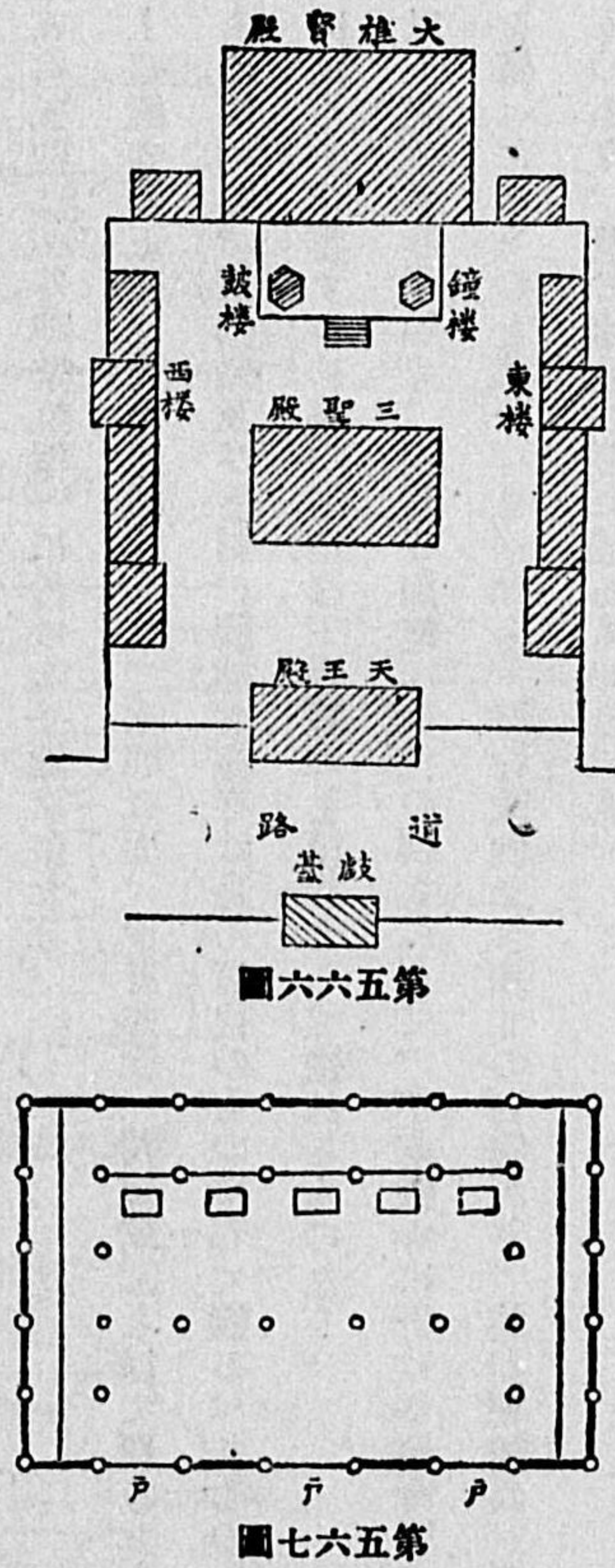
按寺建於唐明皇時與道觀皆賜開元之號而寺獨易名不見其所自今樓有銅鐘其上款識乃是清泰三年歲在丙申所造也其易今名當在石晉之初或唐亡以後乎未究其所易之因云々(大同府志)

とあり、又該寺の碇文には

(前略) 始於唐玄宗開元年間名之開元寺其後傳之久更其名曰大普恩寺迨遼末兵燹而後不無殘廢金太宗天會六年寺僧圓滿重修葺焉而古刹爲之一新歷明正統十年僧大用奏請藏經又爲整飾爲多官習儀之所復更其名曰善化寺萬曆崇禎年間亦因之而規制(下略)云々

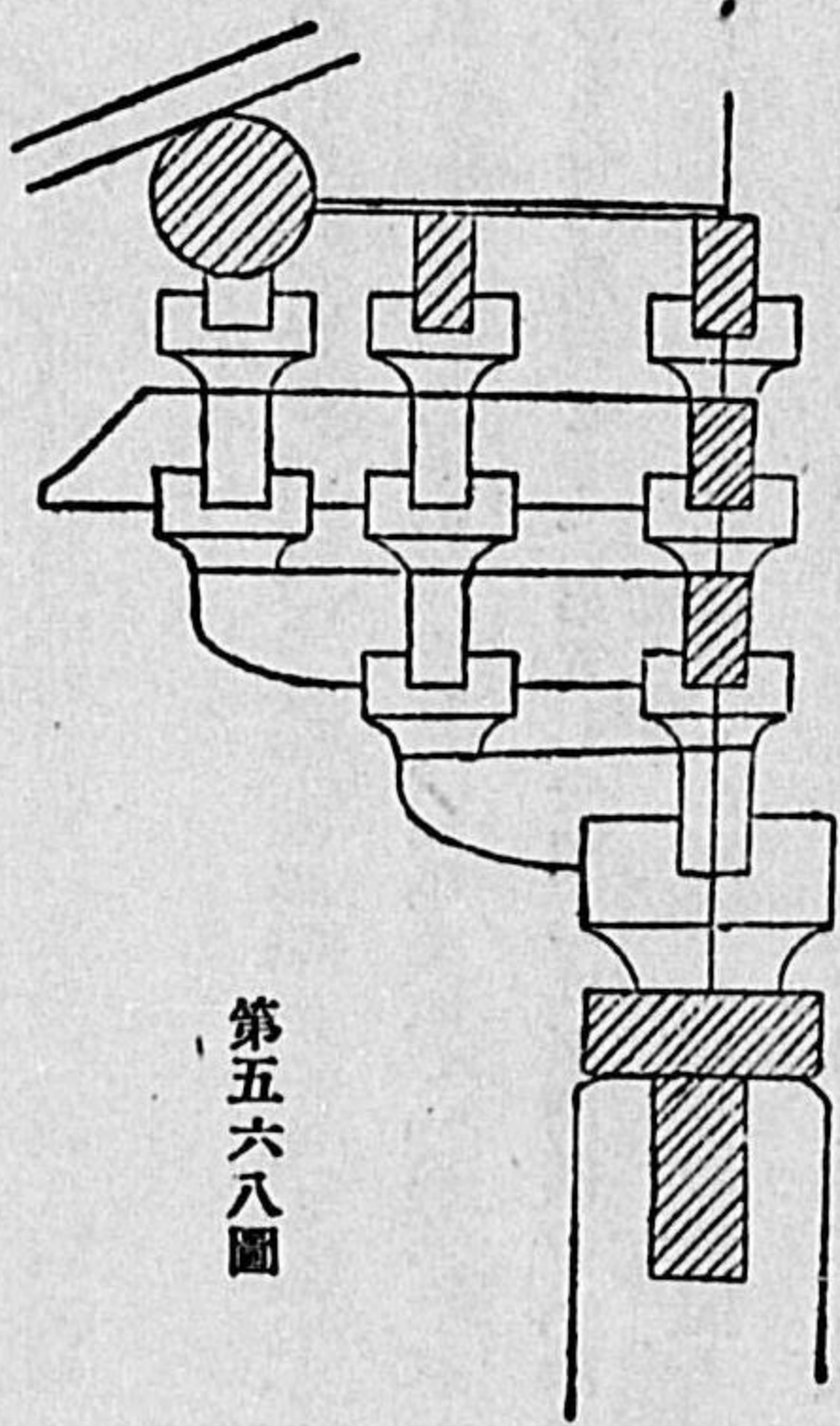
乾隆五年

憶ふに現今の建築は金の天會六年重修の時に成れるものなるべし。即ち我が邦崇徳天皇の大治三年に當れり。彼の大華嚴寺も亦た金代の遺物なり。其の建築の配置の多少相似たるは偶然にあらざるべし。第五六六圖は善化寺の平面圖なり。大雄寶殿前六角の樓左右相並び其の前に三聖殿あり、又其の前に天王殿あり。大雄寶殿は七間五

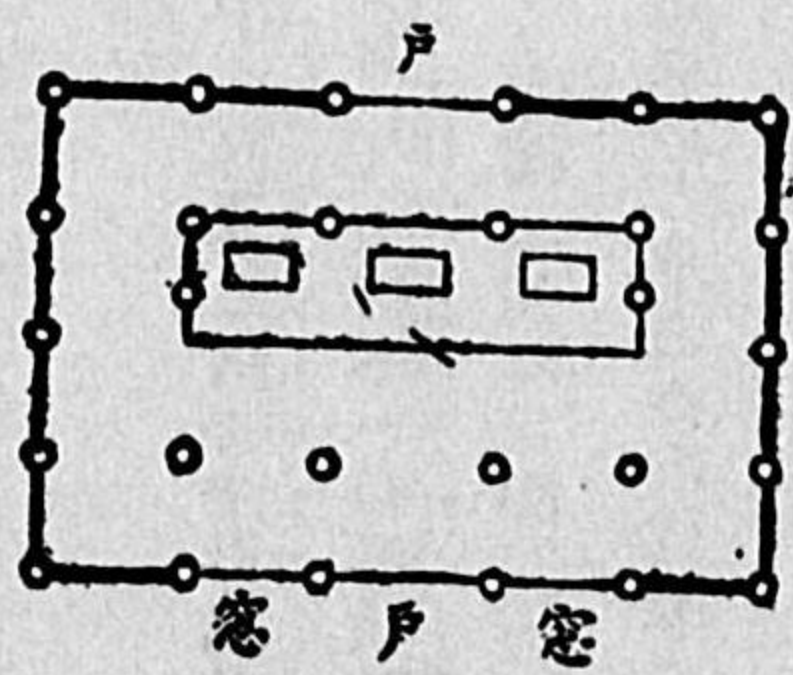


を作し、「臺輪」はやゝ柱よりも小なり。

面、單層四注第五六七圖にして料拱は「和様」なり。其の組織第五六八圖の如く、「二手先」をなすと雖も、第一の「手先」と間隔相均しからず。柱の上端に少しく「ちまき」



第五六八圖



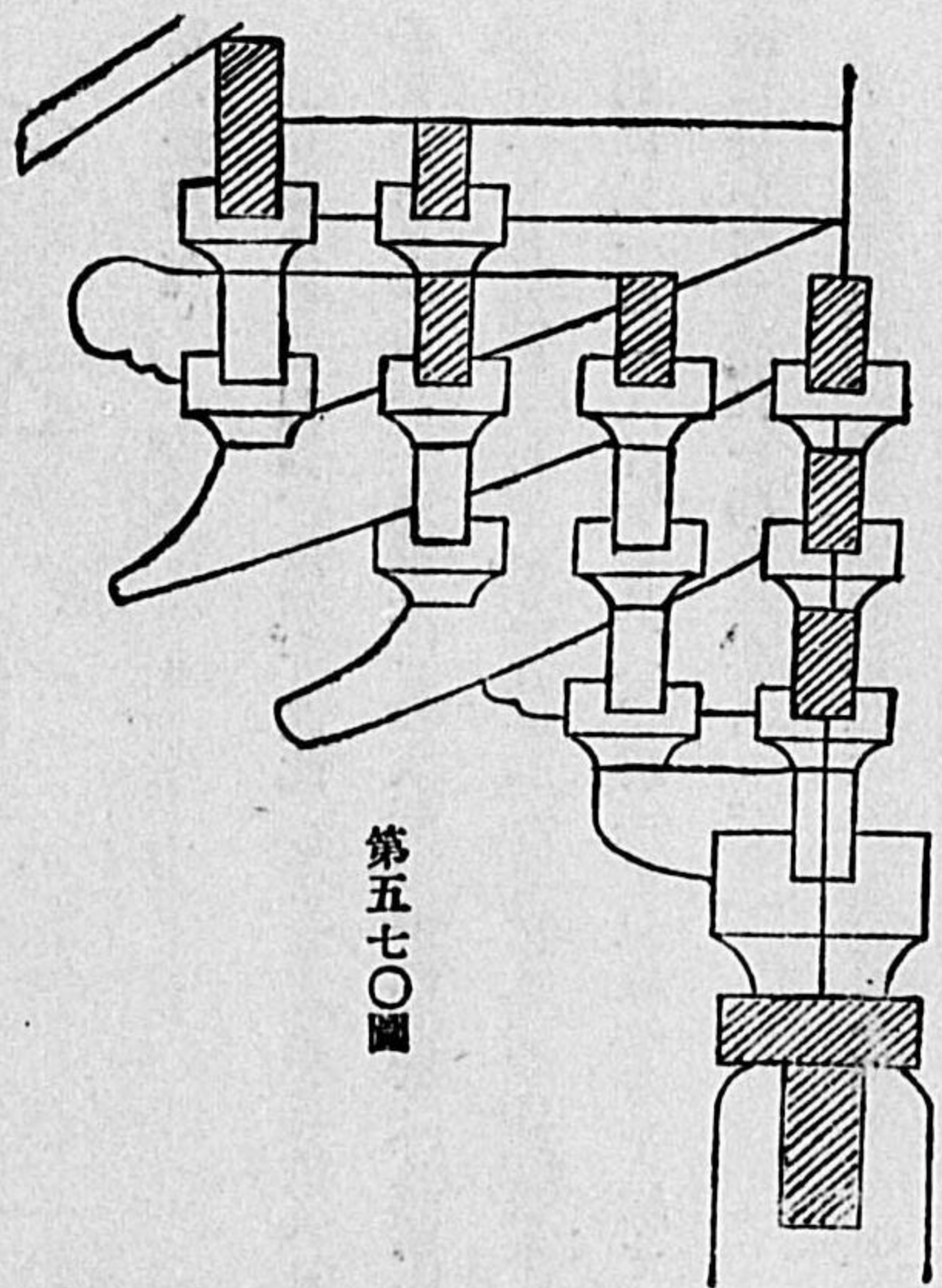
圖九六五第

内部は須彌壇上に五體の佛像あり、皆結跏趺坐して、遙かに丈六よりも大なり、蓋し五如来なるべし。兩側に多くの立像あり、皆傑作なり。又壁畫あり、頗る優秀のもの

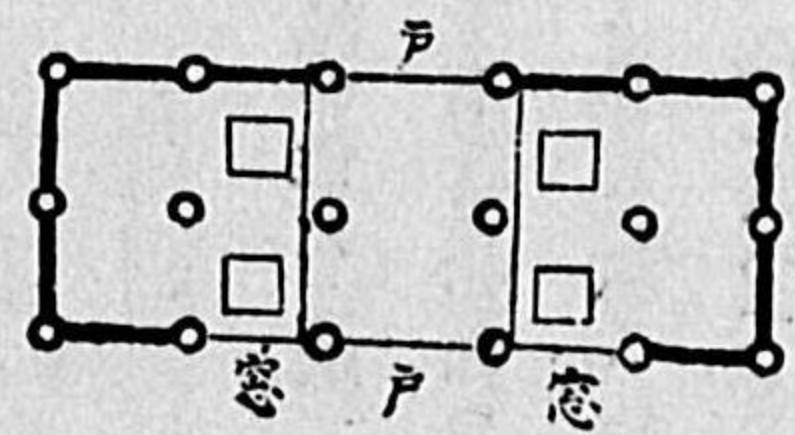
なるが如し。

三聖殿は五間四面、層單、四注(第五六九圖)なり。料拱の性質は總て我が藤原時代に似て、已に鎌倉時代のものにあらず。只だ「尾垂木」の末端の形状及び「鳥舌」を有するが如き事實は、鎌倉以後のものに類せり(第五七〇圖)。又柱間に於ける料拱は一種特殊にして「隅肘木」を用ひたり。隅の間に於いては隅柱上の「大斗」に接近し別に又一の「大斗」を具へ、料拱を組織せるを以て、隅に於いて著しく料拱の複雑なるを見るべし。大雄寶殿に於いても亦た一同の手法あり。

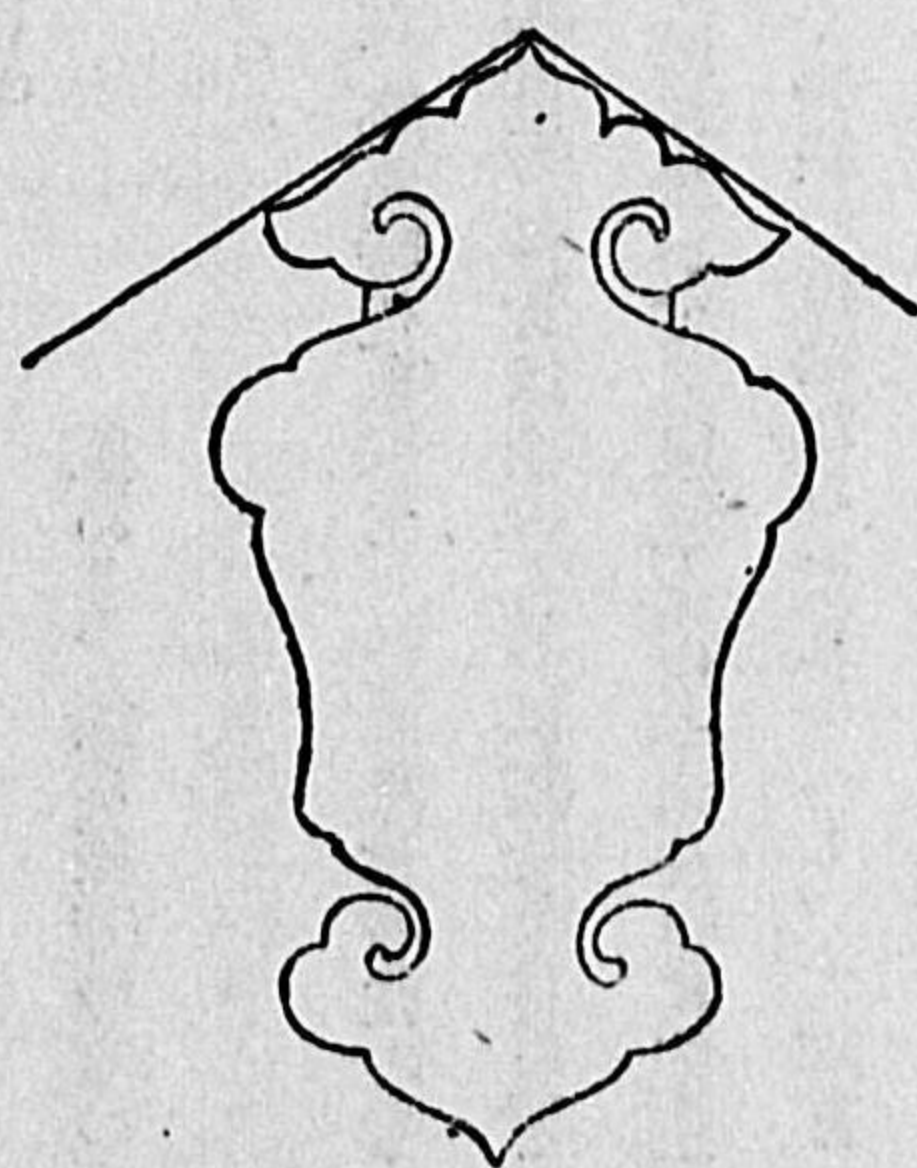
天王殿は五間二面、層單四注なり(第五七一圖甲)、凡そ殿堂の層に相重つて皆四注の屋蓋を有するは吾人の稀有とするところなり。蓋し唐の制多く四注を用ひたる者の如く、此の伽藍建築は即ち尙ほ多少唐代の意匠を傳ふるも



第五七〇圖



第五七一圖(甲)



第五七一圖(乙)

の如きを覺ゆ。四天王は所謂喇嘛的のものなれども、足下に邪鬼を踏まず形相甚だ簡なり。料栱は「和様、つめ組」にして「二手先」なり。「尾垂木」「鳥舌」は三聖殿に均し、「肘木」の形状特に優秀にして、我が國藤原時代のものに酷肖せり。第五七一圖乙は東西樓の「懸魚」なり。兩樓は共に三間四方、二層樓にして上層入母屋なり。予は唐代創立のものは遼末に廢滅したるの傳記と、此の建築が大華嚴寺の建築と類似の點あるとに由りてこれを推考するなり。然れども吾人は尙ほ多く他に比較を求め、精細なる調査を遂ぐるにあらざれば、未だ其の年代を測

定するを得ざるなり。

第十 雲岡の石佛寺

雲岡は大同の西三十里にあり、石佛寺は武周川の北岸なる小丘を鑿つて大小數十の窟を作り、其の中に佛像を造り出せるものにして、所謂 Rock-cut Temple なり。其の創立に就いては同寺の碑に刻するところ左の如し。

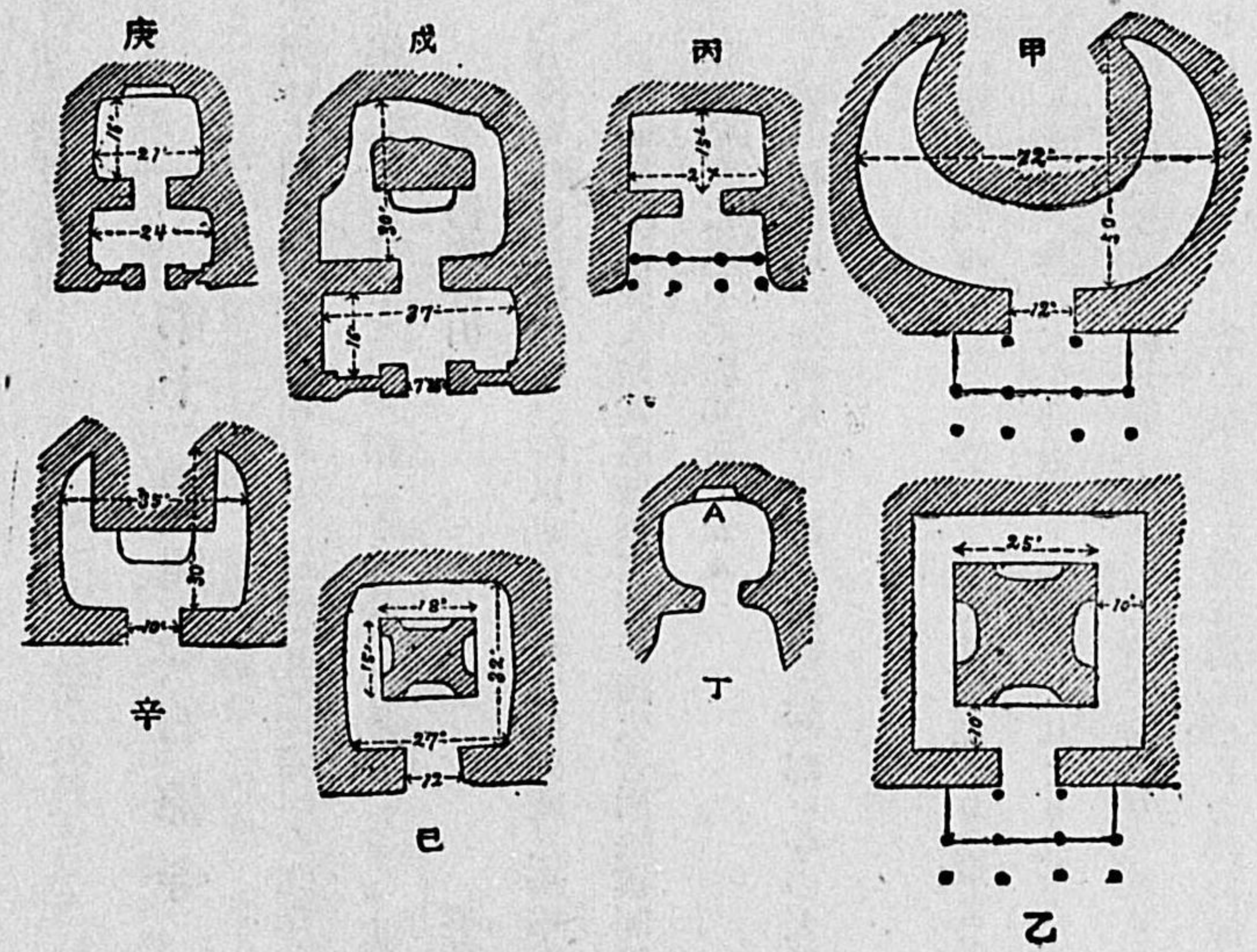
遊石佛寺并引

吳伯興

石佛寺創自後魏拓跋氏時以定伯之猛力仰岡壁之清華接構歷七帝百餘年神峯遍石佛二十座盤空數級梯石盤似甌欲揚如翹斯倚金人錯其虛臂蓋宮蔚於高天奇樹映樓閣以葱龍丹青并異卉而冥密斷繁不足比其紛披操蛇不足異其轉徙梵天化城不足窮其高、云々

即ち魏の拓跋氏の遺跡なり。遺し拓跋氏は都を今の大同に定めたり、石佛寺は即ち此の時代の創建に係るものか。

予の觀察したる石窟の主要なるもの凡て九あり、東より西に整列す。其の尤も東なるを大佛殿と云ひ、其の次に彌勒殿と云ひ、其の次を佛窟洞と云ふ、これより以下の五窟は特に名を有せず。予今假りに第一窟、第二窟を數へて第五窟に至る、第五窟は即ち尤も西の窟なり、第五窟の西亦た重要な窟あるを見るも、終に之を見るに及ばずして止めたり、故に姑く筆を第五窟に止めて其の餘に及ぼさず。



圖二七五第

一大佛殿

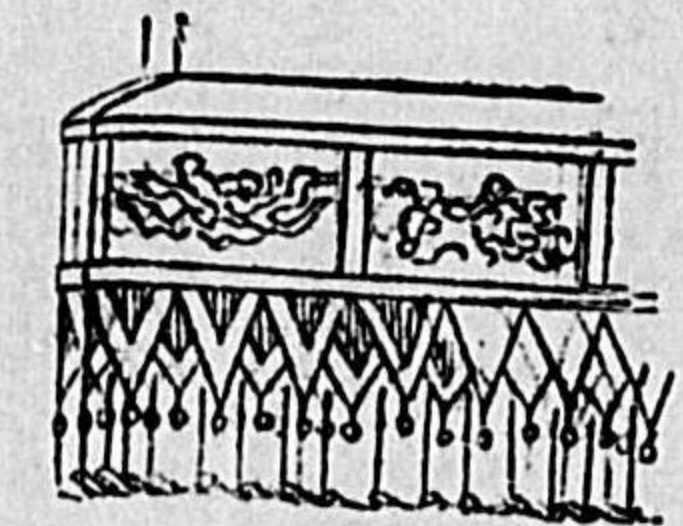
大佛殿の平面は第五七二圖甲の如く、石佛寺中最も大なるものなり。窟の前面に四層の閣樓を造りたり、其の形式構造は最近の制に由り、別に見るべきものなし。其の窟内は即ち幾分の古式を存し頗る異趣を呈せり。其の本尊は結跏趺座高さ凡そ六丈、足の長さ一丈五尺に及べり、周圍の壁面には無数の佛像を刻出し、皆鮮麗なる色彩を施せり。只だ隨處後世の修繕の爲めに古式を滅却せるは惜むべし。

二如來殿

如來殿のプランは、第五七二圖乙に示すが如く凡そ四十五尺四方の石室内に、更に二十五尺四方の柱あり。柱は高く延いて窟の天井に接したり。柱は二層を分ち、下層は其の四方各龍ありて、其の内に佛像あり、佛像の上に天蓋あり、天蓋は直に天井に接したり。窟の内壁にはまた無数の佛像あり。その他、極めて複雑なる裝飾模様あり、一々記すべからず。外部には四層樓の構架あれども、近世の製作にして見るに足らず、佛像及び其の裝飾の大部分はよく古式を保持し、極めて奇觀なり。佛像は多くは其の容貌奇古にして、我が邦法隆寺金堂内の壁畫に於ける彫像と酷似し、其の衣紋は、却つて同所の鳥佛師作のものに酷似し、文様の如きは全然我が所謂推古式即ち法隆寺式と符合せり。第五七三圖は上層の佛像の上なる天蓋なり。其の鱗形の裝飾、其の末端に懸れる鈴、鱗形の下に垂下して鉛直に竝行せる皺襞を作れるもの、一々法隆寺金堂内の天蓋と符合せるなり。第五七四圖は



第五七四圖



第五七三圖



第五七七圖



第五七六圖



第五七七圖

佛像の光背の一部なり、飛遊せる天人の形状、其の曲線、其の色彩、また純乎たる法隆寺式なり。第五七五圖は上層九重塔に接して立てる佛像なり。其の衣紋の一種異なるを見よ。これ又法隆寺金堂なる薬師及び釋迦の脇侍の衣紋と全然其の意匠を均しうせり。其の他微に互り細に入りて、吾人は彼我符合するもの、類似するもの、或る關係を有するものを發見する所甚だ多し。今一々これを記するに遑あらざるを憾むのみ。

三 彌勒殿

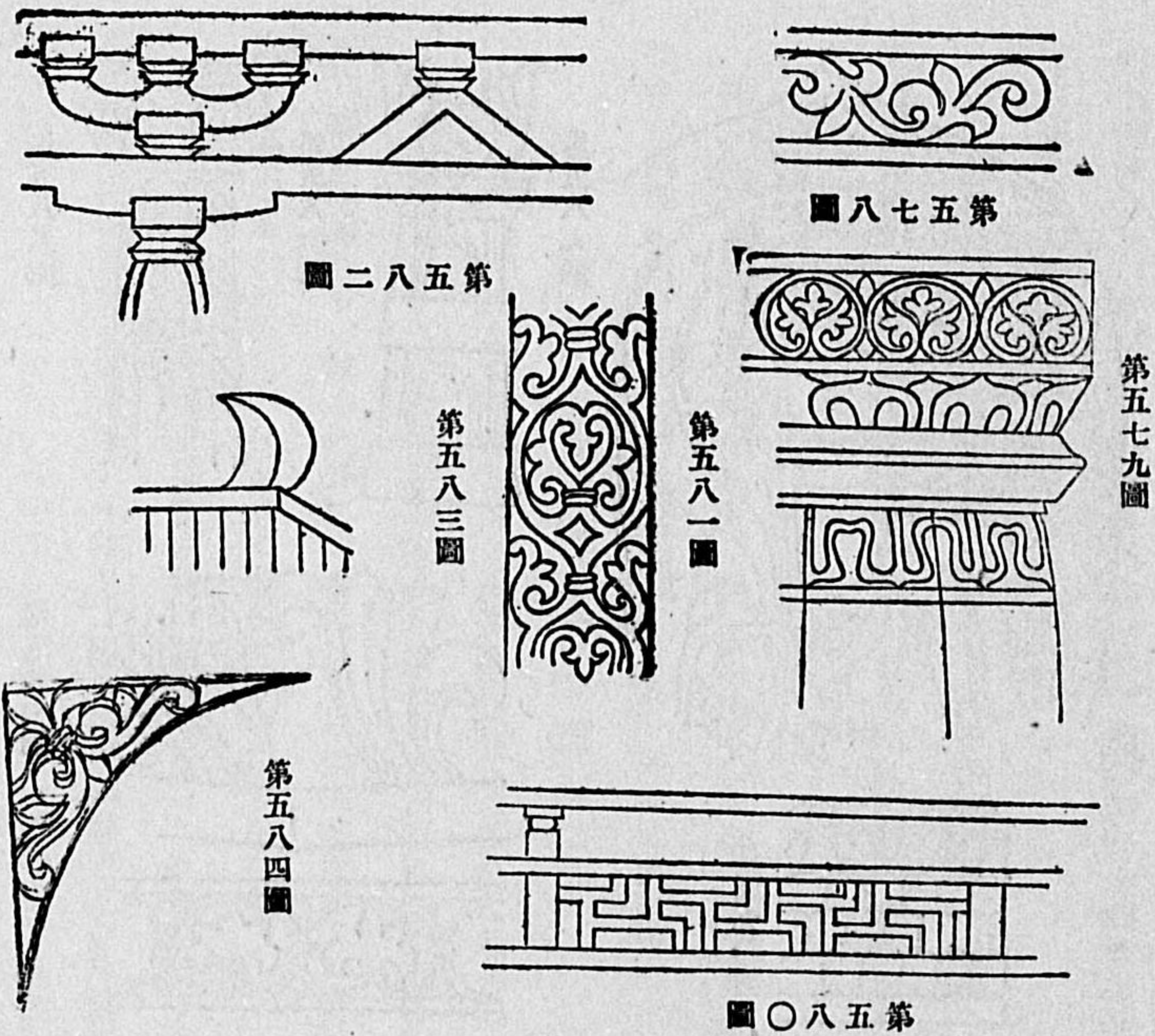
第五七二圖内は其の平面なり。また前面に四層樓の構架を設く、其の内部の佛像等は殆ど完全に保存され、後世の修理にかゝるもの極めて少し。第五七六圖及び第五七七圖は其の壁上の文様なり。吾人其の全然法隆寺模様と同じきことを觀察すべし。

四 佛籟洞

第五七二圖丁は其の平面なり。Aの部二層をなし、上層に三尊佛あり、下層に一の佛像あり、創立のまゝにして殆ど修理を加へたるの痕跡なし。

五 第一窟

第五七二圖戊は其の平面なり。第一門を入れれば前庭あり、第二門を入りて廣き窟あり、其の中央に佛像あり、高さ三丈六尺許り、窟内の佛像及び裝飾の手法皆よく古式を保存せり。第五七八圖は第一門の柱の基礎に於ける文様なり。第五七九圖は柱の上部なり、其の「大斗」の面には希臘とアンシリヤとの中間にゐるが如き文様あり、



「斗操」に連あり、其の下に「皿斗」あり、柱は八角にして粗野なるエンタシスを有し、其の面に佛像を彫刻せり。

第五八〇圖は柱上の勾欄なり、亦全然法隆寺金堂のものに均しきを觀るべし。第五八一圖は前庭に於ける龜の脇柱に於ける文様なり。第五八二圖は第二門に於ける料栱なり、其の三斗及び三斗の中間にある人字形の臺股、みな法隆寺金堂に於けるものに均しきなり。第五八三圖は前庭の左右にある右門の鴟尾なり。第五八四圖は第二門の穹窿に於ける文様なり。

六 第二窟

第二窟は其の形状も其の廣表も共に殆ど第一窟と相均し。細部の手法には頗る注目

第五八五圖



第五八七圖



第五八八圖

第五八九圖



すべきものあり。第五八五圖は前庭に於ける柱なり、イオニア式柱頭を用ひたるは頗る奇なり。又第五八六圖は多少コリント式柱頭の意を有す。且つ柱面に佛を刻するの法は、蓋し印度より傳來せる意匠なり。第五八七圖は第一門の柱礎なり。第五八八圖は第二門の楣上にあるアッシリア文様なり。第二門の楣形は蓋し西藏ヘミオンチの寺院に於けるものと意匠を均しうせり。

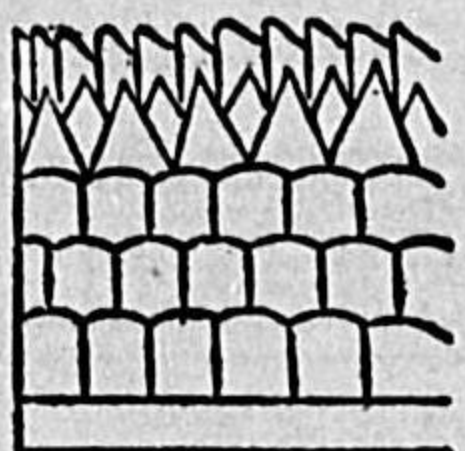
(フアーガッソン氏東洋建築史参照)

七 第三窟

第五七二圖の已は其の平面なり、其の意匠如來殿に似て小なるものなり。中央なる柱は延いて天井に達し、柱の



第五九〇圖



四面佛像あり、正面なるを無量壽佛とす。窟の四壁皆佛像なること上記の如し。此の窟は後年の修繕に逢ひ、大に古式を損したるが如し。

此の窟は其の外面に無数の佛像あり。其の容貌、其の衣紋、其の光背、全然法隆寺式即ち鳥佛師式なり。第五八九圖は其の一例を示せるものなり、吾人は此に至つて彼我符合するの甚しきに驚かざるを得ざるに至りたり。

八 第四窟

第五七二圖庚は其の平面なり、第一窟に似て其の小なるものなり。第二門は楣なくして穹窟をなせり。内部は後世の修理に由りて大つに古式を失へるも、外面には鳥佛師式の佛像半ば雨露に破壊しつゝ駢列せり。

九 第五窟

第五七二圖辛は其の平面なり、大佛殿に似て其の小なるものなり。佛像は須彌壇上に倚り、足を交叉して地上に委せり、高さ凡そ五丈餘、足の長さ八尺あり。内部には後世の修理多きも、外部鳥式の佛像を以て満たされたり。第六窟は未成なり、其の内外に大小の鳥式の佛像甚だ多し。第五九〇圖は其の天盖の一例なり。吾人は其の法隆寺金堂内のものに似るの酷しきに驚かざるを得ざるなり。

要するに石佛寺の大部分は拓跋魏の遺物たること疑を容れず。然らば即ちこれ千四百五十年前の遺跡にして、我が法隆寺に先つこと百五十年なり。思ふに所謂推古式なる藝術が三韓より傳來せるは疑なし、三韓これを何處より得たるか、これ吾人の切に知らんと欲して未だ知るを得ざりし。大疑問にてありしなり。而して吾人は今や

大同の附近に於いて推古式の遺物を見るを得たり。吾人はこれに由つて、所謂推古式なるものは西域より、内蒙北支を通過して朝鮮に入りしことを想像すべきに至りたり。吾人は猶ほ此の石佛像に就いて極めて精細に緻密に、其の現状と起原とを研究せざるべからず。吾人はこれに由つて、東洋美術史上の一大疑問を解釋すべき楷梯を得べきなり。

第十一 應州の八角五重塔

應州は大同府の南百三十里にあり、其の寺を佛宮寺と云ふ。其の年代に關しては「重修佛宮寺碑記」に云く、

(上略) 寺内又有古塔上下以木爲之其高三百六十尺(中略)余考釋迦之塔建自遼清寧二年厥後重修者不知其凡

幾(下略)

(同治)

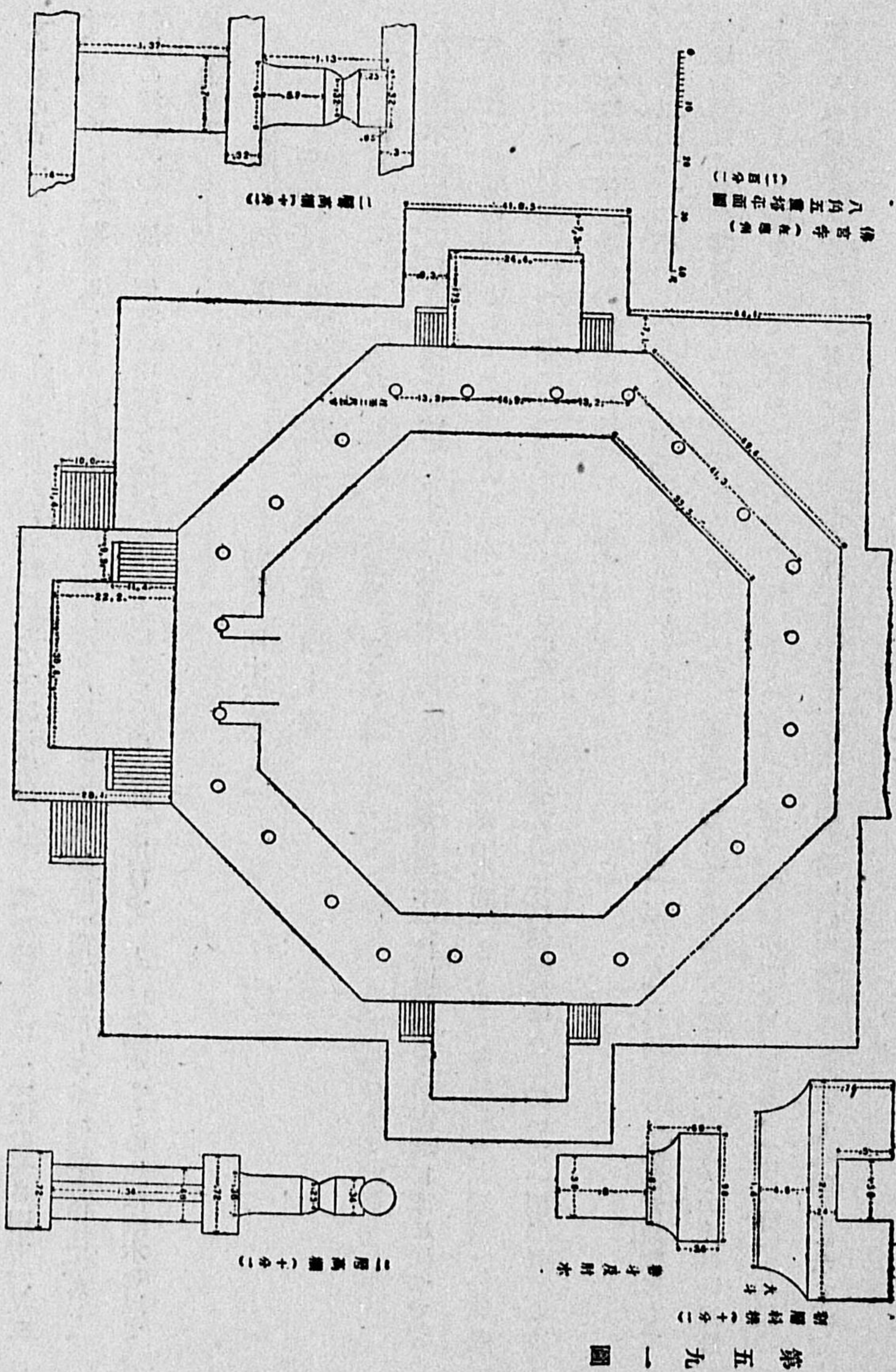
又別に碑あり曰く

(上略) 遼清寧二年志稱其建塔於城之西北隅高三百六十尺圍一百八十尺有奇上下架巨木爲鬼斧神工非人力所

能(下略)

(光緒)

即ち遼の清寧二年の建築にして(我が國後冷泉天皇天喜三年)爾來幾回の修繕を経たるべきも、依然として八百五

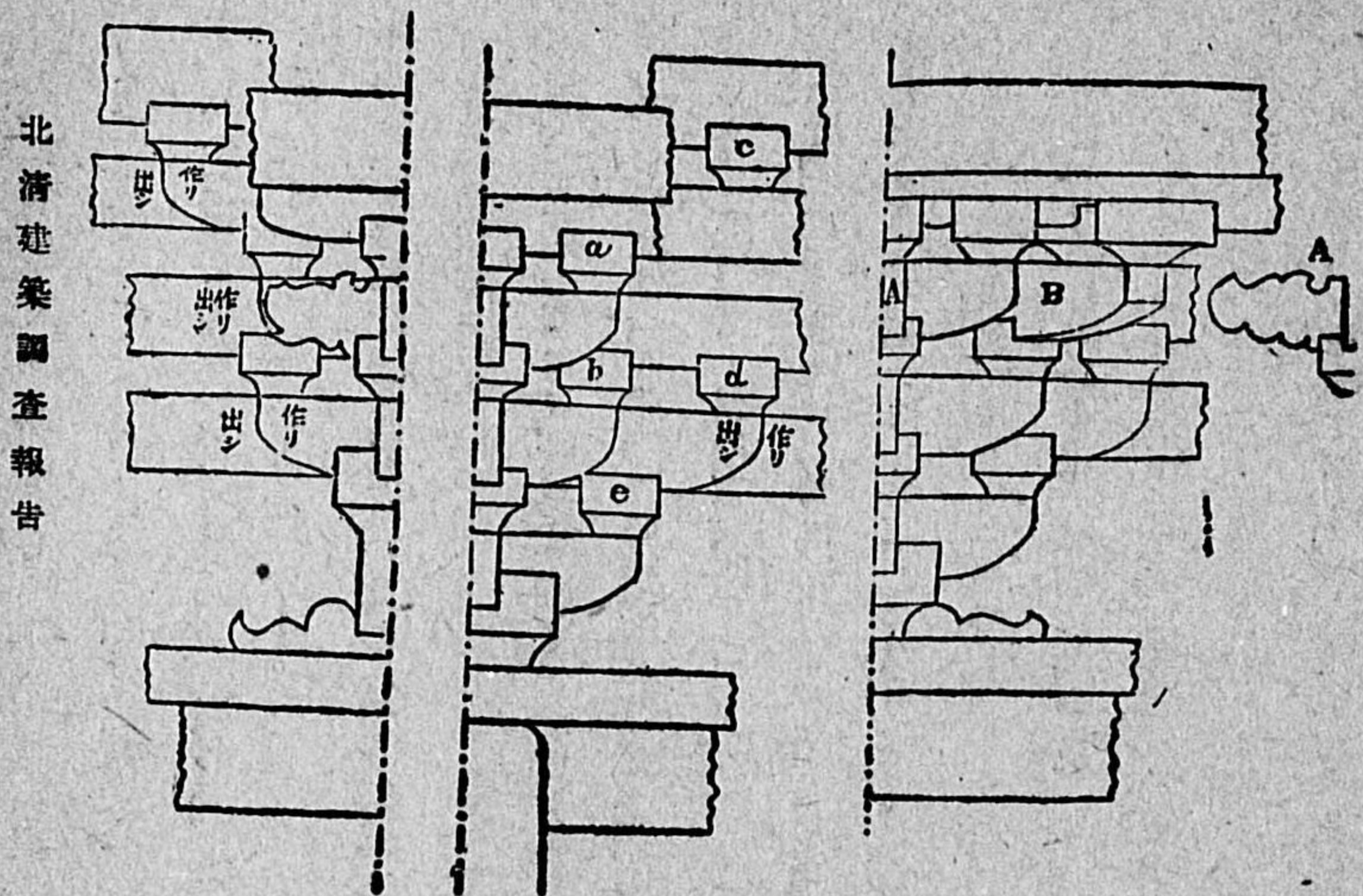


十年前の古式を存するものなり。塔は八角五重にして下層に裳層あり、裳層柱に於ける一面の長さ四十二尺三寸、側柱中柱共に輓を以て包める外は全部悉く木造なり(第五九一圖)。毎層一面三間にして、側柱と中柱とあり、毎層の柱は其の下層の側柱と中柱とを繋げる梁の上に立ち、中心柱を用ひず、上部に縮小するの比は垂木を以て表すれば左の如し。

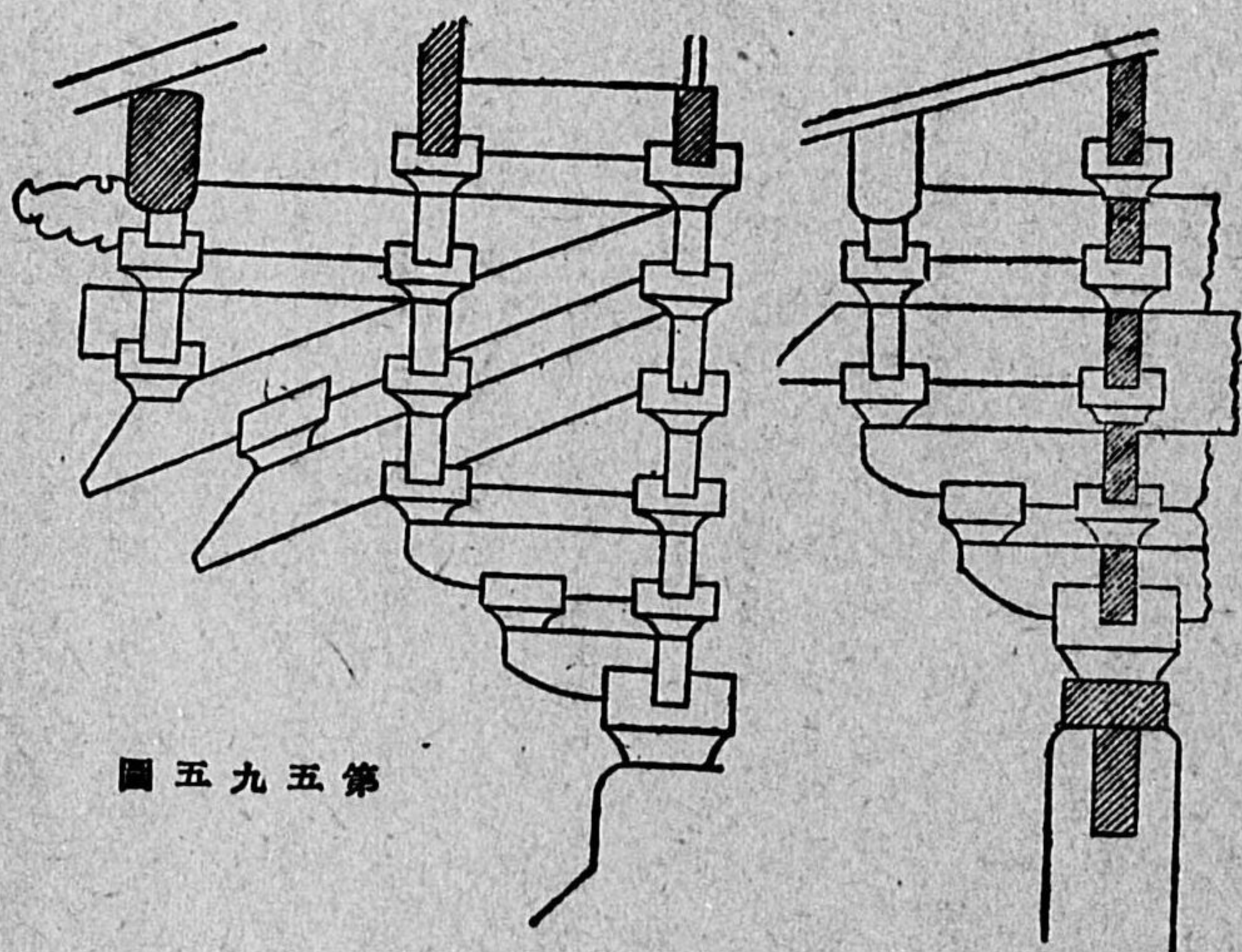
裳階 一面	五十二支	初重	四十六支
二重	四十四支	三重	四十支
四重	三十九支	五重	三十六支

但し垂木の配置及び大きさ甚だ均整ならず、「地垂木」丸くして「飛檐垂木」は直角形をなし、共に末に向つて著く細まれり。其の結果として「丸垂木」の「本」に於いては其の徑は「小間」よりも大なれども、「飛檐」の末端に於いては「小間」は「下端」の二倍ならんとするに至る。第五層の大きさは側柱の中心に於いて一面の長さ十九尺六寸なり、第二層に於いては内陣柱の一面十七尺七寸なり。

二層以上には勾欄あり(第五九一圖)、其の形式大いに我が邦古代のものに似たり。料栱は其の制甚だ放縱にして毎層皆異れり。今裳層に就いて觀察するに、「中の間」の「柱間」の料栱は第五九二圖に示すが如く、「大斗」は柱上のもよりも稍小にして「料栱」の左右に「鰭」あり、又Bの如き「隅肘木」を用ひたり。「中の間」と「脇の間」との界をなせる柱上の料栱は、第五九三圖甲に示すが如く、「脇の間」の中央なるは第五九三圖乙に示すが如



圖二九五第 (甲) 圖三九五第 (乙) 圖三九五第



圖五九五第

第五九四圖

く、彼の大華嚴寺の海會殿に於ける如き「束」と「墓股」との配合を見る。第五九四圖は第五九三圖甲の断面を示す、其の組織また善化寺の大雄寶殿に於ける料拱第五六八圖に類似し、其の年代の相去ること互に遠からざることを示したり。

第五九五圖は初層の料拱なり、其の全體の形状大いに我が邦南都薬師寺の塔に於ける料拱に似たるを覺ゆ。其の「二重の尾垂木」の手法の如きは特に吾人の注意するに足るべきものなり。只「大斗」及び「卷斗」の長廣高の比例は第五九一圖にこれを示す如く、我が邦藤原時代のものに比して少しく異れり。

第二層の料拱は「四手先」の地を有し「尾垂木」二本を有す、但し柱間の料拱は著しく異様なり、且つ「支輪」を有せり。(第六一一・第六一二圖)

第三層は「三手先」にして「尾垂木」なし、中柱一本の上に於ける料拱は半「あま組」なり。

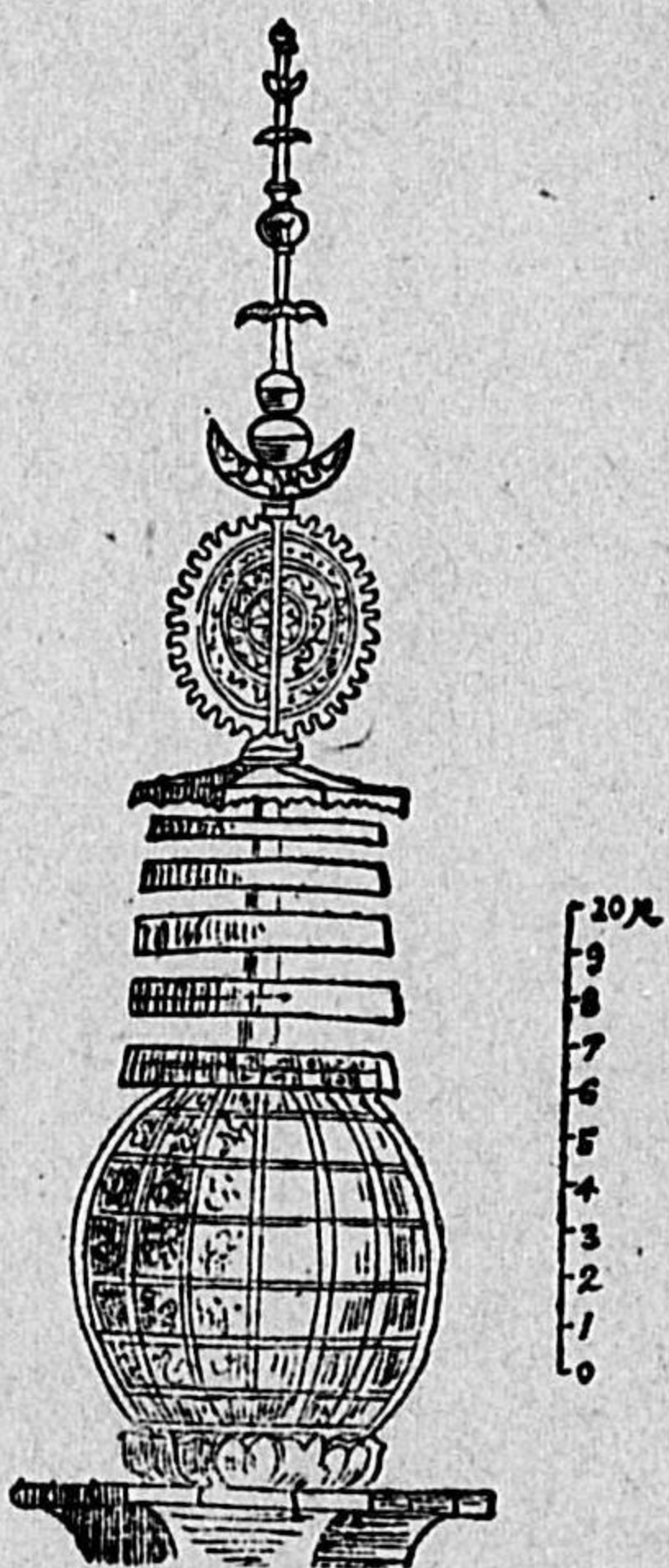
第四層は「二手先」にして「つめ組」なり。

第五層は「二手先」にして「中の間」の中央の料拱は「あま組」なり。各層勾欄の下に「腰組」あり、皆「三手先」なりと雖も其の手法一々均しからず。

要するに料拱の制に變化多きは即ち意匠の富裕なる所以なり。これを我が邦の千遍一律、毎層殆ど同一の料拱を反復するに比すれば、其の優劣は素より論を待たざるなり。

第五九六圖は「相輪」なり、屋上に八角の「露盤」あり、其の上に二重の「請花」あり、皆輓を以て造れり。請

第五九六圖



上に寶珠あり、其の上に再び蓋あり、其の上に「請花」あり、其の上に最後の寶珠あり。

相輪の大きさは不詳、予の觀測を以てすれば「露盤」の下より頂まで約四十尺なるべきか、塔の全高は凡そ二百五六十尺なるべし、傳へて三十六丈と云ふは素より誇大の言のみ。我が邦亦た古來三十六丈の高建築の傳説あり、近くは京都相國寺の塔の如きはこれなり。然れどもこれまた佛宮寺の塔の類にあらざるなきか。

要するに支那に於いて木造の塔を見る已に奇なり。其の八角五重にして二百數十尺の高さを有する已に甚だ奇なり。而して其の年代の遼の清寧二年にしてよく當時の形式を存するは尤も奇なり。況んや其の細部の手法の經營自在にして意匠縱横なるものあるをや。蓋し大同の大華嚴寺及び善化寺と共に、大同附近に於ける遼金の三遺物として建築史上に異彩を放つものなるが如し。

第十二 五臺山

五臺山又清凉山と云ひ山西省五臺縣に屬す。清凉山志に曰く

五岳之外有清凉山者乃曼珠大士之化宇也亦名五臺山以歲積堅氷夏仍飛雪會無炎暑故曰清凉山五峯聳出頂無樹木有如疊土之臺故曰五臺

五臺とは中臺、東臺、西臺、北臺、南臺にして高各一萬有餘尺、予の觀測によれば東西兩臺相去ること直徑約四十里、南北兩臺相去ることまた約四十里、五臺の水集つて清水河となり、南に流れて終に漳沱河に入る。河の西岸五臺の中央に一小街あり、即ち五臺山の諸寺の在るところなり。傳説に由れば五臺山の創立は後漢の明帝の時であり。清凉志に曰く

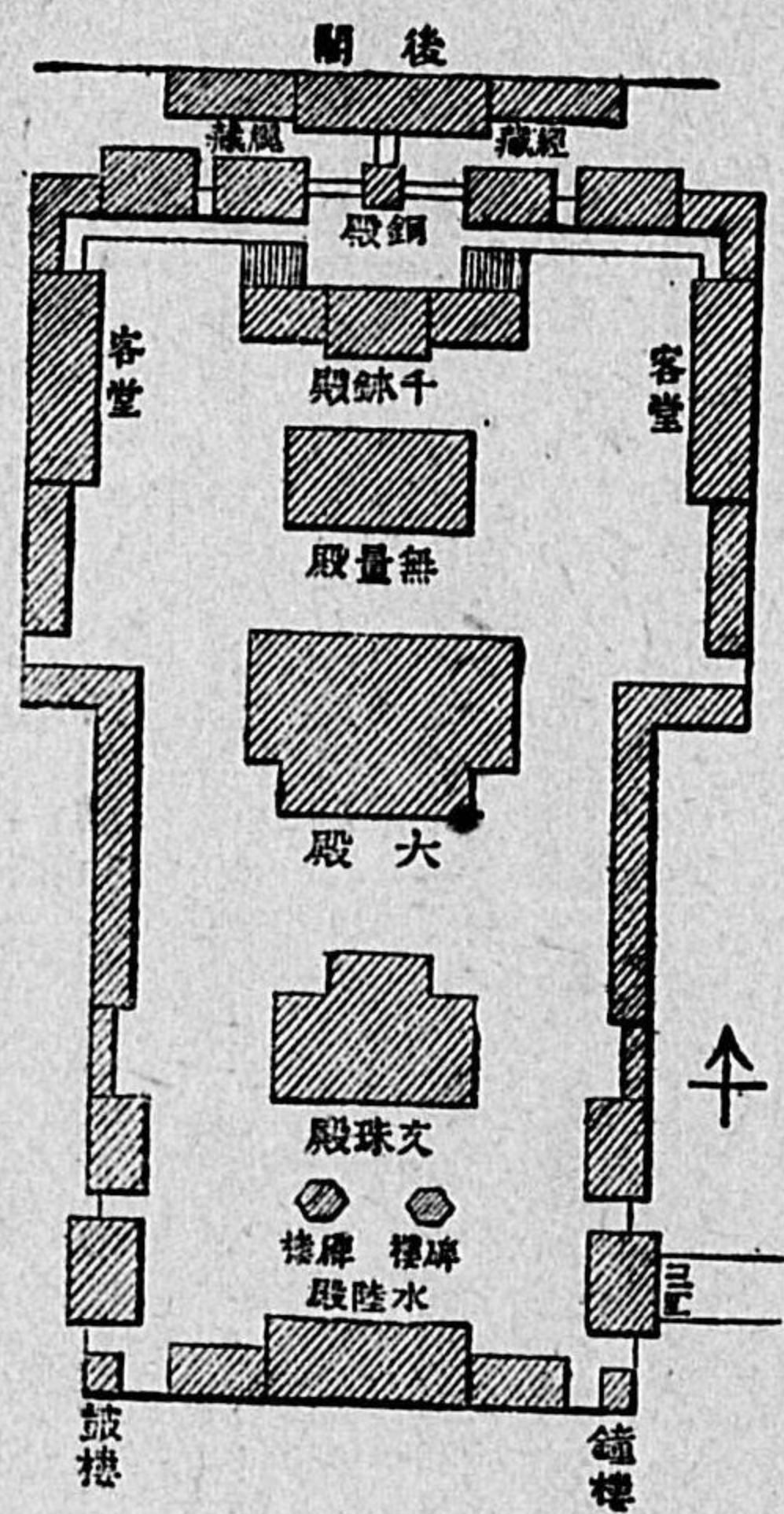
漢明帝時摩騰西至以慧眼觀清凉山乃文珠化宇中有阿育王所置佛舍利塔秦帝建寺額曰大孚靈鷲寺大孚弘信也帝以始信佛化教以名焉

と、爾後後魏孝文帝これを再建す。下つて隋唐以下各朝に於いて尊崇甚だ深く、漸次に伽藍を加へて以て今日に及びたり。

臺内の佛刹六十四所あり、(清凉志)其の顯著なるものは、曰く大顯通寺、曰く大寶塔院寺、曰く大圓照寺、曰く大文珠寺即ち菩薩頂、曰く大廣宗寺、曰く三昧寺、曰く南山極樂寺、曰く殊像寺、曰く慈福寺等なり。方今禪

教に歸すと雖も、其の一部は即ち喇嘛教なり。聞く五臺山に喇嘛教の伽藍十個所あり、而してこれを統轄するものは即ち菩薩頂なりと。

五臺山に於ける伽藍の規模は殆ど皆同一の制に由れり。故に今大顯通寺を採つてこれを述べ、其の他は凡て省略す。大顯通寺は五臺山中尤も古き伽藍なり。後漢の明帝の時に創立せられ、後魏の孝文帝これを再建すと稱するもの即ちこれなり。唐太宗これを重修し、則天華嚴經を納めて大華嚴寺と稱す。清の太宗勅して重建し、大顯通寺と改稱す。其の平面は第五九七圖に示す如く、東門を入れば南に水陸殿あり、觀世音を祭る。文珠殿には文珠



第五九七圖

を祭り、大殿には釋迦三尊を祭れり。重層四注屋上に寶瓶を冠し、殿前の碑には天順二年及び萬曆三十五年の聖旨を刻せり。無量殿には無量佛を安置す。軛造にして内部は穹窿をなし、外部は重層入母屋の觀をなす。千鉢殿には文珠を安置す、千手十一面なり。殿の後に壇を築き、壇上五個の小塔を建つ、蓋し五臺に象るものと云ふ。壇上

又銅殿あり、重層入母屋なり、悉く銅を以てこれを造る。其の左右に經藏あり、軛造にして重層入母屋なり。銅

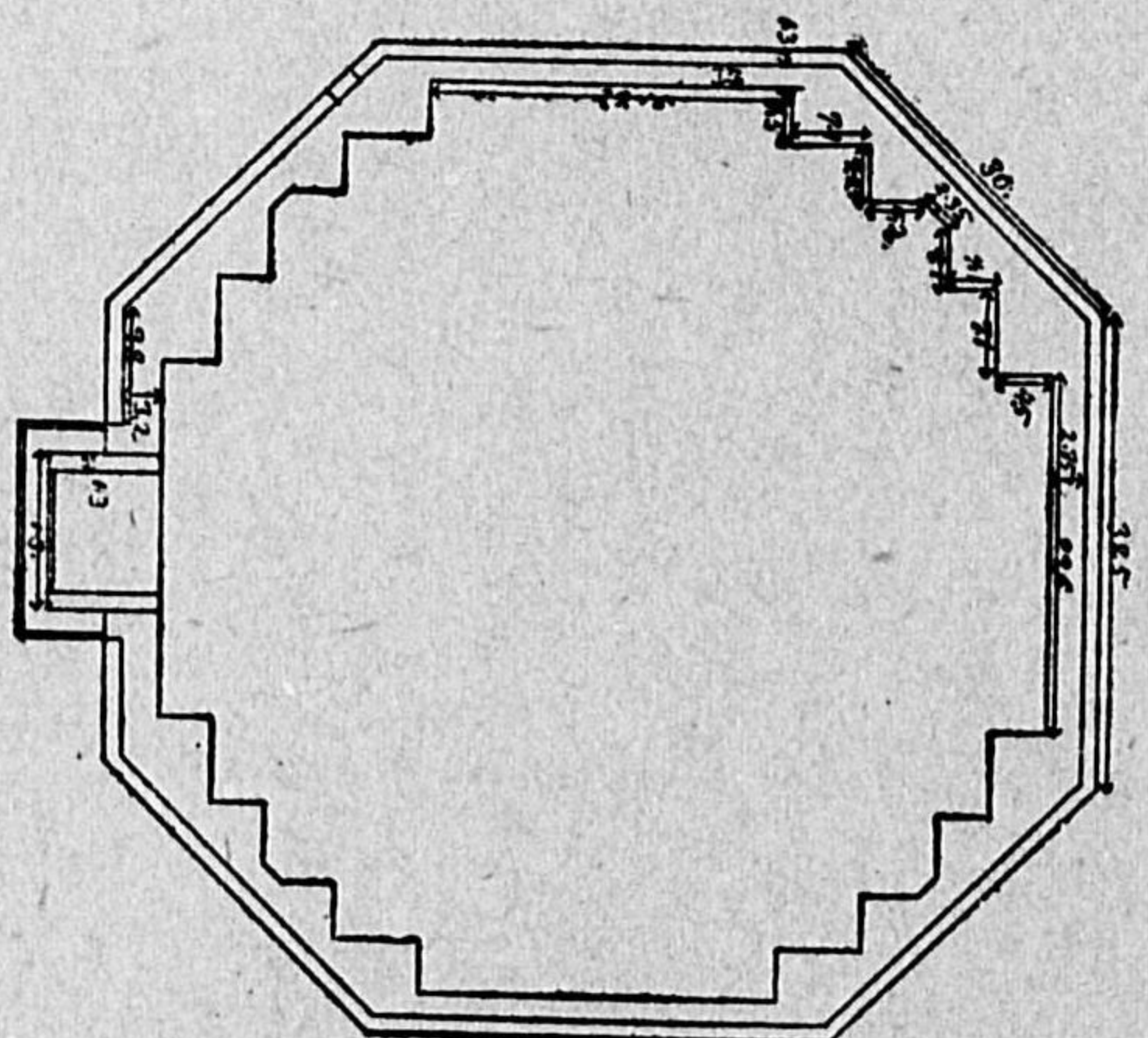
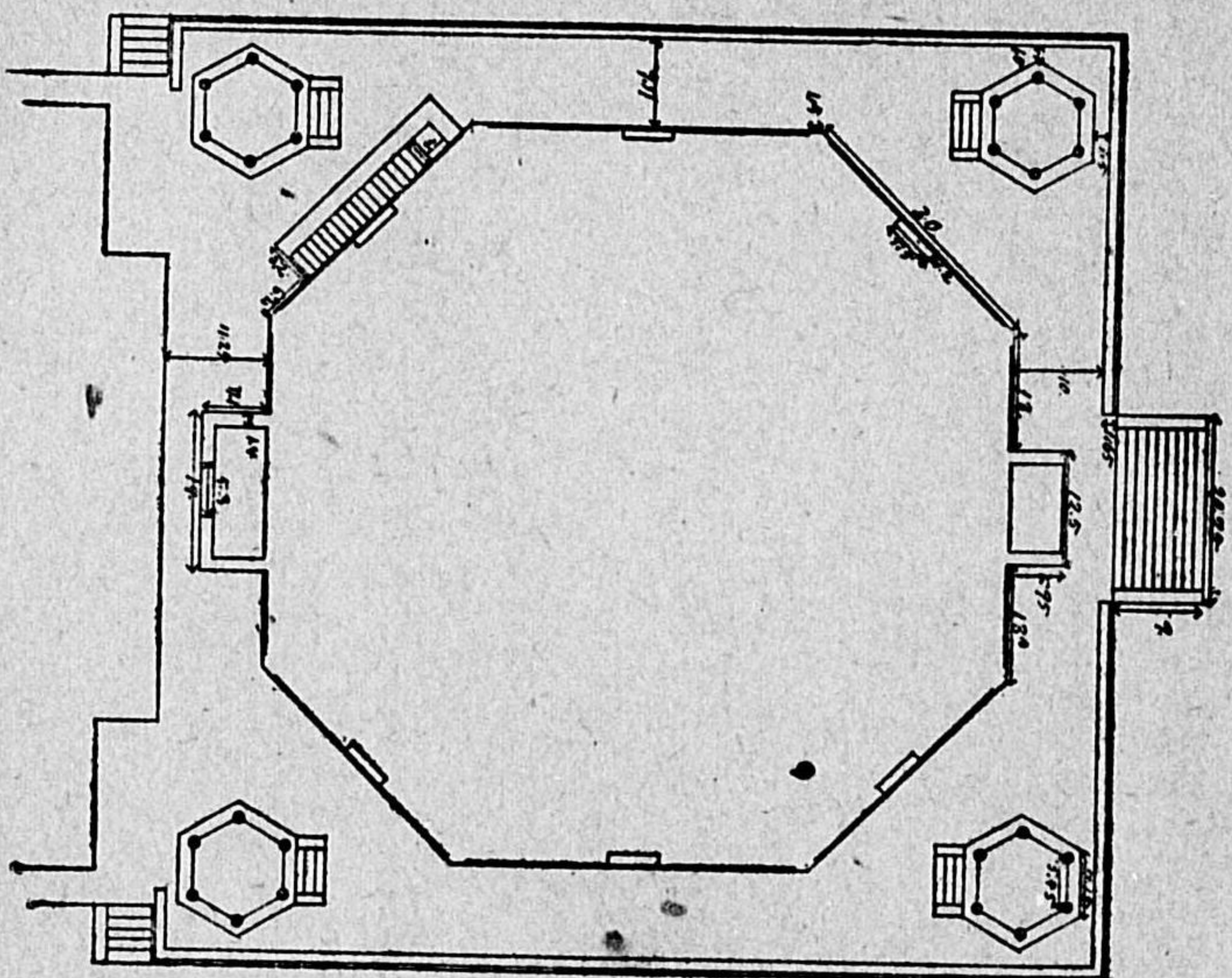
殿の後に後閣あり、重層切妻なり。其の他客堂、廊、鼓樓、鼓樓等あり。規模甚だ壮大なりと雖も、建築個々に就いて視察すれば、皆清朝の建築様式を表すと云ふのみ。殊に意匠と製作に見るべきものなし、佛像の如きも著しく喇嘛の影響を被りて、已に純然たる華嚴宗のものにあらず。

大塔院寺は大顯通寺の南に隣り、大塔を以て著はる。永樂五年勅して塔を重修し、始めて寺を建つ。萬曆戊寅聖母勅して塔を再建す。清涼志に曰く

塔在鶯峯之前群山中央基至黃泉高二十一丈圍二十五丈狀如澡餅上十三級寶餅高一丈六尺鍍金爲飾覆盆圍七丈一尺巾以懸帶懸以金鈴更造金銀寶玉等佛像及諸雜寶安置藏中云々

此の塔萬曆七年九月起工し、十年七月を以て成ると云ふ。其の平面は、第五九八圖に示すが如く、廣潤なる方形の壇上に八角の塔基を建て、更に其の上に塔身を築けり。全部軀を以て造り、上に白堊を塗れり、其の形式及び細部の手法殆ど全く北京城内白塔寺の白塔に均し。只だ彼に比して基小さく丈高さのみ、高さ二十一丈と稱す或は眞に近からん。

此の塔の基壇は正八角にあらず、これ故に其の上に築ける臺座の平面は頗る異様のものとなれり、吾人は其の何の故なるやを詳にせず。又全體の形狀を見るに臺座、球體、相輪の三部の區劃甚だ明かならず、殆ど三部模糊の間に連続せるの感あり。且つ頂上なる澡餅は小に失して其の下に於ける相輪との關係妙ならず。予は此の塔が白塔寺の白塔を模範とし、故らに多少これを改竄したるものに非ざるなきやを疑ふこと切なり。(第六一〇圖)



圖面平塔寺院塔大 圖八九五第

要するに此の塔は規模の大に於いて、五臺山第一の奇觀なり。これを北京白塔寺の塔と比較して。其の年代の差と、恰も相并行するが如きを觀察するは吾人の尤も趣味を感じる所以なり。

五臺山中塔甚だ多し、其の形状千種萬別なり。中臺絶頂の塔は相輪發達して八角七層の建築の意となり、南山極樂寺の塔は臺座發達して球の部を壓し、寶篋印塔の型に進まんとするものなり(第六一〇圖)。

第十三 曲陽の北嶽廟及び塔

曲陽は定州の西北六十里にあり、域内に北嶽廟あり、恒山の一部飛んで此の地に落ちたりと稱し、これを祭る。其の正殿を德寧殿と云ふ、九間六面重層四注の大建築にして、周圍の柱は遊離して立ち、廂を構成す。其の細部の手法を検するに、料拱の配置は明代のものに比すれば疎大なり。十三尺の楹に於いて柱の間に二具の料拱を納れたるなり、「尾垂木」は斜に用ひられ、「鳥舌」あり、斗のプロポーション亦た明代のものに比すれば少異あり、或はこれ元代の遺物にあらざるか。殿内古鐘あり、大元國大徳六年の銘あり、其の大體の形状は明代のものといふところなし。只だ其の龍頭の形に異なるものあり、又龍頭の頂には寶珠を冠せり。

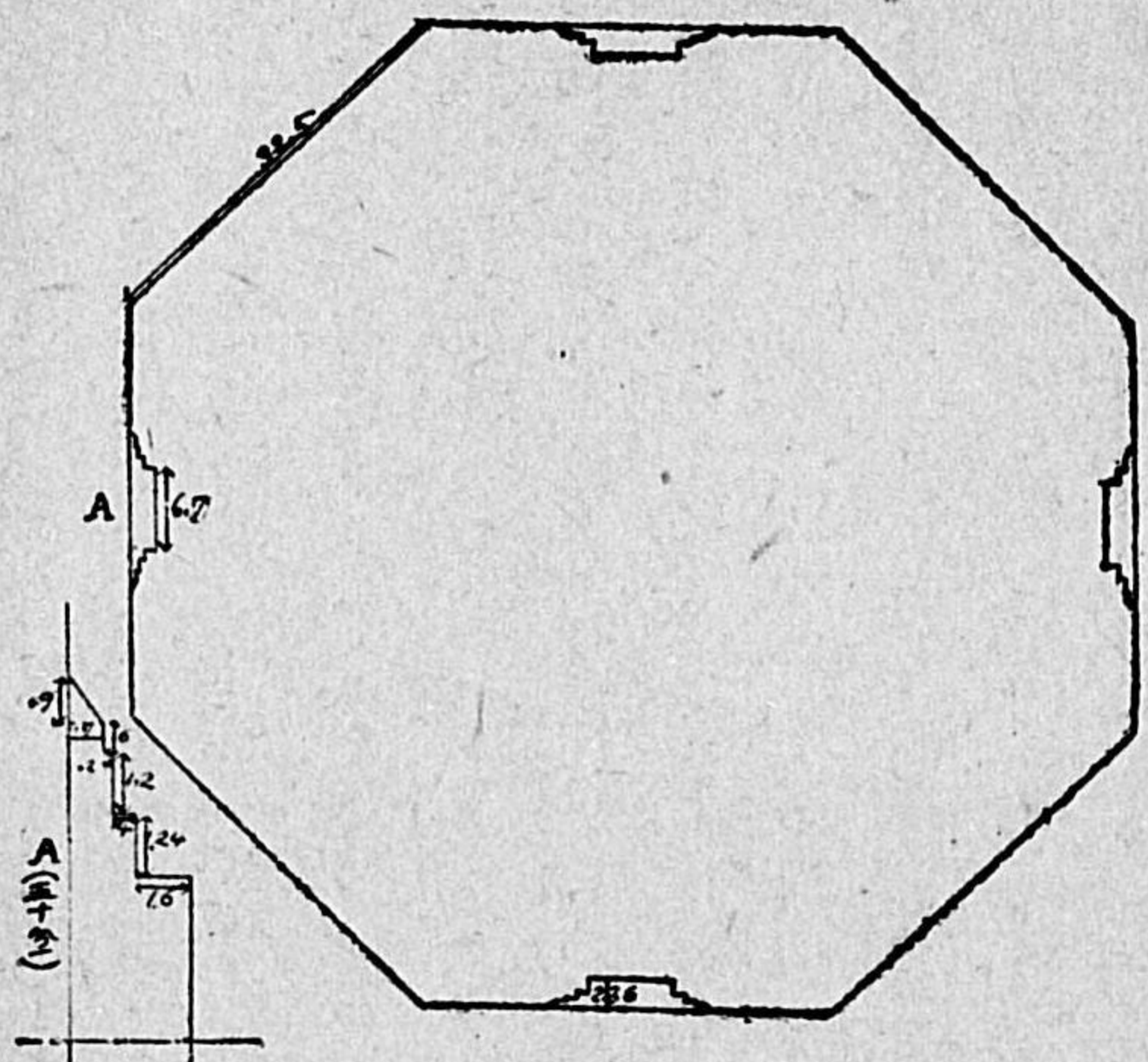
廟内古碑多し、其の尤も古きものは宋の皇祐元年のものなり。周縁にから草模様あり、以て宋代模様の一例を知るべし、其他明代の碑甚だ多し。

城外に一基の塔あり、修徳塔と云ふ。八角五重にして下層一面の大き十一尺七寸高さ約百二十尺あり、五層と

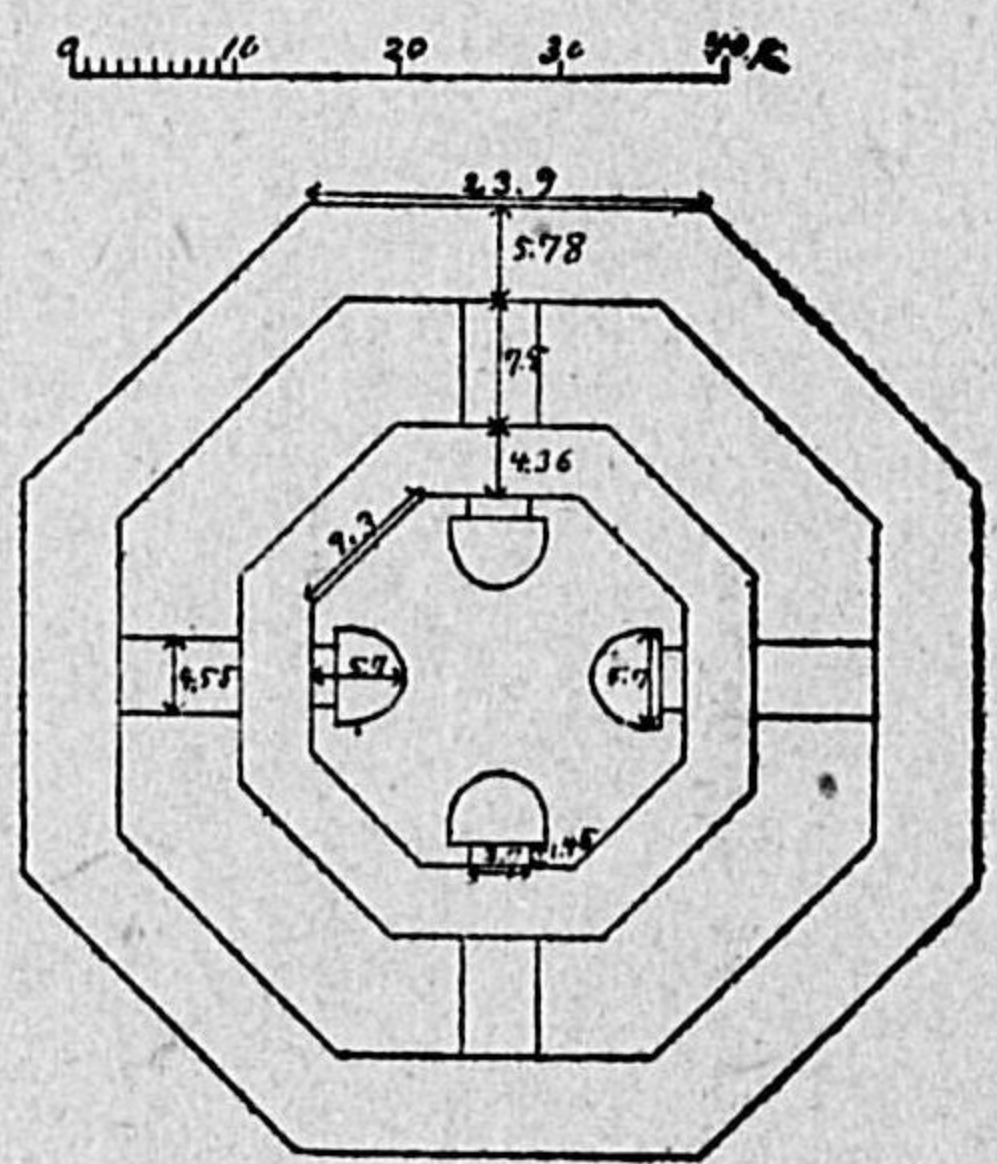
雖も其の第一層特に主要なる部分をなし、二層以上は極めて低し(第六一三圖)。斯くの如き例は五臺山中亦た多くこれを見る。

第十四 定州の塔及び文廟

第五九九圖 定州料敵塔平面圖



北清建築調査報告



三四五

定州は北京の西南四百九十里にあり、古への漢の中山にして、中山靖王の居りしところなり、城内に一高塔あり料敵塔と云ふ。唐の開元元年創立、宋の代に至つて竣成すと稱す。八角十一層、瓶を以て造る。其

の平面は第五九九圖に示すが如く、其の形状は第六一三圖に就いて見るが如く、毎層屋蓋を加へず、單に剝形に由りて深き軒を出し、其の大體の輪廓は印度の Sikaṇa (天宮) の如く曲線形をなし、上部に於いて急激に縮小す。毎層東西南北の四面に入口を開放し、其の間の四面には窓の意ある羽目を施せり。羽目の文様一々相均しからず、皆幾何學的圖案より成り赤くこれを彩色せり。其の他の部分は皆白堊を以て塗抹せり。

内部には内陣を造り、これを繞りて歩道あり、階に由つて最上層に上るべし。内陣には佛像を安置せり。下層は歩道の上に格天井を作れり。格間には極めて精巧なる幾何學的文様或は花鳥等の薄肉彫を施したり。上層に至れば格天井に代ゆるに穹窿を以てせり。清朝光緒の初め塔の東西隅最上より地に至るまで悉く崩落し、其の内部を露出したり。(第六一四・六一五圖)

内部格天井の下には料拱あり、雄健なる和様の手法に成る。

塔の高さは二十丈と稱するも、これを觀測するに二百三十尺に達するもの如し。

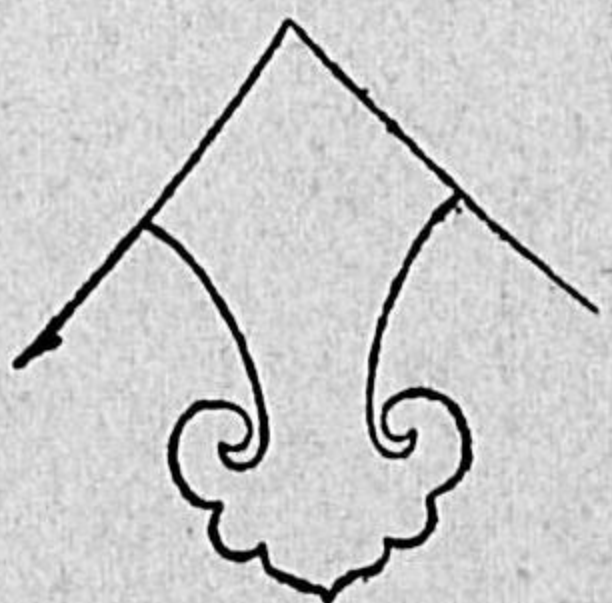
要するに、此の塔は宋代の形式を存するものと認むべきが如し。

文廟は亦た定州に於ける重要な建築なり。大成殿は五間三面、單層切妻なり。其の内部の梁は樹木の自然の形のまゝにして、ほと圓形の断面を有し、其の「桁」一貫「柱」と接合すべき部分のみ直角形に造れり。これ故に「袖切」自ら生ずるなり。其の「懸魚」は第六〇〇圖の如し。我が邦の三花懸魚に對して五花懸魚と名づくべきか、大成門には第六〇二圖に示すが如き「懸魚」あり。其の「桁隠し」は實際に桁の末端を蔽ふべき意匠に成れり。

第六〇〇圖



第六〇一圖

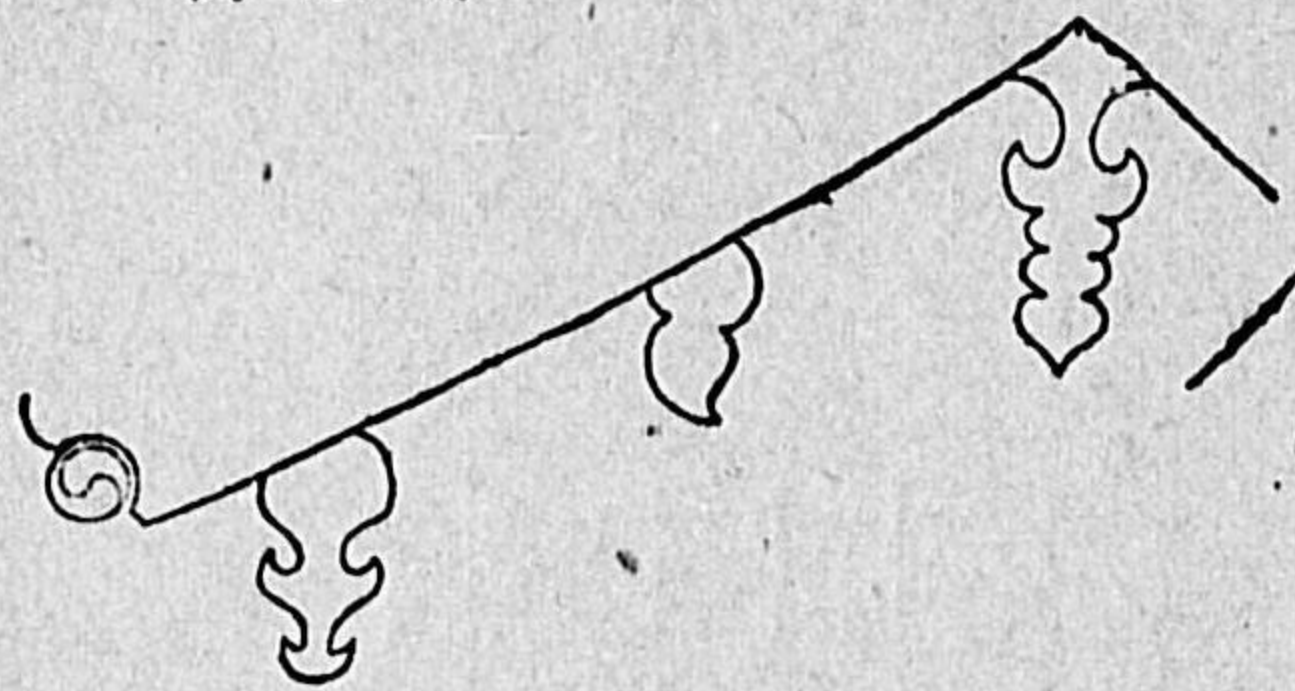


り。奎星閣は三層にして正方形の平面を有し、屋は入母屋なり。其の懸魚は第六〇一圖に示すが如く、全然我が邦に於けるものと同一の形式をなせり。廟内亦た古碑多し、就中元の大徳十一年のものをして最古とすべし。

第十五 結 尾

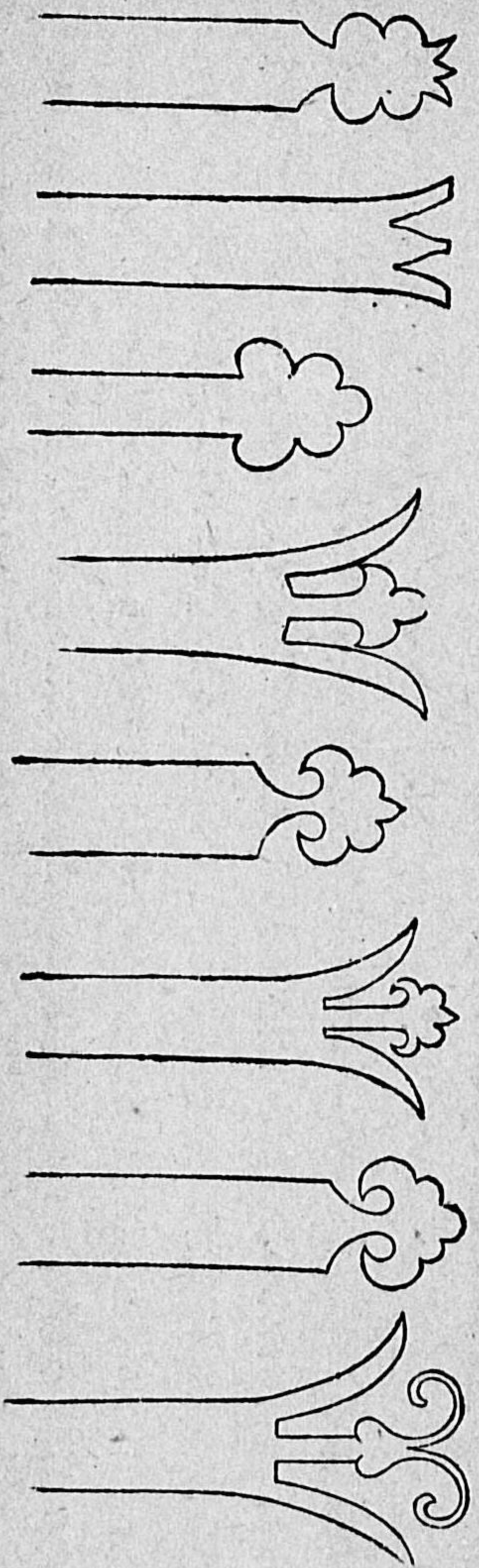
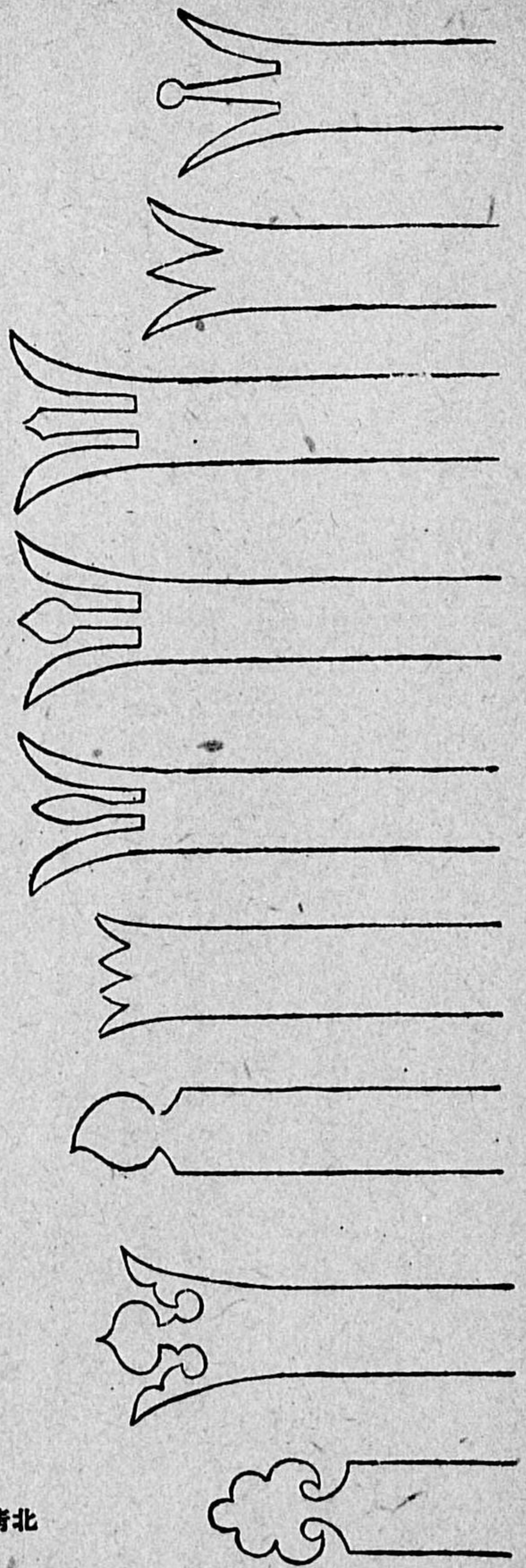
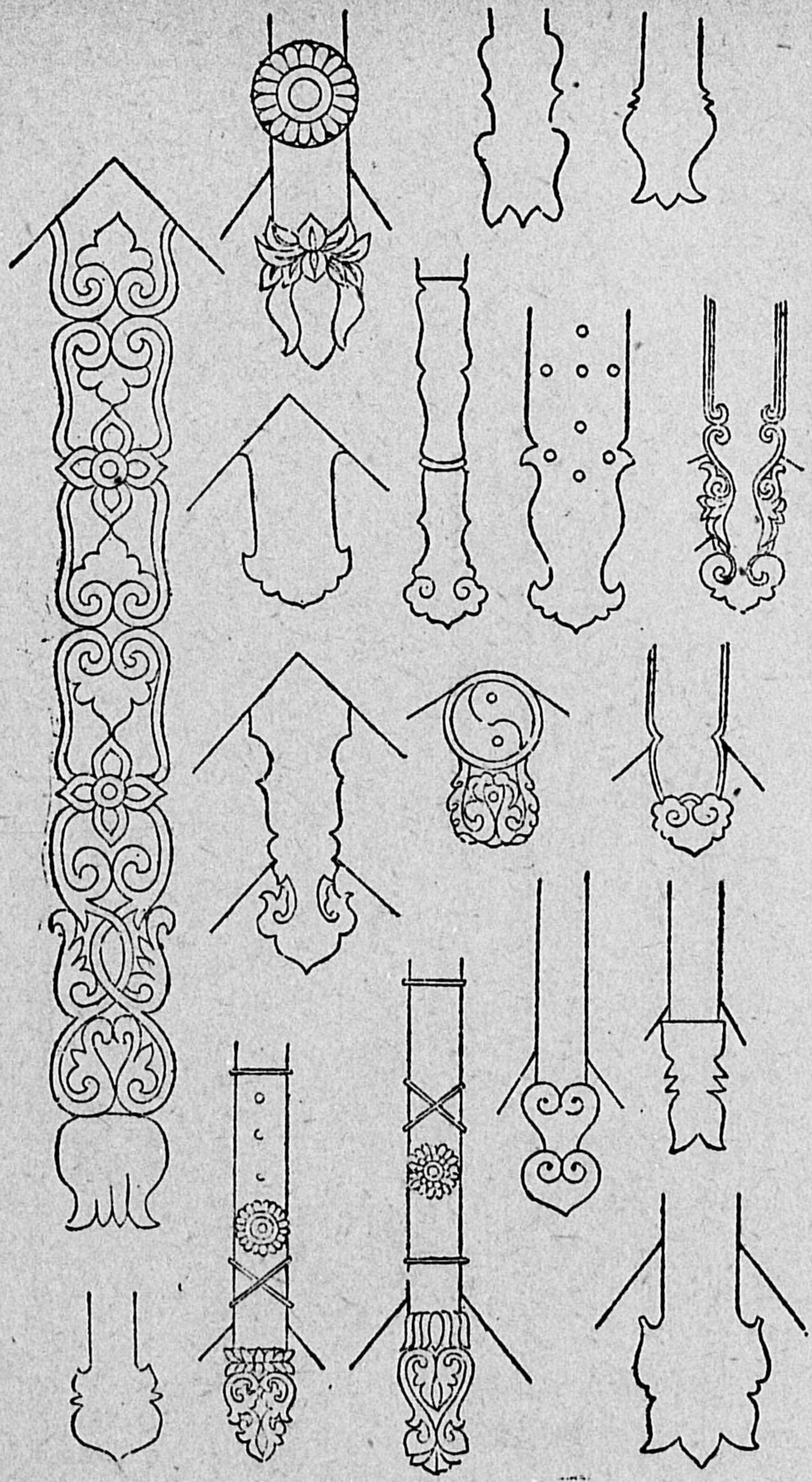
以上は予が山西省旅行中視察するところの一部の記載なり。予は北京を發して西北に向ふや、建築の形式が漸次に變化するを認めたり。而して其の變化は大同附近に至りて其の極に達したり。大同より五臺山を経て北京に歸るや、其の變化は再び逆行し、漸次に復舊して終に北京に到れるを認めたり。これ予が興味を感じたる事實なり。變化とは何ぞや、曰く木造建築の漸次に多きを加ふるなり、其の手法漸次に我が日本建築に近づくなり、漸次に古代建築の遺物を増すなり。例へば北京に於ては吾人一も「懸魚」を見ることなし。八達嶺を越えて始めて「懸魚」に類似のものを見、大同附近に至つて終に完全なる「懸魚」を見る。「拳鼻」然り、「臺股」

第六〇六圖



然り、「繪様」然り、料拱然り、建築全體のプロポーション亦た然り、而して雲岡石佛寺に於いては、終に我

第六〇三圖 北清地方建築に現はれたる懸魚の種類



圖四〇六第
類種の雙八るたれは現に築建方地清北

が法隆寺の影を認むるに至れり。予は更に進んで朔平に至り、歸化城に至り、一方陝西の北邊に入れば必ずや亦た意外の建築に逢ふべきを想像せざるを得ざるに至れり。蓋し大同の地は夙に胡人の居住となり、後魏の拓跋氏は築いて都城となし、遼金はこれを以て西京とせり、魏、遼、金等全盛の時代に在つては大同附近は必ず繁榮の地なりしならん。況んや漢人胡人を逐ふの際に於いても、大同は常に北狄防衛の衝に當り、尤も重要な位置に在りしなり。大同附近に古代の遺物を見る、亦た偶然に非らざるなり。予はこれ故に北清建築研究の甚だ重要なを認め、且つ其の最も趣味に富むを信するなり。

終に臨んで予は此所に「懸魚」と「八雙」との數例を示すべし。第六〇三圖・第六〇四圖は即ちこれなり。凡そ北清地方木造建築に於ける懸魚は、其の種類無數なり、否建築各字に於いて一々相異なるなり。これを我が邦の「懸魚」の種類を限り、若し新意匠を以て別種のものを作るときは目して邪道と云ひ、法規に反すと云ふが如きにして果して如何の感あるか。「八雙」のこと亦た然り。吾人は今區々たる「懸魚」「八雙」に就いてこれを辯ずるにあらず。否、建築細部の手法に就いてのみこれを云ふにあらず、各國各種の建築の全體に就いてこれを謂はんと欲するものなり。

(明治三十五年七月、建築雜誌第百八十九號所載)

北清建築調査報告終

滿洲の佛寺建築

滿洲の佛寺建築

緒言

明治三十八年の秋日露戰役將に終局を告げんとし、皇軍奉天に據りて遠く昌圖の邊に戰線を布きし頃、予は帝國大學の命を奉じて滿洲に入り、奉天に於ける宮城建築の調査に従事せり。而して予は餘暇を竊んで北は開原を越えて馬千臺邊門に到り、東は永陵を過ぎて興京老城を訪ひ、其の間各種の建築物を通觀したりき。然れども予の主眼とするところは奉天の宮城及び陵墓の研究にありしを以て、其の他の建築物に對しては自ら充分なる調査を遂ぐる能はざるものあり、茲に記述するところの滿洲の佛寺建築の如きは素より頗る不完全なるものたるを免れざるを知る。予は他日再遊の機を得て充分なる研究を遂げ、以て今日の遺漏と誤謬とを訂正せむことを期すものなり。

本篇に載せたる圖は概ね予が急慌の際に於ける觀測寫生にして、實測を遂げたるものは極めて稀なり。従つて其の誤測誤寫も亦少からざるべし。沉んや高塔の如きは高さ二百尺に達するものあり、其の相輪の細部の如きは強度の望遠鏡に由るも猶ほ明瞭に知るべからざるものあり、斯くの如きは寫眞に由つて其の大體の輪廓を知るべ

からしめ、細部は予の視力の及ぶ範圍に於いてこれを精寫せり。
 滿洲に於ける建築の種類は佛寺の外、道觀、廟祠、回教寺院(清真寺)、宮殿、陵墓、城堡、住家、會館等あり。
 これ等の建築の性質は互に相關聯するところ甚大なり。故に滿洲建築の一般の性質を説かんと欲せば、須らく各種の建築を綜合し、これを比較研究して其の異同を判別せざるべからず。然れども斯くの如きは事態頗る重大にして、尙ほ幾多の精細なる調査を遂ぐるに非ざれば、これを完成するに由なきを如何せん。予は茲に單に滿洲に於いて予の視察せる佛寺建築に就いて其の重要な實例を擧げ、これが建築學的記述を試みて足れりとせむ。
 予が滿洲行は當時東京帝國大學工科大學講師たりし工學士佐野利器、同大熊喜邦、同大江新太郎の三氏と共にせり。本篇所載の寫真大半は大熊工學博士の撮影にかゝる。裝飾文様の圖は一部は大江工學士の寫生より、建築實測圖の一部は佐野工學博士の手に成れるものより、共に諸氏の快諾を得てこれを轉載せり。

第一章 各地方に於ける佛寺の記載

予は先づ予の旅行順路に従ひ、各地方に於いて予の訪問せる重要な佛寺建築の記述を試むべし。

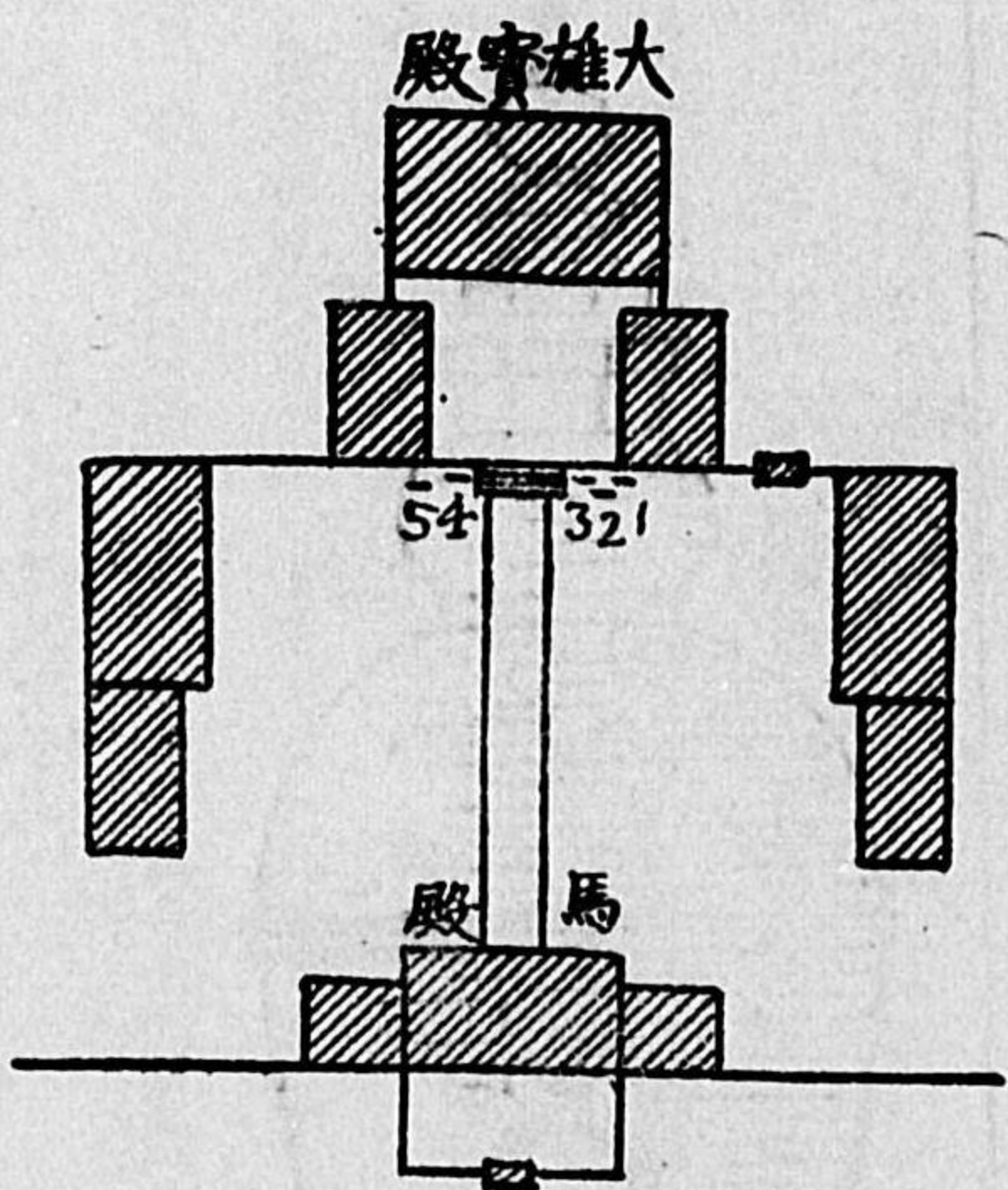
其の一 熊岳城

熊岳城は大連を距る北方鐵路百十里半に在り。城の大きき方約二百四十間、北に綏徳門を開き、南に迎薰門を開けり。城内の佛寺中やゝ觀るべきものを道林寺とす。

(二) 道林寺

寺の沿革は不詳、傳へて唐代の創立と稱す。全遼志古蹟の部に
 道林寺 蓋州城南 熊岳堡

とあるを以て明代已に古蹟に屬せる古刹なるを知るべし。境内成化十七年(西曆一四八二)、嘉靖九年(西曆一五



碑、年號
 1 順治丁亥
 2 道光三十年
 3 嘉靖九年
 4 成化十七年
 5 乾隆五十二年

三〇) 順治四年(西曆一六四四)等の重修の碑あるを以て其の創立の遠きを知るべし。現今の建築は道光三年(西曆一八五〇)の重修に成れるものの如く、其の平面は第六一六圖に示すが如く頗る破格のものに屬し、建築上特に擧ぐべきものなし。只だ通例天王殿を置くべき位置に馬殿を置きたるは、廟祠建築の性質を混和せるものとして注目すべき現象なるが如し。

(三) 水雞塔

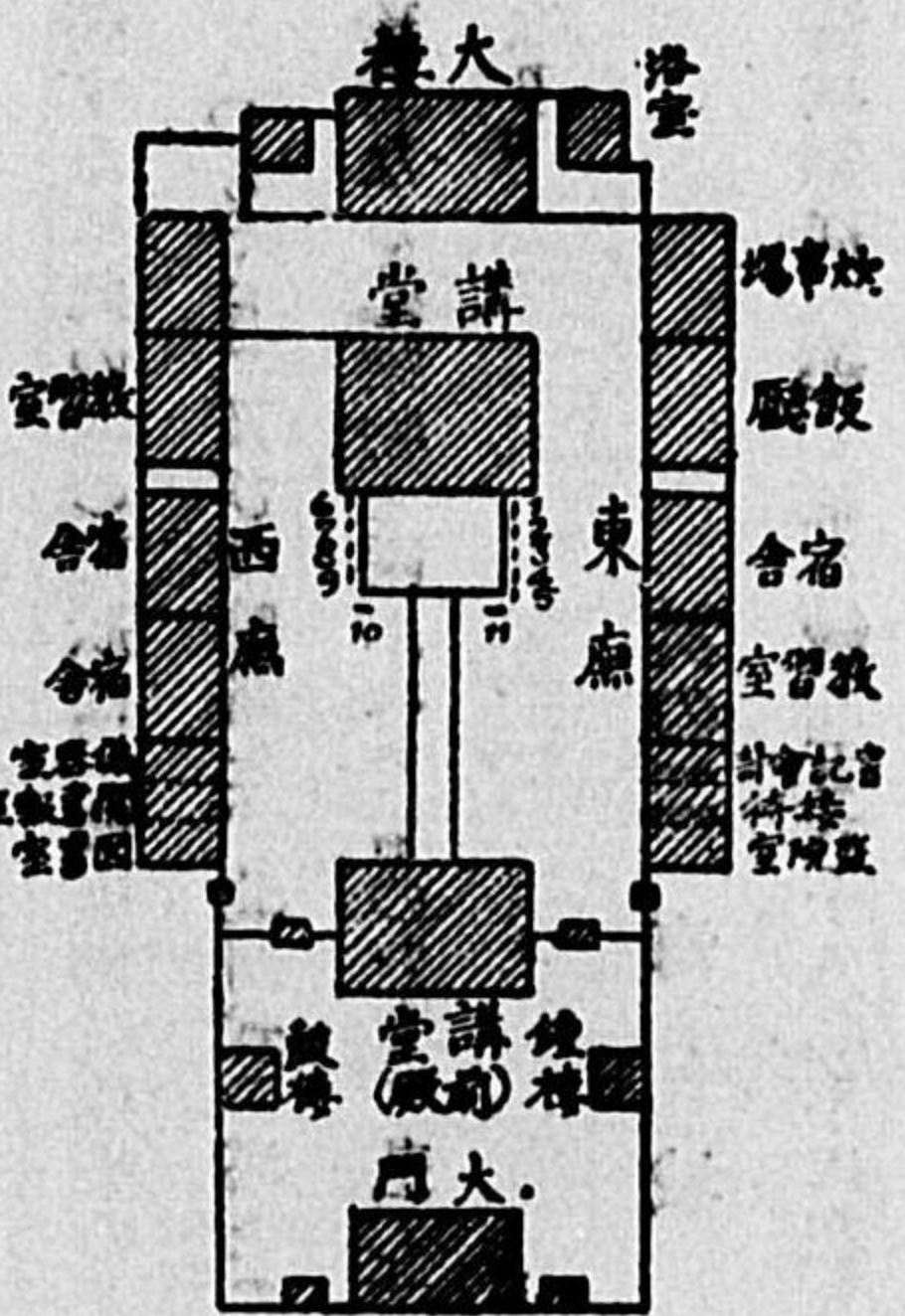
熊岳城外東北約一哩、小丘の頂に一基の塔

第六一六圖 熊岳城道林寺平面圖
 滿洲の佛寺建築

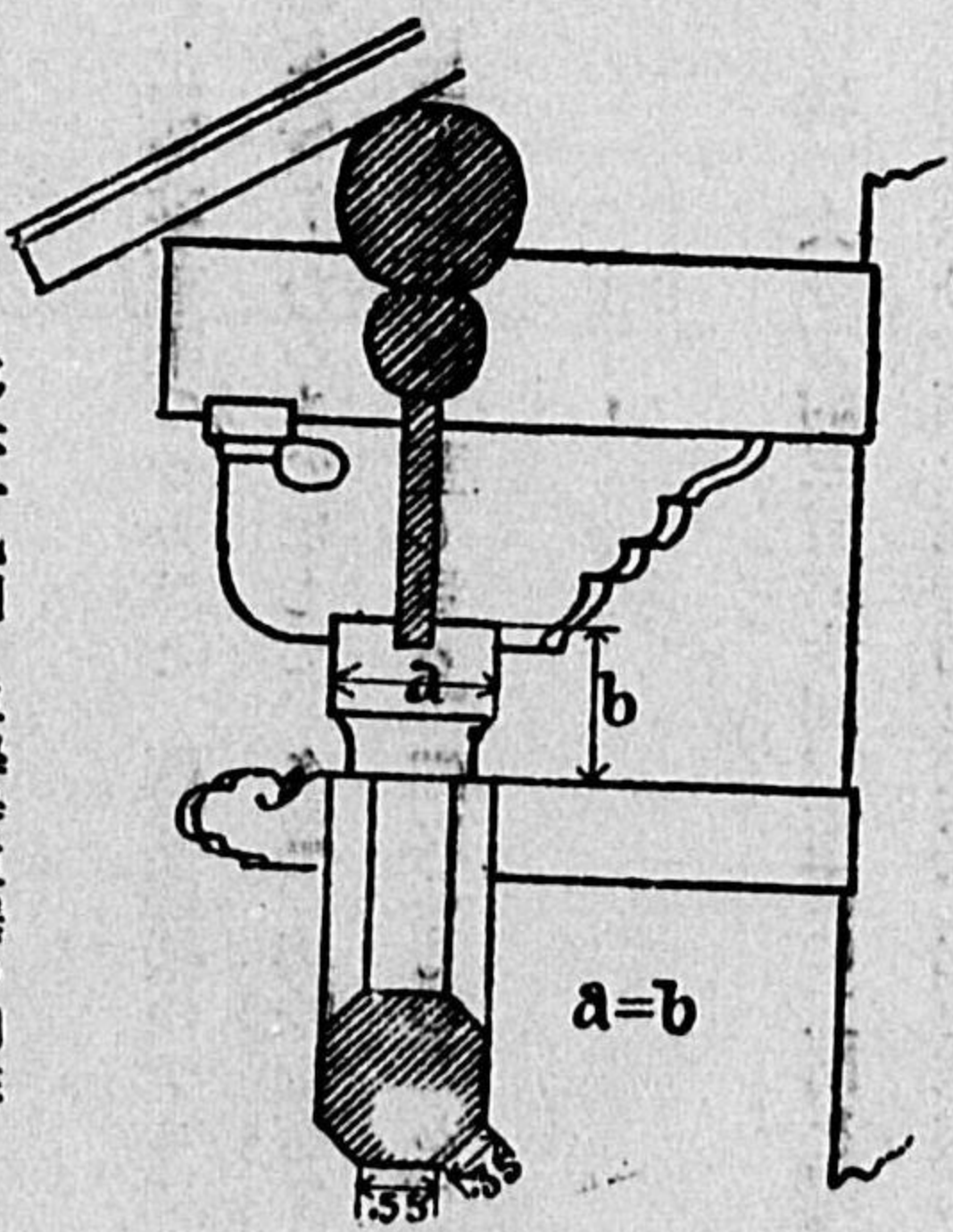
三學寺は傳へて唐代の創立と稱す。全遼志古蹟の部に

三學寺 海州城 西南隅

とあり、明代已に古蹟に屬せり。今は學堂として用ひられ、其の平面は第六一八圖に示すが如く、會つて天王殿及



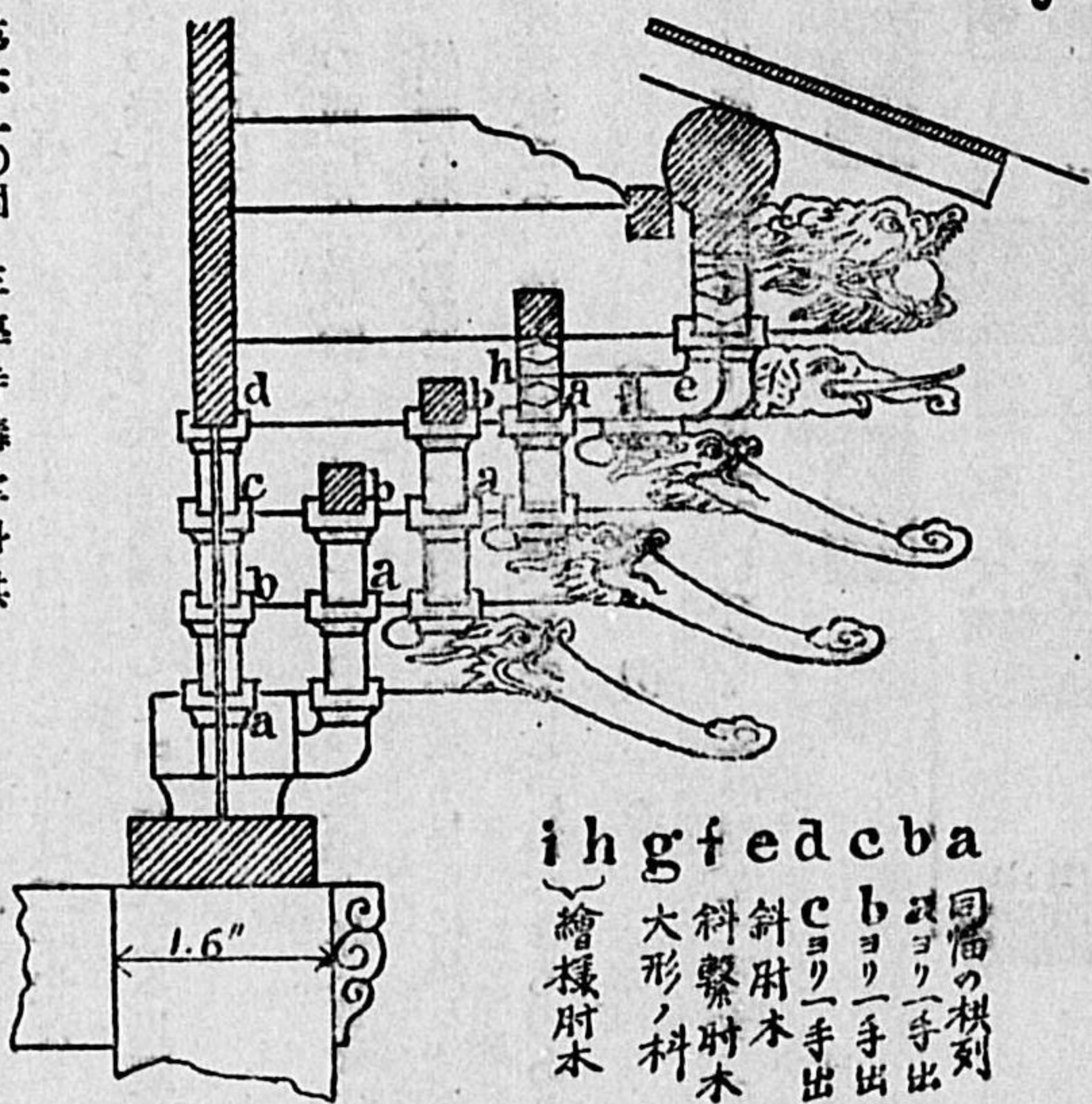
碑年号
 1 宣德十年
 2 崇禎二年
 3 崇禎六年
 4 崇禎六年
 5 崇禎六年
 6 崇禎六年
 7 崇禎六年
 8 崇禎六年
 9 崇禎六年
 10 崇禎六年
 11 崇禎六年
 光緒十年
 光緒十年



第六一九圖 三學寺東廡の側柱

び大殿たりしものは今共に講堂となり、左右の堂宇亦たみな學堂の爲めに用ひられたり。蓋し現今の建築は順治の初年若くは崇徳の末年に重建せられたるもの如し。但し其の兩廡の手法の如きは明かに古式を存するものなるべきが、第六一九圖に示すが如く、其の柱頭の大斗の高さと廣さと全く相等しく、其の柱は石造にして異常な

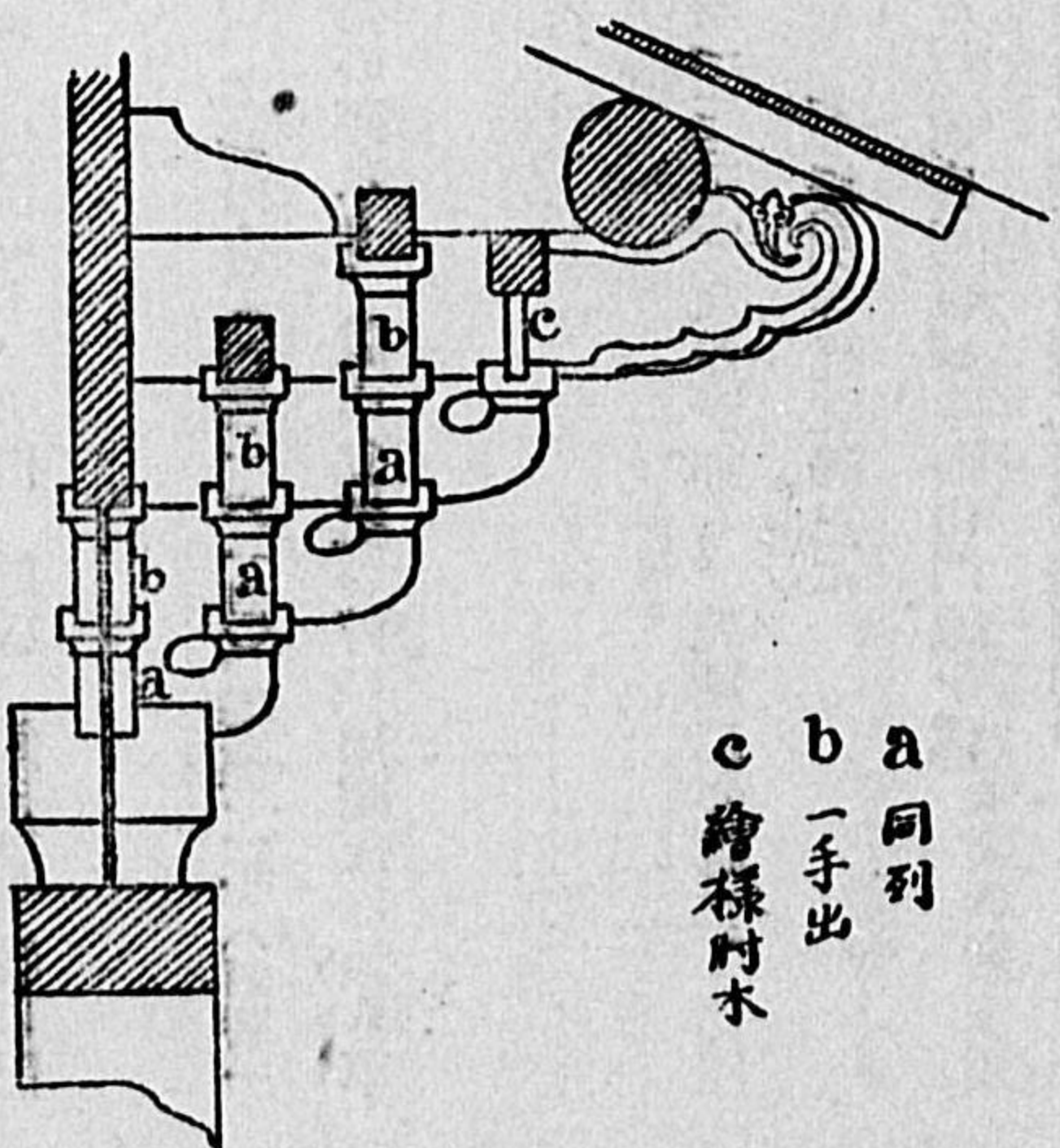
る大面を取り殆ど八角の形をなす。我が邦に於いても奈良朝、若くは平安朝の初期に於いて、較々相似たるものを見る。即ち此の手法が唐代の遺風を傳へたるものと考ふべき理由ある所以なり。第六二〇圖の大講堂の料枋は既に著しく近代の趣味を表はし、尾樞木、拳鼻に複雑なる繪様と彫刻とを施したり。蓋し清初の意匠を傳ふるものなり。



同列の枋列
 a 同列の枋列
 b ヨリ手出
 c ヨリ手出
 d 斜附木
 e 斜附木
 f 斜附木
 g 斜附木
 h 斜附木
 i 繪様肘木
 大形、斜

第六二〇圖 三學寺講堂料枋

滿洲の佛寺建築



a 同列
 b 一手出
 c 繪様肘木

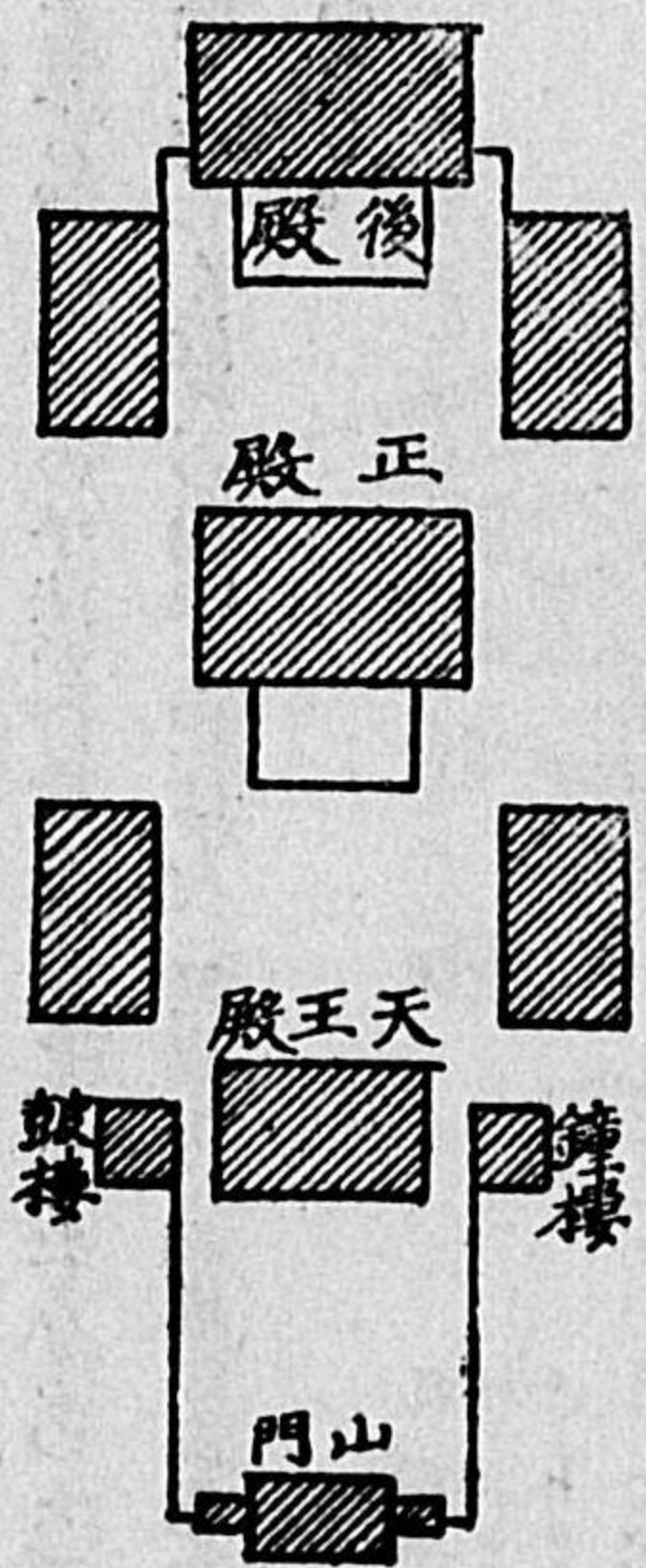
第六二一圖 三學寺前殿

第六二二圖の前殿の料栱の制も亦前者と同一の意匠に成り、たゞ其の程度を異にせり。即ち繪様、尾極木及び拳鼻の彫刻を缺き、彼の四手先なるに對して此は三手先なり。
大講堂の後に大樓あり。五楹重閣にして中に巨大なる毘盧佛の坐像を安置せり。大門、鼓樓、鐘樓以下特に記すべきものなし。

大講堂の前に左右相對して碑の二列あり。宣德十年(西曆一四三五)、萬曆甲寅(西曆一六一四)、崇德二年(西曆一六三七)、崇德六年(西曆一六四一)等のもの最も見るに足る。みな重修の碑なり。就中宣德の碑の周圍なるから草文の優秀奇抜なる、遠く唐代の遺風を認むるを得べきものあり。

(ろ) 接引寺

接引寺は第六二二圖の如き平面を有す。其の創立は乾隆二年(西曆一七三七)なるが如し。乾隆二年歲次丁巳四



第六二二圖 海城接引寺平面圖

月初八日創立の接引寺建立碑記に

正殿五間前廊房後禪堂而山門通于街

大佛三尊左藥師右彌陀而釋迦居其中

とあり、又乾隆十五年の重修接引寺正殿碑記には

接引寺者係平南王之舊第也厥後建爲寺

とあり、乾隆二十八年の増建天王殿、金剛殿、鐘鼓樓

記の碑及び増建接引寺碑記あり。後者の記中

天王殿三楹、

金剛殿三楹、

鐘鼓二樓、屹如山立

の句あり、以て該寺の規模が漸次に擴張完成せるを知るべし。今、金剛殿は山門と通稱し、左右に金剛の像を置く。右は黒色にして哈、左は赤色にして時、共に臺座に倚り金剛杵を持てり。天王殿は元來四天王を安置せしも今や則ちなし。正殿には三尊の像あれども拙劣見るに堪へず。

要するに、建築の形式手法は清朝中期以後に屬するものにして、價值を認むることを得ず。

其三 柘木城

柘木城は海城縣城の東南三十五清里に在り、本漢の望平縣の地なり。遼に至りて柘木と曰ふ。初め東京に隸し後銅州に屬す。金に至りて縣となし澄州に屬せしが元これを廢す。今土堡ありて柘木城と曰ふ。
城の附近に古塔三基あり。金塔、銀塔、鐵塔と曰ふ。

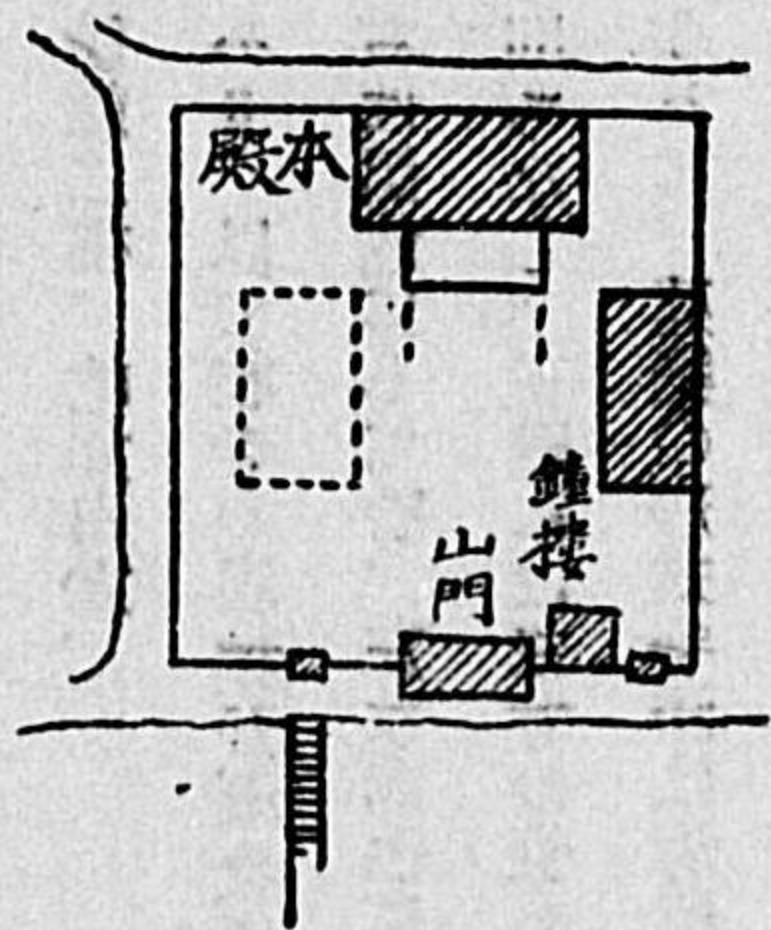
(い) 金塔寺

金塔は城の西北七里に在り、寺を金塔大禪林寺と曰ひ、略して金塔寺と曰ふ。第六二三圖は其の平面圖なり。第六七五圖は其の外觀なり。寺の創立沿革共に詳かならず。全遼志の古蹟部に

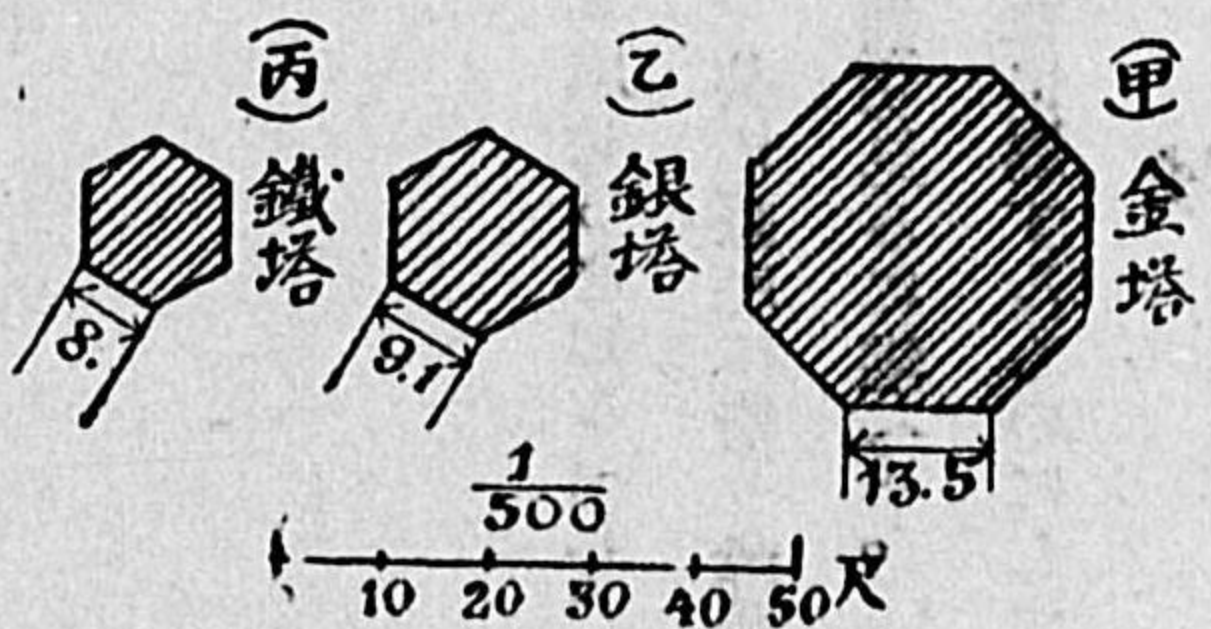
金塔寺

海州城東南二十五里

とあり、明代已に古蹟の部に編入せられたり。其の本殿の前に萬曆三十九年(西曆一六一一)及び同四十一年(西曆一六一三)等の重修の碑あれども創立に關する文字を見ず。塔は本殿の後方急峻なる山腹に立ち、其の平面は第六二四圖の甲に示すが如く、八角にして十三重、一邊の長さ十三尺五寸、遼東七塔の一と稱せられ、其の規模に於いても、其の形式に於いても優に第一流の美塔たり。但し其の上部は今全く破壊し、相輪の形式の如きは全然これを知るに由なし。其の基壇は上下二層より成り、下成壇には美なる狹間を作り、其の間に小像を納る。上成壇の羽目には獅子の如き怪獸の半身を突出したる像を刻成し、八角の稜に立像を作れり。



第六三三圖 橋木城金塔寺平面圖



第六二四圖 橋木城三塔平面圖
塔金(甲) 塔銀(乙) 塔鐵(丙)

壇の羽目には獅子の如き怪獸の半身を突出したる像を刻成し、八角の稜に立像を作れり。
壇の上に蓮瓣あり、其の上に塔身を建つ。塔身の各面中央に龕を作り、其の中に佛の坐像を納れ、兩脇に菩薩の立像あり、皆優秀の製作なり。龕の上部は拱を以て限り、其の上の下の三尊に對して三箇の天盖あり、

更に其の上部に左右天人の飛翔せる形あり。即ち支那に於いて六朝以後唐宋の間に最も普通に見るところの配置なり。

初層の料栱は最も力ある三手先なり。木造の二重垂木概ね腐朽して、軒の曲線の美今や已に追想すべからず。第二層にも多くの小佛像并立せり。而して第二層以上は料栱を用ひず、單に磚を積み出して軒を作ること常例の如し。

要するに此の塔は此の種の塔中最古式を存するものの如し。其の年代に就いては未だ的確なる徵證を得ざるも、其の彫像の手法が確實なる唐式を示すを以てこれを觀れば、或は渤海時代の遺物に非ざるなき乎。吾人が遼金時代のものとして認めたる直隸省涿州の塔、盛京省開原の塔等に比して、更にこれよりも古きが如きを認識すべきなり。

(ろ) 鐵塔寺

鐵塔は橋木城内にあり、傳詳かならず。其の外観は第六七六圖の如く、其の平面は六角七重にして基壇の一邊八尺あり(第六二四圖丙)。下成壇の羽目に格狭間ありしも今全く破壊せり。塔身各面中央に一軀の立像あり、其の上の天盖あり、而して脇侍と龕と天人と共にこれを欠き、製作また甚だ劣悪なり、想ふに清初の重修か。相輪崩れて考ふるに宜しからず。

(は) 銀塔寺

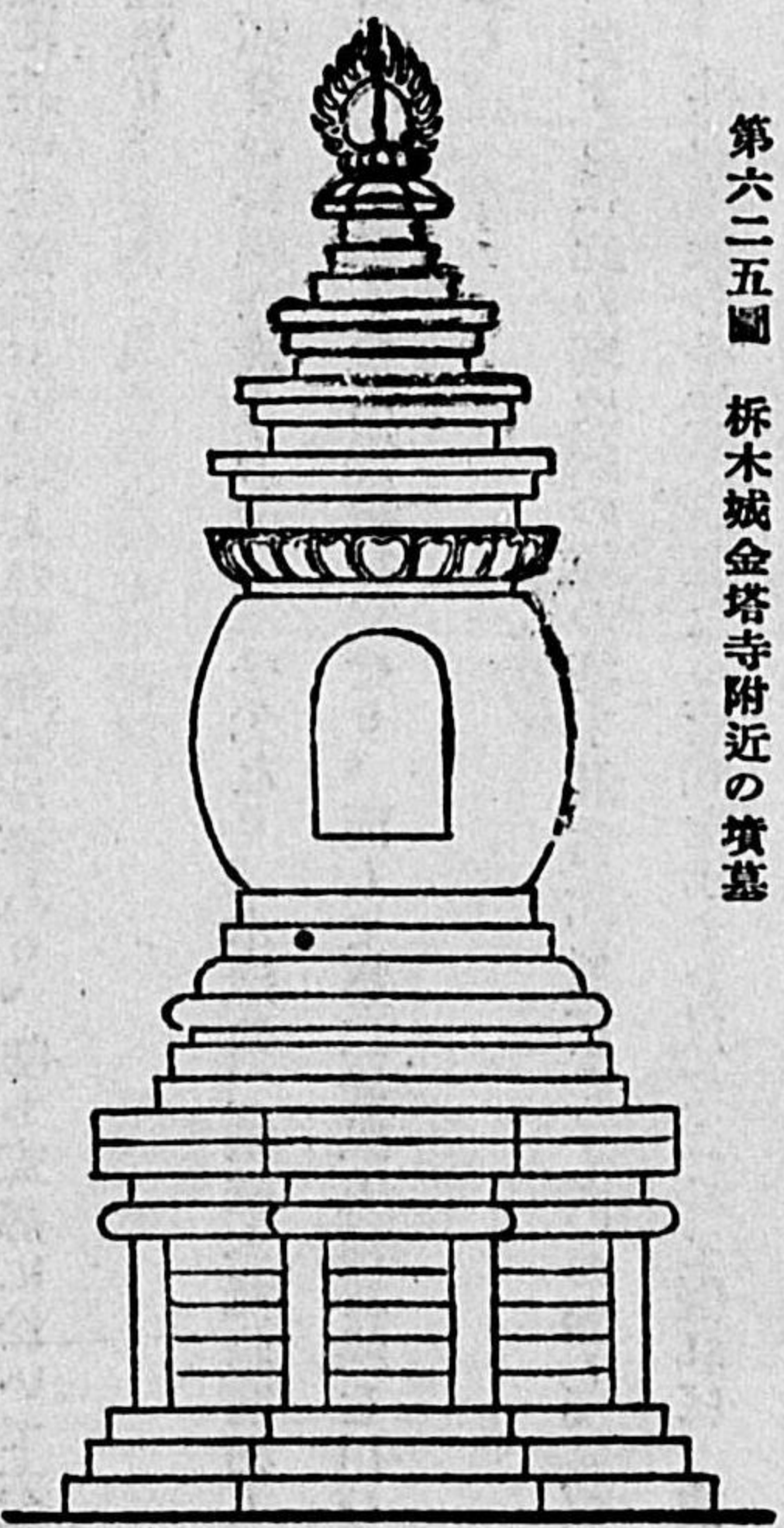
滿洲の佛寺建築

銀塔寺は柞木城の東北十五清里に在り。創立詳かならず。傳へて唐の貞觀年中に荆まると云ふ。塔は(第六七七)六角九重にして基の一面九尺一寸あり(第六二四圖乙)。

基壇には羽目に何等の意匠を見ず、或は破滅に歸したるか。壇の上に勾欄の意ある一帯を上下に二分し、下半部には已崩しの格を入れ、上半部には高彫の花文様を彫成せり。其の上に普通の場合に於けるが如く蓮瓣を敷き塔身を盛る。六面中央の龕中に坐像を納れ、左右に脇侍の立像を置き、三箇の天蓋一對の天人等常例の如し。

軒の料栱の制は、兩柱の間に只一具の料栱を入れ二手先を組織せり。二層以上には料栱なきこと常例の如し。相輪は僅に其の一部を窺ひ得るに過ぎず。即ち最下に露盤あり、其の上に二重の請花あり、其の上に壺狀の寶瓶

第六二五圖 柞木城金塔寺附近の墳墓



あり、これより以下今全く缺損したるも、恐らくは彼の遼陽の大塔の如く、數箇の球を幹に貫きたるが如き手法に成りしもの如し。

第六二五圖は金塔寺の附近に於ける僧侶の墳墓の一例なり。巧に變形せる喇嘛塔にして、みな磚を以て築き、各部の剖形は磚の厚さを利用して作りたる意匠の活動見る

に足る。蓋し近代の製作なるべし。

其の四 遼 陽 州

遼陽州は大連を距る鐵路二百六哩二にありて太子河の西南岸に位し、嘗つて遼金の東京たり。河を距て、東に新城あり、東北に東京陵あり。

廣 祐 寺

遼陽州城の西門外に一基の高塔あり、塔は廣祐寺に屬す。俗に塔を白塔と呼び寺を白塔寺と稱す(第六七八圖)。盛京通志に曰く、

廣祐寺在東西門外有白塔俗呼曰白塔寺天聰九年奉勅重修內有碑記謂此寺創於漢時唐尉遲恭重修蓋古刹也內有自來佛一尊、云々

又、盛京典制備考には

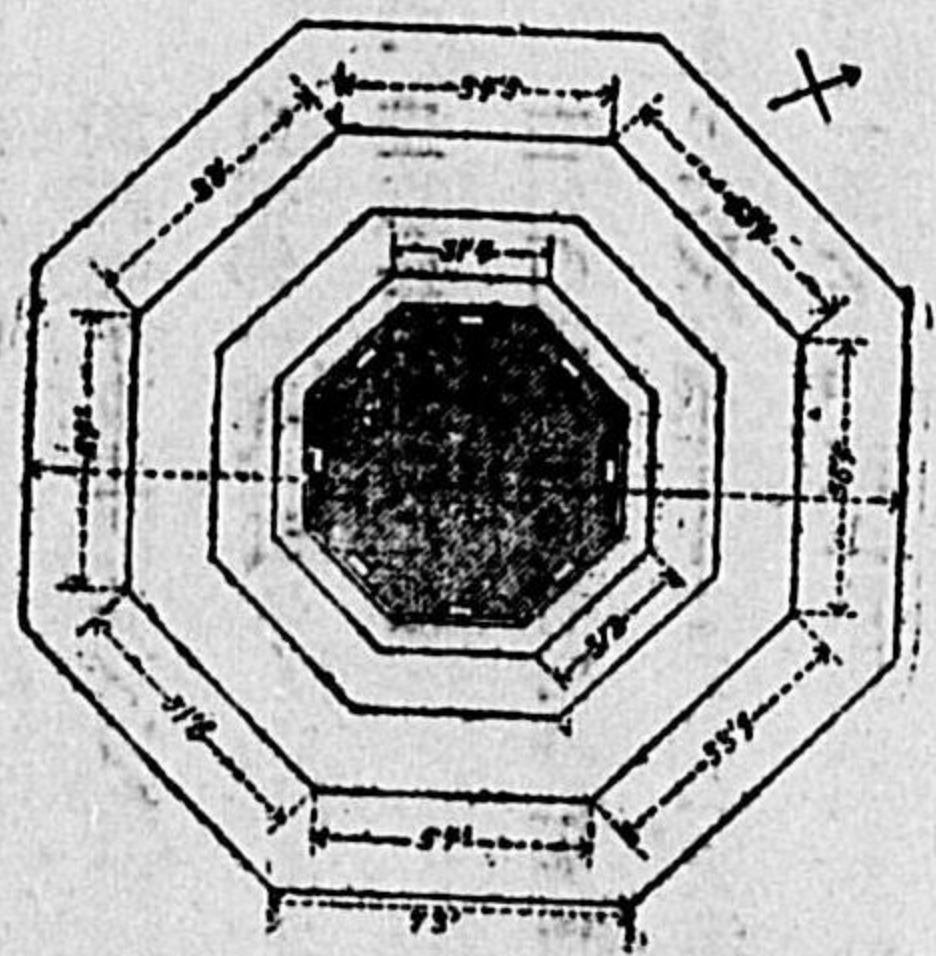
在州西門外三里有白塔俗呼白塔寺前明建本朝天聰九年奉旨修康熙二十一年四月駕幸寺中賜袈裟、云々

とありて兩者相符合せず、一は漢の創建とし一は明の建立となす。而して天聰九年(西曆一六三五)の重修は兩者とも一致せり。想ふに漢代の創建と云ふは虛妄の傳説なるべく、尉遲重修の説も俄かに信すべからず。然れども全遼志古蹟部には

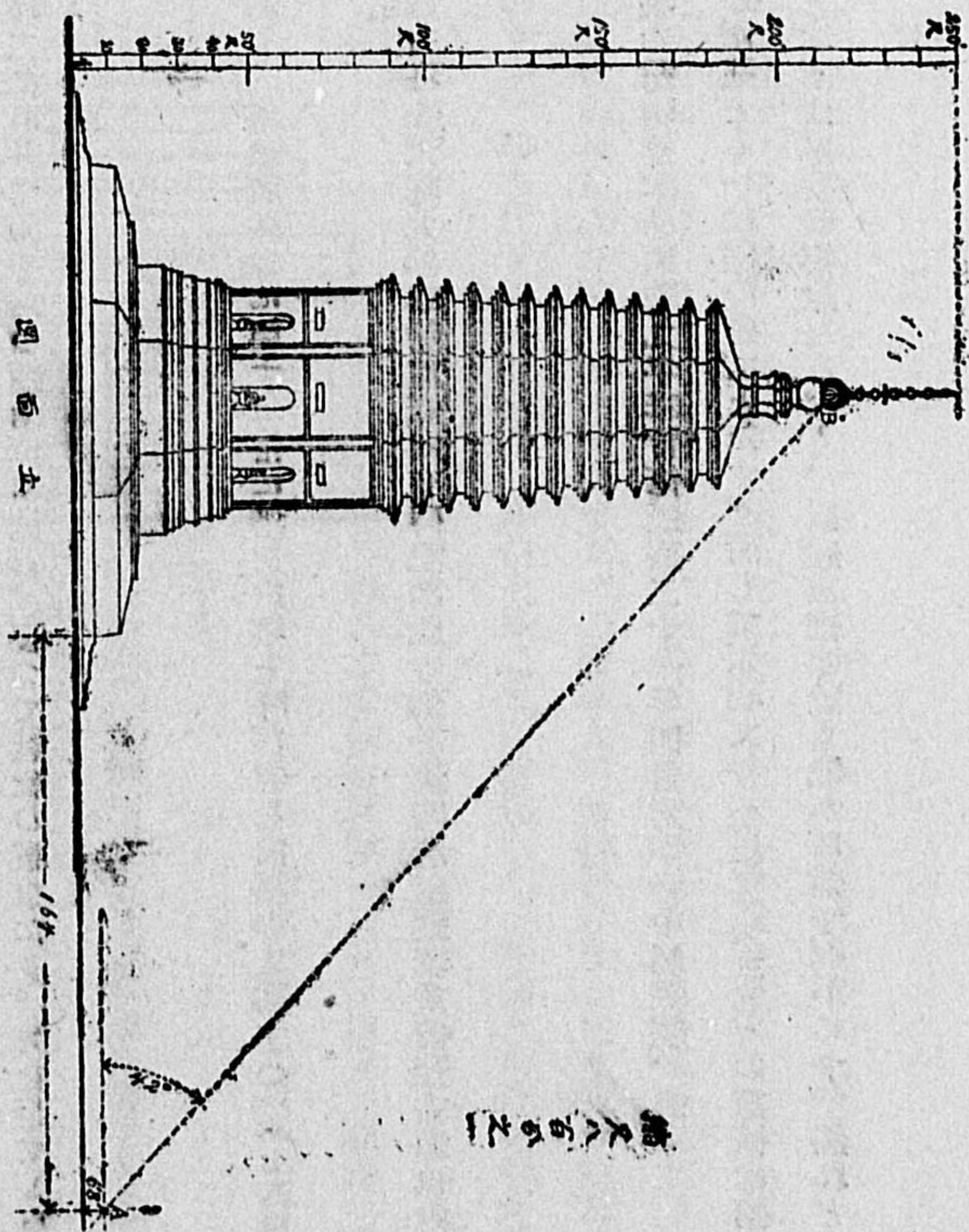
廣 祐 寺

遼陽武靖門外

滿洲の佛寺建築



(■面平)



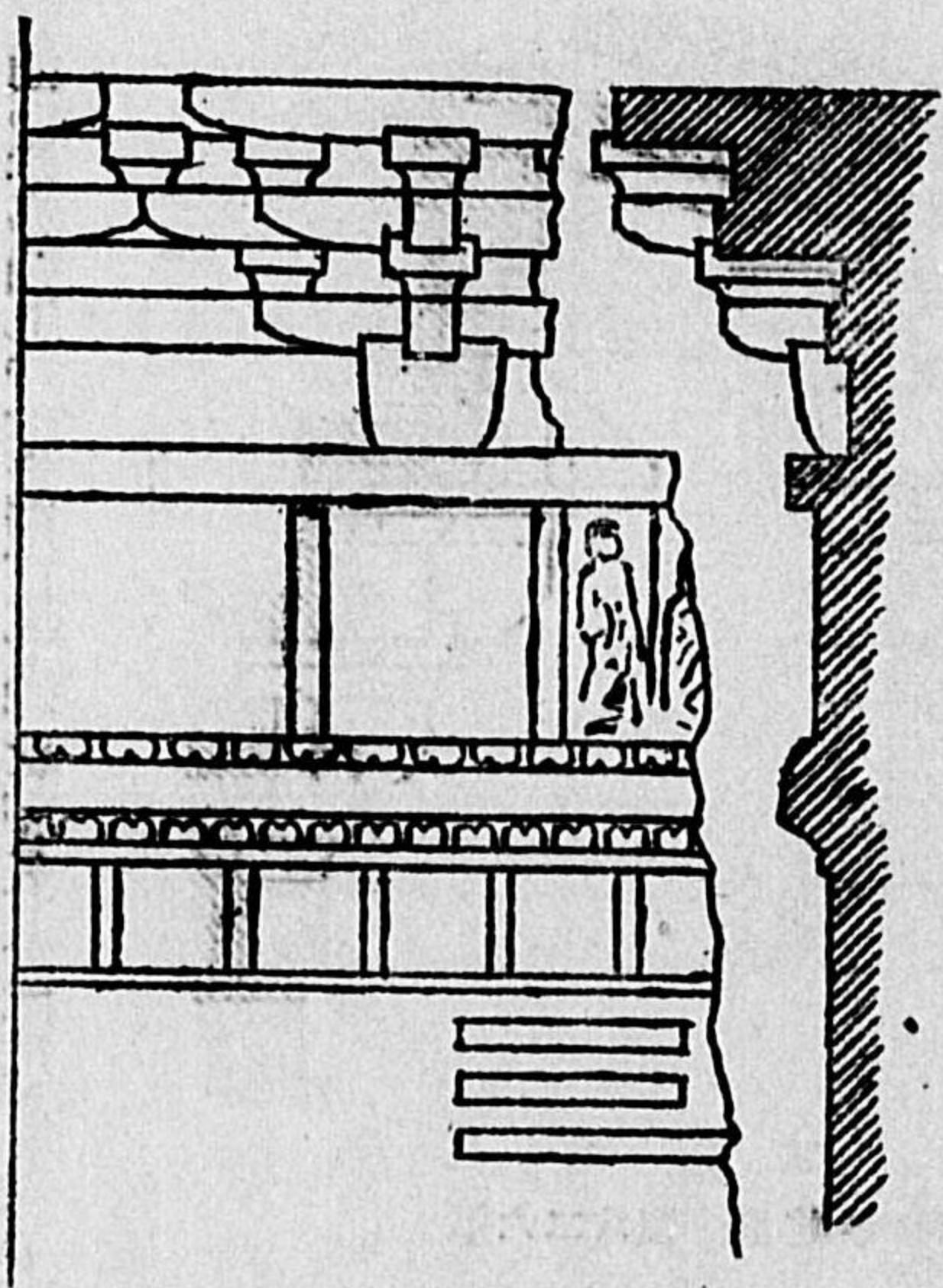
塔の寺跡 廣陽 遼 圖六二六第

(■面立)

とあり、明代既に古蹟として録せられたるを以て、其の創立の遼遠なるべきを想ふべし。予は廣祐寺伽藍の創立は遼金の間にありとし、其の規模の大成せるは明代の修築に由るものにして、白塔現在の形式は天聰の修造に成るものと想像するものなり。

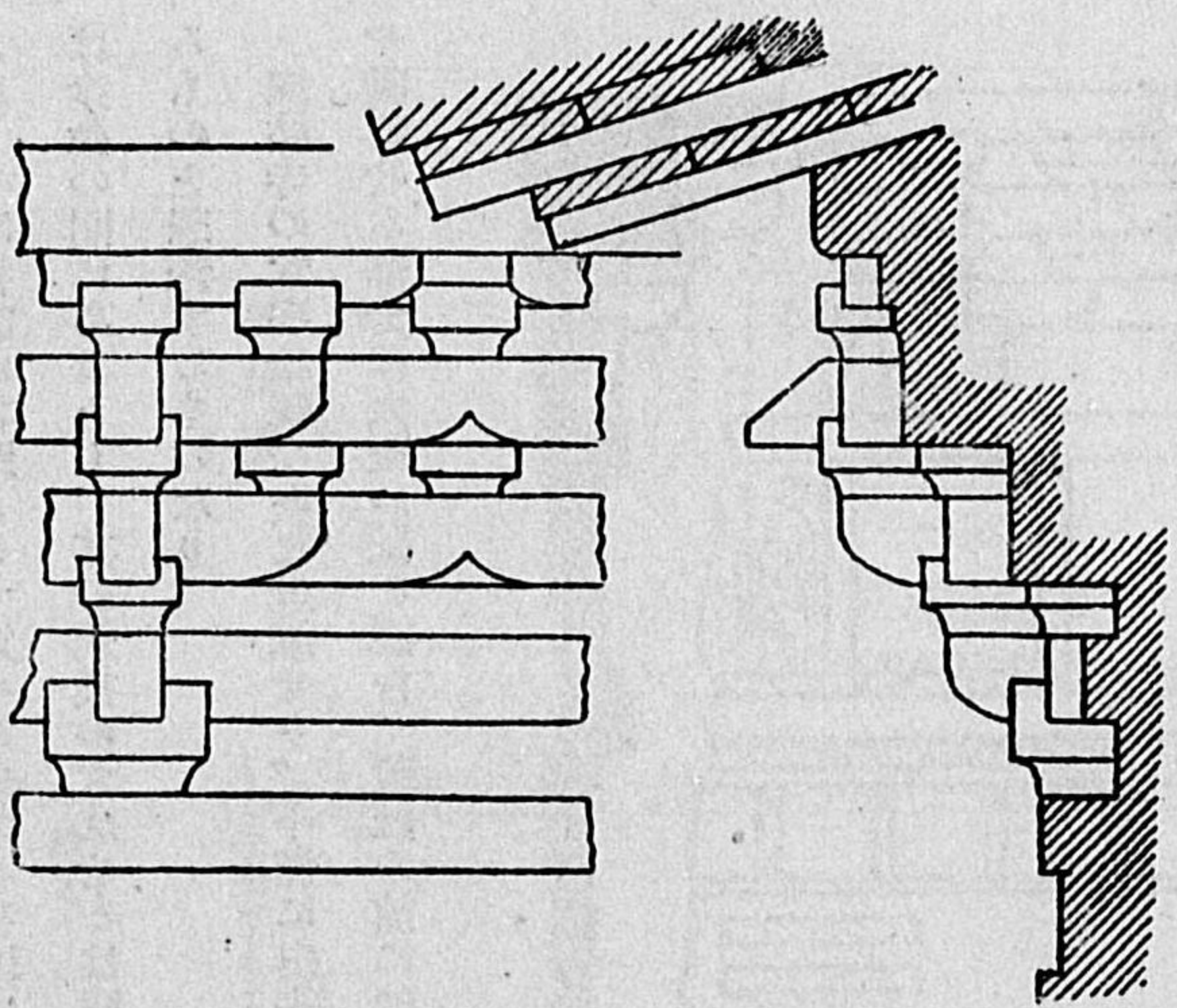
廣祐寺の堂宇は現今みな廢滅せり。今僅に白塔一基を存するのみ、塔の南に一字の堂趾あり、塔の北方地勢や隆起せる部分に大殿の趾を認む。殿趾の前に碑あり、表面風化して一字も銘文を讀むべからざるも、其の周縁に於ける花文は明瞭に其の明末に屬すべきことを自白せり。通志に所謂漢時の創建を記せるも或は此の碑に非ざるなき乎。塔の南方基礎の下に今觀世音及び釋迦の銅像を放棄し在り、其の製作を見るに亦均しく明末清初の頃の製作なるが如し。予はこれ等の點より綜合して、廣祐寺伽藍の天聰九年に殆ど根本的重修を経たることを想像し、白塔も亦此の時を以て舊來の面目を改め、兩來數回の修繕を経たることを信ぜんと欲するなり。

圖七二六第 廣祐寺塔下成壇



滿洲の佛寺建築

塔は八角十三層にし、高き基壇の上に建てられ皆磚を以て造る。中實にして内部に空室を設けざること猶他の普通の塔の如し。下成壇は一邊の長さ七十三尺あり、上成壇は更に數層の帯に區分せらる。其の中帯には八面に

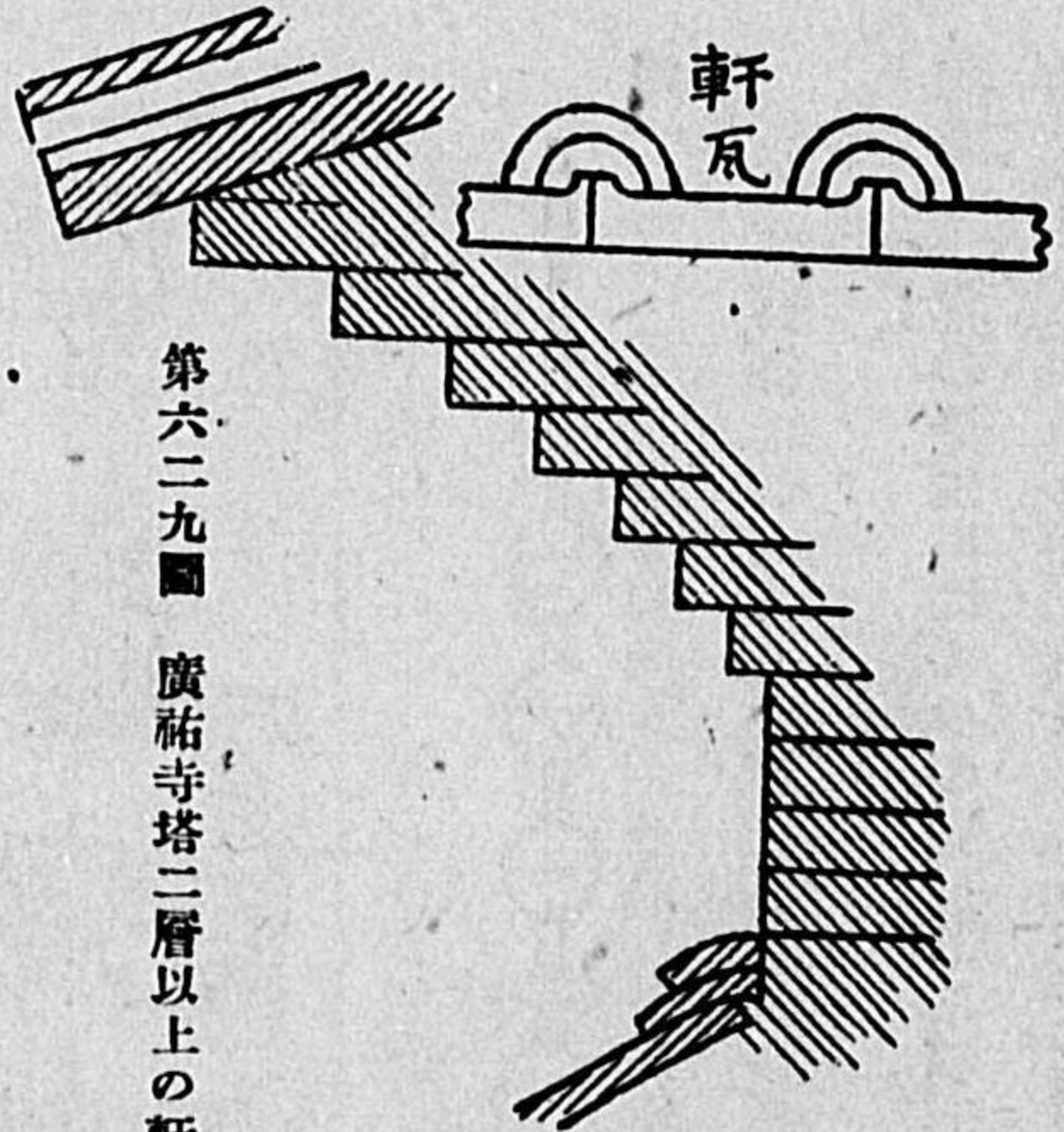


第六二八圖 廣祐寺塔初層軒

八卦の象を嵌し、其の上に各面五箇所には小龕子の列を穿ちて中に佛像を納れ、龕の間に當りて二手先の料枿を出し、其の上に蓮座を設く(第六二七圖)。蓮座の上に塔身あり、其の平面圖は第六二六圖に示すが如く、八角の一面二十六尺、各稜に圓柱を建て、中央に深き龕を作りほゞ半圓形の枿を架し、内に佛の坐像を納る。其の左右に脇侍の立像あり、其の上部の天蓋、天人等の配置全く祈木城の金塔寺に均し。但し彼は莊重古雅の風を存し、此は頗る輕佻卑俗の風を有せり。軒には二手先の料枿三具を納れたり。料枿は頗る雄健にして力あり、軒は二重なるも、垂木の木材なるが爲めに深く挺出せしむるに宜しからず、隅木も亦木材にして其の末端に風鐸を懸けたり。屋蓋は瓦を以て本

葺を施せり(第六二八圖)。

第二層以上は外壁面甚だしく、何等の手法をも施すに餘地なきが如し。軒は料枿を用ゆることなく、單に磚を積み出せり。其の磚の末端を連結せる線は一種の美妙なる曲線を成すことを觀測すべし(第六二九圖)。



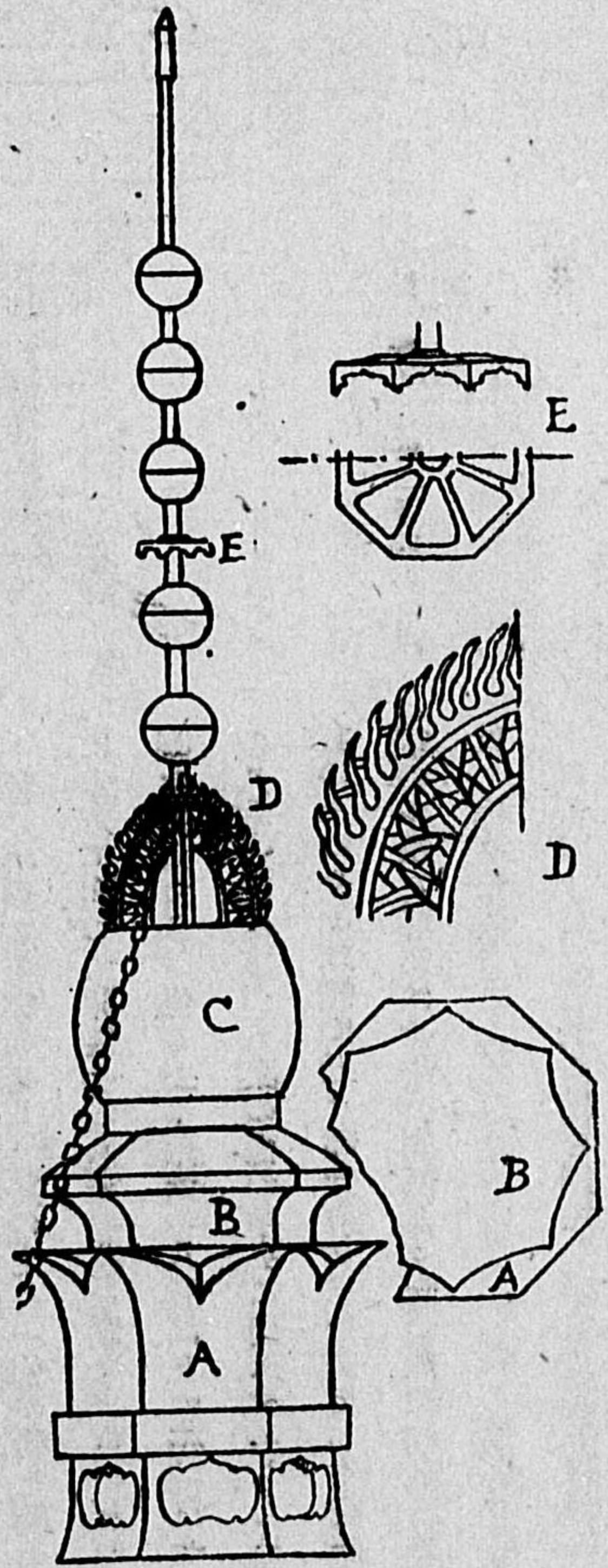
第六二九圖 廣祐寺塔二層以上の軒

相輪の形式は全く一種特殊にして會つて支那本部に於いて目撃せざるところなり。其の最下部に低き八角の臺あり、各面に一種の格狭間を穿刻せり。其の上一條の帯を繞らし、其の上上方に向つて開展せる八葉の蓮を置き、更に其の上に八葉の臺を据えたり。但し上下兩箇の八葉は互に相并せずして、上の八葉の稜は下の八葉の面の中央に向ふべからしめたり。更に其の上をやゝ球體に近き部分あり、今甚だしく殘破して其の上端の手法を詳かにせず。底部より此の球部に至るまでは皆磚を以て作りたり。

球部の上には中央に細き銅柱を建て、其の脚部に水煙の意味ある四枚の銅板を附せり。銅板には一種の文様を穿刻し、外周には火焰ありて上に向つて閃きたり。水煙の上部より八條の鎖を垂れ、八角の屋蓋の各隅に連結せり。

滿洲の佛寺建築

水煙の上に第一の球あり、球は支那本部及び我が國に於ける輪に相當するものと考ふるを得べし。次に第二の球あり、次に傘蓋の意ある八角の小盤あり。次に第三より第五の球に至りて終る。第五球の上には更に銅柱高く



第六三〇圖 廣祐寺塔の相輪

挺出し、其の絶頂には多少の剝形ある筒形の寶頂を冠して終局とせり。斯くの如きは實に盛京地方に於ける相輪の標準となるものなるが如し(第六三〇圖)。

第六二六圖右方は其の立面の觀測圖なり。第六三〇圖中、Aの點より相輪のBの點に對して仰角四十二度を得たり。即ち地上相輪の頂まで約二百五十尺、相輪の高さ約六十二尺あることを知るべし。蓋し滿洲第一の大塔にして亦た支那第一流の巨塔たり。

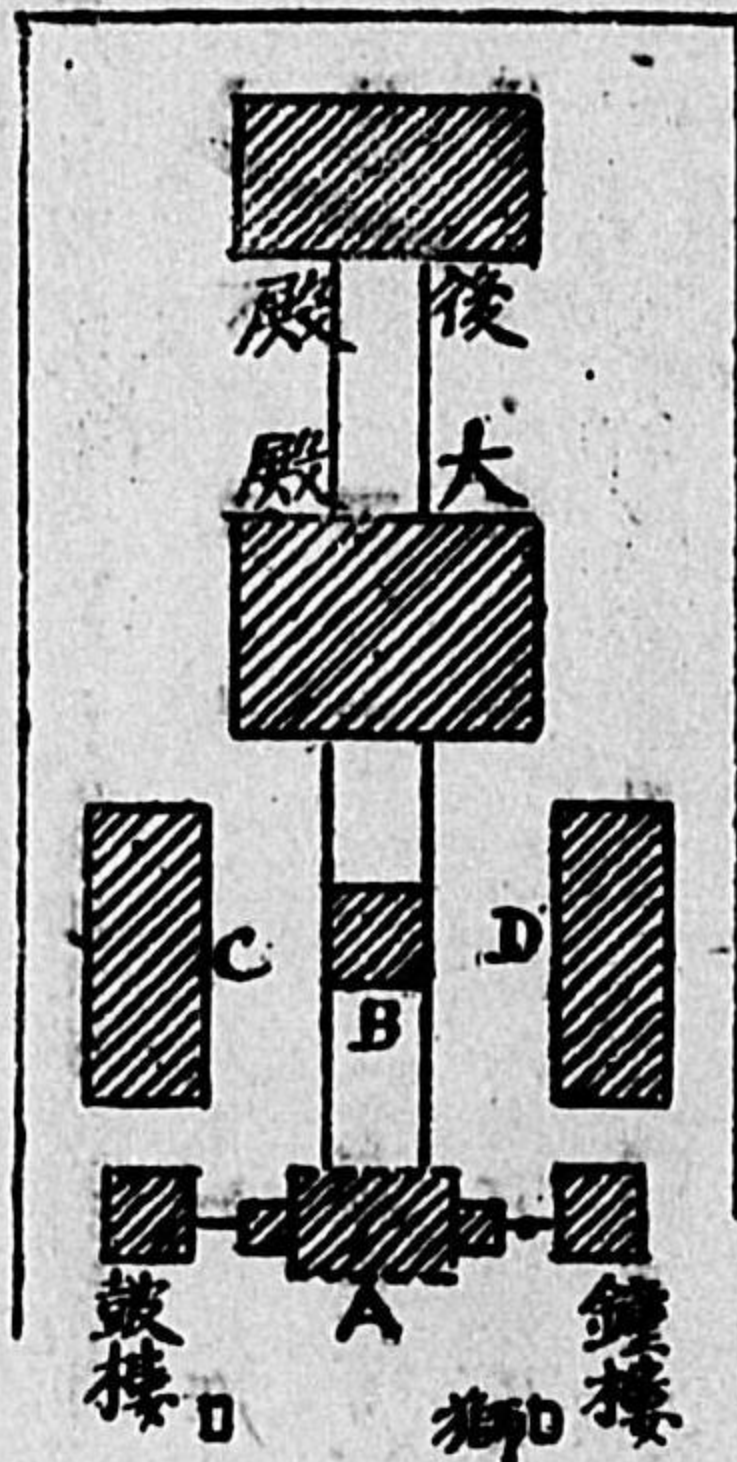
要するに此の塔は基壇、塔身、段層、相輪の四部より成るものにして、盛京地方に於ける塔の好標品なり。但し其の形狀より察するに、段層の部の上部に到るに従つて漸次に縮小するの程度甚だ顯著ならず、これ即ち其の年代の甚だ遠からざるべき一徴候と見るを得べし。塔身に於ける佛像等の彫刻も亦た決して此の建築が遠く唐、若くは渤海等の遺物に非ざるが如し。

其の五 興京老城

興京老城は清の太祖以前より歴代の居城としたるところにして、所謂赫圖阿拉の地に建てられ、奉天より東方我が二十二里に位す。老城の東約二里に地藏寺あり、顯佑宮と相並び共に清の太祖の創建にかゝる。

(一) 地藏寺

地藏寺の平面は第六三一圖に示すが如く、Aなる山門の左右に鐘鼓兩樓あり、天王殿に相當すべき部分に今B



の小堂あり。内に彌勒を安置し、其の後に相背きて草駄天を置くこと猶ほ普通の天王殿の如し。C、Dの廂房には地獄變相の形を作り、Bの後に大殿、後殿相并列すること常例の如し。

此の寺院は現今甚だしく殘破し、殊に後殿山門の如きは既に全く其の形骸を失ひたり。然れども今其の殘餘の建築

第六三一圖 興京古城地藏寺 滿洲の佛寺建築

に就いて考ふれば、其の年代は正に清初に属するものなるが如し。

興京より西の方奉天に到る間各地に佛寺建築あり、其の顯著なるものは、

- (ろ) 清雲寺 (下爽河に在り)
- (は) 慈雲寺 (古樓に在り)
- (に) 衆教寺 (鐵背山外に在り)
- (ほ) 興隆寺及び觀音閣 (撫順城外に在り)

等にして概ね同様の平面を有せり。但し道佛混淆の觀ありて、清雲寺の前殿には關帝及び諸神を祭り、衆教寺の前殿には閻王及び十王の像を安置せり。興隆寺は順治甲申(西曆一六四四)の創立にして規模や、廣大なり。觀音閣上鑄兒山王に一基の塔あり。八角にして一邊の長さ六尺五寸あり、上部崩壊して其の何層たりしやを詳かにせざるも、恐らくは十三層には非ざりしか、其の形式は柝木城の鐵塔に酷似せり。

其の六 奉天府

奉天府城は清の太祖が金遼の濬州の舊治に據り、天聰五年(西曆一六三一)これを經營せるものにして、大連を距る鐵路二百四十六哩に在り、城の内外には佛寺頗る多し。而してこれを大別して禪教及び喇嘛教の二派に分つことを得。喇嘛教伽藍は多く城外に在り、禪教伽藍却つて城内に好遺物を存す。但し今日の所謂禪教寺院の建築は、塔婆を除くの外は喇嘛教建築と大差なく、事實上同式と認むることを得べきものあり。僅に細部の手法に於

して兩派の相異なるものを觀るに過ぎず。次に先づ喇嘛教建築に就いて記述すべし。

(五) 黃寺

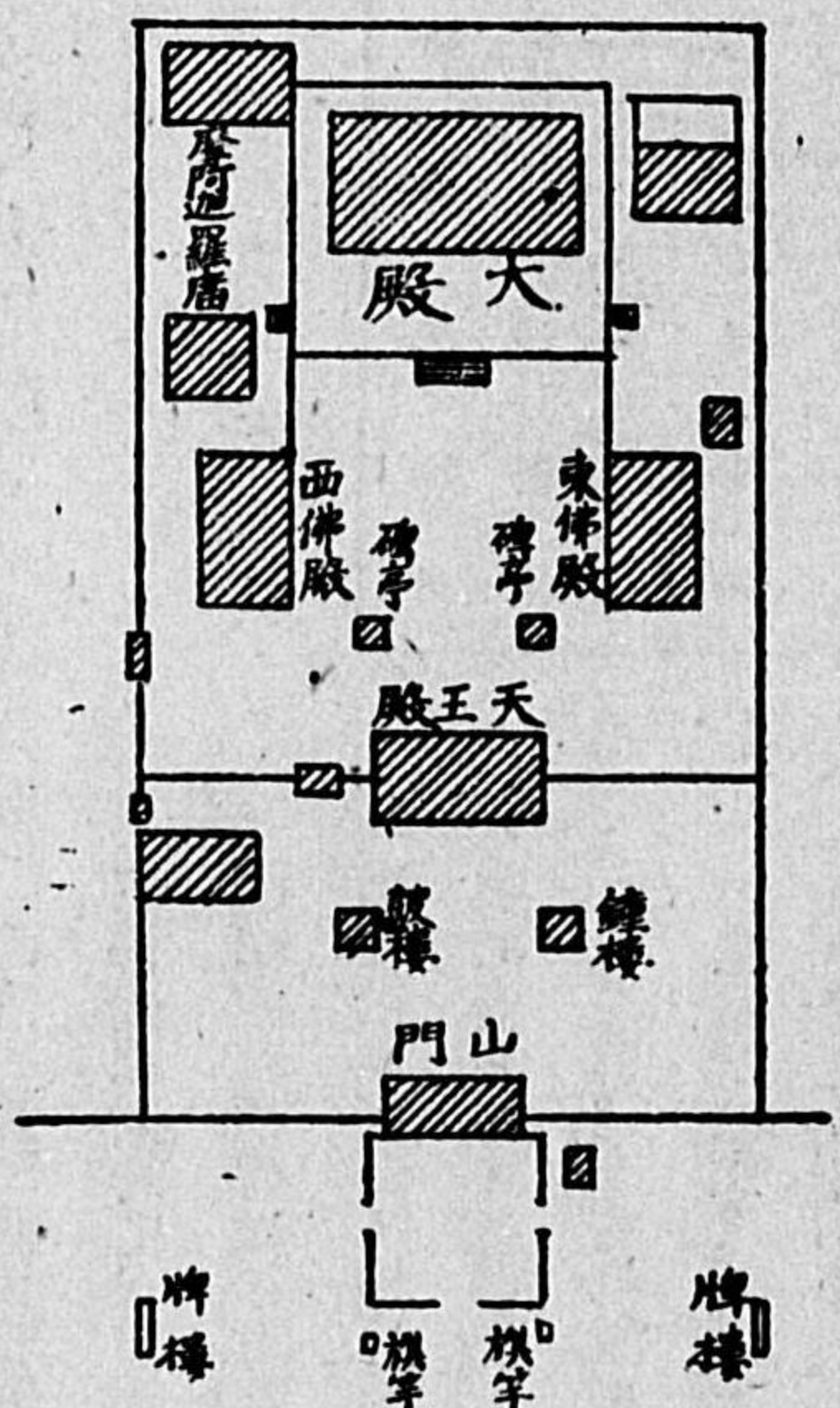
本名を實勝寺と云ふ、小西門外に在り。盛京通志に曰く、

實勝寺外攘門關外俗呼黃寺國初勅建前有下馬牌內供邁達裏佛又有嗎哈喇樓天聰九年元裔察哈兒林丹汗之母

以白駝載嗎哈喇佛金像并金字喇嘛經傳國璽至此駝臥不起遂建此樓有碑文足據於雍正四年奉旨重修

盛京典制備考に曰く、

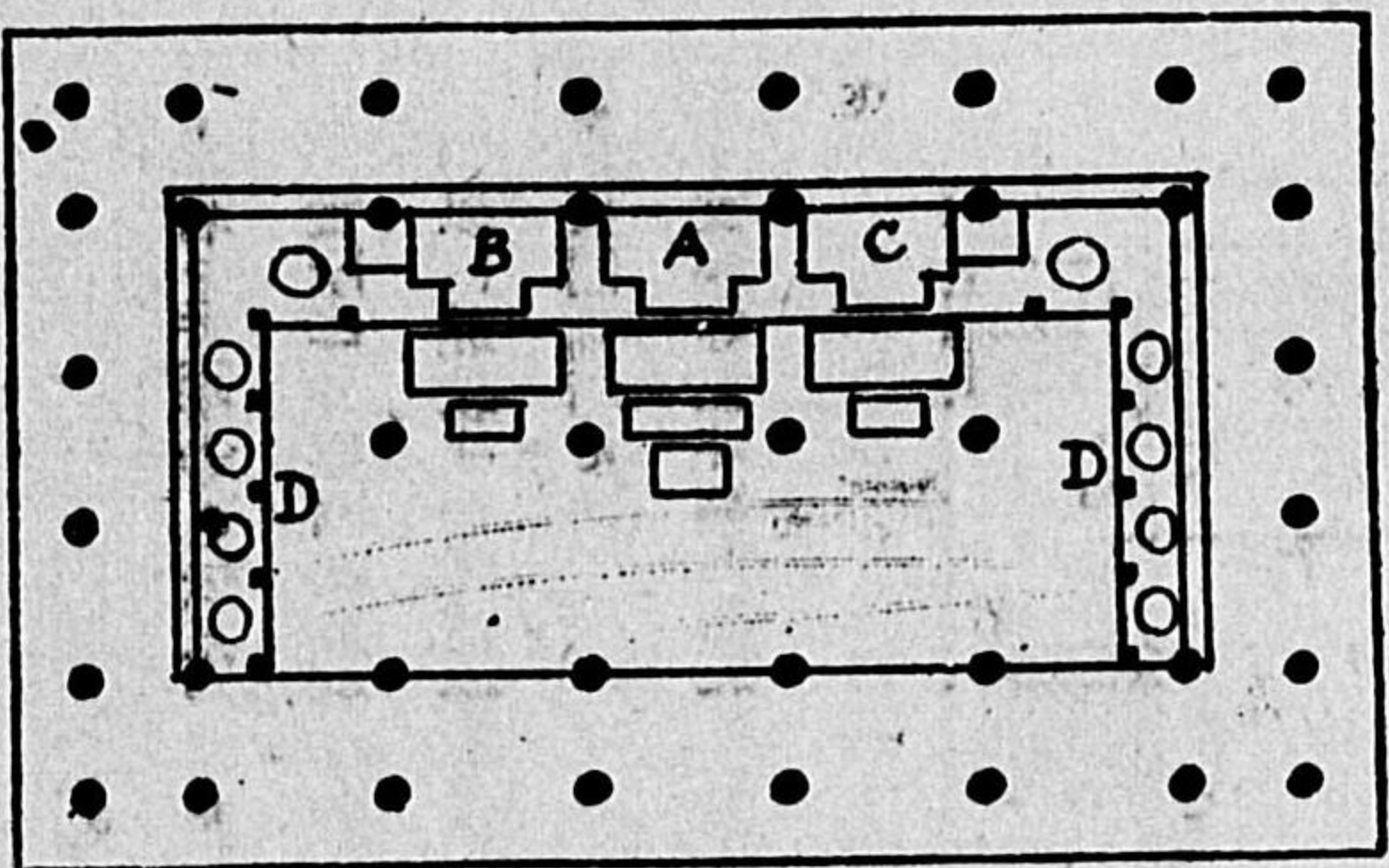
實勝寺在外攘門關外二里俗呼黃寺我朝破明兵于松山勅建此寺供奉邁達里佛并恭藏太祖太宗甲冑弓矢、云々



圖面平寺黃天奉 圖二三六第

此の嗎哈喇樓は元の帕斯八が鑄造せるものにして、曾つて五臺山に奉祀せる後察哈兒林丹汗國に移され、清の太宗其の國を征服するに及んでこれを迎へたりと傳へらるゝ珍像なり。碑記によれば、伽藍は崇徳元年(西曆一六三六)に起工され、同三年(西曆一六三八)に竣工したりと云ふ。平面は第六三二圖に示すが如く、門前一對の牌樓あり

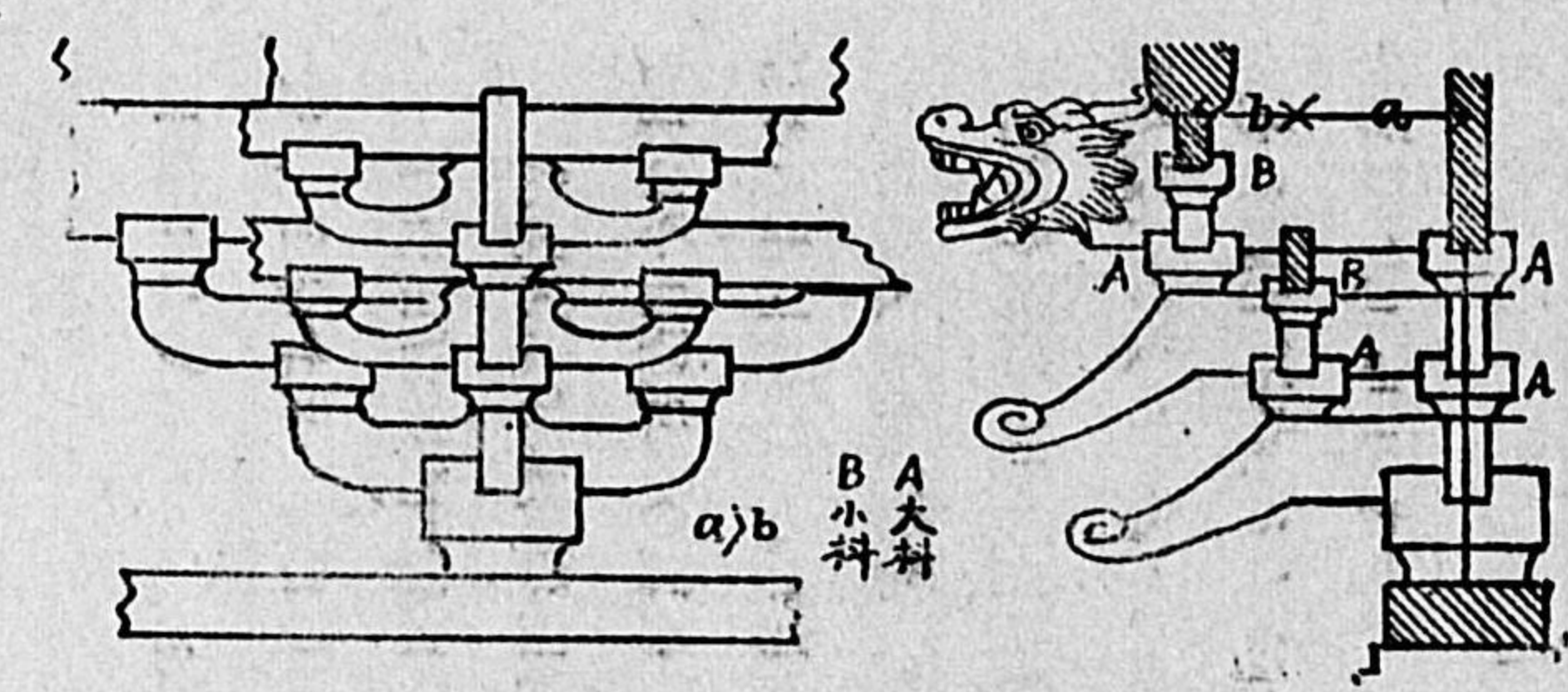
(第六七九圖)、次に山門あり(第六八〇圖)、門内に鐘鼓兩樓相對峙し、次に天王殿あり、殿内に兩宇の碑亭及び東西佛殿相對峙し、正面の壇上に大殿又大雄寶殿あり(第六八二圖)、喝哈喝喇樓は西佛殿の北にありて重層をなす(第六八一圖)、大殿は第六三三圖に示すが如く廣さ七楹、内に廣さ五楹、深さ二楹の身舎を劃し、中央後壁に接して三尊の像を安置す。中央は釋迦、東は邁達里なりと云ふ(第六八三圖)。左右の壁に沿うて廊を作り、中に八大菩薩の立像を納る。廊の柱及び柱頭、其の上部の料枋を代表せる繪様持送りの制は支那固有の佛寺建築に其の例を見ざるところにして、獨り喇嘛教伽藍に於いてのみ適用せられたるは注意すべき事項に屬す。其の柱は上部に向つて著しく其の大きさを遞減し八角にして蓮葉の礎を備ふ。大斗の「斗ぐり」は凸曲線の蓮葉より成り、其の輪廓の性質は寧ろ泰西ローマネスク、或はビザンチウム式に似たる點あり、却つて支那固有の大斗に似ず。吾人は斯くの如き形式を西藏建築に見るものなり。要するに黃寺の柱制は即ち支那式と云はんよりは寧ろ西藏式と云ふの妥當なるを覺ゆ。大斗の上なる繪様持送りも亦寧ろ西藏及びネパールの形式を備へ、其の上部數層の水平線



圖面平殿大寺黃 圖三三六第

内に施せる繊細なる手法も亦泰西クラシック建築のエンタブレチュア Entablature に相當すべき性質を有せり。吾人は支那本來の建築に於いて未だ斯くの如き手法を發見せず。即ち知る、黃寺建築に於ける此の種の手法は凡て西藏傳來のものにして、古く元朝より喇嘛教と共に支那に輸入されたるものなることを。

殿内裝飾も亦た西藏式の多量を加味せり。三尊の後なる光背の上部には迦樓羅 Garuda が龍女 Nagini を攫へたる形を彫刻せり(第六八四圖)。斯くの如きは亦ネパール及び西藏に於いて常に觀るところなり。彼の元の至正四年(西曆一三四四)に成れる直隸省八達嶺下の居庸關門の枋上に刻せるものも亦これと同式にして、要するに喇嘛教に特殊なるものなるが如し。大殿の藻井も亦純然たる西藏式なり。各格間に八葉の蓮より脱花せる花文様を畫き、其の花心及び花瓣には西藏文字を入れたるを觀察すべきなり(第六八四圖)。



拱料の殿本寺黃 圖四三六第

大殿軒の料枋は第六八三圖の如く普通の漢式にして西藏式に非ず、但し其の意匠にはやゝ觀るべきものあり。其の二手先の方法を試むるや、初手先の突出は次手先の突出よりも著しく大にして、料枋も大小二種を用ひ善く變化あらしめたり。

(ろ) 護國法輪寺(北塔)

護國法輪寺は奉天の北郊に在り、清の太宗の崇徳八年(西曆一六四三)癸未仲春起工し、順治二年(西曆一六四五)乙酉仲夏に竣工せり。元來奉天城四方の郊外におのゝ同規模の喇嘛寺を創建し、各一基の塔を造立せしものにして、四寺各其の造營の目的を異にせり。碑銘に曰く、

盛京四面各建莊嚴寶寺每寺中大佛一尊左右佛二尊菩薩八尊天王四位浮圖一座東爲慧燈朗照名曰永光寺南爲普安衆庶名曰廣慈寺西爲慶祝聖壽名曰延壽寺北爲流通正法名曰法輪寺各立寫碑永乘來禱、云々

碑は平面圖所示の碑亭の内に在り、滿蒙藏漢四體の文を以てこれを刻せり。碑文によりて此の寺は佛法弘通の爲めに建立せることを知るべし。盛京典制備考に曰く、

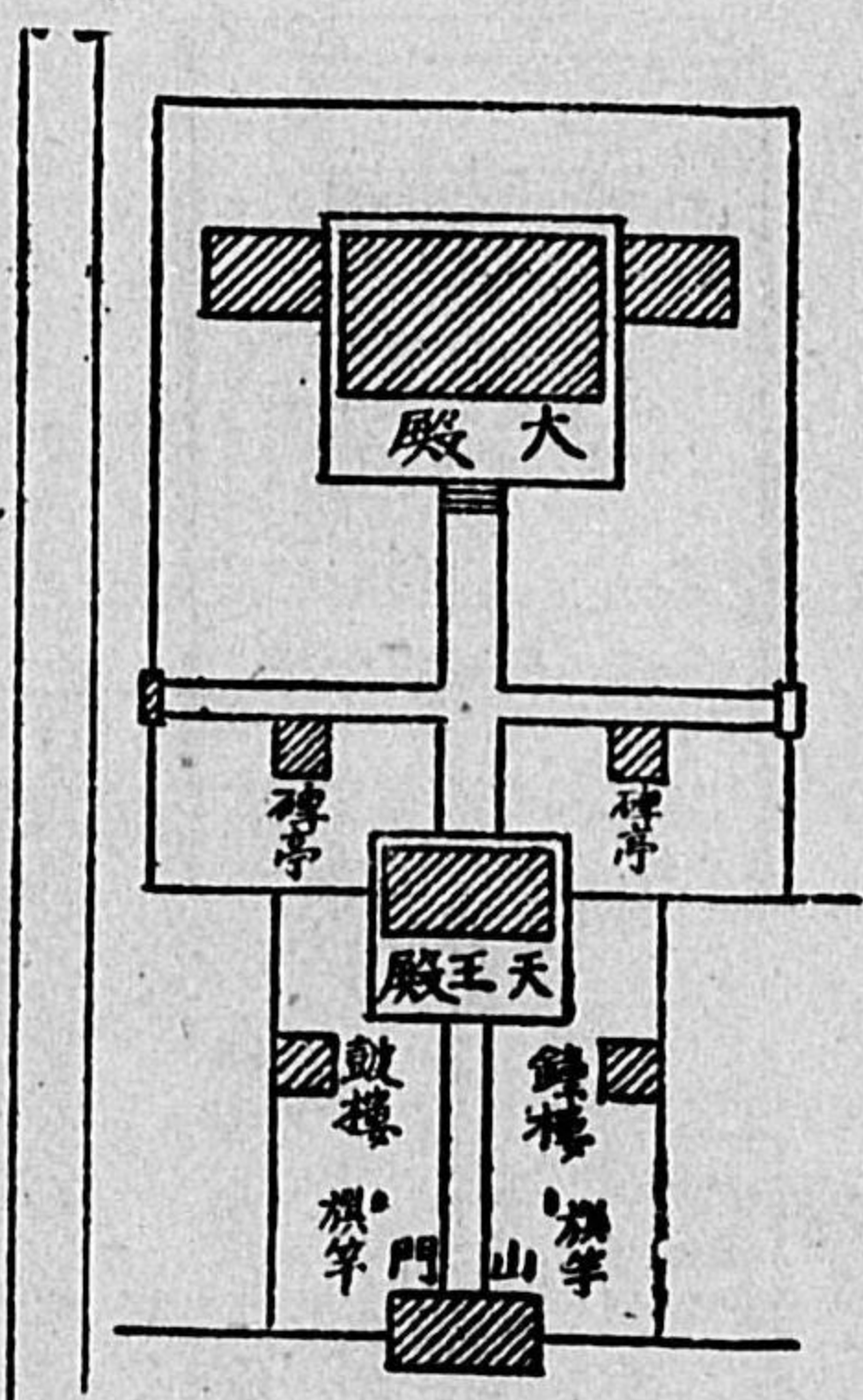
北塔法輪寺在地載門外三里乾隆八年御書金鏡周圍一區額恭懸正殿、云々

伽藍の規模は第六三五圖に示すが如く、大體黃寺と酷肖せる點あり。本殿の内部には中央に天地佛と俗稱する兩性相擁する像を安置し、東に太陽西に太陰を代表する像を配せり。左右兩側には八大菩薩を列ぬること例の如し。塔は伽藍の東北に於いて別に一區を劃し其の中にこれを建つ。其の制全然西藏式にして、他の東西南の三塔と全然形狀を同じうせり。

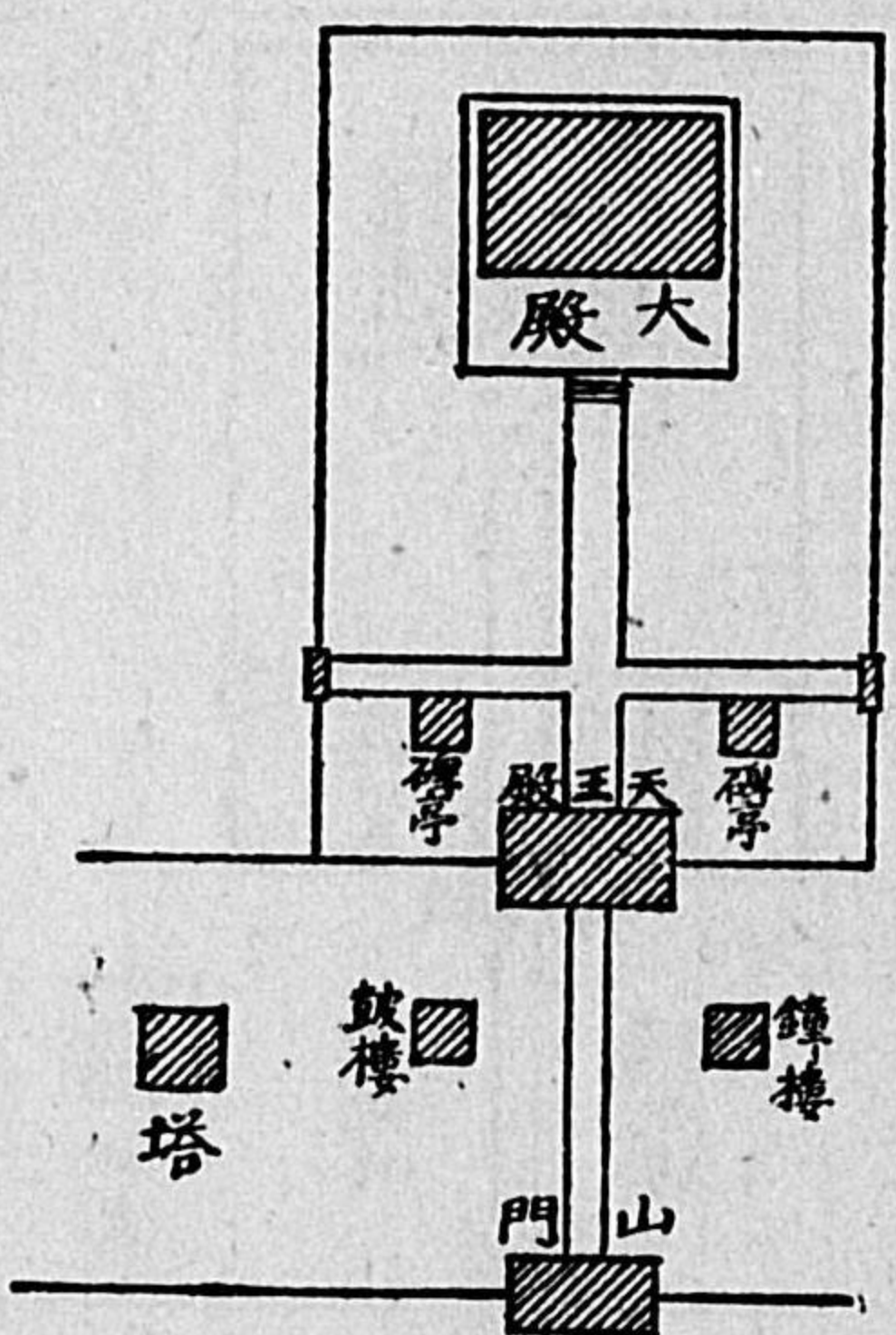
(は) 護國延壽寺(西塔)

護國延壽寺は奉天の西郊に在り。盛京典制備考に曰く、

西塔延壽寺在懷遠門外五里乾隆八年御書金粟祥光匾額恭懸正殿



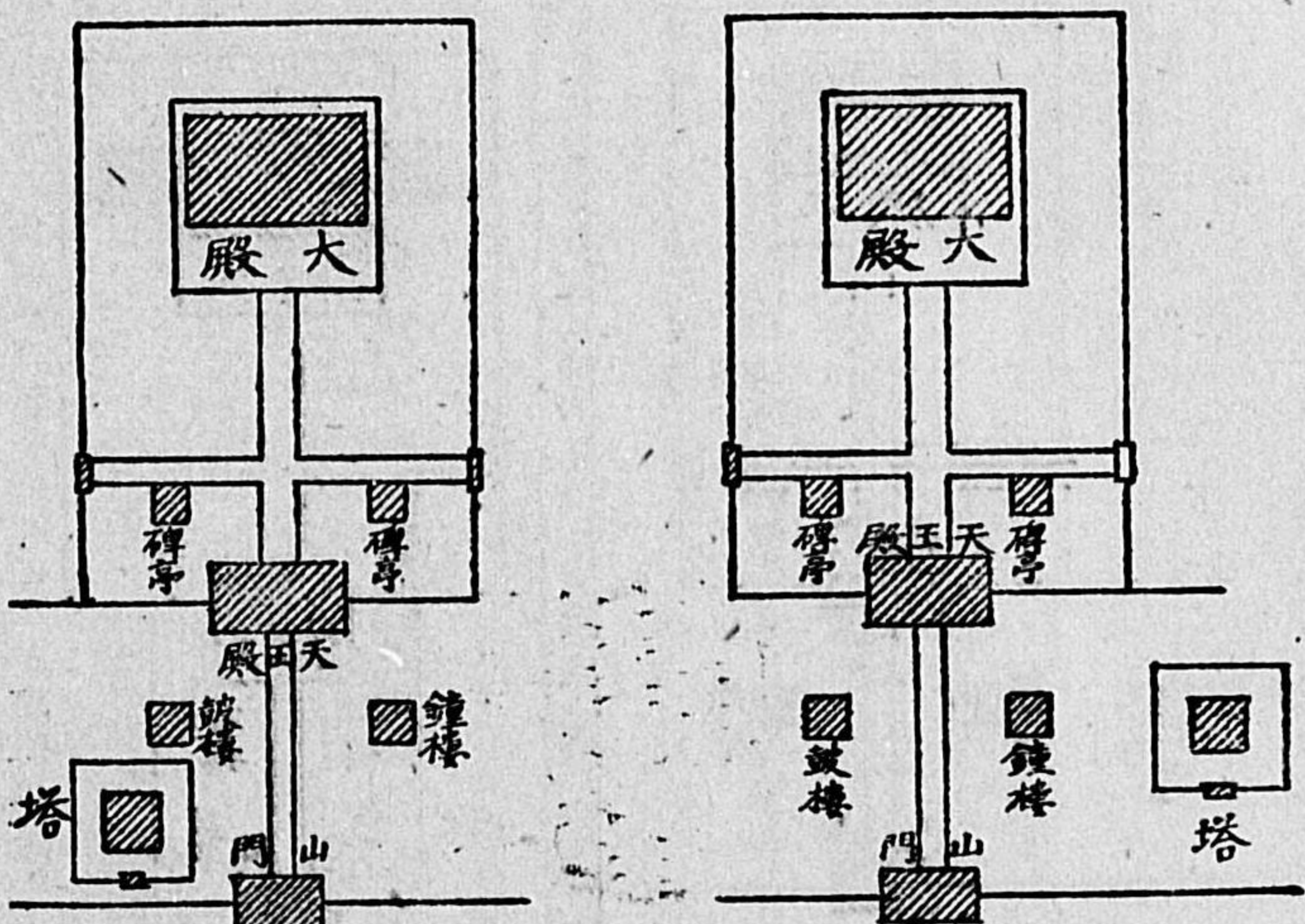
圖五三六第 (塔北)寺輪法國護天奉



圖六三六第 (塔西)寺壽延國護天奉

創立は北塔に均しく、伽藍の規模も亦殆ど全く相均し、只塔の位置互に相異なるのみ(第六三六圖)。元來天子の壽を祈るが爲めに建つるものなるを以て、其の本殿の中尊は長壽佛と稱せり。東は藥師如來、西は釋迦如來なるべきが、左右の八大菩薩は例の如し。此の殿内の佛像莊嚴總て崇徳創立のまゝにして存するものにして極めて重要なる遺物なり。其の柱、柱上の持送り、其の上部の手法、殆ど全く黃寺に於けるものと相均しきを觀察すべきなり(第六八五圖)。

西塔に一の釋杖を藏せり。第六四〇圖は即ち其の實測圖なり。其の大小二箇の小塔の形を見よ、如何に其の形式の完備せる喇嘛塔の好標品たるかを觀察すべきなり。



圖七三六第 (塔東)寺光永國護天奉 圖八三六第 (塔南)寺慈廣國護天奉

(に) 護國永光寺(東塔)

護國永光寺は奉天の東郊に在り。盛京典制備考に曰

東塔永光寺在撫近門外五里乾隆八年御書慈育群靈

匾額恭懸正殿

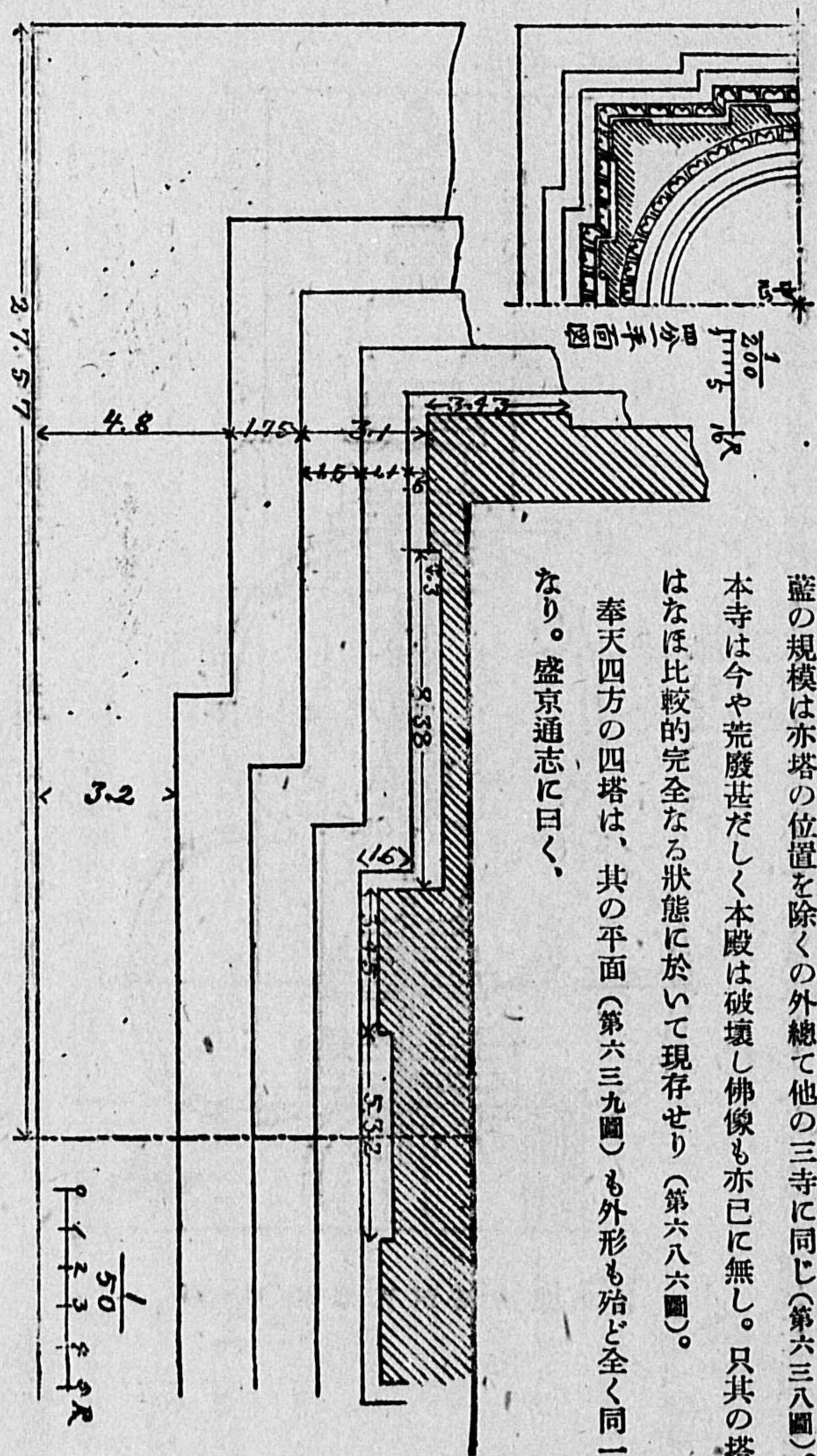
即ち衆生濟度の爲めに建立せるものにして、創立年代は前者に同じ。伽藍の規模は塔の位置の東に偏在するの外は凡て前者に同じ(第六三七圖)。本殿内部は三尊の相形特殊なるの外みな前者に同じ。第六八七圖は塔の外観なり。

(ほ) 護國廣慈寺(南塔)

護國廣慈寺は奉天の南郊にあり。盛京典制備考に曰

南塔廣慈寺在德盛門外五里乾隆八年御書心空彼岸

匾額恭懸正殿



圖面平塔西天奉 圖九三六第

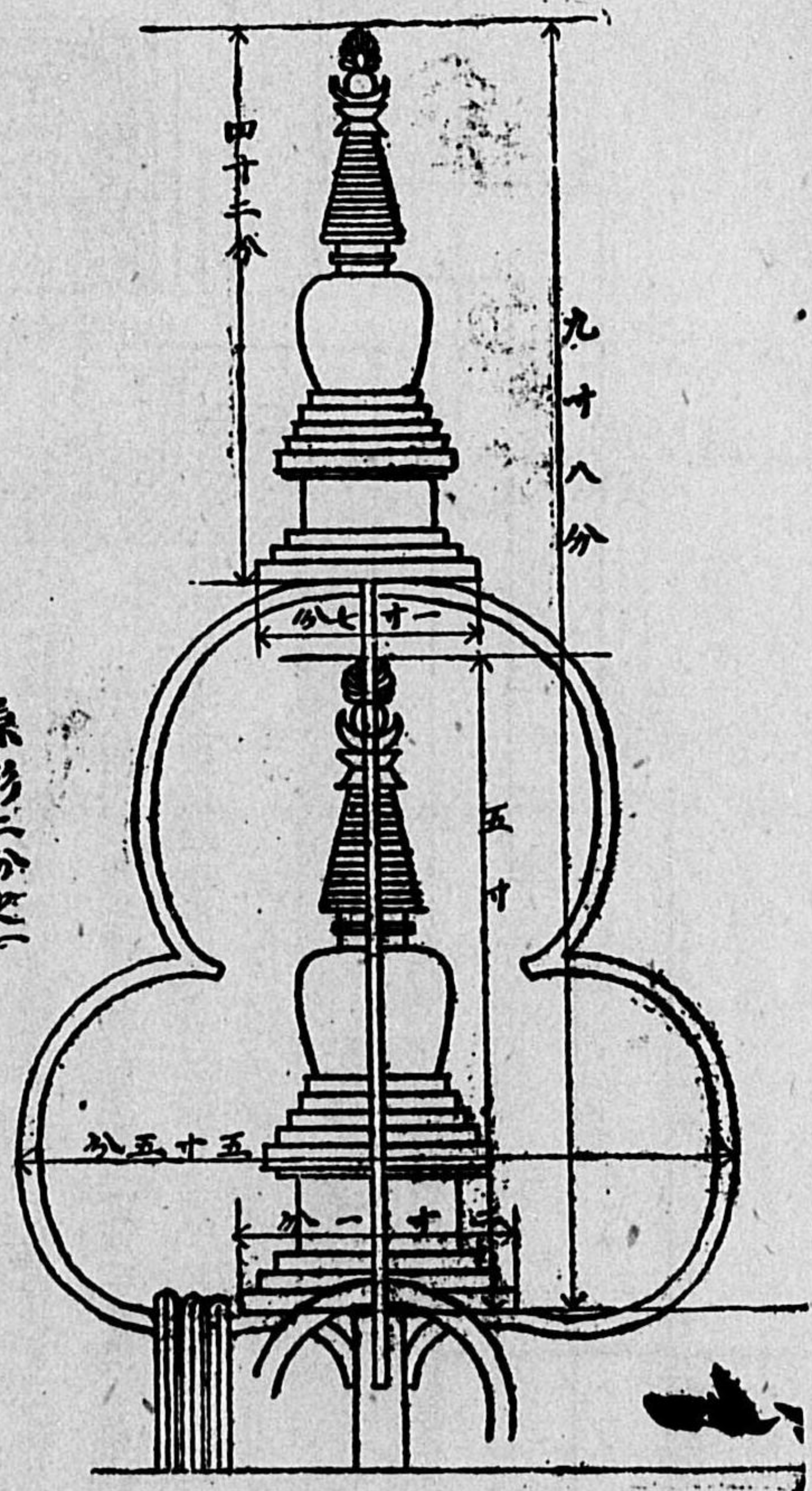
碑額によれば普安衆庶の爲めに建つるものにして、即ち天下泰平を祈るが爲めなり。創立年代前者に均し。伽

藍の規模は亦塔の位置を除くの外總て他の三寺に同じ(第六三八圖)。

本寺は今や荒廢甚だしく本殿は破壊し佛像も亦已に無し。只其の塔はなほ比較的完全なる状態に於いて現存せり(第六八六圖)。

奉天四方の四塔は、其の平面(第六三九圖)も外形も殆ど全く同一なり。盛京通志に曰く、

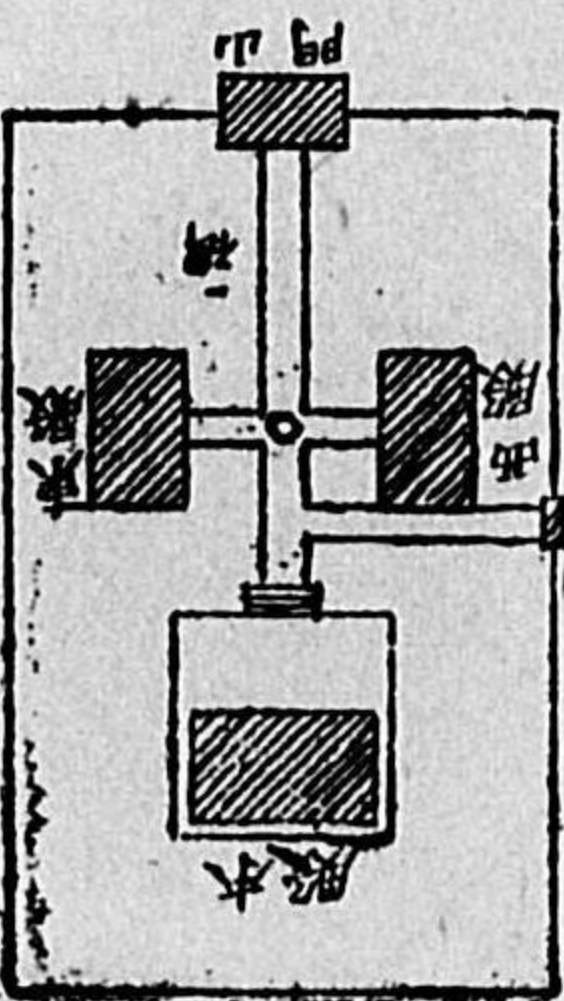
四寺俱勅建用喇嘛相地街每寺建白塔一座云能一統相傳爲異、云々
今其の特性を擧ぐれば、全體三の部分よりなる。基壇、塔身、相輪これなり。



杖錫藏所塔西天奉圖〇四六第

基壇は上下框、東及び東間の三箇の羽目より成る。中央の羽目には火焰一基を入れ、左右の羽目には獅子を入れ、東の中央に球體ありて上下一様に雲形より成る。上下框共に亦美なる彫刻あり、下の框下に逆蓮の座あり、

其の下に最底部の壇あり、上框の上に更に一の帯を繞らせり。塔身は西藏型の肩部異様に發育せるものにして三層の圓壇の上に立ち、圓壇の下に更に逆蓮座あり、塔身の南面に三花拱の龕を穿ち内に佛像を納れ、龕の周圍に流麗なる雲珠を彫す。相輪は露盤、十三輪、重蓋、日月及び寶珠より成る。露盤の細部は不幸にして明瞭ならず(第六〇圖によりて推知すべし)。輪は筒の如く上部に縮小し、重蓋の下蓋は下に向つて開き、其の末端に風鐸を懸く。上蓋はこれに對して上に向つて開き、共に青銅を以て作れり。日月も亦銅製にして弦月の上に太陽あり、絶頂なる寶頂は周圍に火焰を附せるものなりしが如し。



第六四一圖 奉天長寧寺平面圖

盛京備考に曰く

(一)長寧寺

長寧寺在外攘門外西北五里舊稱御花園順治十三年勅賜爲寺、云々

其の平面は第六四一圖に示すが如く極めて簡單なる小伽藍なれども、由緒顯著なる喇嘛寺なり。境内に康熙二十六年(西曆一六八七)の勅碑あり、碑文によれば本寺の本尊は元來太宗の念持佛なり。康熙帝即ち爲めに此の寺を建つと云ふ。現今の堂宇は最近の修理にかゝり、建築上別に特筆すべきものなし。但し其の本殿は五楹にして内部の厨子は、彼の黃寺等に賞用せられたるクラシック趣味の蛇腹を有し、本尊は觀音の小像なり、別に西藏文の經文及び嘉慶帝の用ひたる弓矢あり。

東殿は三楹にして夜摩天を本尊とし、西殿も亦三楹にして天地佛を本尊とせり。

(と) 舍利寺

盛京典制備考に曰く

舍利寺在城西十二里塔灣一名回龍寺崇德六年勅工部重修寺前有舍利塔

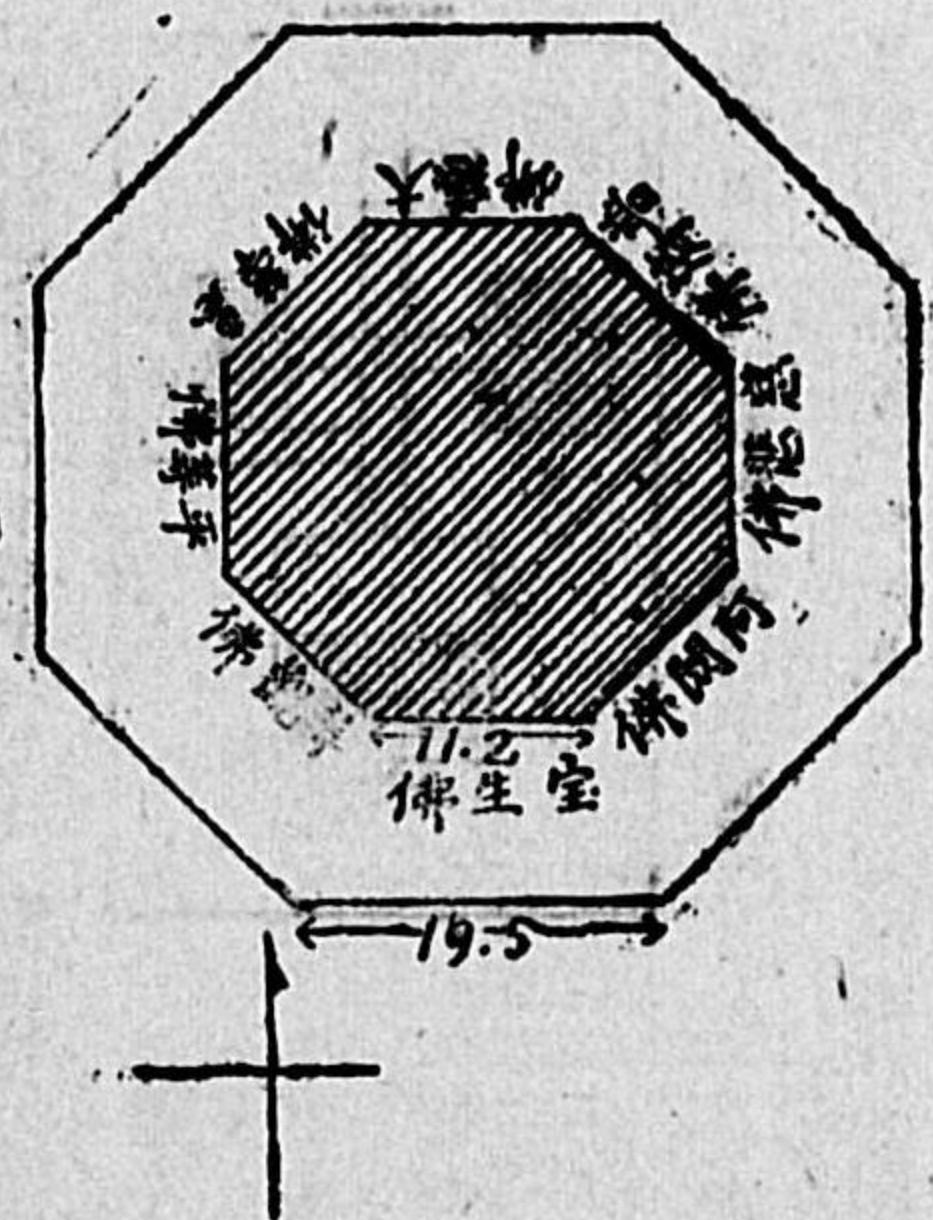
今伽藍悉く荒廢し僅に此の舍利塔を残せり。今俗に後塔と云ふ(第六八八圖)。八角十三重にして(第六四二圖)

初層各面に佛像を置くこと遼陽の塔の如し。北面壁上に銘あり、曰く、

大清崇德五年歲次庚辰工部奉聖旨重修

と。即ち盛京典制備考所載と一年の差あり、蓋し崇德五年起工して同六年竣功せるものなり。其の創立に關しては塔の附近の重修無垢淨光舍利佛塔碑記に左の文あり。

一工部奉



圖二四六第 奉天附近後塔平面圖

命重修無垢淨光舍利佛塔是塔原係大遼興宗時有本邑李弘遜等百餘人見彼時君臣合德風雨順人民安欲建塔以紀一時之盛乃糾僧人雲秀法具同造此塔於重熙十三年四月告成迄今六百餘年我大清寬溫仁聖皇帝見此類續詳察建塔來歷於崇德六年命該部重建佛殿三間令僧玄聲等五名看守

督工 甲喇將軍威國祚

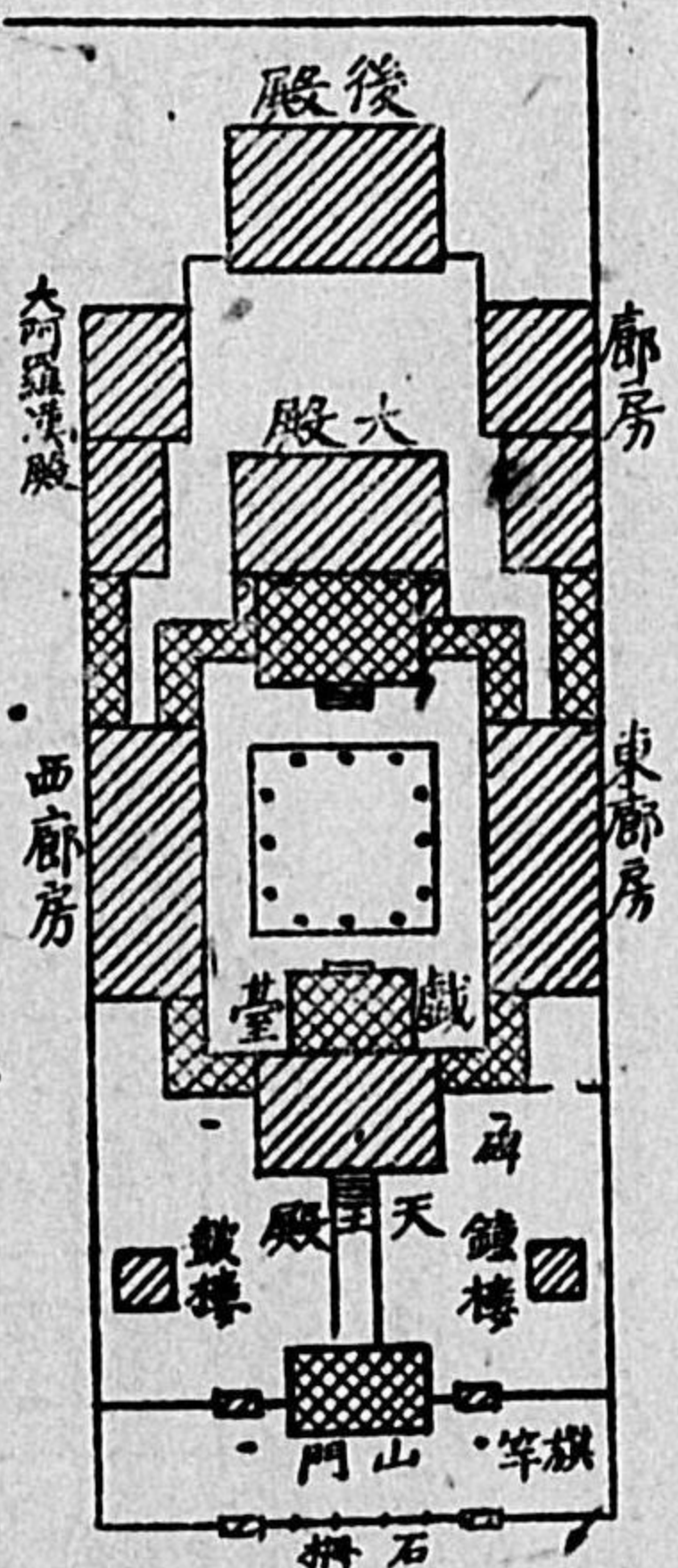
按するに重熙十三年は崇德六年を距ること五百九十七年なり(崇熙は重熙の別名なり)。塔は高さ五尺七寸の基壇の上に立ち壇上高さ三尺四寸の欄あり、塔身は頗る秀高にして中央に二重蓮瓣の帯を繞らし、帯の下には八面各獸頭の彫刻を嵌せり、帶上には佛像、脇侍、天蓋、天人常例の如し。料栱は二手先、二夕軒にして、垂木及び隅木は木製なり。軒は各面五箇の風鐸を懸け、二層以上は各面各三箇の鏡を嵌入し、軒の突出は料栱によらずして簡單なる磚の積出しに由れり(第六八九圖)。各層の大きさが上部に縮減するの程度は、遼陽の塔よりもやゝ急激なれども、開原の塔の如く甚だしからず(第六八八圖)。



第六四三圖 後塔相輪

當時の形式と手法とを存するものなりと思惟す。即ち崇德五年の重修の際全然古式を抹殺することを爲さざりしものと思惟するなり。

滿洲の佛寺建築



圖四四六第 奉天長安寺平面圖

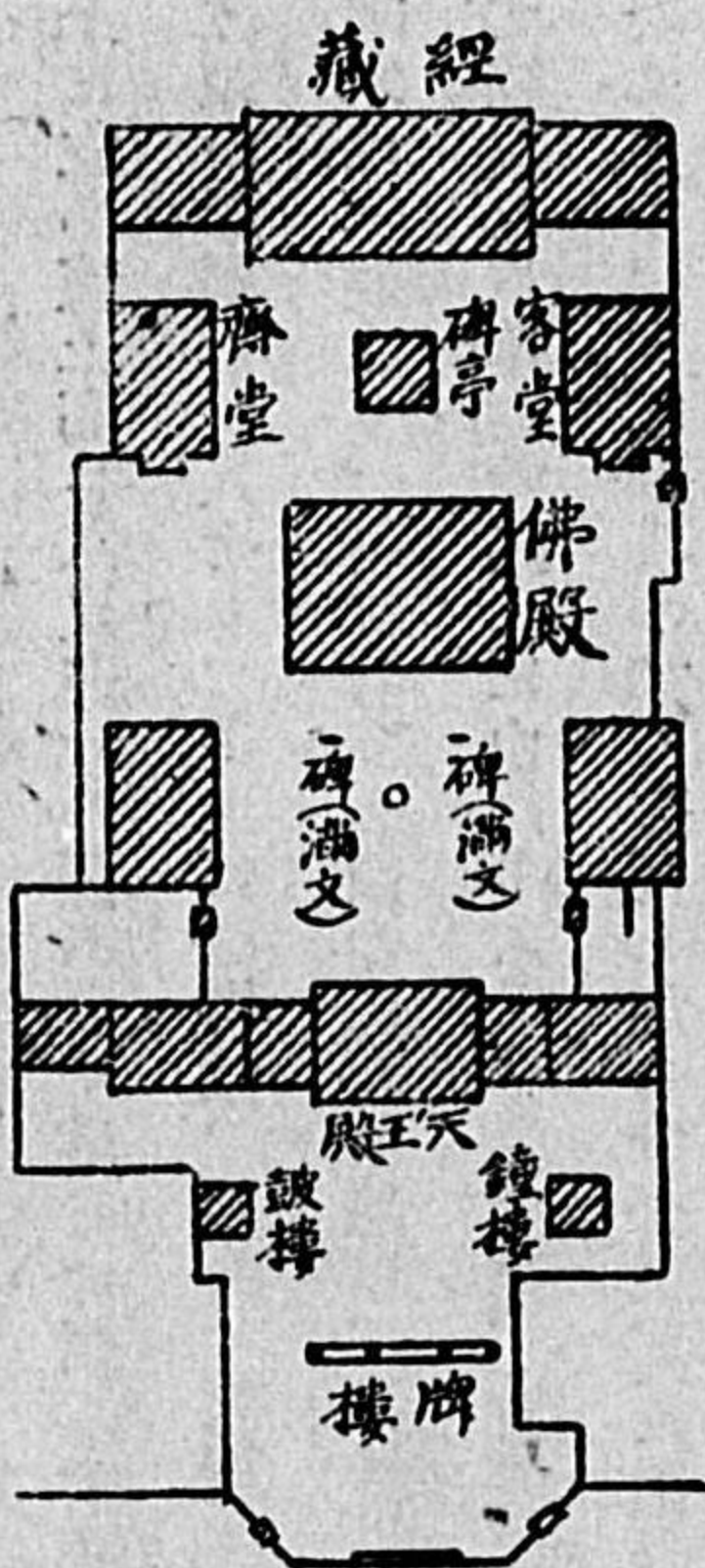
(七) 萬壽寺

盛京通志に曰く、
萬壽寺在外攘門外即慈慧寺俗呼談家菴
康熙五十二年改建、云々(西曆一七一三)
然るに盛京典制備考には、
萬壽寺在外攘門外路北即慈慧寺俗呼談家
菴康熙五十年勅建(西曆一七一三)

圖五四六第 奉天萬壽寺平面圖

其の孰れか是なるを知らず。其の平面は第
六四五圖の如く亦奉天第一流の巨刹なり。佛
殿の前に一對の満文の碑あり、佛殿の後なる
碑亭は四隅各四柱皆傾斜ありて四方開放し、
碑に康熙六年(西曆一六六七)の銘あり。本寺
は今道觀と混淆せるものか、殿内に於いて道
士の跪誦するを見るべし。

(リ) 長安寺



長安寺は奉天城內東北隅の古刹なり。全遼志古蹟部に曰く、

長安寺

瀋陽城
東北隅

即ち明代已に古蹟に屬せるを知るべし。其の規模は第六四四圖の如く、天王殿内に戲臺を設け、廻廊を以て中

庭を圍みたる手法は頗る神祠に類し、同時に
亦我が邦奈良朝の伽藍と類似の點あるは一奇
なり。大殿の前部に成化の碑あり。

(丸) 白塔寺

白塔寺は奉天城內北邊にあり。創立不詳、

第六四六圖 奉天白塔寺平面圖



り、塔の次に天王殿あり、大殿後殿順次相并ぶ。後殿には三尊及び十二天女あり、別に第六九一圖の如き小佛像
及び一對の十三重の小龍塔あり、形式頗る珍奇なり。佛殿には三尊の外、文殊、普賢及び二天あり。而して佛像
の光背に喇嘛の八寶を附著せるは頗る興味ある現象なりとす。

塔は八角十一層なり(第六九〇圖)、傍に萬曆の碑あり。又塔の北面に萬曆の銘ある瓦を嵌入せるを以てこれを
見れば、或は萬曆の修理に成るものか、其の大體の形式より察するに、其の上部に向つて大きさを減縮するの程度
は遼陽の塔より甚だしく、やゝ奉天舍利塔のものに似て更にこれよりも著しきが如し。此の減縮の程度は年代を

滿洲の佛寺建築

測るべき一種の標準となるべきものにして、年代いよく新しくして減縮ますく少きものの如し。予は現在のものを以て萬曆の形式なりと假定せんと欲するものなり。

塔の基壇及び塔身の制も亦舍利寺の塔に似たり。其の塔身各面の龕、三尊佛、天蓋、天人總て常例の如く、料栱は「一手先」「二夕軒」にして「垂木」は木造なり。二層以上は料栱を用ひず各面に鏡を嵌したり。相輪は今三球のみ残存して其の他は知るべからざるも、想ふに他の塔と殆ど同一の意匠に成りたるものなるべし。

其の七 鐵嶺縣

鐵嶺縣は大連を距ること二百九十哩三、遼河の左岸に位し、縣城の大き約方四分三哩あり。城東に龍首山あり。其の脈延びて南に走る。山上に慈清寺及び南塔あり、城内に古刹圓通寺あり。

(五) 圓通寺

盛京典制備考に曰く、

圓通寺在城内明天順年建碑記本朝崇德八年勅賜銀兩寺有塔高三級

盛京通志に曰く、

圓通寺在城西北隅明天順萬曆間碑二崇德八年勅賜銀五十兩寺有浮屠高三級向傳有老鶴棲止其上則有科甲之應

此の天順、萬曆の二碑今日猶ほ存す。其の銘に左の文字あり。

銀州重修圓通寺塔寺記

(前略) 國朝洪武二十三年始成銀州之城置鐵嶺衛城故有利遂在城之西北刹故有塔皆久頽廢宣德三年指揮施興始因其舊垣而宮之八年名圓通寺正統三年都指揮使康福指揮李俊張恭繼葺之景泰之始今都指揮使孫璣借指揮同知王斌復增新之至天順初祠樓僧之具凡百所宜有者咸備

天順六年九月

銀州重修圓通寺記

(前略) 洪武初建圓通寺於城迤西構正殿五楹立佛像三尊東列伽藍西例祖師而前則有四天王一時廟自森嚴佛光炳耀蓋整然具矣浸淫於正統年間稍稍修葺之而猶未備也迄於今棟宇朽壤殿舍傾頽佛像蕩塵金身泄露有識者莫不惘然而竟不能爲佛出一力以光大之乃寧遠伯李輕財好施暨弟原任總兵季成材共興善念隨約善人陶法明及境內助緣士夫若干人同襄厥事或出貲或出粟或出物料各有差計晷課工萬曆五年而功始落成焉、云々

萬曆二十三年歲次乙未

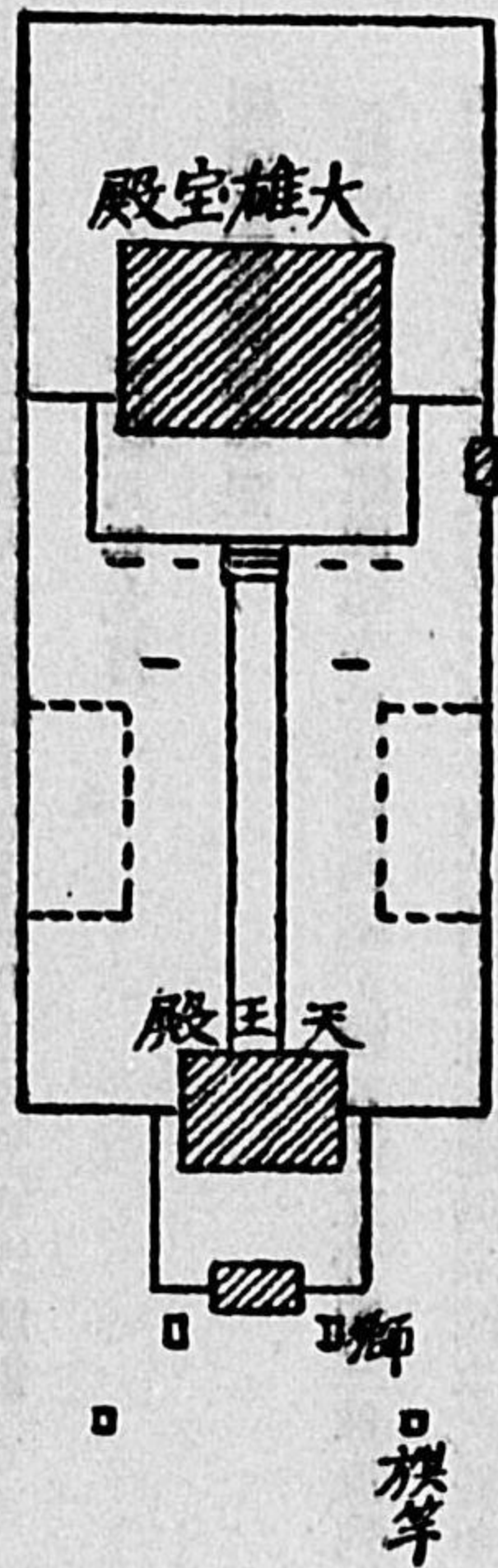
即ち天順の碑によれば、洪武二十三年(西曆一三九〇)始めて銀州に鐵嶺城を置きたる時既に圓通寺あり、圓通寺には古より塔ありしなり。其の年代に關しては左の碑銘あり。

重修圓通寺碑記

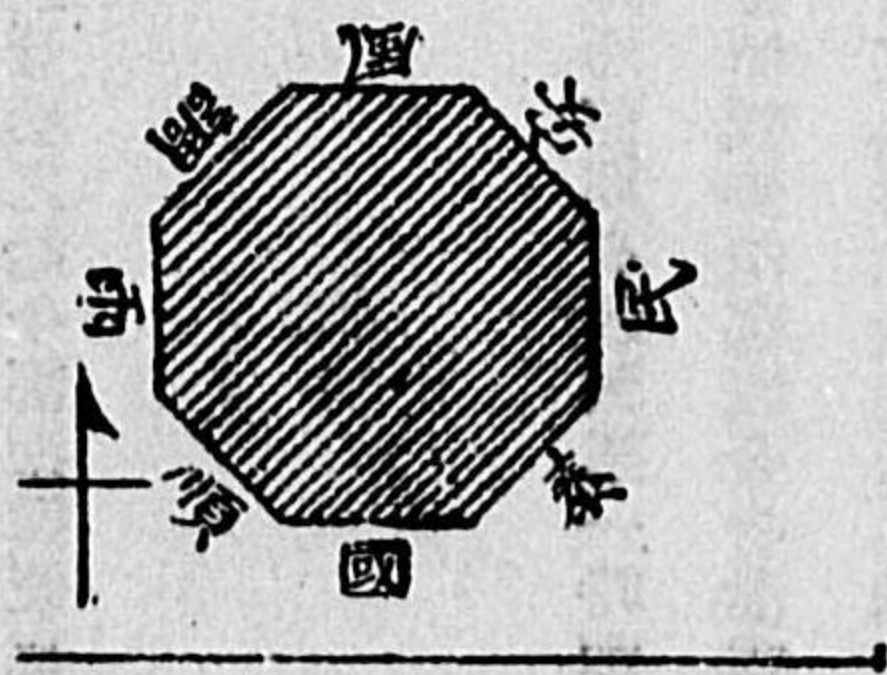
圓通寺古刹也在城西北隅白塔下塔建於唐大和二年明季李氏諸氏夫人捐金修塔而不及寺、云々

大清同治八年

此の碑によれば塔は唐の大和二年(西曆八二八)の創立なるが如し。而して現今の塔は萬曆三十四年塔の西北大破壊を來せる際修理を加へたるもの如し(萬曆三十六年九月初九日の銘板に由る)。惟ふに此の塔明初已に現存せるは明白なるが如し。然るに元は喇嘛教を國教とせるより推考すれば、元に於いて斯くの如き禪教の巨刹を創建せしことは信すべからざるに似たり。果して元以前の創建ならば金か、遼か、予は必ずや其の遼金の間に成りしことを想ふものなり。開原の石塔寺が金代の建築なりと信すべき理由より推考して、圓通寺の塔も亦遼金の間に成りたりと推定せんと欲するものなり。



第六四七圖 鐵嶺圓通寺平面圖



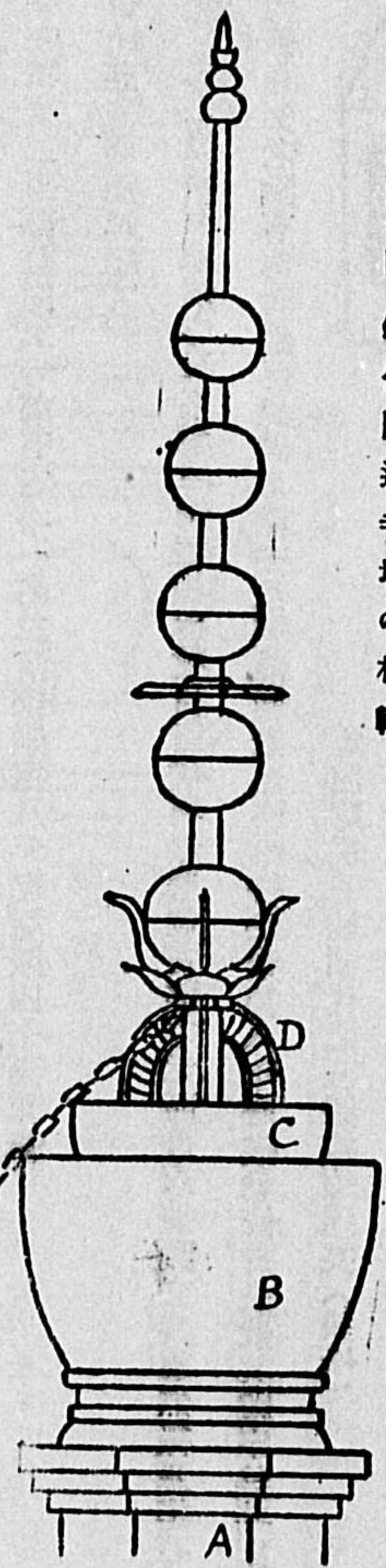
第六四八圖 圓通寺塔の平面圖

此の塔は八角十三重にして廣潤なる基壇の上に立つ(第六九二・六九三圖)。壇は數層の部分より成り、初目あり、から章あり、又八面に風調雨順國泰民安の八字を嵌せり(第六四八圖)。塔身は八面各一體の佛像を置き(棟瓦

にて式み出し其の上を漆喰を以て塗りたり)其の上に天蓋を冠せるのみにして他の物件なし。八稜各柱あり、料栱は二手先なるも大破して手法分明ならず、軒も大破して詳細を知る能はざるも、總て垂木を用ひずして刹形に由れるもの如し。

二層以上は常例の如く、一面各三箇の鏡を嵌せり。軒は階段様の刹形を以てせり。相輪は第六四九圖の如くA部は露盤に中り、B、Cの二部を併せて寶瓶の意を成し、Dの水煙の上に複蓮瓣あり、蓮上に高く突出せる四葉

第六四九圖 鐵嶺圓通寺塔の相輪



ありて第一球を包む。球は總て五箇あり、而して第二球と第三球との間に八角の天蓋あること猶ほ遼陽の塔に於けるが如く、絶頂に簡單なる小塔を冠せり。

此の塔の年代は、これを形式手法の上より推測すれば、殆ど開原の石塔寺と相均しきが如し。即ち或は金初の遺物か、或は遼末に屬するか、要するに盛京最古の塔の一に居るもの如し。現在伽藍の平面は第六四七圖の如し。

(三) 慈清寺

盛京典制備考に曰く、

慈清寺在城東龍首山山前有古塔本朝崇德八年勅賜銀兩重修

盛京通志に曰く、

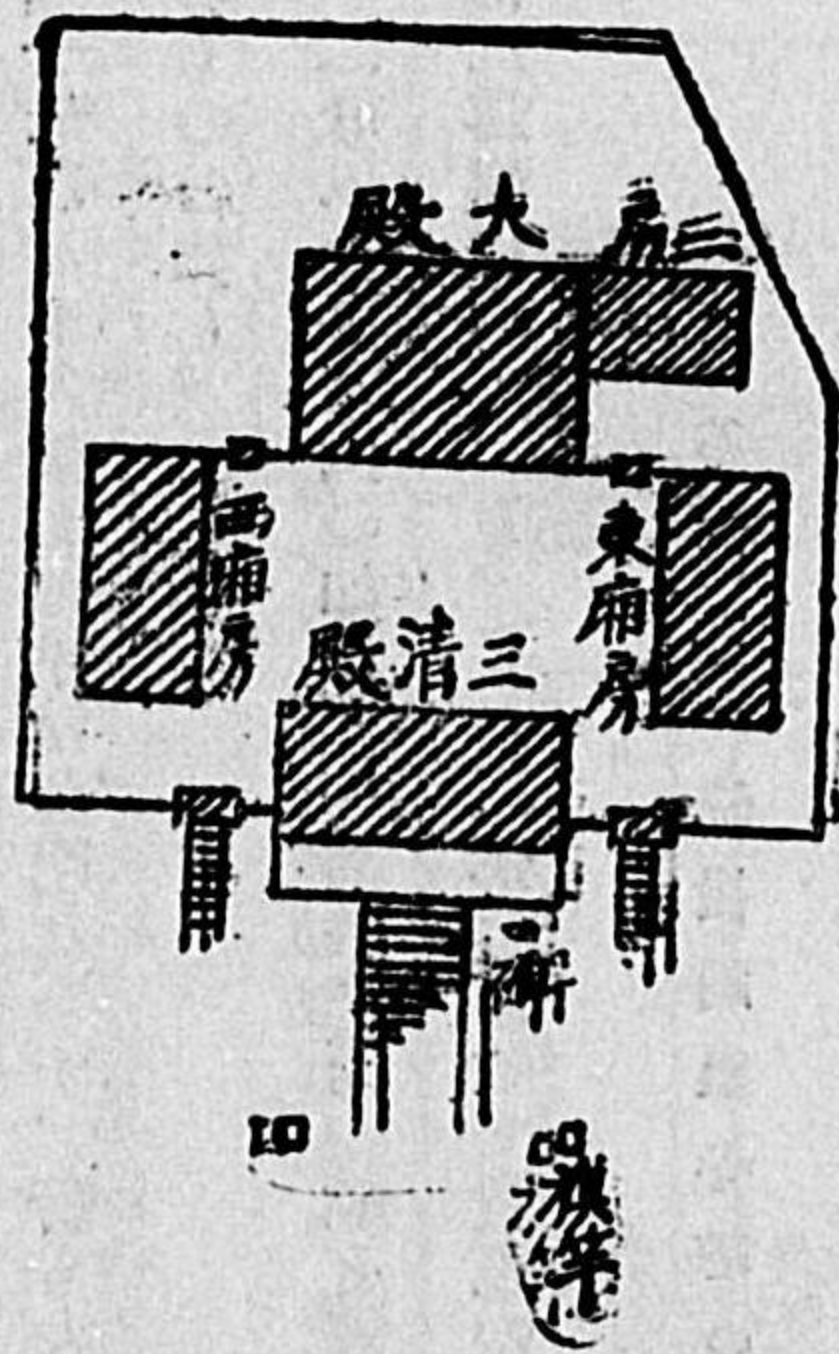
慈清寺在城東二里龍首山上寺前有古塔一名三清觀崇德八年勅賜銀四十兩重修

寺内の龍首山慈清碑記に曰く、

(前略) 山之嶺舊有慈清寺又名爲三清觀相傳建自唐代與浮屠並古遠宋元而後志乘闕文其事無徵焉迄有明萬曆間魯經修葺父老猶有傳者然已無碑可稽矣我朝龍興遼瀋恪奉佛法崇德八年賜銀勅修於是壯其殿宇整其廊垣金碧

煌照耀巖谷較前代之莊嚴模宏遠矣(後略)

大清咸豐八年



第六五〇圖 鐵嶺慈清寺平面圖

以上の記録によれば慈清寺は唐代の創建なるが如きも、崇德重修に至る間沿革詳かならず、現今の平面は第六五〇圖に示すが如く佛道兩教の混合にして、前に三清殿を置き、中に老君、天清、地清を祀り、後に大殿を置いて佛陀を安置す。佛陀に陪して阿難、迦葉あり、文殊、普賢あり、觀音、地藏あり、二天あり、

十八羅漢あり、其の配置第六五一圖の如し。

伽藍に附屬して八角九重塔あり。塔前補修浮屠記に曰く、

慈清寺前有浮屠九級創自何時無所考云云

大清咸豐八年歲次戊午

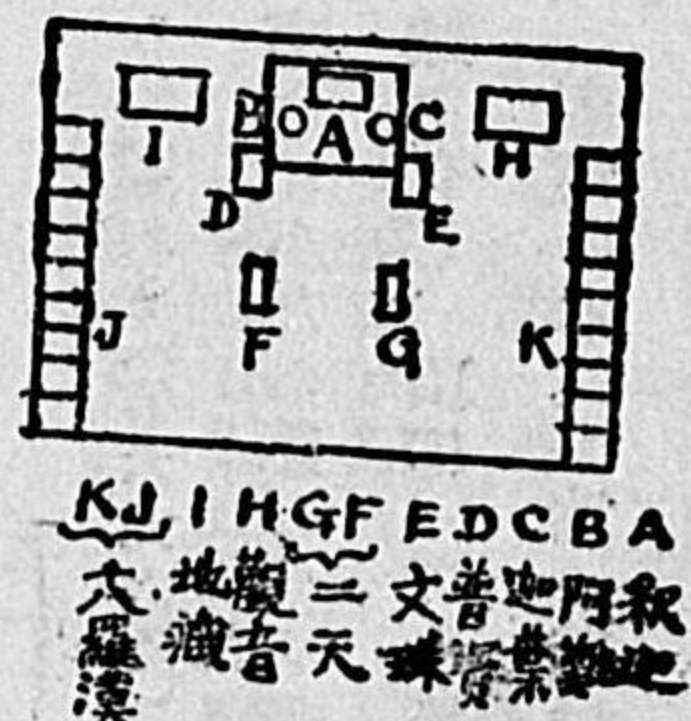
即ち其の創立を考ふるに由なきも、其の現今の形式手法は明の中葉に屬するもの如し(第六九四圖)。塔の大さ基にて一邊七尺二寸、全高約七十尺あり。

塔身は廣大なる基壇の上に立ち、八面に印度的籠を穿ち中に佛像を納れ、軒は二重なり、二層以上の軒は單に剝形より成り、相輪は今破壊して原形を考ふる能はざるも、上部には五箇の球ありしが如し。

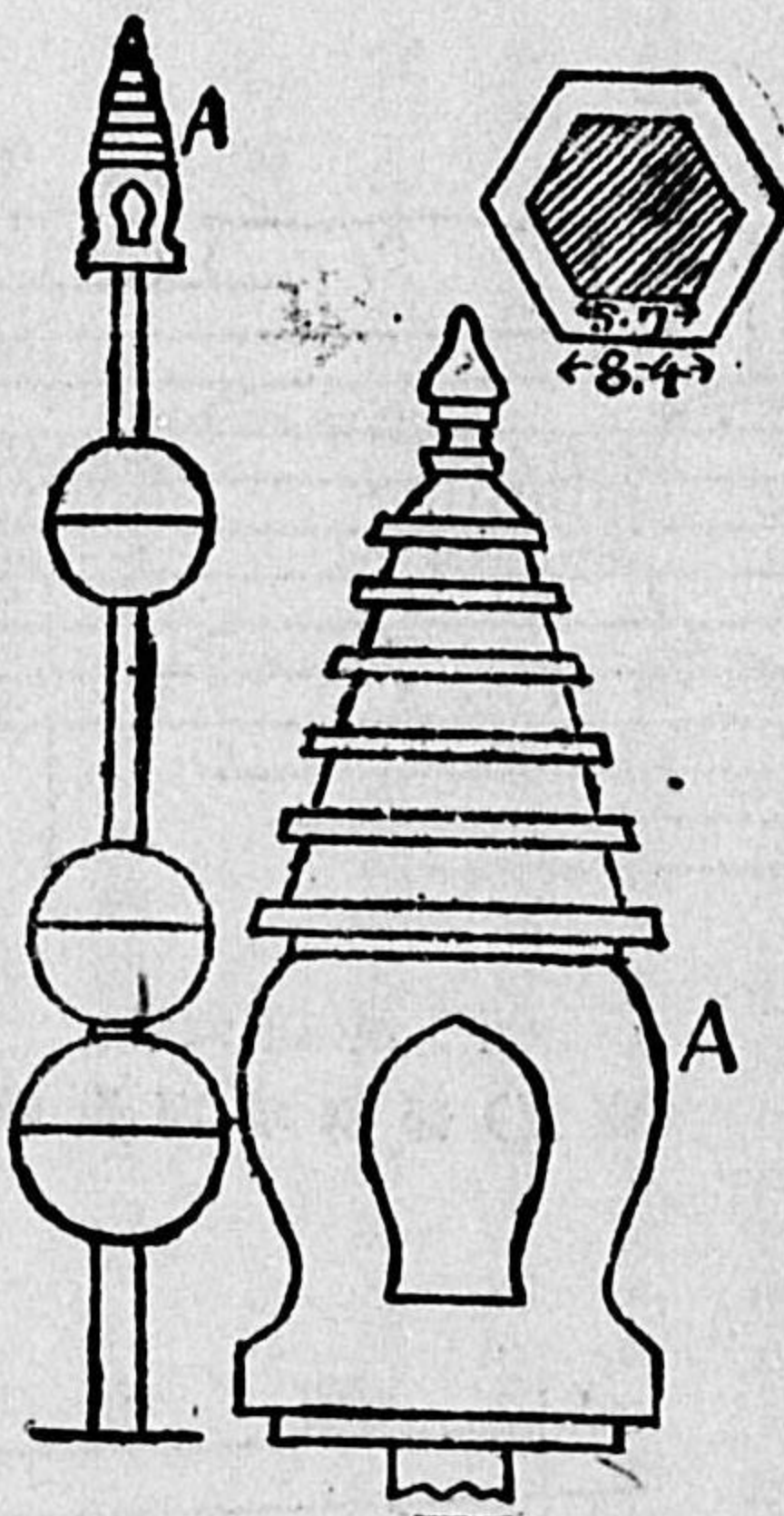
(は) 南塔

南塔は慈清寺の南方山嶺にあり、傳不詳、六角にして九重、其の平面は第六五二圖の如く、其の形状は第六九五圖の如し。基壇は元來通例の形式を備へ

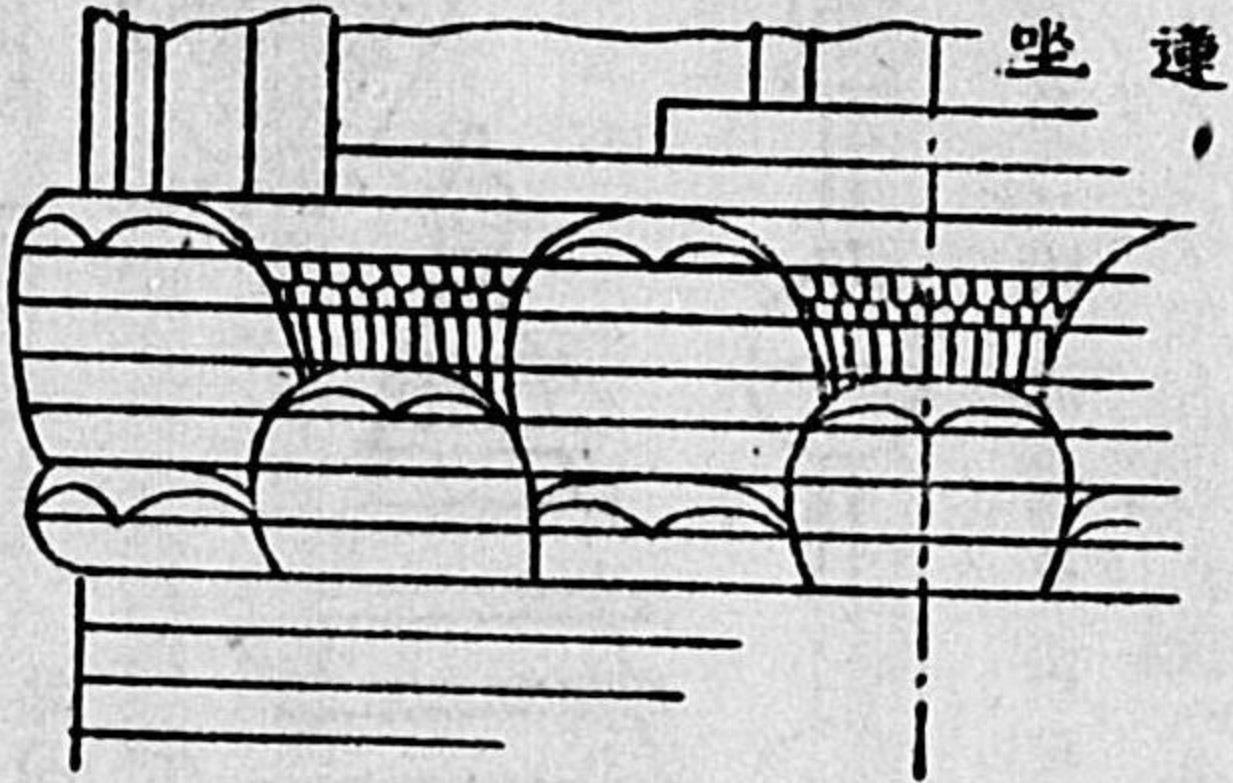
たるもの如きも今全く舊形を失へり。塔身六面には常例の佛像及び附屬物件あり。塔身は第六五三圖(甲)の如



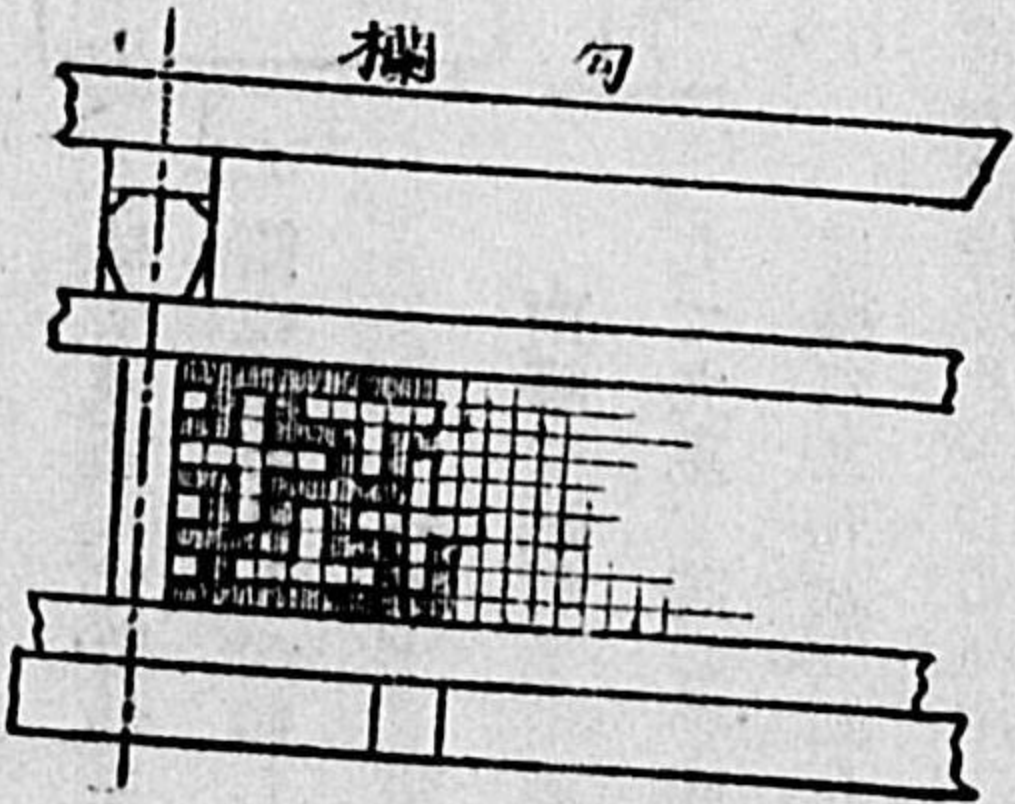
第六五二圖 鐵嶺の南塔



第六五三圖(甲)の如



(甲) 圖三五六第
(座蓮) 部 細 塔 南 嶺 鐵



(乙) 圖三五六第
(欄勾) 上 同

る勾欄あり(第六九六圖)、塔身の軒は二重にして料拱は出組なり。二層以上の軒は刹形より成り、最上層の屋蓋の南面に小なる窓の如き龕を穿ちたり。恐らくは中に佛像を納れたるものなるべし。相輪は原形詳かならず、今三球を有し、頂に一層小塔を冠す(第六五二圖)。蓋しもと五球を備へたるものなるべし。

南塔の形式手法は慈清寺の塔よりも更に新時代に属するが如し。或は清初若くは明末の重建なるべし。

其の八 開原縣

開原縣は大連を距ること鐵路三百一哩一あり、哈達河の北に位す。縣城の大小約方一哩、四方各一門を開き、

月城を備へ、壁上雉堞あり、城の中央十字街上に鼓樓あり、城内西南隅に古刹あり、俗に石塔寺と云ふ。

石塔寺(崇壽寺)

全遼志古蹟部に曰く、

石塔寺

開原城西
南隅有塔

盛京通志に曰く、

石塔寺在縣西南內有大塔一座

開原縣志曰く、

石塔寺即古崇壽禪寺在城西南隅後經商民修葺前有大塔一座後有小石塔一座

正統丁卯(西曆一四四七)黃瓚の撰にかゝる重修石塔寺碑記の中に左の句あり。

余撫其舊碑雖無全文可考其幸存而見者則崇壽禪寺四字熙然及載自唐乾元年有僧洪理大師始創建之遺趾寬宏大定三年人滅因建石塔爲大師龕此寺名之所由更也兵燹之後石塔尙存而寺就傾頽後僧淨善欲復其舊力不能致

(下略)

進士陳循の撰にかゝる重修石塔寺碑銘には左の句あり、蓋し正統重修を頌するものなり。

- 堂堂古刹 肇唐乾元 在遼之左 雄峙開原 肖像祀佛 高以何計
- 煌煌金身 爲國幾四 非空悲色 手眼皆千 坐大悲閣 法相森然
- 滿洲の佛寺建築

萬法三乘	有名有號	儼乎兜率	佛法僧寶	疊石爲塔	高入青冥
俯視今昔	何千百齡	風雨雪霜	閱歲既久	堅者僅存	朴者寔朽
名公鉅卿	與佛有緣	相繼修葺	加乎古先	永樂宣德	世躋熙皞
裴鄴守邊	復務興造	逮乎正統	時極昇平	曰楊與明	遂底其成

(以下略)

又陳嘉慶の撰にかゝる萬曆の重修石塔寺碑記には、特に伽藍の由來及び石塔に關する記事なきも、創立以來八回の重修を経たることを記し、萬曆の重修は甲午(西曆一五九四)に始りて、丙申(西曆一五九六)に畢ることを記せり。

周佩の撰にかゝる重修石塔寺碑記には創立の年代を不詳として曰く、

嘗思開原僻處要荒寺塔之制未至無稽考諸誌云始金元氏之國又云始於唐乾元時余幼藏修於茲閱所立石由永樂甲申迄成化丁未歲歷經五重修、云々

境内天順四年(西曆一四六〇)の開原重修石塔寺塔碑の銘に曰く、

(前略) 開原有祀佛處碑名曰石塔寺者其始爲崇壽寺寺建乾元間僧弘理建有塔高二丈祀佛有殿自國朝永樂甲申重修、云々

又境内道光十七年(西曆一八三七)の重修石塔寺記に曰く、

(前略) 開原石塔寺始自唐乾元時洪理大師所建崇壽禪寺也至大定三年復建石塔爲大師龕乃更名焉詳閱古石恭以縣志自明萬曆以前已經八重修矣、云々

以上の記録に徴すれば、伽藍は唐の乾元中(西曆七五八—七五九)洪理大師の創建する所にして、石塔は金の大定三年(西曆一一六三)の建造にかゝるもの如し。然るに縣志所載の洪理大師の傳には左の記あり。

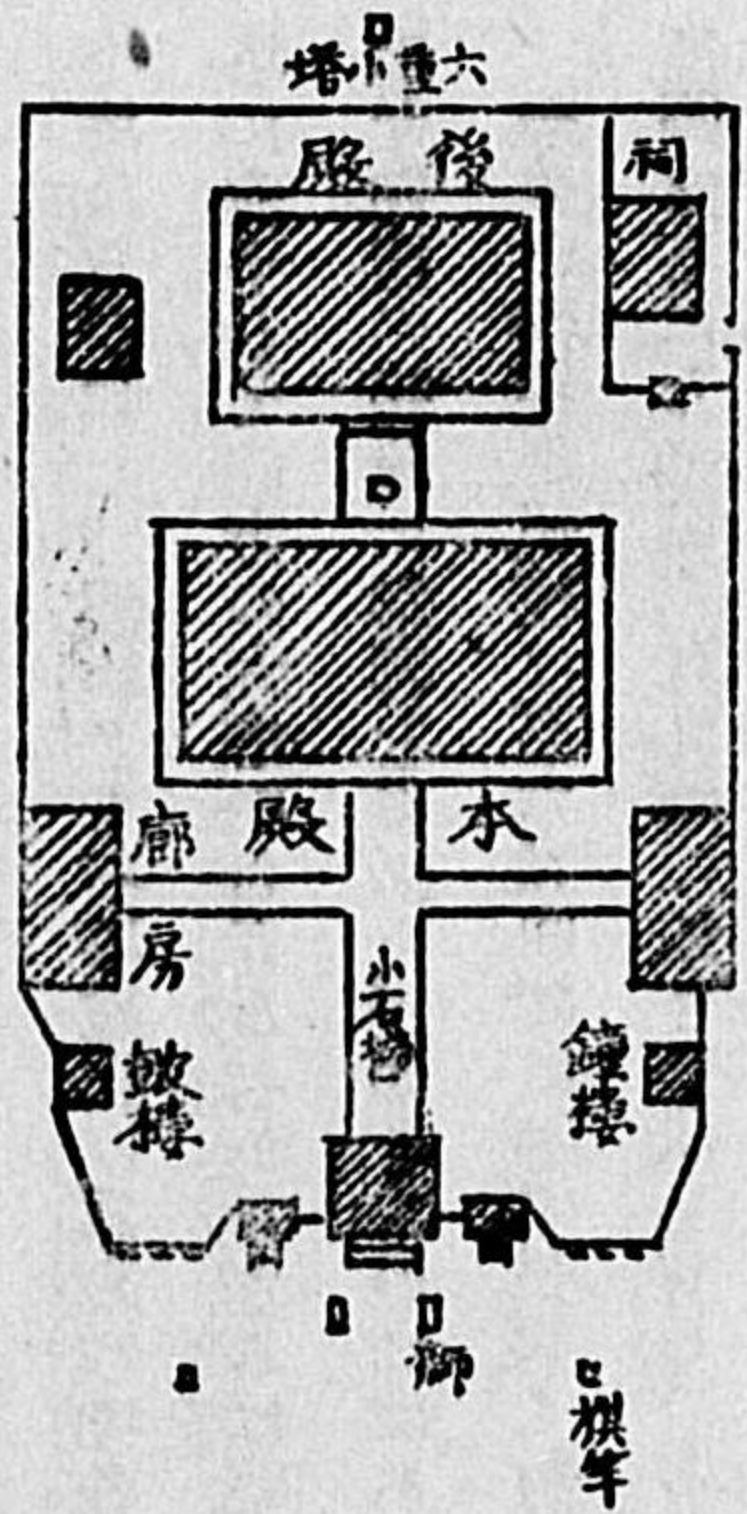
洪理大師

唐乾元時僧人洪理創建崇壽禪寺經樓佛殿五十餘間并造浮圖十三級高二十餘丈後人復造石塔於寺後更名石塔寺云々

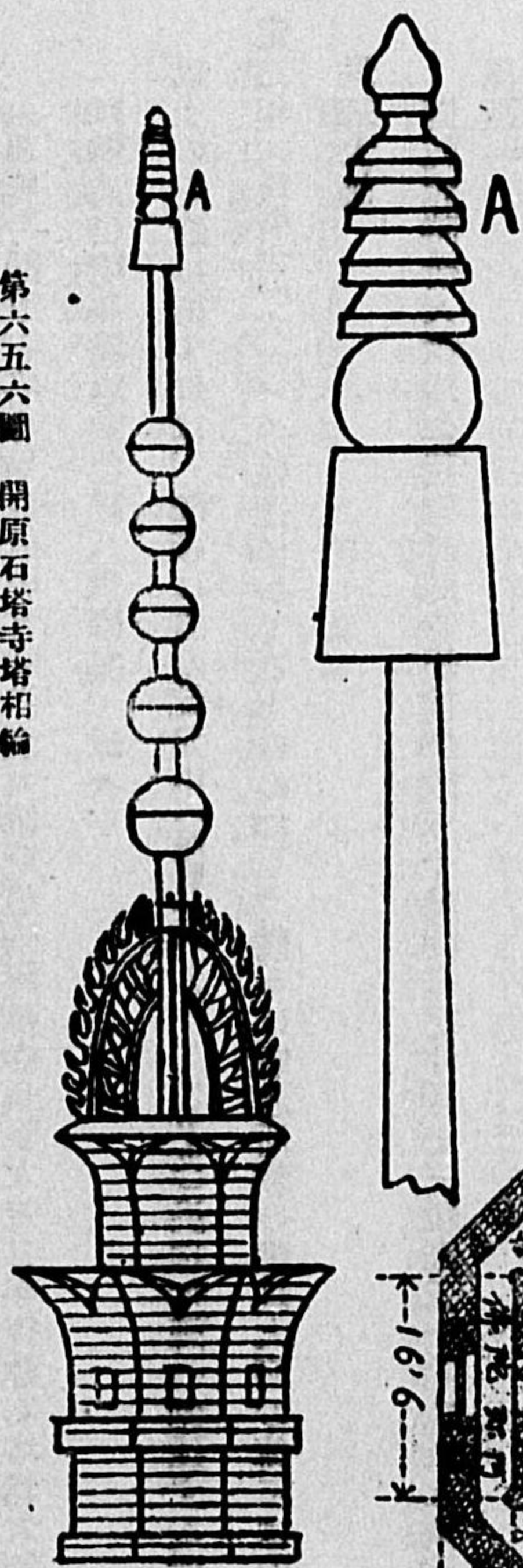
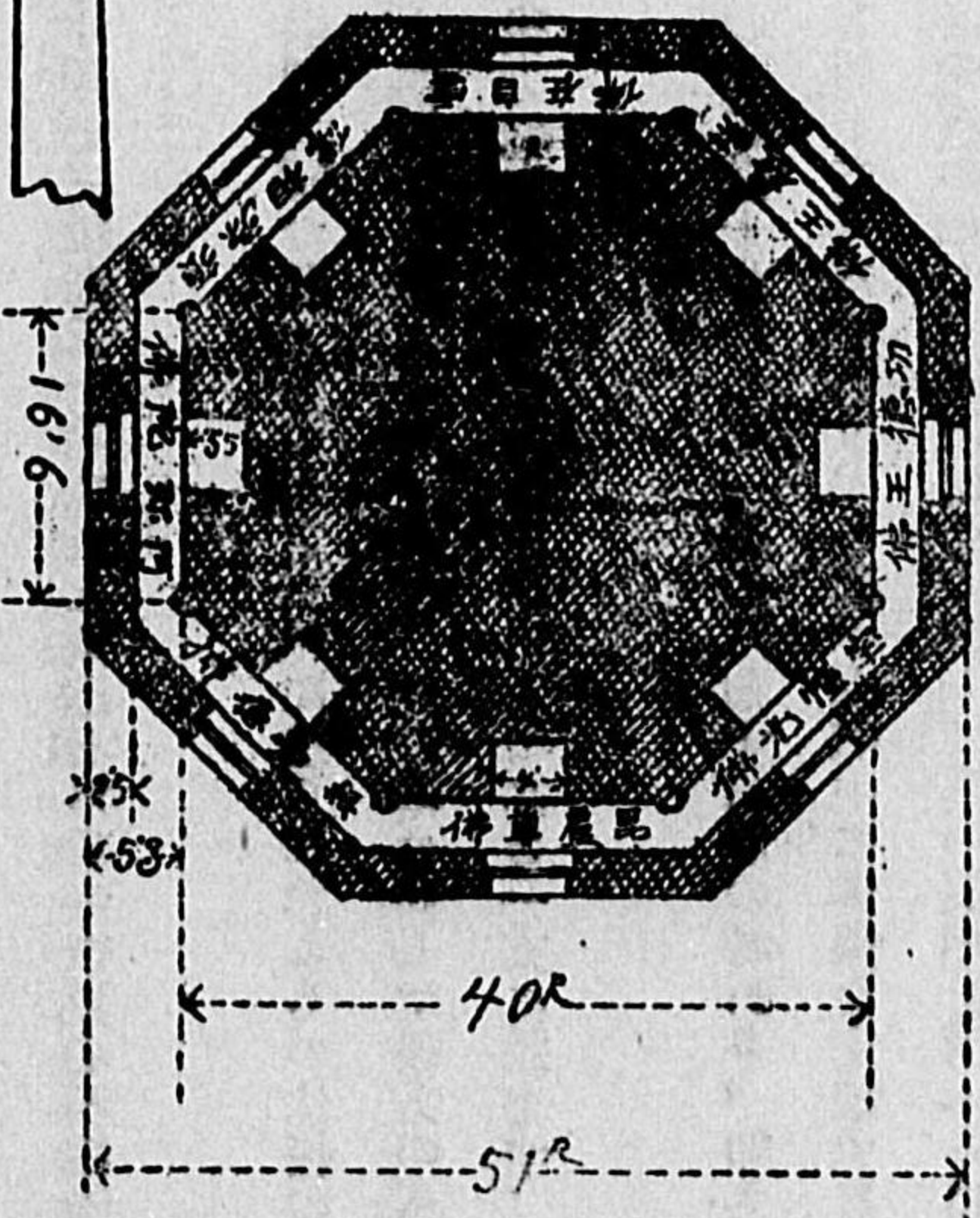
此の記事に據れば大塔は伽藍と共に乾元の創立にして、洪理大師の龕として大定三年に造られたるものは後の小塔なるが如し。然れども石塔建立の爲めに寺名を變更せし事蹟を正確なりとすれば、此の塔は決して後方の小塔に非ずして前方の大塔ならざるべからざるは明白なり。後方の小塔は六重の小石塔にして高さ一丈に過ぎず、未だ伽藍の體裁に影響を與ふるが如きものにはあらず。

現今の伽藍の規模は第六五四圖に示すが如く伽藍の山門の前方數十歩にして一基の八角十三層の塔あり。即ち所謂白塔にして第六九九圖の如き形狀を有し、塔身八角の各面十六尺六寸あり、各面中央龕中に佛像を安置すること第六五五圖に示すが如く、其の脇侍、天蓋、天人の制は常例の如し。基壇は今大破して其の真相を考ふるに宜しからず。壇上塔身を周りて小さき牆壁を築き、廂蓋を設け、一種の裳階を造りたるは頗る異例に屬す。蓋し

第六五四圖 開原石塔寺塔平面圖



第六五五圖 同塔



第六五六圖 開原石塔寺塔相輪

後代の附加なるべし(第七〇〇圖)。

塔身の軒は中央に唯一具の二手先の料拱を納れ、一重の「まばら垂木」を施し、隅に一箇一面に四箇の風鐸を懸け屋蓋は瓦を以てこれを掩へり。二層以上の手法も亦全く遼陽の塔に於けるが如き手法を反覆せり。唯各面各三箇の鏡を嵌入し、中央の鏡は左右のものよりも大なり。相輪も大體に於いて遼陽のものに似たり。第六五六圖に其の概略を示すが如く、下に二重の蓮臺あり、其の上に水煙あり、其の上に五箇の球あれども傘蓋はこれを缺き、絶頂に一種五輪塔に類する四層の小塔を冠せるは頗る興味ある手法なり。

寶塔祥異

城西南隅有石塔寺唐時所遺原名崇壽禪寺舊有寶塔昔在寺中今在寺外高二十丈疊級十三層東南角挿寶劍一頂尖串鐵壺鬪五無風自響不過三日內冬則雪夏則雨矣週圍懸寶鏡數百晝夜放光、云々

以て相輪の制及び鏡の存在を知るべし。寶劍は今其の痕跡を見るべからず。此の塔の形状は遼陽以下各所の實例に比すれば大なる相違あり、即ち其の上部に向つて縮小する程度殊に著しく、每層其の廣さを遞減して終に相輪と相融化するが如く、遠くしてこれを望めば恰も螺貝の或る種族の如し。又塔身の壁も鉛直にあらずしてやゝ内方に向つて傾斜し、稜に當れる柱の如きは傾斜頗る大なるを観察すべし。斯くの如きは皆此の塔の年代が甚だ遼遠なることを證明するもの如し。

境内道光の碑によれば、此の塔の建立は金の大定三年なり。予は此の記事を信ぜんと欲するものなり。而して現今の塔は明かに金代の古式を存するものなることを信ぜんと欲するものなり。此の塔の佛像彫刻の形式はまた此の所信に向つて有力なる援助を與ふるものなるが如し。

前述の如く、此の塔の八面各佛像を納るゝの状態は第六五五圖これを示せり。而して其の莊嚴王佛と須彌相佛(第七〇一圖甲、乙)とは全然創作のまゝにして、今日に残存するものなるが如し。其の大き四尺、木骨の上に藁を巻き、藁筋に泥を混じたるものを以て下塗を施し、灰色の極微の粘土末に毛苧を混じたるものを以て上塗を施し、更に白漆喰を以て仕上げを施し、色彩を以て畫きたる一種の塑像なり。後代の修補にかゝれるものは赤色の土に毛苧を混じたるものを以て古代の泥塑の上に塗り厚さ一分あり、其の容貌溫雅にして些かの俗臭なく、些かの街氣なく、衣紋また繁に流れず簡に失せず、從容たる其の態度、微笑を含むが如き其の顔面、これ決して元以後のものに非ざるべし。元以後に非ざれば即ち金の製作ならざるべからざるが如し。

要するに、予は此の塔を以て金の大定三年創立當時の形式手法を存するものと認め、據つて以て他の建築物の年代を測定するの標準とせんと欲するものなり。

第七〇二圖は開原市街上の小塔なり。石塔寺内の小塔とともに最も興味ある珍種に屬す。開原縣志古蹟の部に曰く、

小石塔

在城南街高二丈圍徑五六尺餘亭立中
舊俗傳地下有一海眼故建塔以鎮之

其の年代未だ考ふるところなし。

第二章 滿洲佛寺建築の特性

以上の事實を根據として次に滿洲佛寺建築の特性を述べん。

其の一 平面

佛教伽藍は其の禪教に屬すると喇嘛教に屬するに論なく、總て同一の方針に由つて堂宇を配置せり。即ち其の主要なる殿堂はこれを大殿若くは大雄寶殿と名付け、其の前に廣潤なる空地を隔てて天王殿あり、兩殿の間空地の左右に東西配殿あり、これを伽藍の中心とす。別に大殿の後に後殿あることあり、天王殿の前に山門あり、山門と天王殿の間左右相對して鼓樓及び鐘樓あることあり。其他牌樓あるもの、碑亭を備ふるもの、塔あるもの、一々相均しからず。然れども支那本部の大伽藍に於けるが如き祖師殿、伽藍殿、禪堂、齋堂、客堂、羅漢堂等堂として相連るが如き偉觀あることなし。或は遼陽廣祐寺、開原石塔寺の如き巨大なる塔を有するものあり。斯くの如き場合には塔は伽藍中最も重要なる位置に在り。

滿洲に於ける佛教規模の伽藍は寧ろ甚だ大ならず、嘗に支那本部に於ける第一流の伽藍に比すべきものなきのみならず、其の箇々の堂宇も亦た多くは甚だ矮小なり。其の最大のものとも雖も廣さ七楹に超ゆることなし。只遼陽廣祐寺の塔の如きは、其の高さに於いて、大さに於いて、共に支那第一流の大作たるを失はず。

其の二 立面

滿洲の佛刹は其の立面に於いても亦た禪教と喇嘛教との間に劃然たる區別あることなし。而して其の規模の一般に壯大ならざるが如く、其の外観も亦た多く人目を惹くに足るものなし。輪奐の美も未だ竭せりと云ふべからず、意匠の精も亦た未だ到れりと云ふべからず、大殿と雖も殆ど常に單層にして且つ切妻なるもの多し。彼の支那本部に於いてしばしば目撃するが如き重閣、若くは數層の大厦の如きは滿洲に於いては絶無なり。況んや其の他の堂宇の如きは概ね凡庸の駄作と云ふも過言にあらず。

塔の形状も佛敎に屬するものは多角多層の一種に止まり、喇嘛教に屬するものは唯一の常式を固有するのみ。支那本部の各地に於いて見るべきが如き變化自在のものあらず。

堂塔のプロポーション及び線條色彩の諧調の如きも多く論ずるに足るものなし。要するに滿洲の佛寺建築は、美的方面に於いて未だ成功せるものに非ず。只だ滿洲の宮殿陵墓に於いては比較的精巧なる手法を顯はし、意匠また多少の變化あり。佛寺建築は此の點に於いて終に宮殿陵墓の建築に數歩を譲りたり。

其の三 基壇及び階

支那に於ける建築は其の如何なる種類を論ぜず、殆ど必ず基壇の上に建造せられ、基壇は更に土壇の上に設けらるゝことあり、殊に喇嘛教伽藍の大殿は必ず廣潤なる土壇の上に立つ。土壇は正面中央一箇所及び左右各一箇所に階を設けたり。其の上面は磚を敷き、周圍に石欄を繞らすもの多し。殿舎の下には別に基壇あり、基壇は建

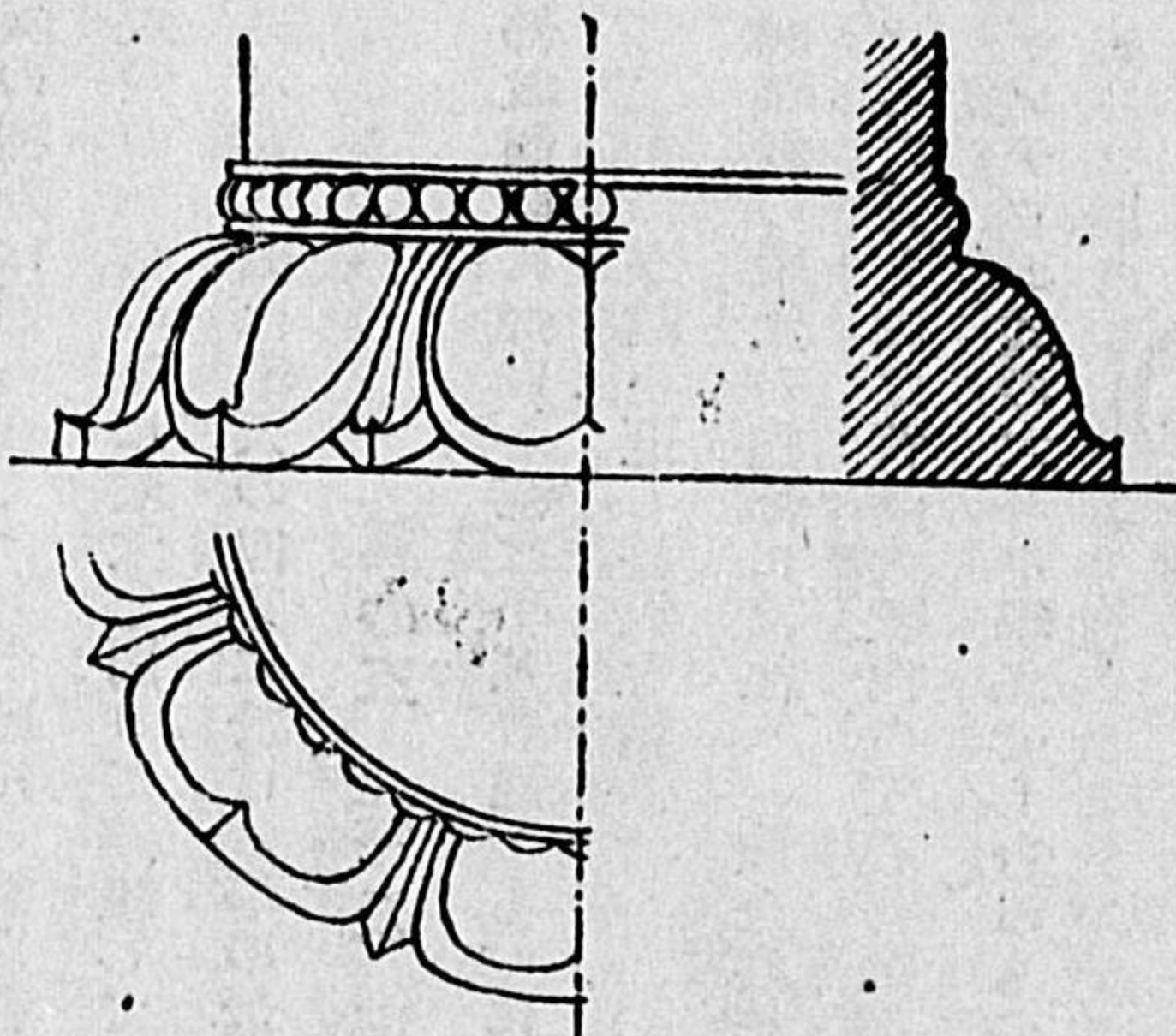
築の大きに應じて一出、三出、五出等の階を有す。

塔に於ける基壇は往々複雑なる幾層の滯より成り、其の間に種々なる裝飾手法を施せるものなり。

其の四 柱礎

柱礎は各種の建築に於いて多様の異例を示すと雖も、佛寺建築に於けるものは第六五七圖の如き蓮瓣より成る。

第六五七圖 蓮瓣より成る柱礎



第六五八圖 奉天西塔基壇



第六五九圖 奉天西塔大殿内



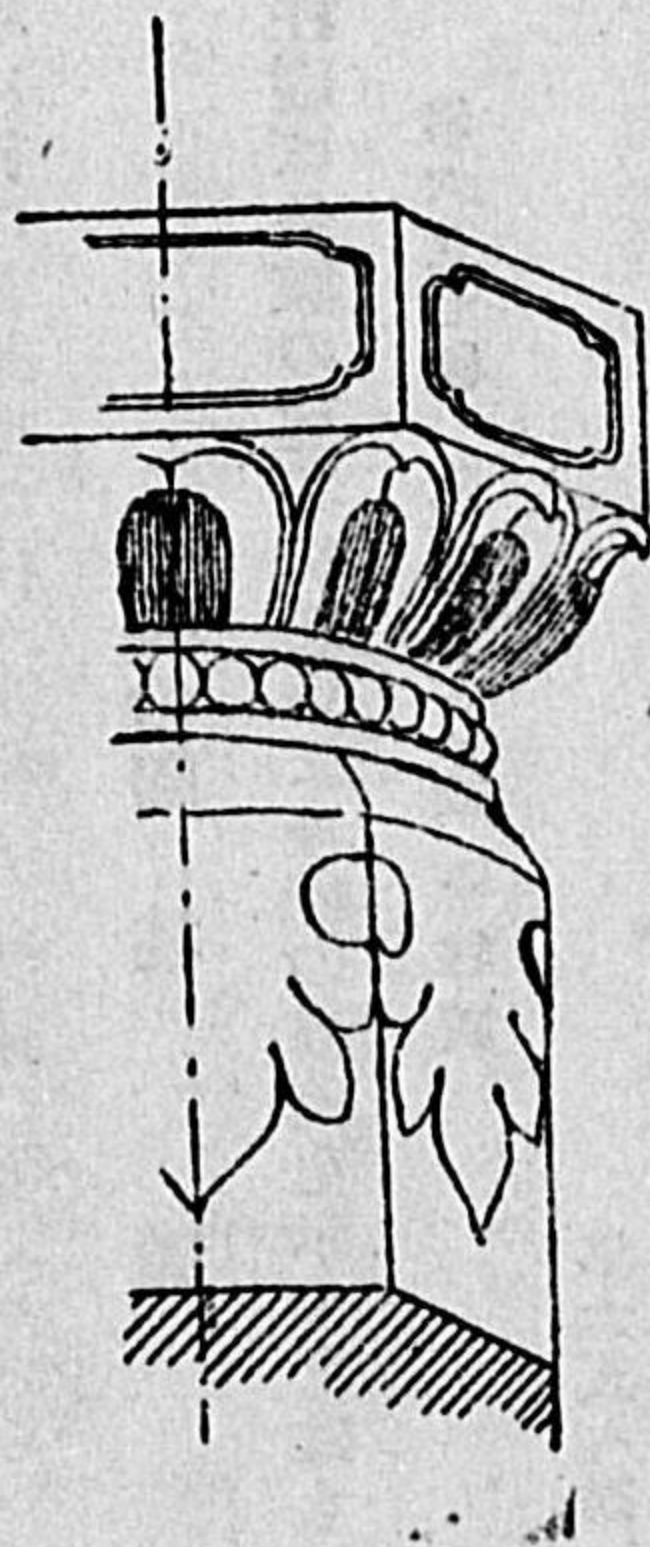
蓮瓣の種類は頗る多く、其の應用の範圍甚だ博し。塔身の基部、露盤の上部及び相輪の中隨所に賞用せられ、往殿堂の外壁の下に殿堂を周りて連続して用ひらるゝことあり。

第六五八圖は奉天の四方に於ける塔の最下の蓮座なり。斯の種の蓮瓣はまた柱礎にも賞用せられたり。

其の五 柱及び柱頭(大斗)

佛教伽藍に於ける柱は平凡普通のものにして特に記述すべきものなし。或は圓、或は方、或は大面取りの別ありて、上に臺輪を冠し料枱を備ふ。

喇嘛教の殿堂の内部には往々一種全然相異りたる柱あり。即ち純然たる西藏式にして著しく支那趣味と遠隔せり。第六五九圖は黃寺大殿内の左右菩薩を納れたる廊の柱なり。其の大斗は全く普通の意匠と相異り、遙に泰西ビザンチウム式の大斗を聯想せしむるものなり。



第六六〇圖 山西省 五臺山喇嘛教寺院の柱

其の斗の上部はアバカスに相當し、表面に木瓜形の彫沈めあり。斗繰りには蓮瓣あり、其の輪廓や、S字形の曲線より成り、著しく泰西趣味を發揮せり。斗尻に狭き帯を繞らしたり、これ亦泰西のネッキングに相當すべき意味を有す。柱は八角形にして上に一種の裝飾文様あり。

支那本部に於いても喇嘛教伽藍には往々斯くの如き柱あり。

第六六〇圖は山西省五臺山に於ける喇嘛教寺院の柱なり。

其の形式手法殆ど全く黃寺に於けるものに均し。西藏のベミオンチ等に於ける寺院の内部にも亦た此の種の柱頭あり。蓋し西藏に於いては到る處みな此の種の柱を用ふるものなるべし。

其の六 枱

滿洲の佛寺には豪華を極めたる大作なきを以て、其の枱の如きも多くは甚だ單簡なり。其の最も複雑なるものと雖も四手先を超ゆるものあらず。其の軒に於ける配置は總て「つめ組」にして、其の年代いよゝ新しくて其の手法ますます濃雜となり、往々繪様肘木を用ひ、彫刻より成れる尾垂木を備へたるものあり。第六二〇、六二一、六二七、六二八、六三三の諸圖を参照すべし。

其の他塔に於ける基壇の腰組等に於いて、やゝ單純なる「あま組」の適用を見ることあり。

其の七 軒 廻

軒は大多數は二重にして、地垂木と飛椽垂木とより成り、兩者共に方形なるもの多し。垂木の制は儼正ならず。而して多くは其の隅に近き邊より急に放光狀に排列せられて終に隅木に終る。即ち隅に近き邊より急に變じて所謂垂木となるものにして、構架上甚だ不自然なる手法に陥りたるものなり。軒の反轉は比較的激烈ならず、これを北清地方に比して更に緩なるを観察すべし。

其の八 藻井

殿堂の内部は普通小屋組を露出すれども、其の大殿、特に喇嘛寺の大殿の如きは藻井を以てこれを蓋へり。藻井は我が所謂格天井にして、これに極彩色を施せるものなり。宮殿の藻井には多く龍を畫けども、佛殿の藻井には通例佛教に因みたるものを以てこれを裝飾す。黃寺の場合に於いては中央に八葉開敷の蓮華を納れ、中心及び各葉に西藏文字を書けり。西塔本殿の藻井には蓮華のみを納れたり。

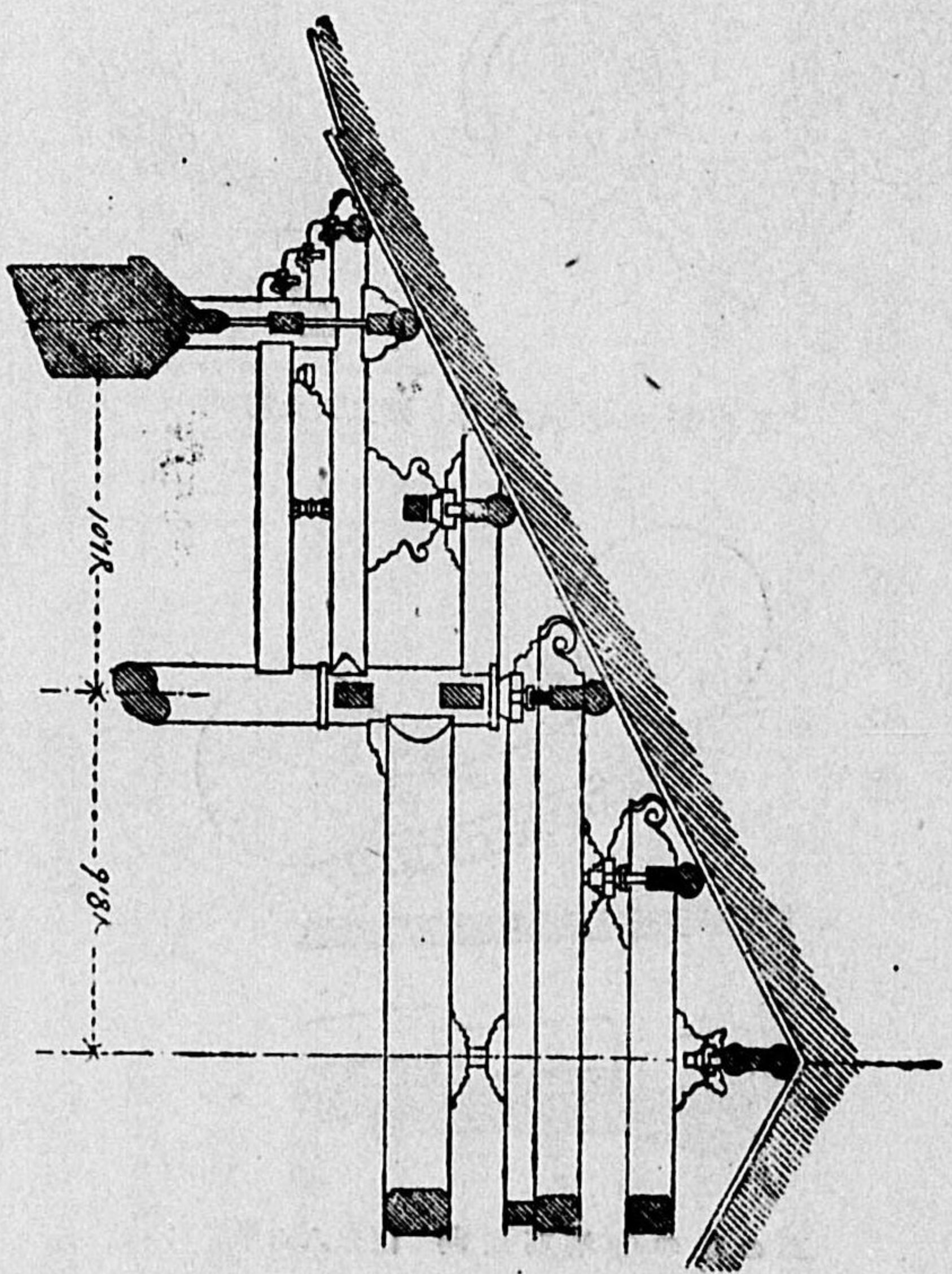
其の九 小屋組

小屋組は支那全土共通の梁束式にして千遍一律の方法を反覆せり。第六一圖は元來遼陽關帝廟に於けるものなるも、今これを仮りて佛寺建築に適用す。圖に示すが如く、小屋は梁と束との單簡なる組織にして一も鐵材を混用せず。

黃寺の本殿其の他の例の如く、藻井を以て内部を蓋ふ場合の外は、小屋組は悉く露出せらるゝを以て小屋材は適當に裝飾せらる。即ち往々複雑なる彫刻と極彩色とを施し、往々華麗人目を眩するに至るものあり。

其の十 屋蓋

屋蓋の形状は入母屋、切妻及び寶形あれども一も四注のものを見ず。蓋し四注は宮殿及び特殊の廟祠にのみ用ひられ、普通の佛寺にはこれを用ひざるもの如し。而して其の何れの形状を問はず、みな瓦を以てこれを蔽へり。瓦は黃寺に黄色の碧料瓦を用ひたる外は、みな普通瓦にして一も碧料瓦を用ひたるものなし。碧料瓦は宮殿

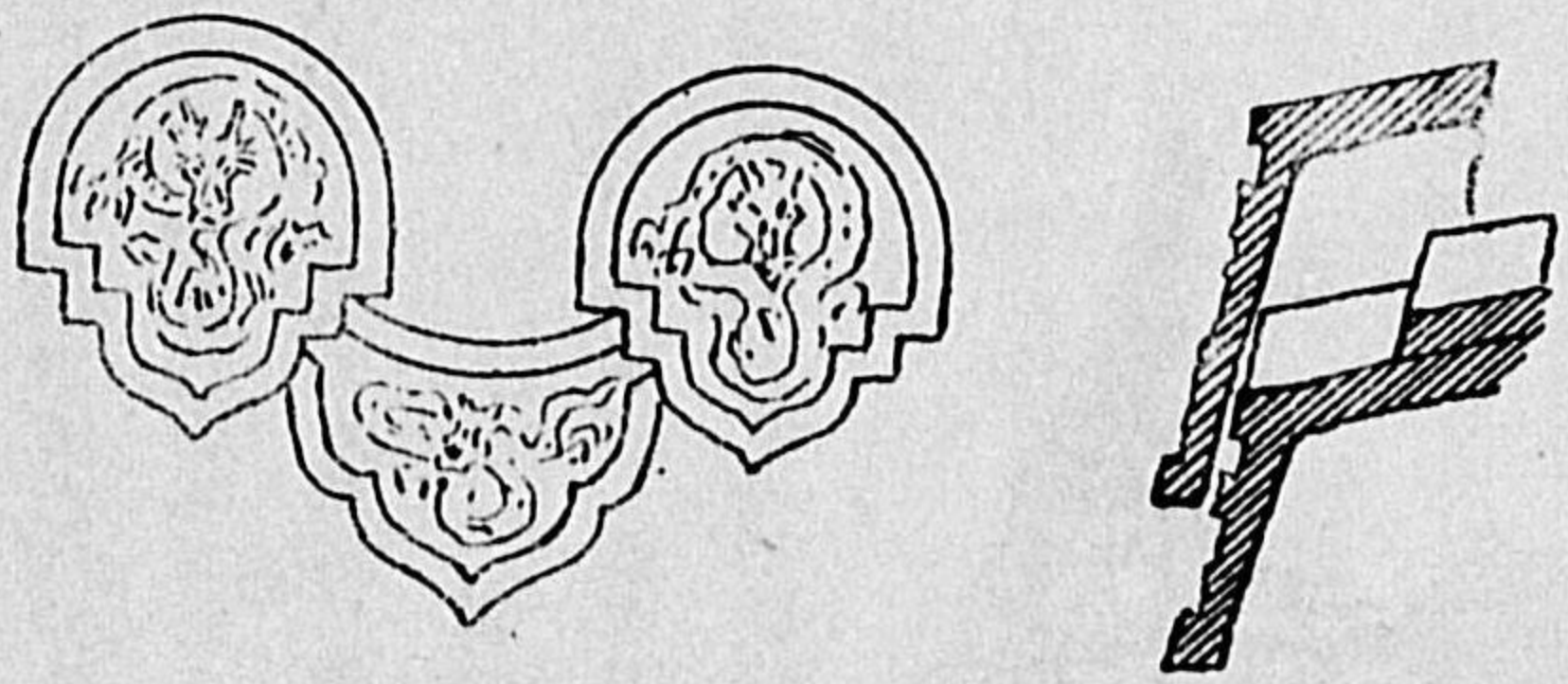


第六一圖

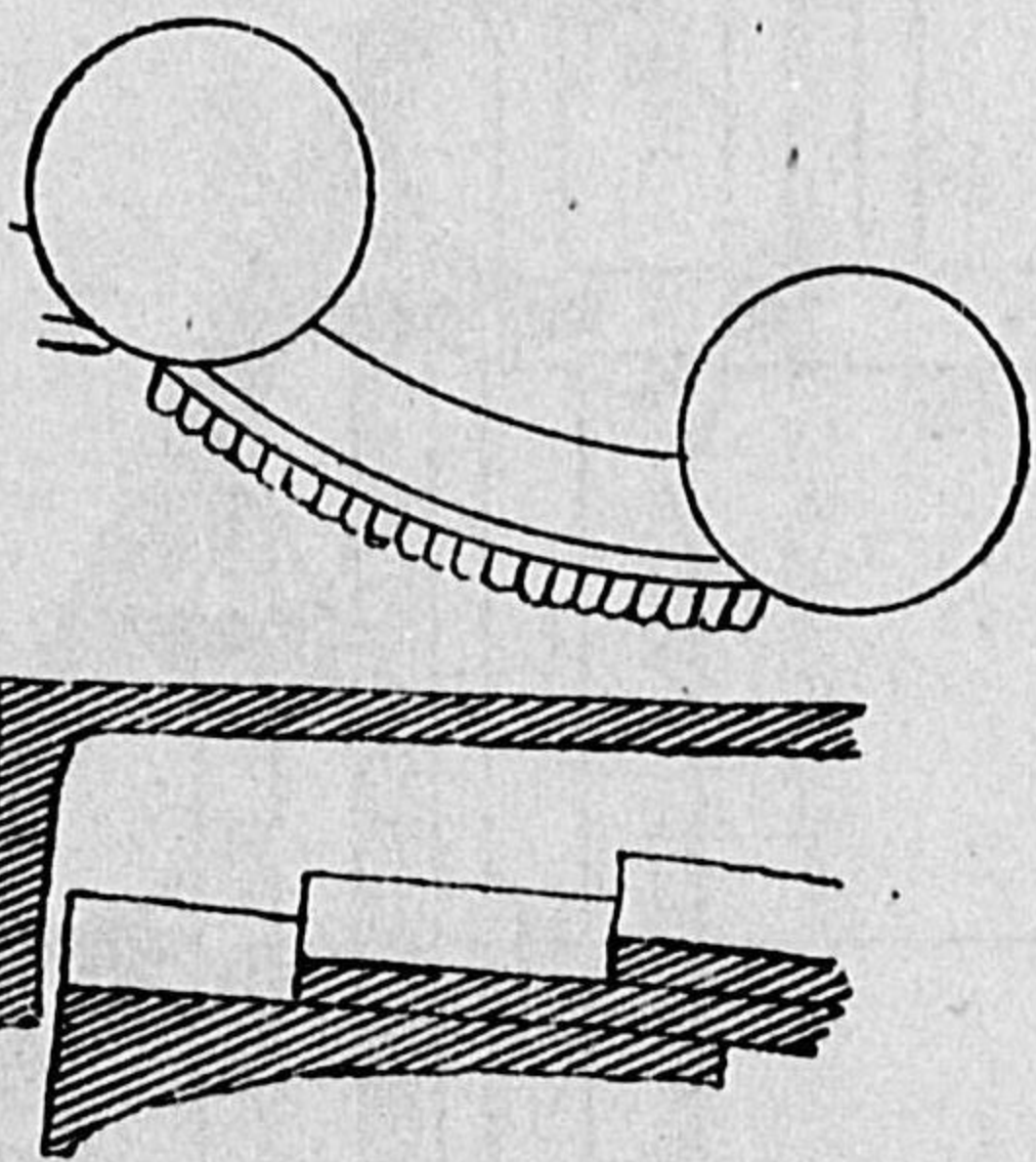
遼陽關帝廟の小屋組

及び特殊の廟祠に限りてこれを用ひたるものなるが如し。其の葺法は主要なる殿堂塔婆は本葺なるも、低度の堂舎は即ち丸瓦を用ひざる普通家屋の葺法に均し。

屋蓋の裝飾も亦寧ろ甚だ單純にして宮殿の豪華なるが如き比にあらず。其の棟の左右には正吻あり、棟の中央には通例寶塔を背負ひたる獅子を立たしめ、寶塔の頂より左右に鐵鎖を垂れ、其の末端は獅子の左右に侍立せる童子これを把れり。下り棟には旁吻を置き、隅棟の脊上には鬼龍子を配置すること常例の如くなるも、鬼龍子は支那本土に於けるが如く賞用せらるることなし。



瓦の殿大寺黃天奉 圖二六六第



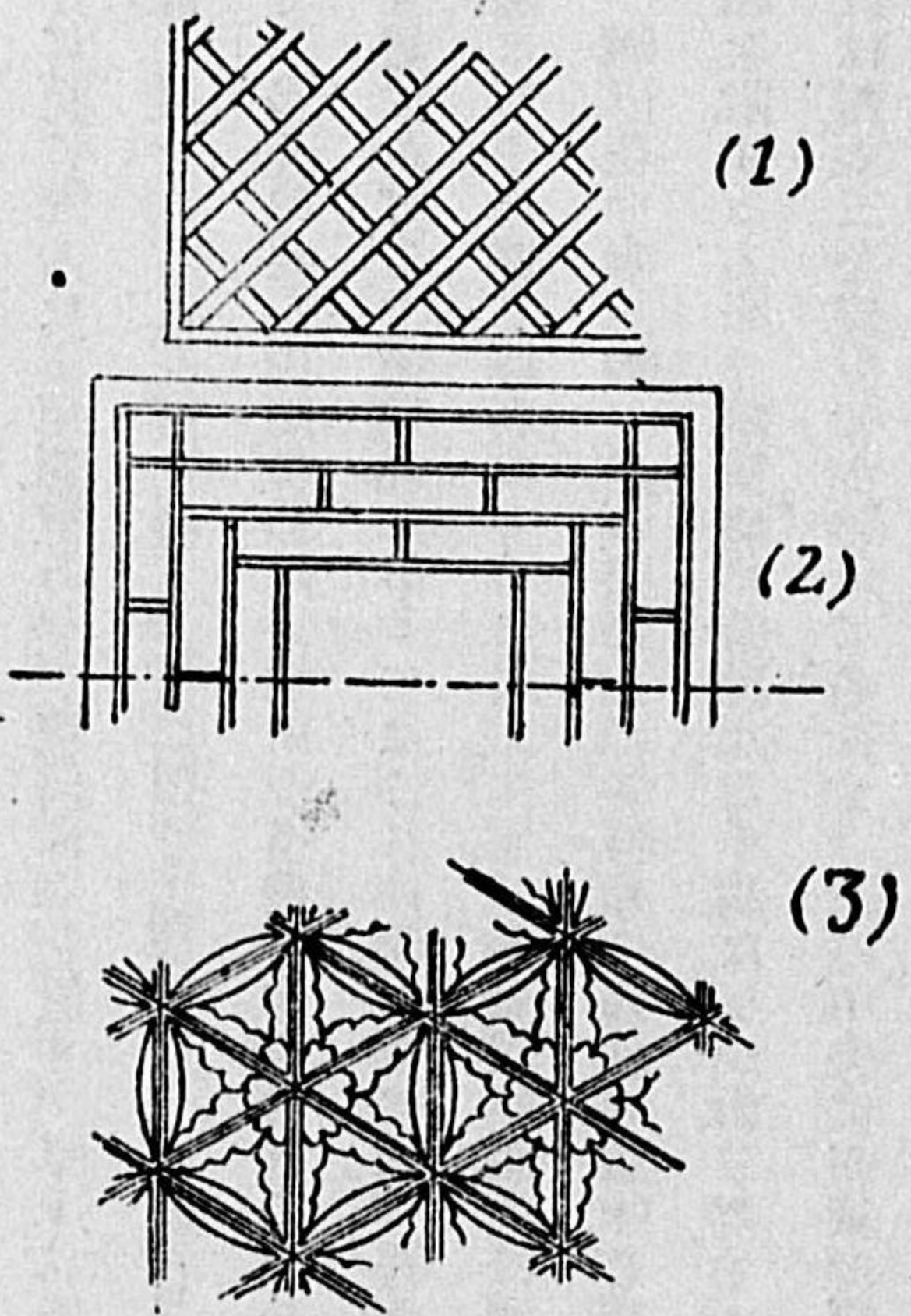
瓦の塔の寺塔石原開 圖三六六第

瓦の形狀には數種あり。第六六二圖は黃寺大殿のものにして、其の巴瓦は圓形をなさずして下に尖り、唐草瓦と共に龍文を有せり。第六六三圖は開原石塔寺の塔の瓦なり。其の巴瓦は圓形をなし、から草瓦の下端に齒狀の裝飾あり。又から草瓦の末端甚だ厚きは注意すべき現象にして、

其の年代の極めて古きを示せり。

其の十一 窓牖及び扉

窓牖は通例花狹間を納れたり。狹間の意匠は多岐に亙ると雖も、要するに方形、圓周、六角、若くは三角を以て骨子とし、これに曲線形の筋肉を添加して組織せるものなり。第六六四圖は其の最も普通なる數例なり。圖中(1)は最も簡單なるものにして最も多く用ひらる。(2)はやゝ卑俗なる堂舎に賞用せられ、(3)は主として宮殿に用ひらるゝものなるも、稀に寺觀廟祠等に適用せらるゝことあり。



第六六四圖 窓牖の花狹間

殿扉は軸に由つて廻轉すべからしめ、框を以て輪廓を作り、通例上半部に花狹間を納れ、下半部はこれを板羽目とし、適當の裝飾文或は彫刻を施せり。

門扉は所謂板唐戸にして花狹間を備へず、多くは環甲を以てこれを裝飾せり(第六八〇、六八一、六八二圖)。

其の十二 内部の莊嚴

佛寺殿内の莊嚴は殿の性質及び其の本尊の種類に由つて各均しからざるも、本殿は多くの場合に於いて一體若くは三身の釋迦を本尊とす。本尊は通例跏趺坐像にして蓮座の上に安置せらる。蓮座の下に華麗なる臺座あり、臺座の下に更に壯大なる須彌壇あり、壇前に卓を置き、卓上に五具足を陳列す。五具足は多くは金屬製にして中央に香爐を置き左右に花瓶を置き、更に兩端に燭臺を立つ(第六八三圖)。本尊と障壁を隔て相背きて觀自在菩薩の像を置き、多くは其の周圍に補陀洛迦山の模型を作りて童子等を點出す。禪刹にありては殿内左右の兩側に十八羅漢を安置すれども、喇嘛寺にありてはこれに代ふるに八大菩薩を以てするを常とせり。此の場合には殿内の裝飾の華麗なること遠く禪刹のものに超えたり。喇嘛教の殿内にはまた殆ど常に八寶の陳列を見る。八寶とは蓋、魚、罐、螺、花、傘、輪、長の謂にして各特殊の宗教的意味を有せり。佛の光背の上端に迦樓羅が龍女の脚を握める形相を附するも亦た喇嘛佛に特殊なる手法なるが如し。

天王殿は四天王を安置せるを以て名付く。殿の中央に布袋の相なる彌勒を安置し、これと障壁を隔てて相背いて韋馱天の立像を置く。殿の四隅に四天王の像あり、殿若し南面するときは通例左の如き配置に成る。

東北 廣目天(摩利海)琵琶を彈す

東南 持國天(摩利青)劍を把る

西北 多聞天(摩利紅)傘を持す

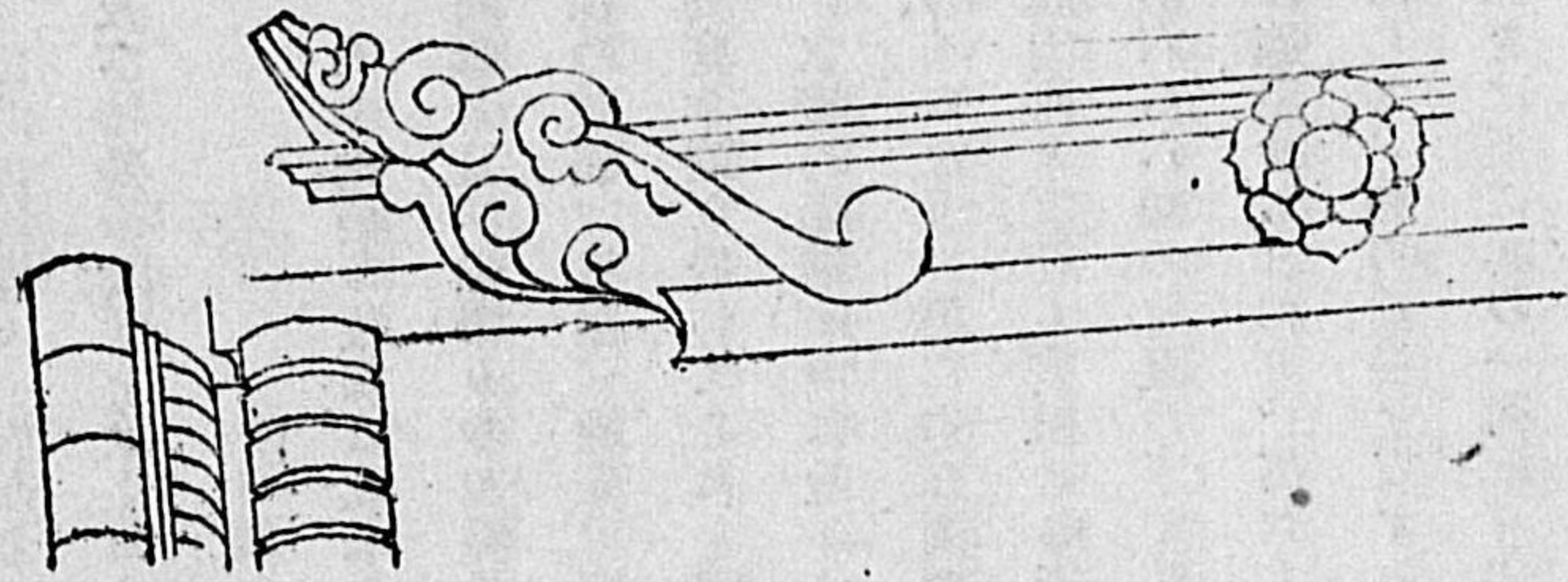
西南 增長天(摩利受)蛇と鼠を握む

山門には往々一對の金剛を置くことあり。東西配殿以下みな各本尊ありて適當の莊嚴を施せり。然れども本殿及び特殊の殿堂を除くの外は極めて粗悪にして觀るに足るものなし。

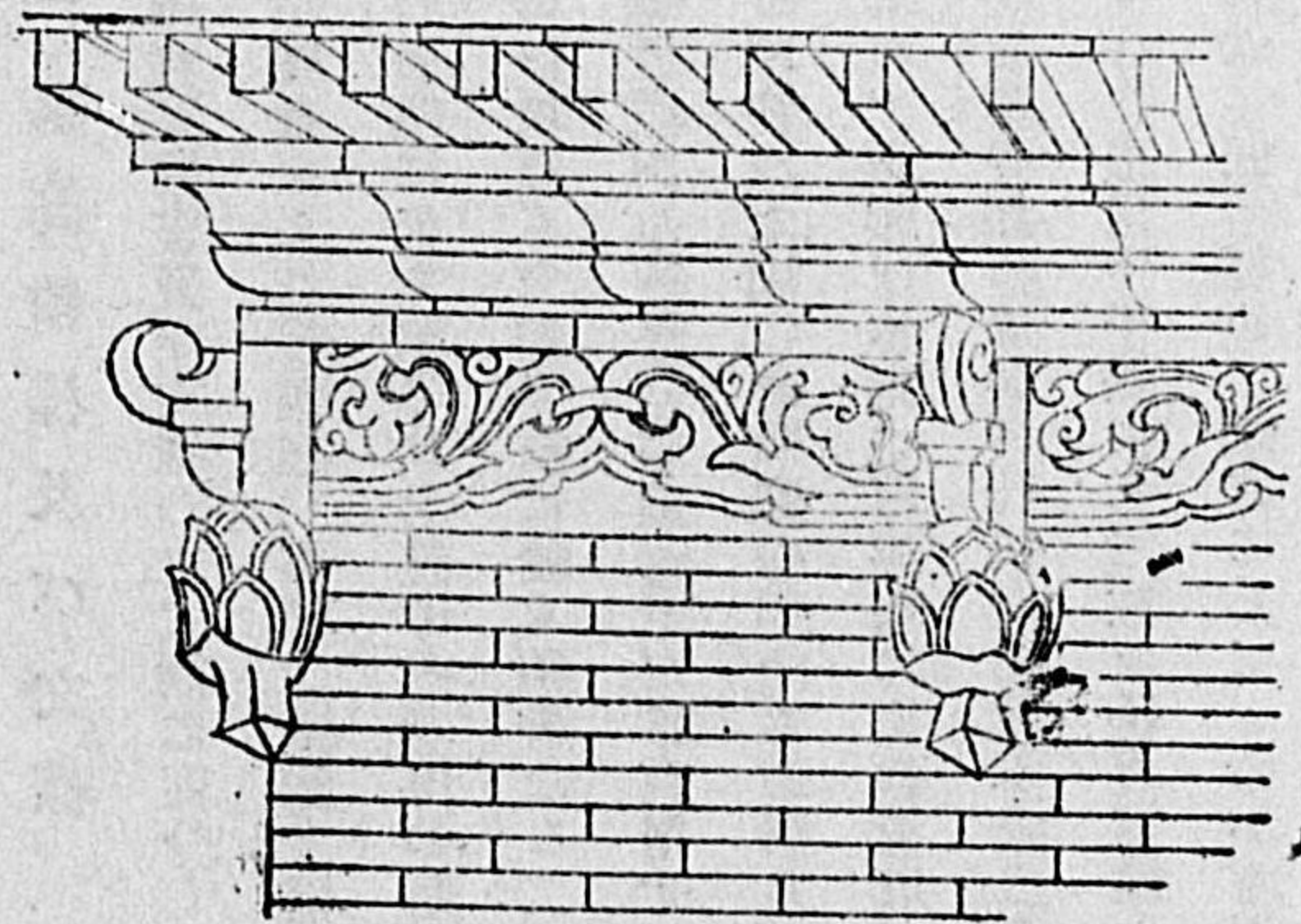
其の十三 裝飾繪様及び文様

佛寺建築の裝飾は元來これを彫刻、繪畫及び文様の三大綱に區分し、彫刻は更にこれを立體彫刻、高彫り、薄肉彫り及び線彫りの四種に分ち、繪畫はこれを畫題、布局、描法、色彩等の各方面よりこれを觀察し、文様は文様の種類、組織、線條、配色等の各項に分ちてこれを説くべきものなるも、斯くの如きは非常なる大問題にして到底本篇に於いてこれを試むるの餘地なし。即ち茲に最も顯著なる二三の事例を摘記して以て足れりとすべし。

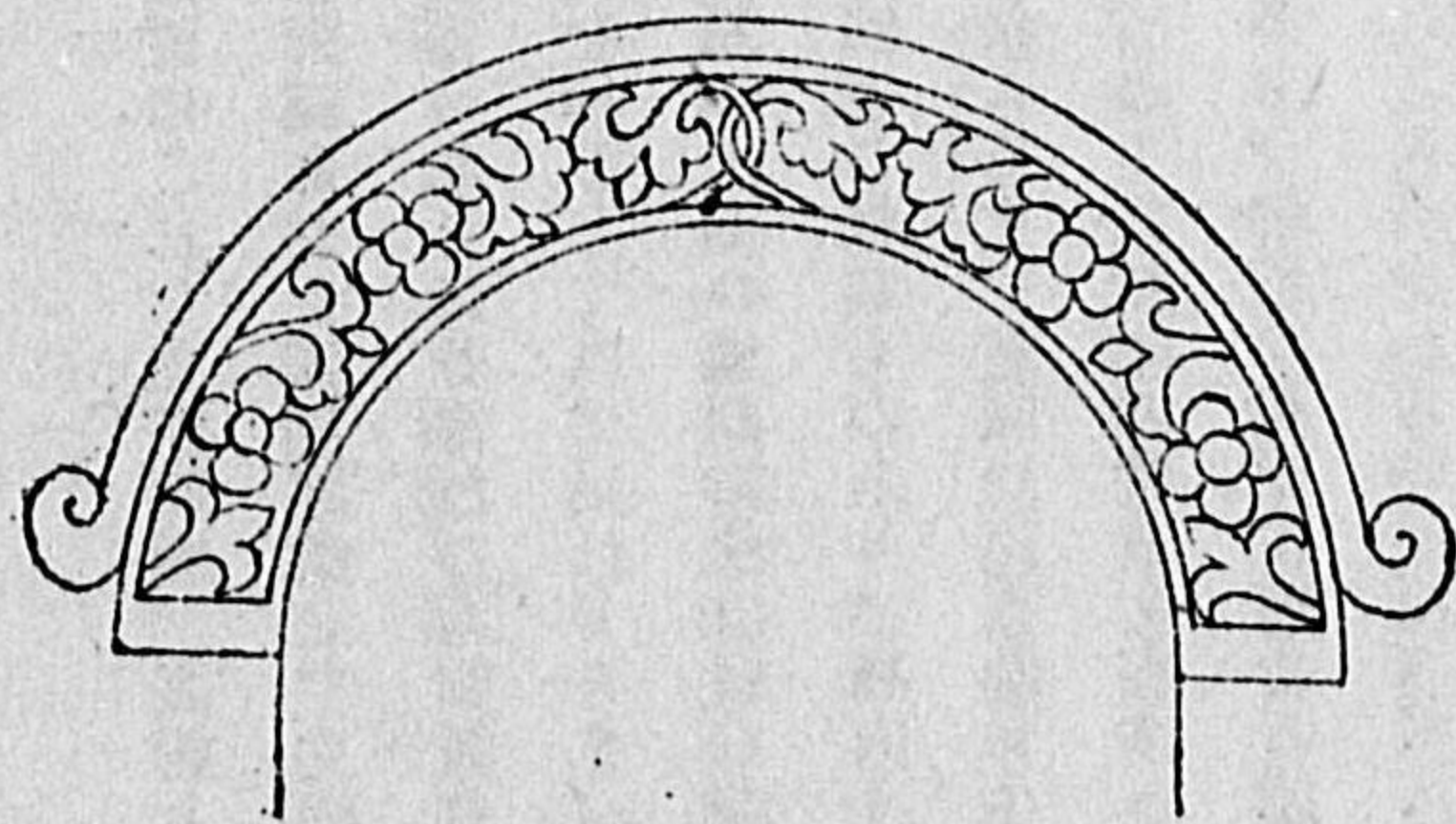
立體的彫刻の中に就いて、喇嘛教殿内(宮城にも實例多し)に賞用せらるゝ柱頭の上部の鬼面彫刻は頗る奇異なるものなり。第六六五圖に於ける屋背の末端の曲線體の如きも奇想人をして驚倒せしむるものあり。高彫り及び薄肉彫りは最も賞用せる方法にして、石彫、木彫、磚彫共にこれ有り、題目はから草文、靈獸、龍等最も多し。第六六六圖の蛇腹の下に於けるから草の如きは其の特に賞用せるところにして、多くは肘木の性質を有する部分に適用せられたり。第六六七圖も亦た慣用の手法にして往々甚だ複雑なるものあり。佛塔の表面に施せる薄肉彫にして、佛的意義を有する物件には意匠の極めて豊富にして、しかも端嚴高尚なるもの少からず。第六六八圖の如きは正に其の一例なり。第六六九圖より第六七二圖に至る迄は、みな天蓋の形なり。如何に其の意匠の謹嚴にして、しかも變化に富み手法の自在なるかを觀察すべきなり。



背屋祠小内寺塔石原開 圖五六六第



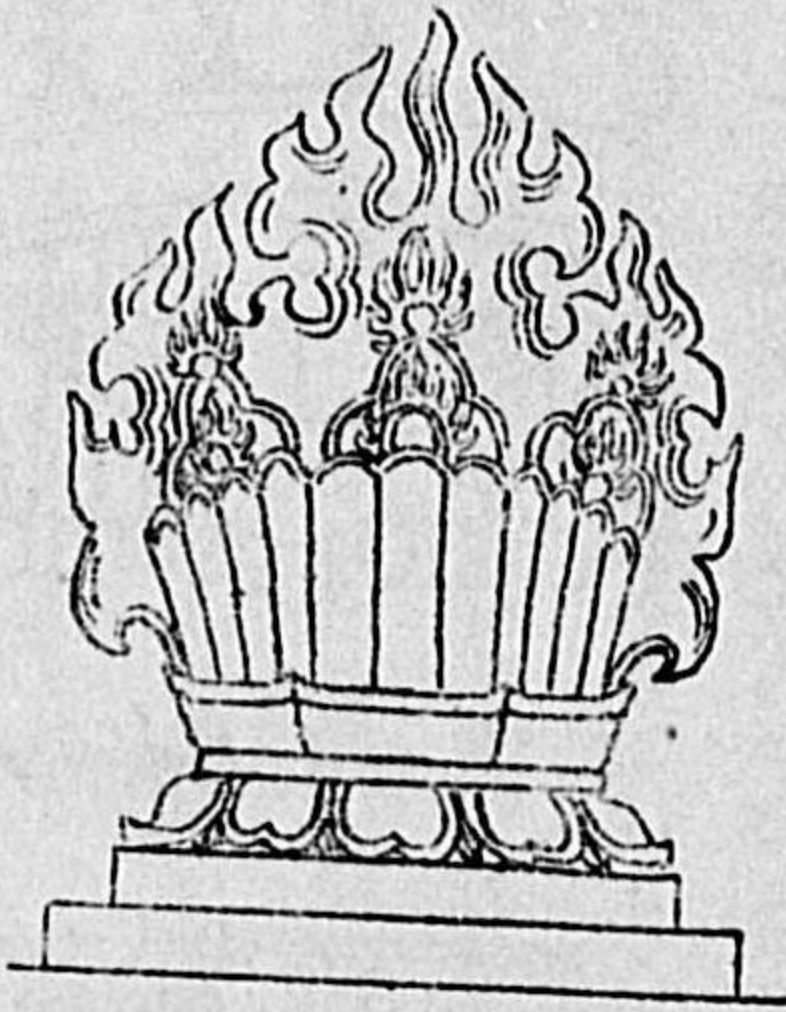
先軒樓牌塔西天奉 圖六六六第



拱の上龍塔東天奉 圖七六六第

第六六八圖

奉天四方塔基壇前面中央の羽目



繪畫は比較的多く用ひられざりしが如し。奉天西塔本殿内部に清

初創立の際に畫ける佛畫の猶ほ今日に存するものあるは頗る珍とするに足る。其の他興京の地藏寺にやゝ觀るべき殘片あり。料枋梁

桷の間に往々極めて劣悪の小畫を見るも素より論ずるに足らず。

裝飾文様は極めて重大なる問題なり。蓋し滿洲建築の死活を制す

べき權能を有するものは即ちこれなり。凡そ支那建築は即ち裝飾文

様及び色彩の建築なり。若し支那建築よりこれ等を奪ひ去らば、其

の殘る所は即ち寂寞なる枯骨のみ、故に予は斯の重大なる問題を尊

重するの意を以て他日別にこれを詳論せんことを期し、本篇に於いてこれを省略することとせり。蓋し文様のこ

とたる、色彩と相伴つて始めてこれを談ずべし。色彩圖無くして文様を説くは既に半ば其の意を失へるものと謂

ふべければなり。

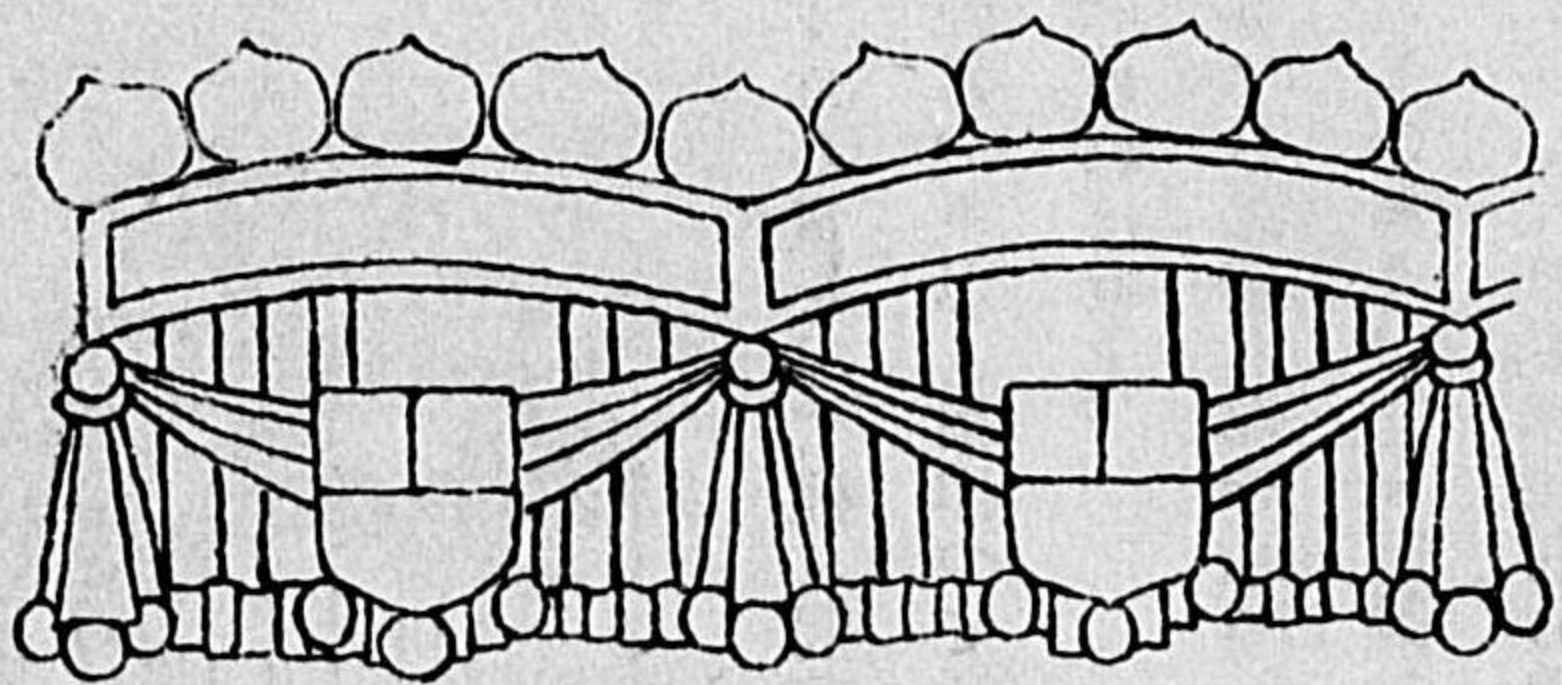
要するに滿洲佛寺建築裝飾の性質は、大體に於いて支那本部に於けるものと相均し。只これに比して往々奇巧

なるものあり、往々端嚴なるものあり、予は滿洲建築は其の平面及び立面に於いてよりも、寧ろ其の細部及び裝

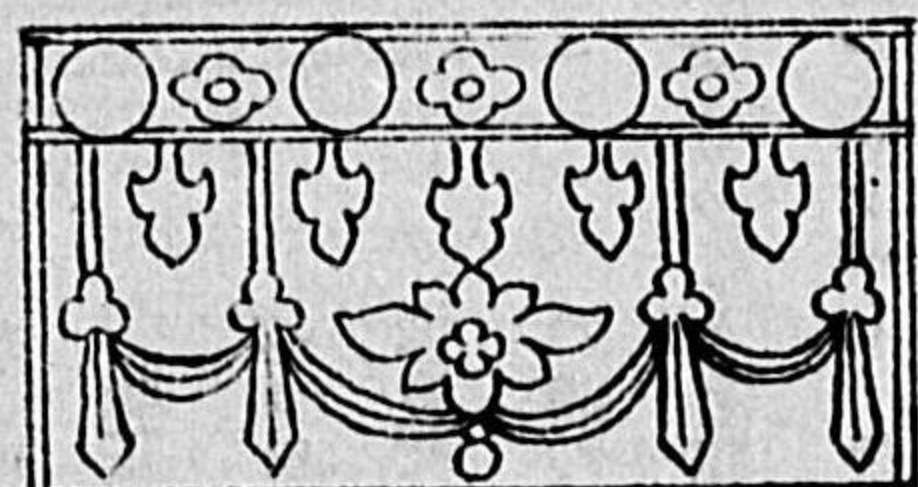
飾に於いて成功に近付けることを認めんと欲するものなり。

其の十四 塔及び相輪

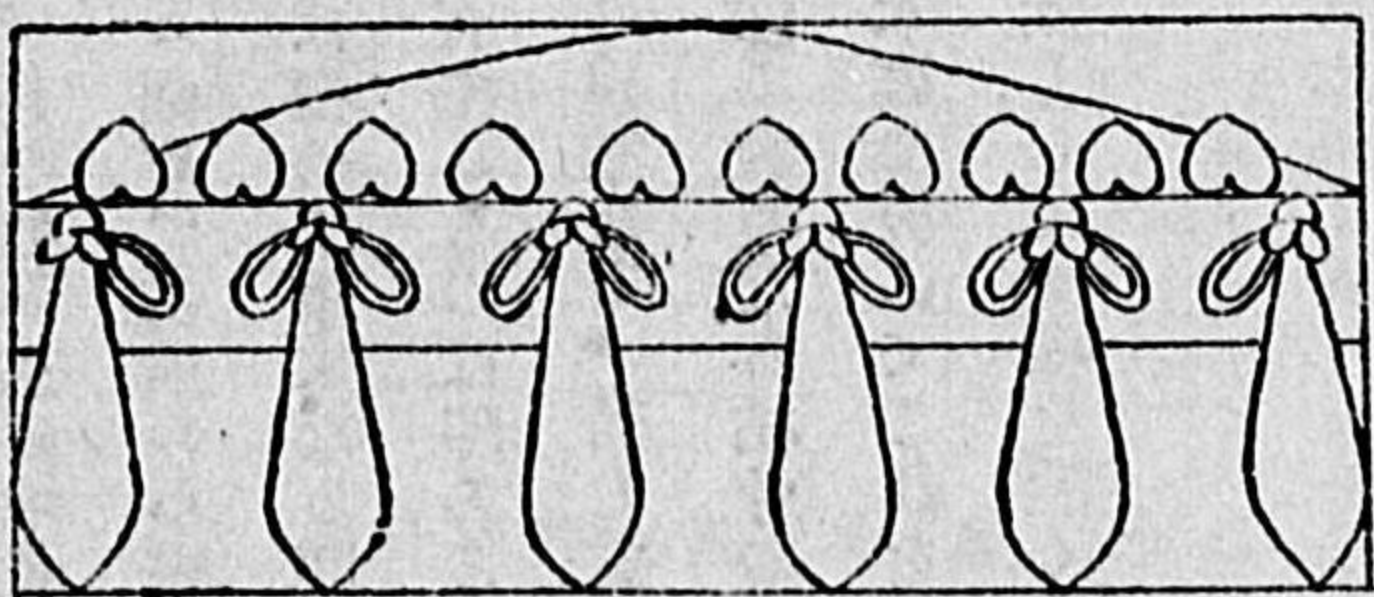
滿洲の佛寺建築



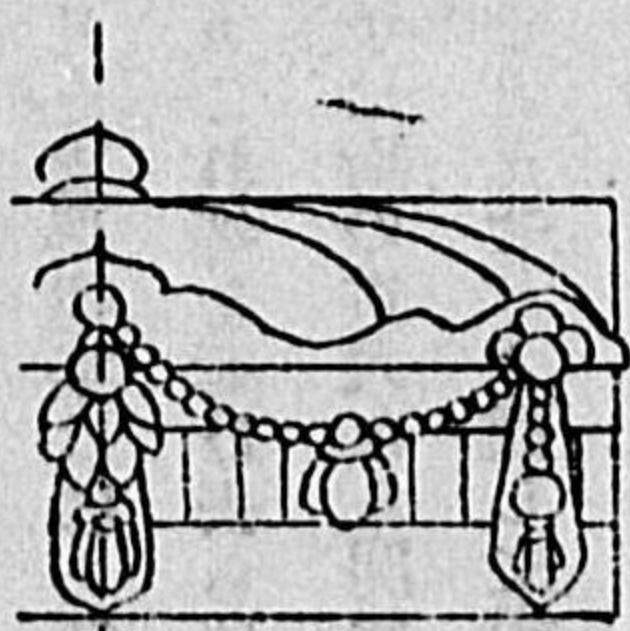
蓋天上侍脇塔寺祐廣陽遼 圖九六六第



圖〇七六第
蓋天の像佛塔南嶺鐵



蓋天の尊中寺塔石原開 圖一七六第



圖二七六第
蓋天の侍脇寺塔石原開

塔に關しては茲に別に一言を費すべき必要あり。滿洲に於ける塔はこれを二種に大別することを得、一は佛塔にして他は喇嘛塔なり。本篇記述の例を以てすれば、遼陽、開原等に於けるものは第一種に屬し、奉天の四方に於

けるものは第二種に屬す。是の故に其の特徴左の如し。

- 一、佛塔 多角形の平面を有し多層形の立面を有す。
- 二、喇嘛塔 圓形の平面(塔身)と單層形の立面を有す。

喇嘛塔は即ち西藏式の塔にして、印度のスツーパー(窣堵波)の直系に屬し、佛塔は其の起原亦たスツーパーにありと雖も、已に西域に於いて幾變遷を重ねて然る後支那に入りたるものなるが如し。

兩種の塔は是の故に全く其の形式手法を異にせり。特に其の最も重要なべき相輪の手法は全然別種の意匠に屬することを觀察すべし。佛塔の相輪は第六三〇圖及び第六四九圖に示すが如く露盤、寶瓶、水煙、五顆の寶珠、寶珠内の天蓋及び尖頂より成り、水煙の上部より屋蓋の八角に應じて八條の鐵鎖を出し、屋蓋の八稜の末端に連結せるに反し、喇嘛塔の相輪は第六八六圖及び第六四〇圖の釋杖に現はれたるが如く露盤、十三輪、傘蓋、日月及び寶珠より成れり。喇嘛塔に於ける相輪は支那本部に於いてもしばしばこれを見れども、佛塔に於ける相輪は支那全土未だ嘗つてこれに類する實例を見ず。即ち特に一種の流派として待遇するを得べき所以なりとす。

第三章 滿洲塔の起原

其の一 滿洲塔の名稱

前章に記述せるが如く、元來滿洲に於ける佛教建築の現状は概ね支那本部に於けるものと相均しく、古代の遺物

は甚だ稀れにして大多數はみな最近の重修にかゝり、特に大なる興味を以て記述するに足るべきものなし。強ひてこれありと云はば、即ち其の規模、體裁、裝飾等に於いて支那本部のものよりも遙かに劣等に位するの事實あるのみ。獨り滿洲の佛塔は其の間に立ちて斬然一種特別の形式を備へ、自ら一派の様式を大成せることを觀察すべし。假令其の規模の大きさに於いて、其の輪奐の美に於いて、其の史的價値に於いて、支那本部の或るものに比して一步を譲るべきも亦た優に一方の覇たるに足る。試みにこれを滿洲塔と名付けて北清塔及び南清塔に對比せしむるも亦甚だ過當に非ざるべし。

蓋し佛寺建築はこれを二種に大別することを得、塔婆及び殿堂これなり。塔婆は其の目的に由つて舍利塔、供養塔、記念塔、墳墓等に區分せらるべく、殿堂は其の目的と形狀とに由つて坊、門、亭、樓、閣、堂、殿等の名を區別す。而して其の建築史上建築形式上、各種の方面に於いて塔は常に殿堂よりも重要にして趣味深し。其の理由左の如し。

- 一、佛塔は元來西域及び印度の傳來にして支那固有の建築に非ず。故に支那藝術と西域及び印度固有の藝術との關係を示すべき好箇の遺物なり。
- 二、佛塔の主要材料は石及び磚なるを以て、容易に廢滅することなくよく千年の古式を保存せり。此の點に於いては殿堂の概ね千年ならずして朽廢するが如き比に非ず。且つ其の重修せらるゝ場合に於いても、塔身の磚は尙ほ全然解體せらるゝことなく、形式手法も亦た全然抹殺せらるゝに至らざること多し。

三、佛塔の形式は變化極めて多く殿堂の概ね千遍一律なる如き比に非ず。殿堂は支那古來の形式を墨守する傾向あれども、塔は自在にこれを経営するの傾向あり。

是の故に古代建築の形式を考究すべき實例は、これを佛塔に得ること多し。これ予が茲に滿洲塔を以て滿洲建築を代表せしめんと欲する所以なり。

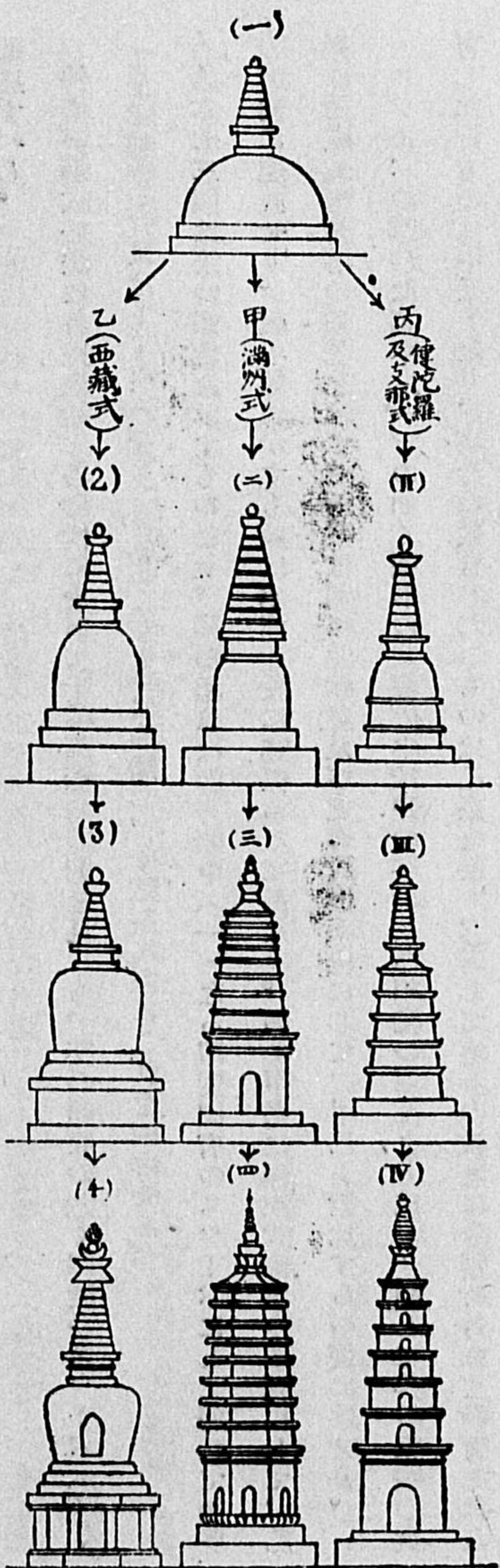
其二 滿洲塔の發生

滿洲塔の形式手法は如何なる邊に於いて發生し、如何なる順序に由つて成熟したるや、試みに予の臆説を左に陳述すべし。

佛塔の形式手法は各民族間、各時代に於いて千種萬様の差別を見るも、其の起原の悉く印度のスツーパー(Stupa、窣都婆)、又はトーン(Tone、塔婆)にあるは論無し。今試みに左にこれを圖解せん。

第六七三圖は塔の系統を示すものなり。其の起原は即ち圖中(一)なる印度固有のスツーパーにして別れて幾多の方向に進發せり。就中茲に示すものは本篇所説に關係ある三系なり。即ち甲系は滿洲式佛塔の系統にして、乙系は西藏式喇嘛塔の系統を示す。丙系は別に健駄羅及び支那式の系統にして、甲乙と對比するの便に供せり。

スツーパーの原形は圖中(一)の如く圓形の基壇、半球體の塔身及び相輪の三部より成る。而して其の相輪の發育したるものは甲系となり、塔身の發育したるものは乙系となり、而して塔身の數層に分割せられて發育したるものは丙系となれり。



甲系に於いては(一)より進んで(二)の如き形となり、(三)に至つては既に多層塔の如き性質となり、(四)に至つて始めて一種の形式を大成せり。此の塔一見多層塔の如くなるも、元來相輪の變形に過ぎざるを以て、二層以上は只だ裝飾的附加に過ぎず、従つて内外共に何等の設備なく、内部は悉く充填して空室を設けず、彼の盤施して梯を攀ぢ頂層に登るべきが如きものと全然其の性質を異にせり。

乙系に於いては(一)より進んで(二)に入り(三)に轉じ(四)に大成す。其の徑路極めて捷なり。此の塔も亦内部に空室を設けず、但し後世籠を表面に穿ちて佛像を納るゝに至りたるは何れの系統にも共通なる現象なり。

丙系は最も複雑なる徑路を取れるものなり。要するに(一)より進んで(二)となり、塔身高く延び、同時に塔身に幾條の横帯を生じたり。健駄羅式の塔は即ちこれなり。次いで進化して(三)となりて中央亞細亞に蔓延し、其の支那に入るに及んで終に(四)の形式を大成せり。此の種の塔は或は甲系のものと同様の點を有するが如きも、其の成立の順序に於いて根本的差異を存す。丙系のもは塔身分れて數層となりたるが故に、明かに多層の意味を保ち、毎層同一の待遇を以て内外の設備を施し、内部に空室を設け梯子によりて最上層に昇るべからしめたり。

要するに滿洲塔は印度のストゥーパより發達し來れるものにして、其の相輪變じて多層形となりたるものなり。是の故に其の特性左の如し。

- 一、平面は多角なり(六角若くは八角なり、印度の圓形より變化し來るもの)
- 二、立面は多層的なり(普通十三層を極限とす、ストゥーパの相輪の發達せるもの)
- 三、高き複雑なる基壇あり(ストゥーパの基壇の發達せるもの)
- 四、塔身の各面に佛像を置く(ストゥーパも後世其の外面に佛像を彫せり)
- 五、二層以上は窻牖龕子等無く、只だ屋蓋を密に重ねたり(ストゥーパの相輪の性質を遺せり)
- 六、塔内充實して内に空室なし(ストゥーパも亦た内に空室を作らず)
- 七、相輪は露盤、寶瓶、水煙、寶珠、寶頂より成る(ストゥーパには斯くの如き手法なし)

其三 滿洲塔の地理的分布

次に滿洲塔の年代を測定するの順序として、試みに先づ其の地理的分布を考察せん。予の狹隘なる見聞の範圍に於いては、滿洲塔は滿洲及び直隸省の北半部にのみ存在するが如し。予の實見せるところのものを列記すれば左の如し。

- 直隸省
 - 涿州南塔 八角五層
 - 同 北塔 八角六層
 - 北京天寧寺の塔 八角十三層
 - 同 八里庄の塔 八角十三層
 - 同 雙塔寺の塔
 - 東塔 八角七層
 - 西塔 八角九層
 - 通州の塔 八角十三層
 - 盛京省
 - 遼陽廣祐寺の塔 八角十三層
 - 奉天塔灣の舍利塔 八角十三層

- 同 白塔寺の塔 八角十一層
- 撫順鑄兒山の塔 八角(層數不明)
- 橋木城金塔 八角十三層
- 同 銀塔 六角九層
- 同 鐵塔 六角七層
- 鐵嶺圓通寺の塔 八角十三層
- 同 慈清寺の塔 八角九層
- 同 南塔 六角九層
- 開原石塔寺の塔 八角十三層

予は此の外尙ほ幾多の塔の滿洲及び直隸省の北邊に存在することを聞けり。就中大凌河の上流朝陽鎮に於ける三基の塔は頗る重要なもの如し。蒙古游牧記卷二土默特部に曰く、

(前略)遼太祖平奚置興中府 太祖平奚置朔州彰武軍重熙十年置興中府興中縣隸中京道金因之築遼金興中府爲今承德府存土人稱爲三座塔蒙古名固爾巴罕城乾隆十六年於其他設巡檢司爲塔子溝廳東境三十九年折置三座塔廳四十二年改設縣治

予は未だ此の三基の塔に關する建築的性質を知らざるも、其の遼金所建三塔と謂ふを以てこれを考ふれば、蓋し遼陽、開原等に於ける予の所謂滿洲塔の一種にあらざるなきを得ざるべし。

而して、直隸の南部及び其の他の各省に於いては、全然斯の種の塔を見ざるは頗る注意すべき現象なるべし。予は先づ滿洲塔の分布が殆ど嚴密に古への遼の領土内に制限せられたることを觀察するものなり。

其の四 滿洲塔は唐式に非ず

口碑及び傳説によれば滿洲塔の多くは唐の創建なりと稱す。或は尉遲敬徳の建立と稱し、或は單に開元年中の創立と稱す。然れども吾人はこれを信すること能はず、蓋し唐の勢力が未だ遼河以東に及ばざりしことは事實に徴して明かなり。遼陽、奉天、開原の地方に大規模の佛寺を經營し、秀美なる浮圖を創建するが如きは到底あり得べからざることに屬す。況んや其の建築的性質は明かに支那本部に行はれたる唐式と全然相異りたるものなり。

滿洲塔を以て唐の創立となすの非なるは一點の疑ひを挟むべき餘地なきに似たり。唐代の遺物としては西安に慈恩寺の大雁塔、薦福寺の小雁塔及び興教寺の塔等あり。慈恩寺の塔は西域の式に摸すと稱し頗る異例に屬するも、其の系統は正しく第六七三圖の丙系に屬し、方形の平面七層の立面、各層みな獨立して床を備へたる空室を有せり。薦福寺の塔は稍やこれと趣を異にすれども、寧ろ唐塔の最も普通なる形式を代表するもの如く、四角の平面、十三層の立面、一見滿洲塔に酷似するが如きも、實は尙ほ慈恩寺大雁塔と同系に屬し、明かに十三層たるの實を存せり。滿洲塔の多層なるは、實に徒らに屋蓋を重疊せるのみにして眞に多層の實を有するに非ず、且つ唐塔は必ず常に内部に空室ありて佛像を安置し、滿洲塔は中實にして空室なく、却つて塔の表面に佛像を刻出せり。此の點に於いて滿洲塔は却つて健駄羅塔に類似する性質を示したり。

要するに滿洲塔を以て唐代の建立と稱するは歴史上信すべからざる處なり。これを以て唐式の建築となすは實例の比較研究上是認すべからざる處なり。

其の五 滿洲塔は遼式なり

滿洲塔の形式に已に唐式に非ず、然らば當に何れの式に屬すべきか、予はこれを遼式と名付けんとす。其の理由は左の如し。

- 一、滿洲塔の地理的分布は遼の版圖内に限れり。
- 二、奉天附近の塔灣に於ける舍利塔は遼の重熙の創建なり。
- 三、涿洲の兩塔は遼の建築と稱す。寺傳信すべきに似たり。
- 四、開原石塔寺の塔は金の大定の建築なり。

予は以上の理由を以て滿洲塔を遼式なりと推定するに充分なりと信するものなり。

惟ふに遼は渤海を併合して滿洲を占有せしより、漸次に南進して北支に入り直隸山西の北部を確保したる間、各地に佛刹を起し佛塔を建てたるものなるべく、遼陽奉天附近に於けるものは其の初期に屬し、北京附近に於けるものは其の後期に屬するものと推測し得べきが如し。然れども遼代建つところの佛塔悉く同一の形式手法を取りたるに非ざるは、山西省應州に於ける八角五層塔が清寧二年に建築せられて、しかも其の形式は寧ろ健駄羅及び支那式に近きが如きに徴してこれを知るべし。然れども應州の塔は木造にして磚造にあらず、其の形式に多少

の差異を生ずべき理由また無きに非ざるべし。而して此の遼塔は遼代を通じて適用せられたるのみならず、金に至りても尙ほこれを襲用したるもの如し。爾來滿州に於ける佛塔の形式は茲に成熟して一定の型典となり、其の重修せらるゝ場合に於いても亦た多く改竄せらるゝことなくして今日に至りたるもの如し。

其の六 遼式の起原

遼が一種特殊の佛塔の形式を大成せる動機は何處に在りや。遼は何處より這般の形式の成作を暗示せられたるか、將た遼は自ら此の形式を創造したるか、これ吾人の最も知らんと欲するところなり。

予は遼式建築が唐に負ふところ尠少なからざることを想はざるを得ず。假令唐、遼其の形式を均しくせざるも、兩者手法の運用に於いて相類似するところまた甚だ多し。而して此の特殊の點は、或は遼の獨創に歸すべき部分あらむ。然れども其の大部分は或は渤海の形式を踏襲せしに非ざるか。予は不幸にして未だ渤海建築の片影だも捕ふことを得ず。況んや其の實體の如きは全然これを知らずと雖も、歴史との關係より推測して斯くの如き想像を下すべき理由あることを信するものなり。渤海はもと高句麗に隸屬せしが、高句麗滅亡(西曆六六八)の後、獨立して國を建て(西曆七一三)、相傳ふること十四世二百十五年、其の間遼東より日本海に至る領土を占め、五京を置き、十五府六十二州を分ち、文學藝術を興隆し文化旺盛を極めたるは史乘に明かなる事實なり。其の寺塔建築に關しては多く傳ふる處なきも、既に其の佛教國たるの事實と文化旺盛たるの事實とより綜合して、國內到る處に佛寺建築の存在せしことを想像するに難からず。而して渤海に代つて其の地を領したる遼が、其の佛寺建築を興

すに當つて範を渤海に求めたるべきは正當の徑路なりと信す。

渤海の藝術はこれを何處に得たるか、予はこれを高句麗に歸せんと欲す。遼が渤海に負ふところあるが如く、渤海は亦た高句麗に負ふところなかるべからず。高句麗の藝術はこれを何處に得たるか、予はこれを北魏に歸せんと欲す。高句麗が殆ど北魏に臣事し、歳々朝貢を怠らざりし事情に考ふれば、吾人は終に此の推測に到達するを免れざるべし。

予は未だ高句麗藝術の性質に關して毫も知る處あらず、然れども高句麗と梁陳とより均しく文物を輸入して大成したる新羅藝術の遺物に關しては、吾人幸ひにして其の一斑を知るを得たり。工學博士關野貞氏の報告によれば、韓國慶州附近の佛國寺の多寶塔(西曆七五二)、梁山郡の通度寺の三重塔(西曆六四三)、慶州南郊の芬皇寺九重塔(西曆六四三)、其他、梁山郡の梵魚寺の三重塔、陝川郡伽椰山中の海印寺の三重塔の如きは、みな第六七三圖の丙系に屬するものにして、ほぼ唐式と其の軌を均しうせり。吾人はこれより逆算して高句麗の藝術の性質を推測するを得べきが如し。即ち高句麗藝術は亦た唐式の系統に屬するものにして、第六七三圖の丙式の部に編入せらるべきものなるが如し。而して高句麗より渤海に傳へ、渤海より契丹に傳ふる間に於いて終に一變して所謂遼式となりたるは、要するに渤海及び契丹が獨殊の趣味を以て其の先師の形式に改竄を加へたるの結果なりと推定せざるを得ざるなり。

其の七 結論

是の故に予の所謂遼式の起原は左の如し。

一、遼式は渤海の藝術を襲踏し、これに唐式を参加し、且つ契丹特殊の趣味を混和して大成せるものなるべし。

二、渤海藝術は高句麗の藝術を襲踏し、これに唐式を参加し、且つ渤海特殊の趣味を混和して大成せるものなるべし。

三、高句麗藝術は支那北朝藝術を基礎とし、これに高句麗特殊の趣味を混和せるものなるべし。

四、北朝藝術は支那固有の藝術と健馱羅系の藝術との和合なり。

予はこれより以上に溯ることなかるべし。今便宜上以上の経歴を算式的に示せば左の如し。

$$\text{遼式} = \text{渤海} + \text{唐} + \text{X}$$

$$\text{渤海} = \text{高句麗} + \text{唐} + \text{Y}$$

$$\text{高句麗} = \text{北朝} + \text{Z}$$

故に

$$\text{遼} = (\text{高句麗} + \text{唐} + \text{Y}) + \text{唐} + \text{X}$$

$$= (\text{北朝} + \text{Z}) + \text{唐} + \text{Y} + \text{唐} + \text{X}$$

$$= \text{北朝} + 2\text{唐} + \text{X} + \text{Y} + \text{Z}$$

故に遼式を分析すれば、多量の唐的手法と北朝的手法とを得べく、別に高句麗、渤海、契丹各民族特殊の手法を發見すべき理由あるが如し。

吾人は實際に於いて既に遼式の中に於ける唐式と北朝式とを認識せり。吾人が次に知らんと欲するところは、即ち方程式中の未知數なるX、Y及びZの真相なり。

(東洋協會調査部學術報告第一冊所載)

滿洲の佛寺建築終

滿洲の文化と遺跡の史的考察

滿洲の文化と遺跡の史的考察

一 序 論

滿洲文化と遺跡の史的考察と云ふ面倒な演題を掲げて置きましたが、茲に申す滿洲と云ふのは、今日の滿洲國の意味ではありませんので、今日の滿洲國の領土に屬する地方を申すのでありまして、つまり國の名ではなくして、土地の名と御承知を願ひます。此の地方の中には、古來幾多の國を建てた民族が相次いで興亡してゐるのであります、其の民族の既往の文化と其の民族が残した遺跡とを結び付けまして、その史的考察を試みたいと申すのが、私の趣意であります。

扱て其の文化及び史的遺跡と云ふことは非常に範圍が廣いのでありまして、これを簡単に短い時間に御話することは如何にしても不可能であります。今日は極く大體の筋だけを搔撮んで御話致すより外に致し方がないのであります。尤も遺跡の方はこれまで既に東洋歴史家、考古學者、歴史地理學者、人類學者等、各方面の學者が可なり深く研究してをりました、其の發表された刊行物なども送迎に違のない程澤山ありまして、御蔭で私共も大いに學問をしてゐる次第であります。ところが此の文化と云ふことになりまして、これは私甚だ寡聞でありまし

て、既往の滿洲地方の各民族の文化と云ふものを説明したものは餘り聞いてをりませぬので、私と致しましては此の方面に對しては門外漢であり、勿論能くは分らないのであります。併し其の遺跡を通じて見ますと、若干合點の行く點もあるのであります。試みに今日は其の遺跡と文化とを結び付けて一通り御話を申上げ、さうして皆様方の御高評を得たい、斯う云ふ考であります。豫め其の點の御承知を願つて置きます。

二 滿洲の國土

扱て御話の順序と致しまして、先づ文化發生の約束即ち一般的の原則から説き始めようと思ふのであります。申す迄もなく、凡そ一國の文化は其の土地の條件と、其の國民の資質とに依つて生れるものでありまして、原則として、國土は氣候が順當であるとか、地味が豊饒であるとか、天然資源に恵まれてゐるとか、又は他との交通連絡の關係が都合が好いとか、さう云ふ條件が具備してゐなければ文化は發達しないのであります。先づ此の點から觀察して、滿洲地方即ち今申上げました奉天省、熱河省、吉林省、黑龍江省、興安省を總稱する其の國土が、文化の發生に恵まれてゐるや否やと云ふことを考へて見ませう。

滿洲と申しても可なり廣い土地でありまして、土地に依つて事情が大いに違ふことは御承知の通りであります。試みに、今の新京邊りを中央として南部と北部とに區別して見ますと、氣溫の點では南部の方は一箇年の平均溫度は攝氏の五度乃至十度になるのであります、さうすると、歐羅巴で申すとスコットランド地方、或はドイツの

北の外れ邊りの氣温と同じやうになるやうであります。これは寒いには違ひないですが文化の發生に大した障礙にもなりません。併しながら北半部の平均氣温を取つて見ますと、一箇年の平均は零度乃至五度になつてをります、即ちこれを外國に比較しますと、露西亞の北の外れ若くはアラスカの南の外れくらゐなところに當るのであります。それは如何にも寒過ぎるのであります、文化の發生には都合が悪く、文化の種を蒔いても芽が生えぬのであります。地味はどうであるかと云ふと、私は専門外で能くは研究してをりませぬが、聞くところに依れば南地地方はやゝ豊饒であり、北部地方は必しも地味が悪いと簡單に言へぬが、氣候や水利の關係で地味の能力を發揮し難いと云ふことでもあります。天産資源は今後の調査に由らねば充分に分りませぬので、文化の無い古代に於いては素より問題になりませぬ。要するに遼河の下流並に松花江の土流方面は文化の發生に適してゐると言へる状態だらうと思ひます。併しそれから以北は元來文化の發生には適してゐるとは言へない地方であります。外界との連絡はどうであるかと云ふと、吉林省の東部は山岳起伏し、樹林鬱生してをり、興安省には興安嶺が縦貫してをりまして、此の兩方の山系の間に平地があります。北境は黒龍江を以て限られてをりますが、非常に寒いところで、どうにもならぬところでありまして、問題になりませぬ。要するに滿洲は興安嶺と吉林省の山系の間の平野及び遼河下流の平野が中心で、南に開いて渤海灣に面してゐる。斯う云ふ地形でありますから、滿洲の活路は渤海灣に沿うて支那本部に出る一方口であり、其の他鴨綠江の下流又は間島から朝鮮へ出る路もあるのです。即ち滿洲平野に發生した文化は氣候風土の適順なる地方に向つて南へくと延びて行く傾向になつてゐることは當

然でありまして、實際此處に住つてゐた民族は古來何れも南へくと進出して來まして、第一に支那の沃野を目がけて進んで參りました。即ち黃河、楊子江流域のあの美しい沃野に侵入して行くのであります、茲に第一に支那本土の漢民族と絶えず衝突が起り、交渉が起り、文化の交換が起る。而して他の一面に於いては朝鮮との交渉が起るのであります。

三 滿洲の民族

次に第二の條件なる民族の方から考へて見るのでありますが、若し其の土地の民族が智能が優れてをり、又非常な堅忍勤勉な民族でありましたならば、假令文化の發生に適しない土地と雖も、人力を以てそれを開發して行くこと云ふことは不可能ではないのであります、世界に澤山の例を見るのであります。ところが古來滿洲に住んでをった民族にさう云ふ資質があつたかどうかと云ふ問題であります、それは私には的確に分らないのであります。古來滿洲に住んでをった民族の大多數は通古斯族であります、其の外に蒙古族と通古斯族との混種があり、又蒙古族も進出して來てゐるのであります。それ等の民族の智能はどう云ふ程度であつたか、如何なる程度の文化を有つてゐたかと云ふことを知りたいのであります、私はまだ明確に承知しないのであります。僅に文獻上に散見するところを見、又遺物などに付いて見て、古來の滿洲民族と云ふものは決して智能の優秀なるものとは言へないので、唯剽悍であり、又鈍重であつたと云ふことは窺はれるのであります。さう云ふ民族であります。

から、どうしても自から固有の文化を打立てると云ふところまでは行きさうにもない、他の優れたる民族の文化を取入れるより外に致方がなかつたのであります。古來滿洲地方に澤山の民族が現はれてをりますが、重要な文化を造つた民族と云ふものは誠に少いのであります、それは此の圖表にも掲げて置いた通りであります、肅慎、濊貊、扶餘、挹婁の古代は姑く措き、高句麗であれ、魏であれ、渤海であれ、遼、金であれ、又元であれ、清であれ、それはおひ／＼と説明致しますが、結局皆漢民族の文化を受けたものであります、それに同化したものであります。要するに土地と民族の關係から、滿洲には立派な文化を造り出すだけの要素が備はらなかつたのであります。

四 滿洲の歴史

尙ほこれに就いてももう少し具體的に説明を加へて見たいと思ひますが、それには滿洲の歴史の梗概を述べなければならぬ。これは誰方も御承知のことではありますが一通り申上げて置きたいのであります。

此の問題にはどうしても朝鮮が参加して來なければいけないのであります、朝鮮のことは姑く措きまして、此處では滿洲對支那の歴史に限ることと致します。一體支那と云ふのは國の名ではないのであります、土地の地理的名稱であります、而も外人が付けた地名であります。それは秦の字音の轉訛であり、更に震旦とも呼ばれたのですが、震旦はシン國の意で、且は今日でも西亞又は印度に残る坦の字と同意であります。さて其の支那又

は震旦とは何處を指したかと云ふと、はつきりした區域は無論ないのであります、黄河、楊子江の流域を中心とした漠然とした大きな土地を支那と呼んで居つたのであります。然るに漢民族が逸早く其の一角を占領して文化を造つた、其の年代は遼遠にして知ることが出来ないであります。併し、其の時は滿洲とは全然没交渉であつた。周時代に於きましても、滿洲には肅慎、濊貊が居り、肅慎は挹婁となり、濊貊は扶餘に代り、周とは殆ど全然關係がなかつた。只だ戰國時代に燕が今の熱河省の南部から、遼河以西の渤海灣沿岸の地を領してゐたのであります。周以前から漢族と交渉の有つたのは獯狁即ち犬戎即ち匈奴でありました。其の後秦の始皇帝は北方から侵入して來る蠻族を防ぐ爲めに萬里長城を築いたと言はれてゐる。蠻族が侵入するのは何の爲めかと云ふと、先に申した通り、北方は物資が乏しくして生活に困難でありますから、生存の必要上中原を取らなければ生きて行けないからであります。始皇帝の長城は今日の長城とは全然没交渉であります、文獻に由れば甘肅の臨洮より起きて遼東に至つたのです。滿洲では恐くは熱河省の中央の邊を貫いて遼東まで來て居つたものであると考へられて居るのであります。さうすると秦の始皇帝の時に今の滿洲の一部分が始めて漢族の領土に編入されたと認めなければなりません。漢の時も同じ状態であります、漢は更に發展しまして其の領土は渤海灣の沿岸の全部に亘り、今の朝鮮の西北部に及びました。併し勿論海岸地帯以北は漢の領土ではなかつたのであります。それは滿洲の内、地は蠻族の巢窟であつて手が著けられないからでありました。所が漢末三國時代の頃から滿洲の蠻族共が中原に向つて逆襲をして來ました。何故かと申しますと、漢の勢力の強い間は齒が立たないのであります、漢が衰へ

て中國が亂れ出すと、其の壓力の減退に乗じて蠻族が中原を取りに来るのであります。それが即ち所謂五胡十六國の亂から南北朝の對立と云ふことになります。殊に蠻族の雄は北魏でありましたが、これは鮮卑即ち通古斯の一種で、靺鞨及び蒙古の混種と言はれて居りますが、支那の北半部を占領したのであります。別に又高句麗、それは扶餘から出たと言はれて居りますが、それが遼河の東部全體を取つて居つたのであります。隋が南北を統一して唐の時代になりますと、今度は又漢民族が盛返して復た滿洲へ進出しました。其の時滿洲には丁度渤海が興つて居ましたが、渤海は契丹の爲めに亡ぼされてしまひ、契丹は國を遼と號して又中原に逆襲して來た。何故逆襲をしたかと云ふと、唐の盛んな時には齒が立たないのでありますが、唐が亡びて五代十國の亂世になり中原が混亂に陥つたので、これに乗じて中原を奪はんとしたのであります。然るに女眞が、これも通古斯であります。遼の後から出て來た、さうして遼を征服して中原に侵入した。此の時代は支那の地域を南北に折半して漢族と蠻族、即ち宋と金の對立となつて居ります。さうしてゐる内に、今度は又金の後から蒙古が興つて來まして、金も宋も一緒に潰してしまつて、さうして滿洲全土、支那全土を取つてしまつた、それは元であります。茲に於いて支那に於ける漢族の國家は一旦消滅してしまつた。然るに漢族の明が蒙古を驅逐して中原を回復したのであります。明は滿洲の方には餘り深く手を延して居らないのであります。滿洲の方には女直、これは女眞のことでありましたが、それが割據して居りまして明の疆域の形でありました。さうしてゐる間に明が又衰へて其の壓力が減じますと、其の女直の愛親覺羅氏が滿洲から興つて又中原を取つてしまつた。要するに漢族の支那の本土

に於ける國家は二回全滅してゐるのであります。始は蒙古の元に全部占領され、後には女直の清に再び全部占領されたのであります。尙ほ滿洲と支那との歴史的交渉は茲に掲げて置きました圖表(圖略)に由つて其の大體を御承知下さい。

五 漢文化の滿洲侵略

漢民族と異民族とは太古以來絶えず葛藤を續けて居つた、異民族は間斷なく漢族の中原を狙つて居つた、隙があれば乗込まうと狙つて居つた。其の隙と云ふのは、支那に於いて國朝が迭りますと、其の迭り目には必ず群盜が蜂起して國が亂れる、壓力が無くなる、其の隙を狙つて遣入つて來るのであります。然るに腕づくでは異民族の方が強いので漢族はいつも受太刀であり、漢民族が滿洲蒙古等の異民族の土地を全部領土としたことは未だ會て無いのです。只だ僅に渤海灣の沿岸地帯即ち滿洲の南端だけを漢民族が領土にしたことは數回ある。併し滿洲全部を取つたことはない。取つても統治が困難であり、又當時は物資に乏しい荒野であつたので取らなかつたのでありませう。然るに異民族は度々中國を犯して、或は一部分或は半分を取つたことが數回あり、全部を取つたことが二回ある。さうすると滿洲蒙古から發生した通古斯、蒙古等の異民族は餘程剽悍であつて、武力の強い奴だと思はなければならぬのであります。併しながら文化と云ふ點に至つてはどうでありますか、これはまるで漢族に對して太刀打が出來ない、漢滿兩族の文化はまるで段が違ふのであります。何故かと言ひますと、これは漢

民族が逸早く黄河、楊子江の流域の旨いところへ乗込んで來、さうしてそこを根據として豊富なる物資、良い氣候に恵まれて長い間に立派な文化を造つてしまつた。先んずれば人を制するのであります。通古斯と雖も、漢民族が這入る前に黄河、楊子江の流域へ這入つてしまつたならば、立派な文化を造り得たのでありませうが、運の好い漢民族が逸早く黄河、楊子江の流域で文化を作つた爲めに、非常な優勢な國が出来たのであります。但し漢民族は戦は弱い、いつもながら戦は弱いのであります、そこで結局外交手段に依つて蠻族を懐柔する、籠絡する、さうして凌いで來たのであります。

優秀なる支那の文化は以上の關係に依りまして滿洲へどんく輸入されて來、又滿洲方面の民族も美しい漢文化に心酔しまして、悉くこれを崇拜し悉くそれを取つたのであります、これに付いて色々な面白い記録もあります。一例を挙げますと、魏であります、鮮卑族の拓跋氏ですが、それが黄河流域の、北支那全部を取つて國を魏と稱したのであります。其の拓跋氏は戦には勝ちましたが文化には負けた、即ち勅して胡服を禁じ、胡語を禁じた、姓名さへも自國の固有の姓名を改めて漢式にしてしまつた。即ち徹底的に文化的には漢に降参したことになる。單り魏ばかりではないのであつて、多くの滿蒙から出た民族は皆漢文化に心酔して漢化してしまふ。其の結果又中國から驅逐されてしまふ。斯う云ふことを繰返してゐる。一體北方の蠻族が漢族に與へた文化と云ふのは何かあるかと言ひますと、それは著しいものは餘りないと思ふのですが、小さな問題では若干記録にもあるのであります。例へば北方、と云つても滿洲には限らないで、もう少し廣い意味に取りますが、北方の異民族が漢

民族に教へた重要事項に騎馬の術がある。太古の漢人は馬を戰車や荷車等を挽かせる爲めのみ使用してゐたが、北方の剽悍な異民族は騎馬が上手であつたので、漢人は彼等から騎馬の術を教へられた。或は又漢人は昔は床の上に坐つて居つた、而も膝をきりつと折つて坐つて居つた、それは古い畫像石などにも見るのであります。それが椅子卓子式に變つたのは矢張胡人から教へられたのであります。其の時代は何時頃だか分りませぬが、六朝頃だと考へる説が多いやうであります。或は又武器であるとか、樂器であるとか、色々な珍らしいものを蠻族から傳へてゐるのです。要するに胡と云ふ言葉は、あれは異民族の總稱ですが、胡の字の付くものは、皆漢人以外の蠻族から教へたのであります。例へば胡座、胡床、胡笛、胡笳、胡琴、胡弓、胡椒、胡桃等々枚舉に遑がない。併しそれ等は必ずしも重要でないのですが、漢人から胡人に傳へた文化は第一に學問、文學、藝術、宗教等何れも文化の根幹を爲すところ重大なるものであります。結局北方民族の文化は悉く漢民族の文化の攝取であると云つても差支ないので、要するに北方民族は武力を以て漢土を侵略し、漢族は文化に於いて北方を侵略したことになるのであります。

六 遺跡の分布

今問題として居ります處の滿洲に於ける遺跡を見ますると殆ど總て漢式のものばかりであります、漢式に據らないものは何であるかと云ふと、例へば建築、私は建築の方を主として研究して居りますが、それは例へば田舎

の百姓屋の様な原始的の面影を残してゐるものでありまして、黄河、楊子江の方面の漢式のものとは違ふのであります。それは又違ふ筈でありまして、第一氣候風土が違ふ、習慣が違ふからであります。併し苟も文化的の建築になりますと悉くそれは漢式であります。併しながら、支那の文化は時代に由つて變遷して行き、滿蒙の文化は其の變遷を追うて行くのでありまして、滿洲に於ける遺跡を調査して見ますと、支那に於けるいつ頃の文化が、どの方面にどれだけ影響したかと云ふことが分るのであります。尤もそれを具體的に確かめると云ふことは非常に困難でありまして、これは長い研究を積まなければ出来ない仕事であります。今日と雖も臆氣ながらそれが分るのであります。これから其の御話に進みたいと思ひますが、其の目的で茲に遺跡の略圖を作つて置きました、それには遺跡の主なもの、重要なものを擧げて置きました。別に又遺跡の年代、國の名、民族の名、所在地の名を示した表(前掲)を作つて置きました、どうか此の地圖(略)と表を對比して御覽を願ひます。

此の遺跡を研究しまするのに第一に必要なのは其の遺跡の分布だらうと思ひます。勿論滿洲の遺跡がどれ丈けあるか未だ調べ盡されて居らず、調べ盡すのはいつのことか分りませず、而してそれが調べ盡されねば確實な結論は出来ない譯であります。今日私の承知して居ります極めて僅かな材料に由つて説を立てることは無理ではありませうが、試みに此の地圖の上に重要な遺跡の地點をしるして置きましたが、御覽の如く今日の調査程度では滿洲の南半部に澤山に遺跡があります。さうして北半部には極めて少いのでありまして、將來發見されたところで幾らも重要なものがないだらうと思ひます。是は申す迄もなく南半部は氣候と云ひ地勢と云ひ文化に適した

土地でありますから、當然茲に澤山の文化的藝術や土木の施設があつた筈です。殊に支那との交渉は前に述べた通り、滿洲の南端から遼河の下流地方を舞臺としてゐたので、此の方面に多くの遺跡を見るのは當然であります。さて此の遺跡の分布状態の研究に由つて、文化の中心及び文化移動の行路が考察されるのでありますが、それに就いては尙ほ後に述べ度いと思ひます。

七 遺跡の概説

其の一 漢

遺跡の先史時代に屬するもの、例へば貝塚、ドルメン、石器、土器等に就いては、茲に述べないことに致します、それは寧ろ考古學及び人類學の方に屬するからであります。さう致しますと、滿洲に於ける有史以後の文化的遺跡は漢から始まると云つて宜しいだらうと思ひます。漢の遺物で今日發見されて居りますのは主として遼東半島の南であります、例へば牧羊城、前牧城、貔子窩等で、これは濱田耕作博士、原田淑人君其の他斯道の權威が研究され發表されてゐるのですが、引き続き尙ほ此の邊に若干發見されつゝあります。私は此の地方にまだ澤山あるだらうと想像して居ります。何故此處に遺跡が群集してゐるか云ふと、それは對岸の山東省から近距離に在るからで、而も其の間に島々が點々として飛石のやうに布置されてゐるのであります、恐らくは山東省の漢人が最短距離を取つて海を渡り、島々を経て此處へ來たのだらうと思はれます。漢の遺跡は滿洲の奥の

方にはない筈と思はれますが、漢の領土は朝鮮にまで及んで居りましたから、此の方面にも遺跡がある。それは古の樂浪の地今の平壤の郊外に発見された墳墓でありまして、其の内容は既に世に周知の事でありますから、茲に説明の必要は無いと思ひます。

其の二 高句麗及び北魏

高句麗は扶餘の一派と考へられ、六朝の始には奉天省の遼河以東の全部、吉林省の一部と朝鮮の北部を併有した大國を作りました。其の遺跡として鴨綠江の右岸に近い處に國內城、丸都城の趾がありますが、殆ど全く荒廢に歸してゐるのです。但し朝鮮平壤の西郊江西に発見された墳墓は實に面白いもので、明かに支那の六朝時代の様式を示してゐます。高句麗の領土であつた滿洲地方に於いて、今後必ず若干の遺跡が発見されることでありませう。

北魏は既述の如く支那本土の北半部を占領し、尙ほ遼東の一部を領有した大國であり、支那方面に偉大なる石窟寺を遺してゐることは餘りに有名であります。滿洲にも好例を遺してゐるのです。それは奉天省義州の郊外に萬佛堂と云ふ石窟寺がありまして、其の存在は既に知られて居つたのでありましたが、實際にそれを踏査し研究されたのは關野貞博士でありまして、それも最近發表して居られます。北魏の遺跡が此處にあるのは何故かと云ふと、恐らくは此の地點が、六朝文化が北支那から遼東を経て朝鮮に進む重要な位置に當る爲めでありませう。北魏の首都は始めは山西省の大同であり、後に河南省の洛陽へ移つたのです。そこで考へて見ますと、大同

から遼東に進出する通路は、張家口、北京、薊州、山海關を經由すれば路は平易ですが距離は遠くなります。張家口から直ちに熱河に出て、朝陽、義州を經由すれば路は險阻であるが路程は著しく短縮されます。即ち義州は大同遼東を連絡する國道の重要な地點に當つてゐるのであると思はれるのであります。尙ほ義州に遼金時代の重要な建築があるのは特に注意を要する點であります。

其の三 渤海及び唐

渤海は靺鞨より出て、靺鞨は挹婁より出たので、渤海の領域は、南は朝鮮の元山附近から、北は沿海州、吉林省、奉天省の大部分に及んだ大國でありました。渤海には五京があつたので、其の上京忽汗城は今東京と呼ばれ寧古塔の附近であります。最近原田淑人君の發掘の結果都城の全貌が闡明されたさうです。他の四京の趾も追て發掘されることと期待してゐる次第であります。

渤海は日本へも屢々來貢してゐますが、これは渤海が日本海に面してゐたので、一面唐系の文化を攝取すると同時に、他面に日本の文化を享くるの便宜を有してゐた譯であります。

其の次は滿洲に於ける唐の遺跡であります。これが問題だと思ふのであります。實際唐の遺跡と云ふものは殆ど無い。文獻に依りますと唐の創建であると稱する寺塔の建築が随分澤山ありますが、實地を見ますとそれがどうしても唐のものではない。此の御話は餘り専門的になりますから遠慮致しますが、様式上から見ると到底唐でないことは明瞭であるに係らず文獻には唐と書いてあるのが澤山ある。例へば錦州の塔、遼陽の白塔寺、橋木城

の金塔寺及び銀塔寺の塔、鐵嶺の圓通寺及び慈清寺の塔、開原の石塔寺の塔などで、様式から見ても當然遼金系の建築である。これを唐の建立としたのは或は此の地方が唐の勢力圏内に在つて、唐の正朔を奉じてゐた爲めであるかとも想はれるのですが、其の真相はよく知りません。要するに唐は其の初期に於いて高句麗を滅ぼした當座、渤海灣沿岸地帯を領土に編入したのですが、滿洲内地に侵入して居らず、滿洲南端の領土も久しからずして放棄したのであります。結局滿洲には眞に唐の遺跡と認むべきものが見當らず、僅かに渤海に於いて唐系と見るべきものが發見されてゐるのであります。

其の四 遼 金

それから次に遼金であります。滿洲の遺跡で中堅を爲すものは遼金であります。又其の管でありまして、滿洲に國を建てたもので最も勢力のあつたのは遼金であります。遼は御承知の通り東は沿海州を包擁し、西は今の新疆省邊まで出、南は河北省山西省の北部まで這入つて居り非常な強い國になつたのでありますから、其の遺跡と云ふものは相當ある、無論漢の文化を攝取したものではありませんけれどもまた若干の特性を有してゐる。金は遼を潰して遼の領土全部を取つた、さうして更に深く支那へ這入つたから金の遺物も澤山あるのです。遼は即ち契丹で通古斯と蒙古の混種であり、其の發祥地は熱河省ですが、金は即ち族の女眞通古斯であり、發祥地は吉林省と云はれてゐますが、金は殆ど全く遼の文化を繼承したものの様であります。遼金の遺物には其の性質に著しい差別を見出すことが出來ないのであります、そこで遼と金とを一緒にして遼金と云ふのです、其の遺跡は餘に

數が多いので、此處で一々申上げるとは甚だ困難であります。唯茲に一例として遺物の分布の状態と其の文化の通つた路筋の關係を申上げて置ませう、それは金の重要遺跡として、今日知られてゐるところでは、一番遠いところは吉林省の五國城、次に金の上京の會寧などでありませう。遼も金も都を五つ持つて居りますが、金の五つの都はハルビンの東南約八里の會寧が上京、遼陽が東京、熱河省の大定が北京、それから山西省の大同が西京、北京が中京でありました。其の後宋の汴京即ち河南省の開封を占領して此處を都としましたが、汴京から中京を経て上京に至る路筋を辿つて見ますと、其の間に點々として金の遺跡が残つて居ります。これに就いて皆て滿鐵で發刊しました鮮滿歴史地理の研究機關誌で文學士松井等君が發表されてゐるのであります、それは宋の徽宗皇帝が金の太宗が即位をしたのを祝賀する爲めに、許亢宗と云ふ人を使節として宋の汴京から、金の上京に遣はしたので、其の時の紀行が解説されてある、其の時の紀行に依ると汴京から先づ北京即ち燕京へ行つた、それから三河、薊州、灤州等を経て、山海關を通つて錦州を通過し、それから奉天、鐵嶺、開原を経て、農安を通つて會寧へ著してゐる、此の道筋は今の鐵道線路とくつ付いたり離れたりしてゐるのであります、さうして其の間の重要都邑には今も所謂遼金塔が建つて居ります。農安にも塔がありますが、今は國道から外れて引込んで居りますが昔は此處が本街道であつたことは許亢宗の紀行でも明かであり、第一其の遼金塔の存在が證明します。それから又斯う云ふことが考へられるのであります。それは熱河省の赤峯の附近の遼の中京大定から遼の東京であつた遼陽を結び付ける近路は何處であるかと云ふと、それは朝陽、義州を通過する線であります。さう思つて見ると果

して朝陽には一基の遼金式に近似の塔があります、それから義州にはこれも最近關野博士に由つて発見された素晴らしい遼代の佛殿があります。詰りこれは遼の中京から遼の東京へ行く國道でありまして、此の道筋にあつたものと考へられます、それから遼の中京から遼の南京、即ち今の北京ですが、此の間にも國道がなければならぬが、其の國道は必ず承德即ち熱河省を通過したものだと思ひます。承德に清國が離宮を造つたのは此の土地が形勝の位置に在つて、古來顯著であつたからだと思像されます。遼の東京、即ち臨潢は今の林東附近であります、中京と上京の間にも何か遺跡があるかも知れぬと思ひます。それから海城の東南に柞木城と云ふところがあつて、此處に立派な塔が二つ、其の外小さい塔がある、斯う云ふ片田舎にあつて立派な塔がある以上は、柞木城は或は朝鮮の方へ通ずる國道筋であつたのではないかと云ふことを疑ふのであります。未だ確實な證據を得ないのですが、さう云ふ感じがするのであります。要するに遺跡の分布と云ふものは、必ず重要な意味を持つてゐるものだと思はれます。

尙ほ話は他所へ行きますが、大同、即ち遼の西京から南に應州と云ふところがあつて、そこには又素晴らしい木造の大きな遼の塔がある、それは必ず昔はそこを通つて、大原、洛陽の方へ行く國道があつたのではなかつたかと考へられるのであります。又北京附近から其の南方若干程の圏内に澤山の遼金塔があります。尙ほ遼金の勢力範圍に在つた地區には必ず遼金塔がある。即ち建築の遺物を見て其の國の版圖を知ることが出来、交通の模様を知ることが出来るのであります。兎に角遺跡の調査研究に由つて滿洲民族と漢民族との勢力の消長を知り文化の

交渉を考へる上に大なる資料が得られると思ふのであります。要するに前掲の圖表に依つても分りますが、漢民族の滿洲に残した遺跡と云ふものは漢の時代には若干ありますが、其の後は殆どないのです。唐の遺跡は先にも申した通り頗る怪しいのです。

其の五 元・明・清

宋が滿洲に遺跡を留めて居らないことは勿論であります。元は完全に滿洲全土を併有したに係らず、元の遺跡が多く見當らぬのは、元は此の地方を重大視しなかつた爲めであらうと思像してゐるのです。尤も廟祠の中に若干の元碑が有りまして、其の廟祠の建立又は重修を暗示して居りますが、何れも重大なものではないと思ひます。明の勢力は、前にも申述べました通り、深く滿洲に入り込んで居らぬのでありますから、明國の事業として經營された重要土木の遺跡は少い筈であります。然るに、滿洲學報第一に村田治郎博士が發表されたところに由れば、金州、蓋平、海城、遼陽の孔子廟は共に明の洪武の創建であり、奉天の孔子廟も明代であるといふのであります。其の他明代の重修と稱せらるゝものは可なり澤山あります。これは何故でありませうか。或は奉天以南は明の領土であつたのでせうか。否、私はさうは思はない。此の地方は即ち所謂瀋陽州と云つて明の勢力範圍であつたけれども、領土でない。當時此處に女直と云ふ強大な異民族が跋扈して居つたのであります。此の地方に明の建立又は重修と云はれる建築の澤山あるのは、女直は明の正朔を奉じ、明の年號を使つて居つた爲めではないかと思ふ。それは日本で言へば琉球が明や清の年號を使つて居つたのと同じことであつて、琉球に於ける明清の

年號の勒せられてゐる建築が、勿論明清の建築でなくして琉球の建築であると同轍であると思ふのであります。結局明の年號の録された滿洲建築は女直の建築であると考へ度いのであります。

滿洲は清國發祥の地でありますから、清國の遺跡の豊富であることは申す迄もない。今日滿洲に現存する建築は殆ど總て清國時代の營造に係るのであり、其の類例は多方面に亘つて非常に多いので、到底一々指摘することが出来ないであります。

八 特殊遺跡の研究

其の一 民家

次に多數の遺跡の中で特殊の性質を有すると思はれるもの數點に付いて特に御話を申して見たいと思ひます。滿洲に於ける原始建築の俦を存続してゐるものは民家であります。民家の研究は私は餘り深くは致して居りませぬが、民家は原始的の性質を持つて居りまして、今日までも其の特色は失はれないのであります。吉林省へお出でになつた方は御承知でありませうが、此の吉林省附近には木造家屋の民家が澤山あります。それは此の地方に樹木が多いからであります。其の家は餘程日本の古式の家に似てゐるのであります。門は日本の鳥居と同じ型であります。全然同じと云つてもよい位のもあります。それから門の兩脇の塀は、柱を立てて其の間へ板を落し込んだ形で、日本の神社にある板垣のやうな様子をして居ります。これが木造の原始的家屋であります。そ

れから進歩した家で面白いと思ひましたのは、私は奉天と撫順で見たのでありますが、其の家は寧ろ日本の家の方に近いプランで、支那の漢族の家とは全然違ひます。支那の家でありますと、例へば一棟の房は原則として三つの室に仕切られる、さうして眞ん中が應接間で左右が居間になり、何處までも三つで割つて行く習慣であります。而して庖厨や物置などは別棟に離れて建てられます。ところが滿洲固有の家はさう云ふプランでなくて、一棟の房の一方に臺所、井戸、竈などを取り、さうして他の一方に部屋を取るのであります。其の結果は入口は房の正面中心を外れて一方に偏在します。斯う云ふやり方は支那の内地の方では見られぬと思ひます。これに類似の形は朝鮮の北部咸鏡道江原道方面に多くあるのであります。ところがそれと殆ど同型の民家が日本に澤山分布されて居ります。此の事實から高句麗、渤海等の通古斯民族と日本民族の間に何か關係がありはしないかといふ事が考へられます。昔から日本民族は所謂天孫民族であり、それは或は通古斯だと言はれ、或は南洋民族だと唱へられ、或は兩族の混和だと考へられ、其の他種々な異説もあつて、それ等の諸説が何處まで確かかと云ふことは、證據を擧げて斷定することは困難ですが、民家の性質に關する限り、通古斯族と日本民族との間に一派相通するものの在ることは現實であります。

其の二 遼金塔

それから其の次に重要だと思ひますことは、既述の遼金の建築殊に塔のことでありまして、これはやゝ専門的になるのでありますけれども、是非簡単にでも御話して置かねばならぬと思ひます。

皆さんの中に滿洲へお出でになつた方は澤山おありでせうが、滿洲へ御出でになりますと滿鐵の本線の沿道に到るところに特殊の塔を御覧になるでせう、それは中實の八角多層でありまして、最下層が特に高く立派に飾られてゐるのですが、第二層から上になりますと各層が壓縮された様に低くなり、屋根が層々密に相重なるのであります。而して頂には一種の相輪が型の如く立つてゐます。層数は十三層以下三層まであり、勿論上層へ行くに従つて小さくなります。滿洲の塔は殆ど總て斯う云ふ型に屬しますが、支那内地の漢民族が造つた塔に斯う云ふ型はない。遼金でどこから斯う云ふ型を考へ出したかは能く分らないのですが、これを我々が遼金塔と云ふのであります。時代から申すと遼が興つた時は支那では丁度唐末でありますから、唐邊りから此の型が流れて來たものと考へるのが當然であります。唐の時代に支那には斯う云ふ塔はないのであります。それは西安の慈恩寺大雁塔を始め、西安附近其の他に唐時代の塔も若干ありますが、何れも中空でプランが四角であつて、各層の間が相當に高く、従つて屋根が互に接近してゐないのであります。遼金塔の調子は大いにこれと違ふのであつて、唐から暗示を得たとは思はれない。それでは何處から得たのか。唐以前の六朝時代の遺物に河南省の嵩山の附近に嵩岳寺と云ふ寺があつて、其の塔が十二角であつて十三重であります。それはやゝ遼金塔に近い。それは東魏又は北齊頃の建築物であると思はれますが、私は或はこれから遼金塔が出たのではないかと思ひます。魏と遼即ち契丹とは共に鮮卑族の系統であり、さうして土地も接してゐるので交通は極めて便利でありますから、魏の塔から遼金塔が出ることは自然であると思はれます。恨むらくは魏の實例が甚だ少いので、此の斷定をするには尙早

であります。兎に角面白い問題であります。遼金塔は既述の如く、文獻では大抵唐の創立としてあるのですから頗る可笑しい譯です。只だ既述の朝陽の塔は、其の風貌全く遼金式ですが、平面が八角でなくして四角である點が唐式であります。然らば遼金塔と唐塔との間に何等かの連絡が有るとも考へられます。但し私はまだ朝陽の塔を見て居らぬのでありますから、今何とも斷案を下すことは出来ませぬ。

滿洲に御出でになつた方は、例へば遼陽の廣祐寺の白塔の高さ約二百七十餘尺もある雄姿を御覧になつた筈ですが、あれが遼金塔中の白眉でありませう。錦州にも壞れては居りますが一基の巨塔があります。文獻には高さ三百九十尺と書いてあるが實際の高さは遼陽の塔と伯仲の間でありませう、兎に角素晴らしい大きなものである。それ等は遼金の盛んな時に其の力を以て造つたもので、外の時代には造れない。然るに更に私として興味を感じることは遼金以後にも此の地方に建てられる塔は皆此の型に據つてゐる。明の時代に建てたとか又改築したとか言はれてゐる塔が矢張遼金塔式です。若し明國で創建するならば此の様式の塔を造る筈がない、それは支那内地に澤山見るやうな明式のもの。を造る筈であります。然るに支那に於いて明の時代には、滿洲に於いては女直が割據した時代で、女直は即ち女眞、女眞は即ち金であります。それであるから女直は自分の祖先の金の残した塔の形に依つて或は新しく造り、或は修繕する。それは女直の當然の心理であります。即ち金の残した型を女直が繼承したことになります。これは建築専門の御話でありまして如何と思ひましたけれども、興味を感じましたので一言申上げて置くのであります。

其三 清國の諸建築

(5) 喇嘛教と建築

清國時代の遺跡は非常に多いので枚擧するに遑がないのであります。其の中で面白いと思ひましたことは、喇嘛教系の建築の盛なことです。それは清國が喇嘛教を篤信したからであります。喇嘛教は元の忽必烈が西藏から輸入して國教としたもので、其の喇嘛教が明時代を通じて一般に行はれたのであります。殊に清國になつて非常に喇嘛教が盛んになつて、既往の佛教はそれが爲めにすつかり壓迫されて勢力を失つた。何故清國がそんなに喇嘛教を崇拜したかと云ふことに付いては、必ず其の理由が明かに説明されてゐるのだらうと思ふのですが、私寡聞にしてまだ多く聞いて居りませぬ。一般に清國は蒙古懷柔策として彼の崇拜する喇嘛教を國教としたと言はれて居り、勿論それに相違ないと思ひます。これを民族關係から見れば、元の蒙古と清の通古斯とは近似の民族であつて民族性に一脈相通するところがあるのではないか、清國が蒙古を優遇してゐたことは明瞭な事實で、それ等の關係から喇嘛教を清の宮廷の宗教としたのであるとも考へ得るのです。兎に角喇嘛教の力と云ふものは恐しいものであります。奉天へ行かれた方は御承知の如く、奉天城の四方に清の皇室で建てた喇嘛寺があり、おのゝく西藏式の塔を有してゐる。それは俗に東塔、西塔、南塔、北塔と呼ばれて居ります。それは喇嘛教の法力に依つて奉天城を鎮護すると云ふのであります。更に徹底してゐるのは奉天の北陵即ち太宗の昭陵、東陵即ち太祖の福陵の建築であります。勿論大體の様式は、支那から暗示を得た様式であります。其の陵に隆恩殿と云つて拜

殿のやうなものがありますが、其の隆恩殿の中の裝飾が西藏式なので、西藏文字が天井などに現はされ、又欄間の飾などに極めて明瞭に喇嘛教の八寶といふ宗教的文様が用ひられて居ります。そこまで喇嘛教藝術が喰ひ込んでゐる。尤もこれは奉天には限らない、北京の宮殿も甚だ喇嘛教臭いもので何處にも彼處にも喇嘛教式の手法や裝飾文様が見える。それから熱河省承德の離宮及び八大寺であります。これも御承知の通り清國の康熙乾隆の遺構であります。私まだ實地を見たことはありませんが、寫眞や報告に依つて大體知つてゐるのであります。昔からの言ひ傳へに熱河の八大寺の主要なる伽藍は西藏の布達拉にある達賴喇嘛の宮殿や札什倫布に在る班禪喇嘛の宮殿を其の儘寫したものである。若し西藏へ行つて見たいならば熱河へ行け、西藏へ行つたと同じものが見られると云ふことを聞かされて居つた。併し寫眞其他に依つて見ますと、成る程布達拉や札什倫布の宮殿に非常に能く似てゐるけれども、全然同じではない。それは何と云つても大分調子の違つたところがありますが、兎に角似てゐることは似て居ります。滿洲の佛寺が殆ど總て喇嘛教化してゐることは申す迄もないのです。

(6) シャーマン教の建築

それから宗教關係でもう一つ注意して居りましたことはシャーマン教であります。シャーマン教は古くから通古斯民族間に行はれた宗教ですが、其の廟祠の跡が奉天に残つてゐるのであります。それは堂子廟であります。私はシャーマン教の祭祀の次第や行事の作法は知らないで、堂子廟のプランを實際に引き當てて説明することは出来ませぬが、併し現場を實測して参りました。其の土地建物の配置から調子から全然普通の佛寺や道教の祠

堂とは違つたものであります。シャーマン教ほどの程度まで今勢力があるかそれも能く知らないのです、遺跡も外にどんなものが有るか知らないのです。唯堂子廟が先づ標準のシャーマン教の祠堂であると云ふことで研究したのであります。

(ハ) 陵 墓

次は陵墓に關することあります。奉天省の興京と云ふところは清國の發祥地であるとせられてゐますが、最近に聞きます處では、清の愛親覺羅氏の發祥地は朝鮮の會寧だと云ふことであります。それは何處まで事實であるかは知らない。兎に角長白山の下ではなくして朝鮮の會寧であるとして、それから愛親覺羅氏が進出して來て先づ此の興京に城を築き、それから遼陽へ乗込んで來たのであります。此の興京の郊外に愛親覺羅氏の祖先の墓がある。それは永陵であります。其の永陵の墓の土饅頭であります。其の作り方が支那内地と違ひまして、それが滿洲固有のシャーマン教の教義に由る作り方と云ふのであります。それも餘りに細くなりますから略しますが、兎に角さう云ふ滿洲固有のものが残つて居ります。それから遼陽の東北郊に東京陵と云ふものがありますが、それは愛親覺羅氏の身内の人達、王族の墓であります。其の調子も支那の方で見るとは一と調子變つたものがある、これ等は矢張り滿洲の特色の一つだらうと思ふのであります。其の外建築關係のもので、取立てて特色があると思つたものは氣が付きませぬでした。

(ニ) 奉天金鸞殿と天壇

奉天の金鸞殿とは乾隆帝が造つた宮殿であります。城の南門の外には天壇の跡がある、これ等は實に何處までも漢文化の追従でありまして、支那固有の原始宗教に依つて天子自から天を祀る爲めに築かれた壇であります。金鸞殿の設備も支那古來の宮殿の配置を縮小したもので、つまり同巧異曲の設計で、喇嘛教臭い手法が鼻につくものであります。さう云ふ風に清國でも漢文化を攝取して居りますが、唯清國でちよつと調子外れな面白いことをやつたと思ふのは、清國では御承知の通り漢民族に對して強制的に服裝を胡式に改めさせ、頭に辮髪を蓄へさせ、全國民にそれを勵行したなどと云ふことは、ちよつと意外な話であります。併しそんなことは寧ろ小さいことであります。肝心の精神文化と云ふものは大體漢民族の文化の祖述と複寫に過ぎなかつたのであります。此の遺跡に關する御話はこれで終りと致します。

九 結 尾

今まで申上げましたことは、問題が元來多方面に互る性質でありました爲めに纏まりが旨く付きませんで恐縮でありましたが、要するに私の申したいと思ひましたことは、先づ滿洲の土地は文化の發達と云ふ點から見て恵まれた良い土地ではないといふ事、さうして其の土地に住んで居つた通古斯其の他の民族も、元來先天的智能が優れたとは言へないものであると云ふこと、それでありませうから、文化を得んが爲めに道を求めて南へ南へと下つて、さうして支那本土に侵入して、そこで漢民族と接觸をして漢文化を吸収し、漢民族の方からも隨時滿洲の

一角を占領し、滿洲に漢文化を注入したのであるといふこと、それから滿洲民族と漢民族の間の交渉には互ひに消長があつたのでありますが、其の消長の跡は遺跡の史的 연구に依つて知ることが出来るといふこと、斯う云ふ順序で御話を進め、さうして終りに其の遺跡の研究の一部分を御話した次第であります。唯だ遺跡は徹底的に探検し盡さなければ結論は下されず、しかもそれが徹底されるのは前途遼遠であります。遺跡と相伴つて研究せねばならぬのは文獻であります。これが又非常に浩瀚なもので、これを調べ盡すなどといふ事は思ひも寄らぬ事です。今日私の御話致した事は、極めて貧弱なる遺跡の實例と、極めて淺薄なる文獻の涉獵とに基くもので、素より粗漏誤謬に満ちてゐることを自覺してゐるのであります。しかも敢て卑見を述べて御清聴を煩はしましたのは、此の問題が目下の重要事であり、當然我々日本人に由つて、徹底的に解決さるべきものと信じましたので、試みに大體の筋を述べて御叱正を願ふ事に致した次第であります。

一〇餘 論

其の一 滿洲は支那の領土に非ず

尙ほ最後に、私の領分外の話で脱線の氣味があるのですが、是非一言述べさせて戴きたいことがあります。それは今日の滿洲と今日の支那の關係に付いての考察の一端であります。それにはもう一度圖表を利用致しますが、一體既往の滿洲と支那との關係は、度々繰返すのでありますが、互ひに相角逐して勝つたり負けたり

追つたり追はれたりして來たのでありますが、此の歴史を達觀して見ますと、支那に於ける周の時代は黃河、楊子江の流域の大部分を保つてゐたわけで、殆ど全然滿洲とは關係がないのでありますが、關係が付いたのは秦の始皇帝が支那を統一して、其の時に滿洲の一角を領土に取込んだ時から始まると見るべきであります。秦が興つてから今日まで約二千五十年程経つてゐる、此の二千五十年程の間に黃河楊子江流域を中心とする支那本土が滿蒙の異人種の爲めに全然占領された期間は、元清を通じ約三百五十年であります。それから滿洲民族が支那の中原の一部或は半分を占領して居つた時代が約七百年であります。さうして漢民族が外敵に侵されないで安全に支那の領土を持つて居つたことが約千年である。然るに滿洲全土が漢族の領土となつたことは一度もないのであります。

清國亡びて以來どう云ふ形勢になつたかと云ひますと、支那には新に民國が出來、滿洲には最近に滿洲國が建設されたのであります。處が所謂滿洲問題が起つた、當時滿洲は支那の領土なりや否やと云ふことが世界の問題として議論されたことがあつたのです、今でも議論してゐる人がありますが、それは私から見ますと實に滑稽で堪らないのであります。何故滑稽だと申しますと、支那は劈頭申しました通り、國家の名ではなくして土地の名であります。若し支那と云ふ土地を非常に大きく解釋するならば、滿洲も支那の一部でありませう、西藏も新疆も外蒙古も支那の一部と云つても宜いでありませう。併し漢人は未だ曾つて自分の住んでゐる土地を自ら支那と稱したことは無く、最近外人の稱呼に従つて已むを得ず支那と稱してゐるのですが、外人は支那といふ地名と支

那に興亡した諸國とを混同してゐるのであり、漢人も亦これに従つて混同して居り、吾人も是非なく混同してゐる。既述の如く、支那に住む民衆の上に君臨した者は多くは漢族であります。異民族も亦た多くの國を建てて君臨してゐる。即ち支那は元來漢族のみの専有物ではなく、如何なる民族にも開放された土地であり、力の強い者が腕づくでこれを占領して國を建てる。其の間には勿論同族互に相争つたのであります。而し其の國が亡びたならば其の土地の所有權も同時に失はれるのであります。而して其の土地は多くの場合には群盜の争奪に由つて分割され、最も強力なる者が終にこれを統一して來たのである。曩に清國が滅亡した際も此の状態が反覆されてゐる。新たに起つた民國は清國の天子から正式に其の土地を讓渡されたのではないから、滿洲を民國の領土だと言ふ理由はない。若し滿洲が欲しいなら舊例に従つて腕づくで奪へばよいので、舌先きで取らうとしてもそれは駄目である。或は若し民國の首領が、「我々の同族は嘗て滿洲の一角を領土としたことがある、故に滿洲全土は我國の領土なり」と云ふのならば、逆に滿洲人は、「黄河、楊子江流域全部、所謂中原の土地は最近まで滿洲人がこれに君臨して居つたが、逆臣の篡奪に遇つて一時其の土地を失つたのである。故に中原は悉く滿洲の領土なり」と言つた方が寧ろ理窟が通る。さう云ふ明瞭な理由があるのに何故枝葉に拘泥して滿洲は支那の領土だ領土でないなどと云つて争つてゐるのか、随分滑稽に感じて居つた次第であります。

其二 滿洲國と新文化

扱て今日新たに興りました滿洲國は、其の元首は滿洲人であつても、其の國民の殆ど總てが漢人種即ち所謂支

那人であります。今日の滿洲に居る人間は御承知の通り九十九パーセントまでが漢人なのであります。通古斯人や蒙古人等は極めて少いのです。又一面に於いて今日の支那人は極めて複雑なる混種となつて居りまして、勿論堯舜の子孫でもなく周漢の血統でもなく唐宋の末裔でもないのです。今日の支那の文化は、一面に於いて數千年來の古典の情力であり、一面に於いて古典の改惡であります。昔の漢とか唐とか云ふ時代の漢民族の古典文化と云ふものは實に驚くべきものであります。殊に唐の文化などと云ふものは當時世界第一と言はれたのであります。それは決して過褒ではない。宋以來漸次に遞下し、明頃になると氣魄は大いに衰へますけれども、それでも形骸には猶ほ一道の光明があつた。併し清に至つて著しく衰へ、最近の支那に至つては頗る混沌たるもので、氣魄は失はれ形骸は枯れ、又昔日の面影がないのであります。即ち今日の支那の文化は全く停頓して進むべき路を失つてゐる。況んや他の民族他の國に向つて感化を與へる能力は無くなつたのであります。

それで、今日の支那は最早滿洲に與ふべき何等の文化を有せず、滿洲は支那から受くべき何等の文化を要せぬのであります。既往の支那と滿洲の文化關係は全く清算せられ、滿洲は自ら獨立の文化を造るべき運命に立ち至つたのであります。私は劈頭に滿洲の土地は文化に適さないと申した、南部の方は氣候や地味の點に於いて相當の文化を生ずべき素養はあるが、北滿の方は至つて自然に恵まれて居らぬと言ひましたが、それは昔の文化發生の時を言うてゐるのであります。今日は申す迄もなく人力を以て天に勝つと云ふ時代で、文明の利器を利用して天惠の乏しきを補ひ、今まで知られなかつた資源を開發すると云ふことがどん／＼起つて來て居りますから、

北滿の荒野も沃野となり、磊々たる秃げ山も物資の寶庫となるのであります。而して精神文化の方面に於いて、學問藝術の振興に努めたならば、滿洲文化の大成は庶幾いのでありませう。是の時に當つて既往を顧みて滿洲の歴史、滿洲の遺跡を徹底的に研究し、文化の推移を知ることが甚だ有意義のことであると信するのであります。私共が滿洲の遺跡を尊重して十分に研究したいと思ふのも、畢竟此の見地からであります。

誠に纏まりの付かない御話を申上げて恐縮に存じます、ほど時間にもなつたやうでありますから、これで講演を終わります。

滿洲の文化と遺跡の史的考察 終

厓

山

厓山

緒言

南宋滅亡の遺跡なる厓山に就いて一場の講話を試みるのであるが、元來此の問題は純正の歴史談に屬してゐる。しかも自分は史學に就いては全く門外漢である。従つて其の説く所が往々杜撰であり又は正鵠を得ない點も少くあるまいと思ふ。併し自分が門外漢であるにも關らず此の問題を掲げて諸君の清聽を汚さんとするに至つたのは少しく理由がある。第一自分は始より南宋の悲惨なる滅亡に對して大なる同情を有つてゐた、殊に其の事蹟が我が平家の末路に酷似してゐる點に於いて深い興味を有つてゐた。然るに先年南清旅行を試みた際、親しく厓山の實地を踏査して見て、無量の感慨に打たれたのである、殊に記録と實地とがよく符合してゐる様に思はれるのでます。感興を深からしめたのである。由來支那に於いては史的記録と史蹟とが符合しないものが多い様であり、往々甚しく齟齬し矛盾してゐる。これは或は記録の誤謬であるか、然らざれば比定せられたる地點の過誤でなければならぬ。然るに厓山に在つては不思議にも極めて正確に記録と實地とが符合してゐる様に思はれる。勿論多少の疑點はあるが大體に於いて頗る明白なものであると思ふ。これ自分が取敢ず自分の所存を述べて諸君の

高教を乞はんとする所以である。但し當時の事蹟の史學的研究に至つてはこれを専門の諸家に譲るので、自分は只だ有り合せの數種の参考書や、若干の碑銘、地圖などに據つたのであつて、決して深い研究を遂げたのではないのである。此の點は豫め諸君の諒承を得て置き度いのである。便宜上講話を二段に分ち、第一を探檢記とし、第二を海戰記とし度いのである。

第一編 探檢記

其の一 厓山の地理

厓山は廣東省廣州府新會縣に屬する一島である。厓山は元來此の島の南端にある山で最高峯は直立目測千八百尺程であるが、同時に此の島の名でもある。島と山とが同じものとして取扱はるゝ例は寧ろ普通である。

厓山島は西江のデルタの一部と見られぬことは無い。即ちこれデルタ中の一島で海洋中の孤島ではない。其の位置は新會縣城の南なる熊海と稱する灣の東を限りて東北北より西南南に互り、長さ凡そ我が五里半、幅は一里より二里に出入して居る。西には熊海が湖の如く、北と東とは狭き水路を繞らし、南角は厓門を隔てて湯嘴山と相對してゐる。島の長さに互つて一連の赤色の花崗岩より成る山脈がある、南端の厓山が最高で、巒峯起伏しつゝ北に走り、漸次に其の高さを減ずる。山の東面の有様はよく知らぬが、西面熊海(自分はこれを厓山灣と命名する)に面する部分には山麓の所々に小平野がある。地圖によれば却々澤山の村落が記入されてゐる、次に記録から二三

の解説を抜萃して見よう(第七〇三圖)。

(廣州府志) 厓山 延袤八十餘里高四十餘丈與湯瓶嘴對峙如兩扉故亦曰厓門山宋紹興中置寨以控島猶大洋之險

(通鑑輯覽) 厓山在鉅海中與寄石山相對如兩扉潮汐之所出入也故有鎮戍、云々

(經世大典) 山南北互二百餘里東南枕海西北皆港(廣州府志)

(寰宇記) 厓山 在新會縣南八十里臨大海(大清一統志)

以上の記事中、厓山が新會縣南八十清里と云ふはほど正確である。延袤八十餘里も頗る誇大に失してゐるが、互二百餘里と云ふは非常な誇大である。これに反して高四十餘丈と云ふは非常に過少である。或は四百餘丈の誤であるかも知れぬ。東南枕海西北皆港と云ふも實地に合つてゐる。與湯瓶嘴對峙とあれば厓山の對岸即ち厓門の南岸は湯瓶嘴である、併し與寄石山相對とあれば寄石山と湯瓶嘴とは同所であるが如くに見える、則ち寄石山の裾が湯瓶嘴であらねばならぬ、これは後章に尙ほ説明するのである。

厓山から南に當り、約三里を距てて獨厓山と云ふ孤島がある、大さは縱横各七八町に足らぬ位らしい。此の島を南宋最後の海戰の地點に比定せんとする説は大なる間違ひである。若しこれに當て嵌めると海戰の經過の狀態が全く説明し難いことになる。

厓門に就いては尙ほ左の記録がある。

厓山

(廣東新語) 厓門 在新會南與湯瓶山對峙若天闕故曰厓門、云々
門の廣さは約十四五町位であり、兩岸は急斜面をなしてゐるが絶壁と云ふ程ではない。

其の二 廣東より厓山に至る航路

明治四十二年正月、自分は南清建築調査の爲め廣東に旅行した。そして廣東省城に滞在中厓山に關する調査を試み、おひ／＼事蹟の明かなるに及んで遊意禁する能はず、折柄廣東税關に奉職しをられたる郷友大瀧八郎氏及び來遊中の畫家那須豐慶氏と共に厓山探檢に出かけたのであるが、大瀧氏が職權を善用せられた爲めに旅行の便を得たことが多かつた。廣東厓山間は勿論舟行であるが、普通の民船では徒らに時を費す許りでなく、不便限りなくして危険も亦た少くない。幸ひに丁度廣東から江門を經、厓門卡を通過して南海岸の諸港を歴訪する小蒸汽船が出るので、これに便乗することにした。船は極めて舊式の畸形なもので約二百噸位であつたと思ふ。第一日の午後四時半頃廣東の珠江を發し黃埔を過ぎ、轉じて南に向つて西江と北江の間なるデルタの中分流に入つた、紆餘曲折してやがて西江を横斷した。西江は幅凡そ七八町の巨流で舟や筏の往來が實に盛である、やがて新會縣の江門に著したのは此の日の夜半過ぎである。廣東より水路約六十裡、九時間を費したのである。

江門は此の附近に於ける最繁華なる港で、西江と熊海とを聯絡する小分流の西岸に位し、戸一千、人口は蛋民と稱する水上生活民を合算すれば約一萬に近いであらう。税關の出張所もある。市街は例の如く極めて雑沓である。此の地は有名なる明の文豪陳獻章の郷里である。陳は厓山とは殊に深い關係があり、後章にも屢々引合に出るのであるから、此處に其の略傳を述べて置く。

陳獻章字は公甫、明の宣德三年江門に生れ、此の邊を白沙村と云ふので白沙を號とした。身長八尺面方玉潤、左臉に七黒子あり北斗の狀の如し、耳長貼頰兩目炯然如星望而知爲非常人とあるので、如何に容貌態度の立派であつたかを知ることが出来る、正統十二年二十歳にして郷試に及第した。學識高くして氣慨あり、詩文に長じ、書を能くした。其の逸話もいろいろあるが今は述べない。年七十三にして弘治十三年に歿した。江門に碧玉樓と云ふのがありが即ち陳白沙の故宅であると云ふ。

第二日の正午江門を發して南下した。水は狭くして淺く、船も速力を減じた。兩岸は一望十里の平野で、芭蕉畑、蜜柑畑、棕櫚畑、竹畑などが一面に連なれる光景頗る面白く、すべて亞熱帯の風物である。やがて小流を行き盡して忽ち廣潤なる水面に出でた、即ちこれが熊海で遙かに西に當つて圭峯山を認める。山の麓には新會縣城が在るのである。熊海は長五六里、幅一里に出入した灣で、其の東の方に現はれた一連の山脈は、即ち厓山島である。厓山と云ふ名から想像して始めは非常な峻峭な山岳が聳え、海岸は千丈の絶壁が物凄く峙つてゐるのであらうと期待したが、實際は頗る平易な景色である。船は靜なる波の上を快走し、熊海の南の端を究めて漸く轉じて東に向ひ、やがて厓門に到達した。

其の三 厓門

厓門は前にも陳べた通り兩岸漸く接近し、山の斜面も餘程急峻である。聞く處によれば此の邊に有名な張弘範

の刻銘がある筈である。それは元の大將張弘範がこゝに南宋を全滅せしめ、己の功を彰表する爲めに崖を磨して張弘範滅宋於此と刻した。然るに陳白沙は之を見て、張弘範は元來宋の粟を喰うた男であるのに、元に降つて却つて宋を滅し手柄顔するは不都合なりとて、彼の銘の上に更に宋の一字を加へて宋張弘範滅宋於此と改めた云ふので、此の文字が海上からよく見えると聞いてゐた。自分は船中の甲乙に問うて見たが少しも分らぬ、望遠鏡で出来る丈け注意して見たが少しも分らぬ。終に自分の好奇心を充すことが出来なかつたのは甚だ遺憾であつた。元史張弘範の傳に磨厓山之陽勒石紀功而還とあれば、張弘範の刻銘は事實であらうと思ふ。又文字に關しては廣東新語に載る所は自分の聞いた處と少しく違ふ、多分新語の方が實説であらう。其の全文左の如くである。

(廣東新語) 厓門在新會南與湯瓶山對峙若天闕故曰厓門自廣州視之厓門西而虎門東西爲西江之所出東爲東北二江之所出蓋天所以分三江之勢而爲南海之咽喉也宋末陸丞相張太傅以爲天險可據奉幼帝居之連黃鶴白鶴諸艦萬餘而沈鐵碇于江時窮勢盡卒致君臣同溺從之者十餘萬人波濤之下有神華在焉山北有一奇石書鎮國大將軍張弘範滅宋於此十二字御史徐瑄惡之命削去改書宋丞相陸秀夫死於此九字白沙先生謂當書宋丞相陸秀夫負帝沈此石下瓊不能從光祿郭棐謂如白沙者則君臣忠節胥備其有關於世教更大而予則欲書大宋君臣正命於此凡八字未知有當於書法否。

又此の銘が必ず實在してゐると思はるゝ一徵證は成化己亥の歲に陳白沙が趙某と共に厓山に遊んで此の銘を見、詩を詠じてゐるので、これは今厓山全節廟の中に碑に刻してある。文字は甚しく剝落し又は字體不分明にて讀み

難い點もあるが、先づ左の如くに讀まる。

經厓山觀奇石碑

忍菴中華與外夷乾坤回首重堪悲鶴功奇石張弘範不是胡兒是漢兒

晉江 趙、、、、

長年碑蹟洗殘潮野○○○○火燒來往不知亡國恨只探奇石問漁樵

白沙陳獻章

成化己亥、、、、

即ち陳白沙が趙某と共に厓山の大忠祠(後章に詳かなり)に參詣した序に奇石碑を見て憤慨したものと見える。此の奇石碑が奇石山の碑で、其の所在地點に就いては元史には厓山之陽と云へば厓山の南面であるが、廣東新語には山北有一奇石と云ふ、即ち湯瓶山の北方で厓山の南岸となる、通鑑輯覽にも厓山が與奇石山相對とあればこれも厓山の南岸となる。兩説何れが正しきや不明であるが、自分は元史の記載が誤りであつて厓山の南岸の方が正しいと信するが、併しこれは追つて調査を遂げる積りである。兎に角自分は厓山の西南岸を廻つて注意して探望したが終に見當らなかつたのであるから、必ず對岸即湯瓶嘴の北岸であると信じてゐるのである。

さて船が厓門十に著いた、江門を距ること約二十五裡で約四時間を費したのである。厓門十は丁度厓門の口に當つて東南大海に向ひ、南は湯瓶嘴と相對して天然の門を作り形勢頗る險要である、東南海上に獨厓山、二虎、